

纏向学研究センター研究紀要

纏向学研究

—第8号—

2020

桜井市纏向学研究センター

Research Center for Makimukugaku, Sakurai City.

纏向学研究センター研究紀要

纏向学研究

—第8号—

2020

桜井市纏向学研究センター

Research Center for Makimukugaku, Sakurai City.

序

桜井市纏向学研究センターの研究紀要である『纏向学研究』第8号を刊行いたします。

当研究センターが正式に発足して今年度で8年、準備室段階から数えると9年の歳月が流れたこととなります。

この研究紀要は、当センターの職員と共同研究員の方々にとどまらず、「纏向学」研究の意義とその学的普及にご賛同いただく多くの研究者の方々の投稿によって継続して刊行されてきました。その成果も考古学や文献史学に限らず、民俗学、環境学、動植物・年代・金工・地質・土木・材質などの自然科学分野と多岐にわたり、毎年、新たな「纏向学」を発信し蓄積してきたものと自負しています。

じつは、「纏向学」研究にはもう一つの目論見があります。この専門的な研究の成果を「現代」と繋げていきたいとの思いです。多くは古代を中心とした研究であったり、纏向という“点”からの発信ですが、それが現代の社会に生きる市民がもつ疑問や欲求への橋がかりになることはできないか、現代社会の難題に立ち向かうきっかけを提供できないだろうか。

この大上段の構えはまだまだ暗中模索が続きますが、東京フォーラムや纏向学セミナー、そして所員や共同研究員の方々による外部講演やイベントへの積極的な参加はその架け橋になるものと信じています。桜井市立埋蔵文化財センターでは、この研究紀要が専門研究者以上に一般の方々からも期待され、毎年完売されているとの知らせは意を強くするところです。

今、私たちの社会はいろいろな面で閉塞感が増長しているようにも思います。それは学界も文化財の世界も、そして一時からすれば、昨今感じる歴史ブームや考古学ブームの衰微も同じ線上にあるように思えてなりません。この序文を認めている間の新型コロナウイルスの世界的な蔓延も、人類史に大きな爪跡を残す事態となってしまいました。

しかしこうした時だからこそ初心に戻って、着実な研究面での自己研鑽を蓄積し、年々刊行されるこの研究紀要が、「纏向学」の血となり肉となって、「現代」にも発信できる日が来ることを願ってやみません。

令和2年3月31日

桜井市纏向学研究センター
所長 寺沢 薫

目 次

序

倭国における方形板石硯と研石の出現年代と製作技術…………… 柳田康雄 …… 1

弥生墳丘墓における性差の認識と帰葬について

—福井県小羽山墳墓群の事例から— …………… 古川 登 …… 67

冠帽形埴輪について

—纏向遺跡出土冠帽形埴輪を中心に— …………… 三沢朋未 …… 83

「マキムク」地名小考 …………… 森 暢郎 …… 95

編集後記

倭国における方形板石硯と研石の出現年代と製作技術

柳 田 康 雄

目次

I. はじめに (研究史).....	3
II. 中国漢代の硯.....	4
III. 朝鮮半島の硯.....	8
IV. 倭国の既報告方形板石硯の検証.....	10
V. 型式分類.....	14
VI. 研石.....	29
VII. 時期.....	33
VIII. 分布.....	34
IX. 製作技術.....	35
X. まとめ.....	41

論文要旨

方形板石硯とは、中国の前漢中期に出現する長方形板石硯を倭国で模倣したもので、玄界灘沿岸の弥生中期中頃に出現する。中国と楽浪郡の長方形板石硯は、扁平で両面研磨から裏面が割面そのままに研磨されていないものに変化するが、倭国も平面形が多様であるものの同様に型式変化する。我国で最初に発見されたのが鳥根泉田和山遺跡で、15年以上経過して2番目が福岡県三雲・井原遺跡群番上地区であった。三雲・井原遺跡群は筆者の身近な遺跡であったところから、以後方形板石硯の搜索を開始した。その結果約4年で玄界灘沿岸と筑紫平野北部で倭国最古の弥生中期中頃例から古墳中期例までと、北部九州や中国地方を含めると方形板石硯と研石を150例以上発見し実測した。その大半が報告書では砥石などとされていたものであるが、砥石とは違うマメツによる窪みと、墨らしき黒色付着物や赤色系付着部が観察できることから、倭国製方形板石硯とした。三雲・井原遺跡群での発見までは倭国製品が存在することなど意識されていなかったが、筆者が3・4遺跡目を資料紹介した時点で前者も倭国製である確証を得た。方形板石硯は、平面形が中国玉器の「璋形」や「圭形」を呈したものが古く、弥生後期前半になって長方形が出現する。弥生後期には不整形や再生品もあり各地に分布するが、弥生中期段階が玄界灘沿岸と筑紫平野北部まで、弥生後期初頭になると筑紫平野中部以南や中国地方などにも分布が拡大する。北部九州以外に分布するのは、時期的に弥生王権が玄界灘沿岸に出現した以後であることから、中国や朝鮮半島系文物が中国地方以東に分布する現象とも一致する。方形板石硯の年代は筆者の弥生年代と合致しており、炭素14年代測定法の弥生年代だと中国より約100年早く北部九州で方形板石硯と研石が出現することになり、誤った研究がなされていたことになる。方形板石硯と研石は未製品もあり、発見された遺跡からは石製工具や鉄製工具が共伴することもある。石製工具の石鑿や石鋸は、石包丁未製品などと報告されていた。方形板石硯と研石には、これらの工具の使用痕跡が明瞭に観察できるものがあり製作工程がたどれる。方形板石硯と研石が発見された遺跡は地域の拠点集落であることが多く、外交文書だけではなく、交易にも文字文化が浸透していたことが推測できるようになった。田和山遺跡新発見方形板石硯裏面の墨書は、「子戊」や「壬戌」などと判読でき、干支の「壬戌」であれば「紀元二年」となり遺跡の年代とも合致する。

柳田 康雄 (やなぎだ やすお)
國學院大學客員教授

倭国における方形板石硯と研石の出現年代と製作技術

柳 田 康 雄

I. はじめに (研究史)

長方形板石硯とは、吉田恵二の「長方形板石硯考」(1993)によると、漢の石硯中もっとも遺品が多く、普及範囲も広いのが扁平な長方形板石硯だという。「長方形板石硯のうち、年代的にもっとも古く位置付けられるのは前漢中期である。しかし、前漢中期から後期に位置づけられる遺品は少なく、前漢晩期以後急激に類例が増え、後漢代に入ると数量が増え、分布域も広域にわたるようになる。前漢初期にさかのぼる円形板石硯や前漢前期に位置づけられる卵石硯に比べると、長方形板石硯の出現は遅れるが、前漢末期に現れる三足円形石硯よりは早く出現する」(吉田1993・2018)という。1931年に朝鮮半島の楽浪彩篋塚木槨の前室から漆盒に納められ硯台に載った長方形板石が発見され石硯であることが明らかになったように、朝鮮半島にも後漢代に確実に分布しており、曹喜勝(2003)によると時期は明らかではないがピョンヤンの楽浪一帯では約25個の各種硯が出土しているという。

日本では、島根県松江市田和山遺跡の石製品が硯と研石と判断され、東京国立博物館所蔵品(小倉コレクション)と共に実測図が紹介された(白井2004)。翌年の2005年には田和山遺跡の報告書も刊行され、東京大学考古学研究室所蔵の楽浪王冢出土品の長方形板石硯と研石や彩篋塚レプリカと比較検討された(松江市2005)。

田和山例報告から11年経過した2016年になって、福岡県糸島市三雲・井原遺跡群番上地区出土の石片が報告書未刊のまま「石硯」と速報され(武末・平尾2016)、賛否両論で話題になった。そこで筆者は、田和山や三雲番上遺跡のような石片が「石硯」であれば他にもあるはずだと確認調査をはじめた。結果、筑前町東小田中原遺跡(石井2001、柳田2017a)・同葉師ノ上遺跡(石井2005、柳田・石橋2017)での確認以来、2018年5月末で国内10例(柳

田2018c)、2019年1月末で田和山・三雲番上例のような小石片や方形板石硯と研石合わせて35例以上を実測し報告した(柳田2019a)が、未確認を含めると2019年6月末現在で150例を超す勢いで急激に増加しつつある(柳田2019b)。しかも、弥生中期中頃の最古例を玄界灘沿岸の糸島市潤地頭給遺跡で1点、唐津市中原遺跡で3点の未製品を、内陸部の朝倉市下原遺跡で完形品の実用例を発見し、製作工具である石鋸や石鑿も他遺跡を含めて20例以上確認・実測した。

当初筆者は「石硯」(武末・平尾2016、柳田2017a・b)から「板石硯」(柳田2018c)としていたが、後に「方形板石硯」(柳田2019b～)に変更した。本稿でも中国の長方形板石硯を倭国で模倣した多様な型式を含めて総体的に「方形板石硯」(柳田2018c・2019a)としているのは、自然石板石硯・円形板石硯も「板石硯」であること、中国製(朝鮮半島製を含む)の長方形板石硯の搬入品やその模倣品が存在すること、現実に吉野ヶ里遺跡・西新町遺跡などで倭国製、門前遺跡で流入品の長方形板石硯が発見されている。

長方形板石硯(方形板石硯)の部分名称は、使用面(上面)を硯面、片面使用の場合は下面を裏面とする。長辺を側面、短辺を小口面とし、そこに加工痕跡や使用痕跡があれば、剖面・切断面・研磨面・敲打痕・ケズリ痕・粗研磨痕・研磨痕・擦切り痕跡・マメツ痕・平滑の用語で表記する。硯面はその中央部で墨粒に水を加えて研石で摺りつぶすことから、その中央部がマメツしてくぼんだ痕跡がわずかでも実測図に楕円形同心円状に表記する。砥石との違いもここにある。破片資料である場合は、この楕円形同心円を復元することで本来の形状(原型・型式)も復元可能である。

研石の部分名称は、長方形板石硯に準じるが、使用面(下面)をマメツ面とし、裏面を上面とする。マメツとは硯

面の摩滅痕跡であり、硯面中央部の墨粒・水と研石の摩擦によってくぼむ現象と硯（研石含む）周縁や裏面が器物などによる摩擦から角などが鈍る現象をさす。黒色や赤色系付着物が観察できるものが存在するものの、科学分析されていないので断定できないが、黒色付着物が墨、赤色系付着物も中国の長方形板石硯と同様に祭祀などに際して筆や刷毛などで文字や記号を描く顔料と考えている（柳田2020）。

Ⅱ. 中国漢代の硯

管見ではあるが、中国での板石硯の出現順にその概要を述べる。

（1）自然石板石硯

前漢前半の中国広東省南越王墓西耳室の石硯と墨丸（広州市等1991）は、板石状の自然石を硯として利用している（図1左）。同じく、前漢前半（文・景一武帝5年以前）の長沙市西郊桐梓坡漢墓は堅穴土坑墓で、茶1号墓から自然石板石硯（長18.5cm、幅16.8cm、厚2.6cm）が出土している（『考古学報』1986-1）（図1右）。浙江省安吉県上馬山前漢墓の前漢中期のM10墓からは長方形板石硯と円形研石が共伴し、前漢晩期のM8墓では、自然石板石硯と円形研石が共伴している（『考古』1996-7）ように自然石硯が前漢晩期までは存続しているようだ。

（2）円形板石硯

円形板石硯は、下記のように前漢初期から後漢晩期までであるが少ない。人工が加えられた円形板石硯は、「直径で9.5～23cm、厚さで0.5～5.0cmと個体間に法量差が認められる。しかし、前漢中期以後、2、3の例外を除

くと円形板石硯の厚さは1～1.5cmに集中し、厚さに規格性が見受けられるようになる」（吉田1993）という。

- ① 前漢初期の湖北省江陵鳳凰山8号漢墓は、円餅形扁平板石の硯で、一面が研磨され光滑で墨痕がある。研杵と三弦鈕素面鏡（直径7.9cm、縁厚0.1cm）を共伴している（『文物』1974-6）。
- ② 埋葬年代が前漢前期の文帝13年（前167年）と判明している湖北省鳳凰山168号漢墓は、竹筒内に円形板石硯・自然礫研石・墨・筆・削刀・木簡・竹簡・半両錢・天秤竿等が共伴し、円形板石硯は花緑色細砂岩製で、円形面径9.5cm、底径9.8cm、厚1.5-1.6cmの法量。研石は石英岩で河卵石を加工した円錐形、磨面直径5cm、頂端径3.7cm、高さ3.5cm。使用面に墨が付着している（図2）（『文物』1975-9、『考古学報』1993-4）。
- ③ 前漢武帝期の陝西省宝鶏市扶風県石家1号漢墓は、砂岩製円形の直径23cm、厚4.7cmの大きさ。研石は緑豆石製で饅頭状の高5.5cm、径4×6.5cmの大きさ。星雲文鏡（径11cm）を共伴した（『中原文物』1985-1）。
- ④ 前漢中期の陝西省西安市西北医療設備廠95号墓は、堅穴墓道土洞墓で夫婦合葬墓。両木棺周囲に四葉座銅飾がある。武器がない南棺左腰部に円形板石硯副葬、棺内頭部に径15.8cmの星雲文鏡副葬。円形板石硯は、径7.7cm、厚1.4cmの大きさ（『長安漢墓』2004）。
- ⑤ 前漢中期の雅荷城市花園15号墓は、堅穴墓道土洞墓で墓室奥北角に円形板石硯を副葬。表面比較的粗造円形板石硯で、径8.8cm、厚2.4cmの大きさ（『長安漢墓』2004）。
- ⑥ 前漢後期の陝西省西安市方新村開發公司22号は、堅穴墓道磚室墓、北側人骨右側腰部に長方形板石硯と方形研石、頭部に小型異体字銘帶鏡副葬、黒色長方形

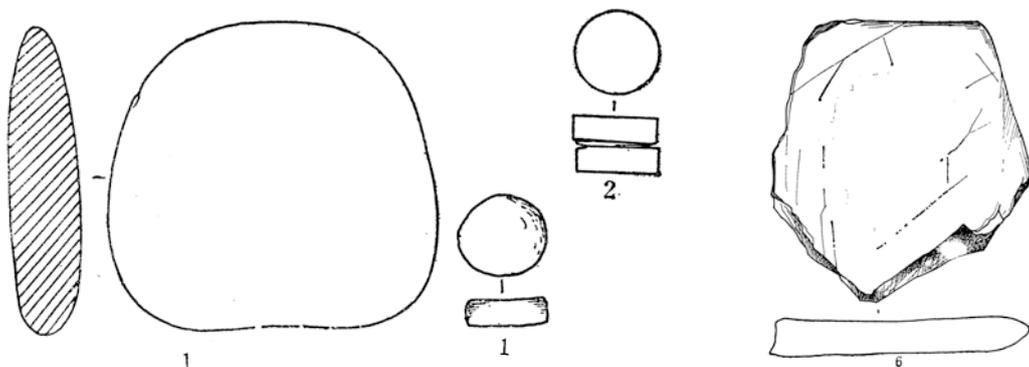


図1 南越王墓（左『西漢南越王墓』1991）と長沙市西郊茶1号漢墓（右『考古学報』1986-1）の自然石硯

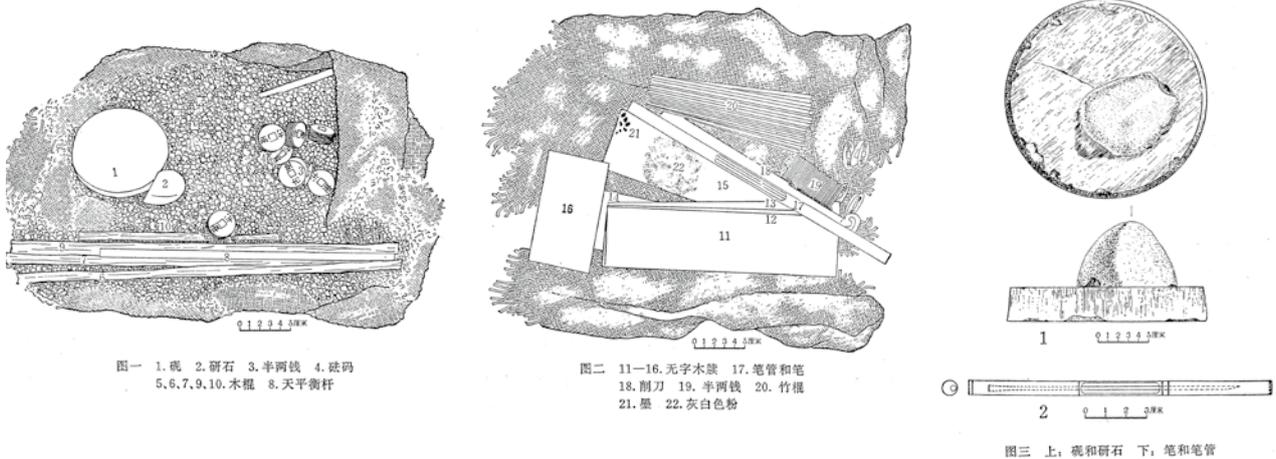


図2 中国鳳凰山168号前漢墓 円形板石硯と共伴文房具等（『文物』1975-9）

板石硯長13.5cm、幅5.7cm、厚0.9cm、方形研石長3.6cm、厚0.6cm、南側人骨左頭部に円形研石副葬、逆台形で裏面剖面、研石径3～3.4cm、厚0.9cm（『長安漢墓』2004）。

- ⑦ 前漢後期の湖南省長沙沙湖橋一帶古墓のF・M5は、円形板石硯が直径15cm、厚2.8cmの大きさと、硯上朱色残余し、研杵高3.1cm、異体字銘帶重圈文鏡（径12.9cm）を共伴している。EM3の円形板石硯は青石磨琢し上下平整、辺稜完好無欠である。直径15.5cm、厚1.5cmの大きさ。研杵は多稜形で上下平整、長さ2.8cm、上端径2.5cm、下端径3cm。虺龍文鏡（径10.6cm）を共伴し前漢末（『考古学報』1957-4）。
- ⑧ 河北省石家莊市北郊後漢墓は、前室から直径17cm、厚1cm、研石梯形、上幅4.6cm、下幅5.5cm、長さ6.5cmの砂質頁岩が出土。後漢初（『考古』1984-9）。
- ⑨ 河北省定県北庄漢墓は、封土中出土ト骨・石刀・石鎌・骨錐・紡錘車有り、円形石板は7件（42-48）ある。直径15.3-16.9cm、厚0.5-1cm、朱色が一周している。銅鏡3（内行花文、直径36cm、鈕高6cm、）鉄鏡5（125-129、内行花文鏡、直径19.8-28.7cm、面反り強い）、時期後漢「晩期」（上限56年、下限88年、明帝或いは章帝時期）とされることから後漢中期となる（『考古学報』1964-2）。

(3) 長方形板石硯

吉田恵二は、長方形板石硯最古の前漢中期例を6例紹介し、北魏天平4（537）年までであるという。「長方形板石硯の法量を見ると、長辺7.0～21.5cm、短辺2.7～

14.2cmで、法量に差がある。しかし、法量分布では長辺10～17cm、短辺5～7cmの範囲内に大多数が集中し、長辺と短辺の比が2.3対1の長方形を呈するものが多い」（吉田1993）という。

- ① 山西省大同市渾源縣華村1号木槨墓は夫婦合葬墓で、男性棺外頭部に長方形板石硯・円形研石・半円錐体墨丸が共伴。長方形板石硯は長16.8cm、幅6cm、厚0.3cm、円形研石が径2.8cm、厚0.1cm、墨丸長2.5cmで、木盒が伴って前漢中期（『文物』1980-6）。
- ② 湖南省長沙市401号漢墓は墳丘をもつ木槨墓で、盗掘されているが長方形板石硯と円形研石共伴し、硯残長14.3cm、幅6.1cm、厚0.43cm、研石直径3.1cm、厚1.2cm。頁岩製、顔色紫褐、前漢後期（『長沙発掘報告』『中国田野考古報告集』1957 中国科学院考古研究所編著）。
- ③ 山東省臨沂市金雀山11号周氏墓は、三色漆画（虎・熊・鹿・羊等）の漆盒に収められた長方形板石硯と方形研石、木胎漆盒長21.5cm、幅7.4cm、厚0.9cm、長方形板石硯長16cm、幅6cm、厚0.2cm、出土時盒内残留粒状黒墨、硯上に墨留まる。研石は、長・幅2.5cm、厚0.2cm、長幅2.5cm、厚1.1cmの壇形木塊。長23.8cmの毛筆共伴。前漢後期（図3）（『文物』1984-11）。
- ④ 河北省張家口市陽原縣北関2号墓では、長方形板石硯・方形研石・異体字銘帶鏡（径11.6cm）が共伴し、長方形板石硯が長14.2cm、幅5.8cm、厚0.9cmで、横断面形梯形をし、両面朱色塗りだという。研石は、長3.1cm、幅2.1cm、厚0.9cmで、断面が梯形。前漢中期の昭宣期とされる（『考古』1990-4）が、異体字銘帶鏡が広縁であることから本稿では前漢末とする（図4）。

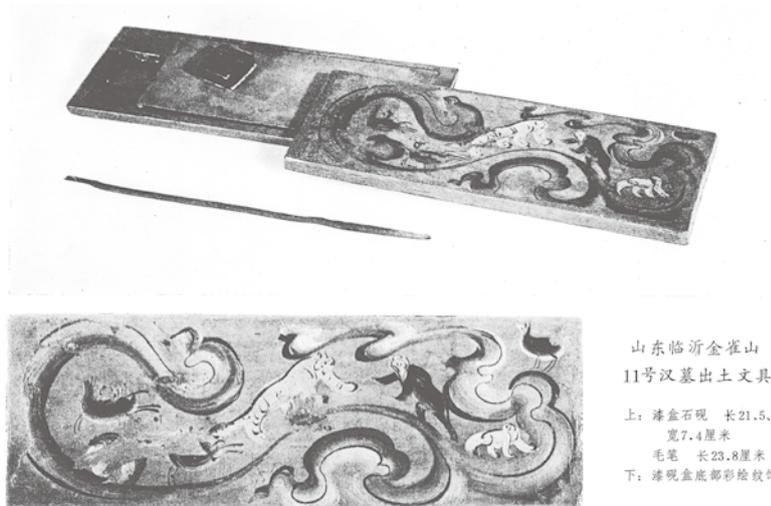
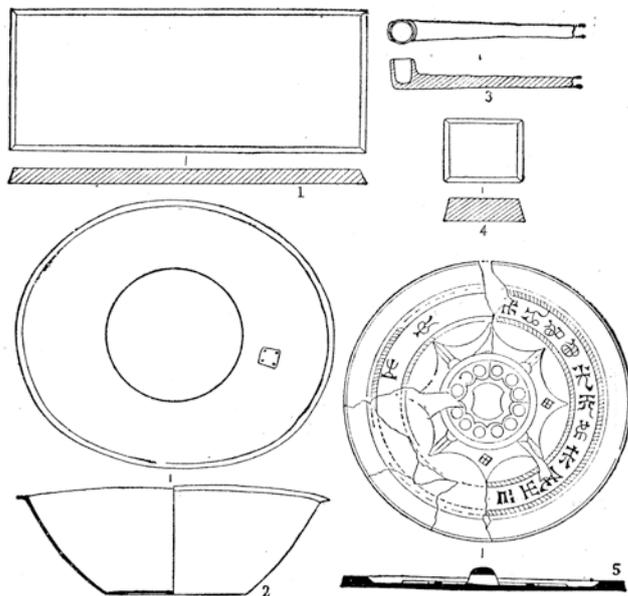


图3 中国山东省临沂金雀山11号汉墓 长方形板石砚 (『文物』1984-11)



图八 出土器物

1、4.石砚 (M2:7、10) 2.铜盆 (M2:2) 3.铜刷把 (M2:16) 4.研石 (M2:10) 5.铜镜 (M2:12)

图4 中国河北省阳原县北关2号墓 长方形板石砚·研石と
共伴副葬品 (1/3) (『考古』1990-4)

- ⑤ 江蘇省揚州市平山養殖場4号墓は、木棺内頭部で
虺龍文鏡 (径19 cm) と共伴、漆盒、前漢末、(『文物』
1987-1)。
- ⑥ 江蘇省揚州市儀徵市石碑村2号漢墓は、棺内頭部 (銅
鏡共伴)、長方形板石砚、漆盒、異体字銘帶鏡・虺龍
文鏡共伴、前漢末 (『考古』1966-1)。
- ⑦ 青海省西寧市大道県上孫家寨115号漢墓は、木槨内
木棺2基外に入骨2体、入口に近い人骨右側に長方形
板石砚と研石、長方形板石砚長13cm、幅5 cm、厚0.6cm、
研石上円下方形、幅3.2cm、高1.5cm、両方の光面に墨

痕、磨製精査細、銅鏡3面 (虺龍文鏡)・
削刀共伴、前漢末 (『文物』1981-2)。

- ⑧ 遼寧省大連市榮城子1号貝墓は、長
方形板石砚長9.87cm、幅4.8cm、厚0.5cm、
広縁異体字銘帶鏡2面共伴、前漢後期、
10号墓—長方形板石砚長16 cm、幅6
cm、厚0.6cm、研石上円下方形、幅3.2cm、
厚1.52cm、光滑面に墨痕。前漢末 (『考
古学報』1958-4)。

- ⑨ 河南省鄭州市鞏義市石家莊13号漢墓
は、棺内脚部左側に副葬、石黛砚長
14.4cm、幅5.1cm、板面墨跡、並びに紅
朱塗、上円下正方形研石、前漢晚期 (『考
古』1963-2)。

- ⑩ 四川省涼山州西昌市礼州漢墓は、1
号墓棺内頭部に長方形板石砚と研石を
副葬、2号墓は足元に長方形板石砚と
研石を副葬、長13.6cm、幅5.2cm、厚0.6cm、
直径3 cm、厚1.1 cm、別に円形石片が
あり一面光滑、いずれも上面に朱砂、
前漢晚期 (『考古』1980-5)。

- ⑪ 江蘇省連雲港市海州前漢霍賀墓は、
男女合葬墓の男性棺内足元で小型異体
字銘帶鏡と墨書 (蓋) 木盒 (長22.9cm、
幅7.6 cm、厚1 cm) 内蔵長方形板石砚
と上円下方形研石、小型異体字銘帶鏡
共伴、女性棺内足元には中型星雲文鏡、
「後漢晚期」 (『考古』1974-3)。

- ⑫ 山東省臨沂市銀雀山6号漢墓は、2
体合葬の男性棺内頭部に銅鏡 (小型虺
龍文鏡)・五銖錢と共伴、長方形板石砚長15.5cm、幅4.8
cm、厚0.3cm、一面光滑、前漢末 (『考古』1975-6)。

- ⑬ 陝西省交通学校163号墓は、豎穴墓道土洞墓、棺内
頭部に小型異体字銘帶鏡 (径6.8 cm、銘帶：内而清而
質以而明光而日月而)、腹部右上に長方形板石砚副
葬、黑色長方形板石砚一面平整光滑、長4.5 cm、幅2.7
~ 2.8 cm、厚0.1 cm、報告書図面によると横断面形梯
形、周縁粗欠き未研磨。前漢晚期 (図5) (『長安漢墓』
2004)。

- ⑭ 西安市図書館8号墓は、豎穴墓道土洞墓、棺内人骨左腹部に長方形板石硯副葬、残長19.2cm、幅8.7cm、厚0.3cm、大泉五十銭貨、王莽新（『長安漢墓』2004）。
- ⑮ 佳馨花園80号墓は、斜坂墓道磚室墓、双人葬、南側男性人骨頭部左側に長方形板石硯と上円下方形研石副葬、方格規矩鏡（径11.8cm）頭部共伴、石硯長12cm、幅6cm、厚0.5cm、研石長3cm、高3.5cm、大泉五十銭貨共伴、王莽新（『長安漢墓』2004）。
- ⑯ 湖南省長沙市金塘坡13号墓は、頁岩製長方形板石硯・方形研石・鉄鋸共伴、長方形板石硯長14.3cm、幅7cm、厚0.5cm、研石長2.82cm、厚0.3cm、後漢中期（『考古』1979-5）。
- ⑰ 甘肅省武威市磨嘴子49号墓は、毛筆（「白馬作」銘）、長22.3cm、漆盒板石硯、後漢中期（『文物』1972-12）。
- ⑱ 湖南省衡陽市茶山拗18号墓は、磚室墓、長方形板石硯1、青灰色、長10.8cm、幅6cm、後漢晚期（『考古』1986-12）。
- ⑲ 後漢末とされる安徽省亳州市鳳凰台1号漢墓は、羨道左壁で長方形板石硯と竹葉石製上円下方形研石を共伴し、長方形板石硯が青石質で長16.7cm、幅7.6cm、厚0.7cmの大きさ（『考古』1974-3）。

(4) 長方形研石

吉田惠二の方板形研石は、「板状の研石で、平面形が正方形のものと長方形のもの二種類がある。平面正方形のものは15点ある。一辺2.5～4.0cm、厚さ0.2～0.9cm。前漢後期～後漢晚期。方板形研石も円板形研石と同様、木製その他の把手を付すのが原則であった」（吉田1993）という。

雅荷城市花園3号墓は豎穴墓道土洞墓で、頭部棺外に長方形研石を副葬。棺内頭部に小型異体字銘帶鏡（径8.1cm、広縁日光鏡）が共伴している。報告書では一面磨光で青砂石質の「石硯」だが、長3.5cm、幅2.6cm、厚0.2cmの大きさであることから研石とする。図面では周縁が粗欠き未研磨、断面梯形。報告書では前漢中晩期だが、中広縁日光鏡が共伴することから前漢末とする（図6）（『長安漢墓』2004）。



図5 中国陝西省交通学校163号墓
長方形板石硯と共伴前漢鏡（1/2）（『長安漢墓』2004）

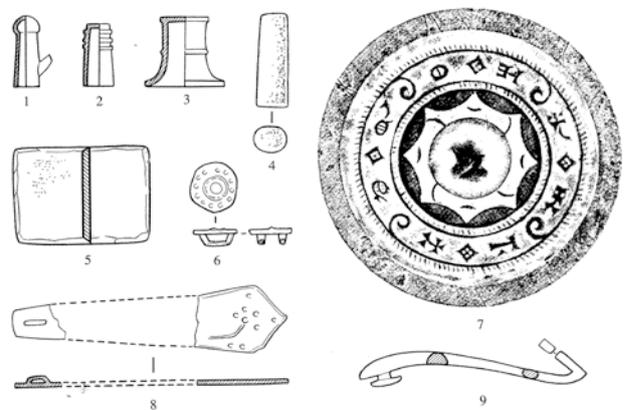


図6 雅荷城市花園3号墓副葬品（1/2）（『長安漢墓』2004）

(5) 三足円形石硯

陝西省西安市芙蓉南路1号漢墓は斜坂墓道磚室墓で、耳室中央部に三足円形石硯を副葬。三足円形石硯は砂岩製で上面中央部が平坦に突出し、外側一周に連続菱形文

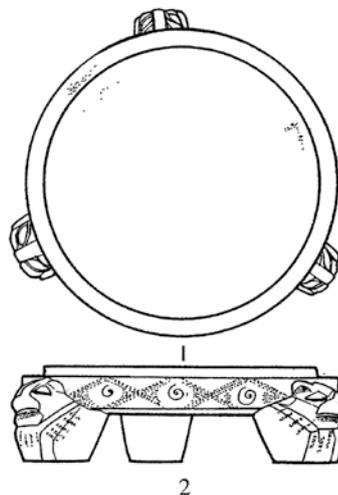


図7 中国陝西省西安市芙蓉南路1号漢墓
三足円形石硯（『長安漢墓』2004）

を施す。側面から底面に三獣面形足を配置している。法量直径10cm、厚1.6cm、通高2.8cm。銅四葉座棺飾・大泉五十銭貨が共伴していることから新王莽時期(図7)(『長安漢墓』2004)。

Ⅲ. 朝鮮半島の硯

朝鮮楽浪の硯と研石については、管見ではあるが曹喜勝(2003)が報告している25墳墓の28例(研石4例含む)があるが、詳細は不明である。実物を実見・実測できたのは、東京国立博物館所蔵の小倉コレクションと東京大学考古学研究室の楽浪王肝墓出土品のみである。したがって、後者の2例を検証しながら紹介する。法量は、以下一覧表(表3・4)に明示する。

① 東京国立博物館所蔵小倉コレクション例

小倉コレクションの中に、長方形板石硯破片と上円下方形研石各1個がある。長方形板石硯は砂質頁岩製の三分の一以下の破片で、硯面は平滑で小口側以外に使用によるマメツのわずかなくぼみがある。マメツ部分には斑点状に墨らしき付着物とその周囲が灰黒色を呈するが、マメツしていない小口側は灰茶色を呈する。原状が保たれた3辺角には、浅い擦切り痕跡の滑らかな溝が残る。裏面は、石材から割り取られた割面そのまま未加工。裏面にも斑点状に黒色の墨痕跡があり、その下の褐色は付着物の、小口面と側面の点的付着物の黒褐色が漆盒の付着物の可能性を残している。側面と小口面は、硯面側に浅い滑らかな擦切り溝が残る、全体に黒灰色を呈するが、部分的に墨らしき黒色斑点が観察できる。硯面小口側とその側面に浅い鑿痕跡が存在するが、その後も擦切りが続行されている。側面や小口面には、擦切り痕跡以外に研磨痕跡がない。横断面形は、逆台形であることから吉田のC類となる(図8-1、表3-4)。

白井克也(2004)の報告では、実大実測図が掲載されているが詳細を欠く。例えば、硯面のマメツ部分と非マメツ部分(平滑部分)の境界線が明示されず、原状を保っている3辺角の擦切り切断溝痕跡を「面取り」と表現している。硯面の墨付着については記述されているが、側面や裏面の部分的墨付着が明記されていない。

武末純一(2016)は、図面の硯面にマメツ部分と非マメツ部分の境界線が明示されているが、裏面に「一部に

ノミ痕」を指摘するがどの部分か不明。やはり、側面や裏面の墨痕跡が表記されていない。しかし、「石材は層理があり」、「金雲母様の粒子を多く含み、黒灰色を呈する」と明記していることは評価できる。

上円下方形研石は、厚さ1.49cmの正方形板石の四隅に山形の彫刻を施し、上半を円形に整えてつまみとし、下面の研面以外に赤漆らしき赤彩が施されている。平滑な下面の研面には墨らしき付着物があり、図8-1のように一部側面の四隅彫刻部分にも及んでいる(表4-4)。

② 楽浪王肝墓例(表3-2、4-2)

後漢前半から中頃の後漢鏡3面が共伴する楽浪王肝墓からは、長方形板石硯と方形板石研石が各1点出土している(原田・沢田1930)。長方形板石硯は小型で、硯面と両側面がわずかに凸面を呈する。裏面は割面のままで、全体に凹面を呈することから、硯面とあわせて石材の層理がわずかに湾曲していることになる。したがって、縦断面形はわずかに台形となる。硯面は濃厚に墨が付着している部分が多く、墨が剥離した部分のみ灰色を呈する。裏面には墨の付着は片側面に部分的で、他の部分の大半が茶褐色、部分的に灰色を呈することから、灰色が本来の石材の色調で、茶褐色は付着物と考える。裏面側面に浅い擦切り痕跡の細い溝が残されている。したがって、擦切りは裏面から行われている。両側面の加工は、明瞭な研磨痕跡は見られないが、両小口面に粗研磨された痕跡が存在する(写真1)。石材は砂質頁岩で、全面に金雲母粒が含まれている。

研石はほぼ正方形の後漢尺の1寸に近く、長方形板石硯と同じ石材である。下面の研面がわずかに凸面状を呈し、墨が付着していることから灰黒色を呈する。側面も部分的に墨が付着するが、上面になる裏面には及ばず灰色と茶褐色を呈することから、茶褐色は付着物と考える。上面には把手が張り付けられるらしく、中央部分が円形にわずかにくぼむ。断面形は、下面がわずかに広いことから台形を呈することになる。研石は石材からの剥離後、研磨面側から擦切り分割したらしく、その痕跡が下面の研面に面取状に残る。長方形板石硯と同じく、周縁が傾斜する外側に擦切り痕跡が存在することになる。周縁側面は粗研磨されている(写真1)。石材は砂質頁岩で全面に金雲母粒を含み、長方形板石硯と同一石材であることから、製作当初からセットをなすものである(図8-2)。

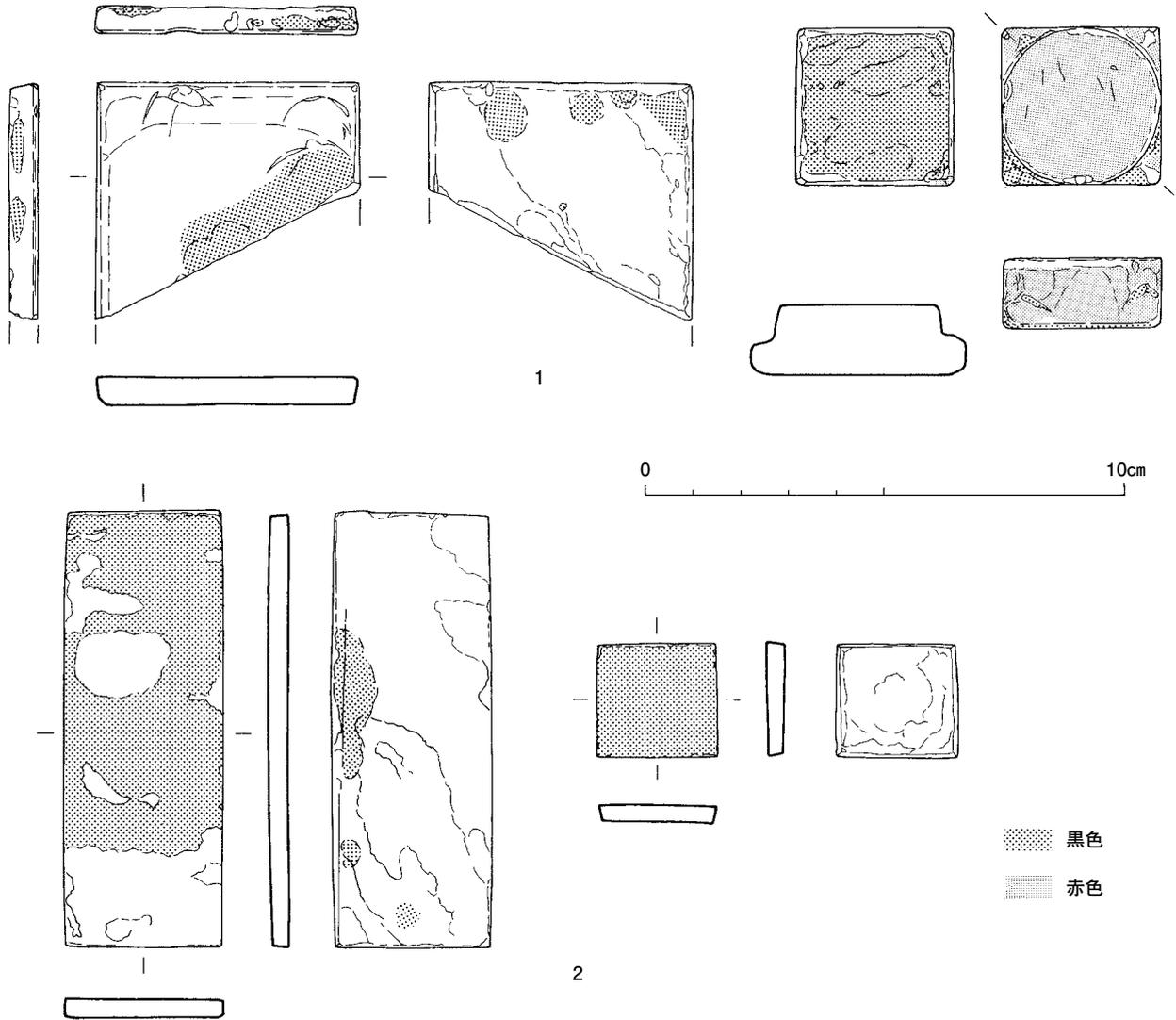


図8 北朝鮮の長方形石硯と研石実測図(2/3) [1: 東京国立博物館所蔵小倉コレクション 2: 楽浪王肝墓]

③ 韓国靑島遺跡B地区カ-245号住居跡例

245号住居跡からは、当該地の土器と共伴して北部九州の中期後半土器片や北部九州製大型銅剣(柳田2014)が発見されている。方形板石硯は当初砥石とされたが、後に「石硯」の可能性が示された(李2007、武末・平尾2016)。

方形板石硯は、平面形で両側面が平行せず一方小口が狭い(幅6.4-6.84cm)が、両小口が直線ではないことから狭い方の小口は「欠失」しているものと理解されていた(武末・平尾2016)。ところが実際は、狭い小口は意図的に尖るように斜め方向から打撃が加えられ、両小口面が敲打仕上げ調整されていることから誤解されたい。したがって、本例の平面形は五角形をしていることになる(柳田2017a・b・2018c・2019a~e、柳田・石橋2017)。しかも、両側面には硯面側に数か所の割合

大きな打撃痕(写真2)が存在することから、敲打調整前に鉄槌による割り取りが先行したらしいので、小倉コレクション長方形板石硯と一部が同一の手法であることになる。これは武末純一(2016)の「長辺と長い方の短辺の側面は、上半が擦り切りで内傾し」と見解が異なることになる。本例は両面が研磨仕上げされていることから、中国例(吉田2003)では古式になる可能性がある。しかし、硯面として使用されているのは片面のみで、縦方向にマメツして中央部が長楕円形状にわずかにくぼみ、裏面がわずかに凸レンズ状を呈し、裏面全体と周縁角がマメツして丸みがある。石材は、灰黒色と茶褐色層が交互に堆積する粘質頁岩である。本例は全体に湾曲してねじれ、平坦面に置いた場合に安定しないことから木枠などに嵌め込むものではない(図9、表3-5)。

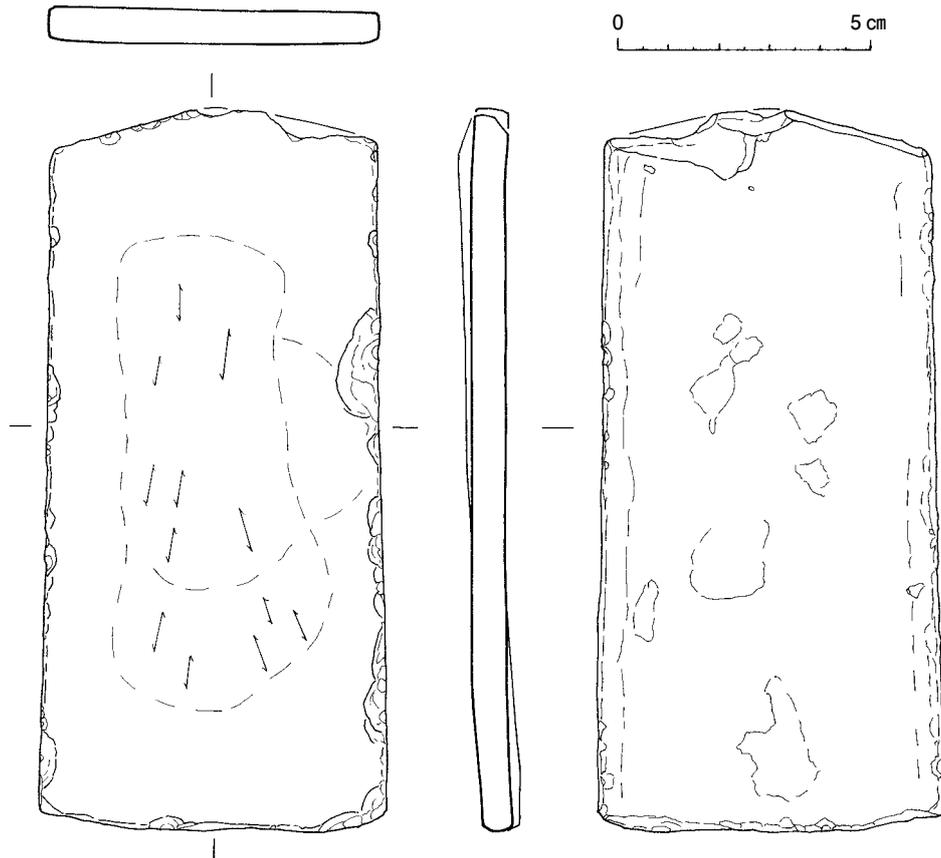


図9 韓国勸島遺跡B地区カ-245号住居跡方形石硯実測図(2/3)

IV. 倭国の既報告方形板石硯の検証

(1) 鳥根県松江市田和山遺跡方形板石硯

田和山遺跡では、当初「石硯」と研石が報告されている(松江市2005)。本2例は国内で最初に確認された弥生の方形板石硯である。この2例を「石硯」と認定したのは、管見によると西谷正氏とされており(白井2004)、正に卓見である。ところが、実測して中国や楽浪の長方形板石硯と比較すると、その違いが多すぎることに気付く。第1環壕(1-c環壕)出土方形板石硯は、周縁の一辺のみが原形を留めていると考えられている(白井2004、武末・平尾2016)が、0.8cm程が残る対面側にも墨らしき黒色付着物があり、破棄される直前まで原形を留めていたものとする。ただし、原形を留めていると考えられている一辺は粗研磨されているが、反対側は断面のまま研磨されていないことから、本例は再生品と考える。したがって、原形が残るのは、平滑に研磨された硯面と、粗割で一部粗研磨され黒色と赤色付着物のある裏面、現長4.04cmの粗研磨された側面、さらにその対面の現長0.8cmの粗割された側面である。断面形は台形で、硯面がわ

ずかに膨らんでいる(図10-1、表3-120、写真3)。

先に検討した武末純一(2016)は、原形を保つ側面観察から「側面は上面側に内傾し、擦り切り研磨で仕上げ」とするが、側面に残る斜め方向に継続する条痕を擦り切り痕跡とすると、鉄鋸で瞬間的に切断したことになることから、機能的にありえないことになり、前記したように裏面の一部と同じく粗研磨とするしかない。武末は、おそらく台形の断面形を擦り切り痕跡と考えているらしい。しかも、各部分の黒色や赤色付着物には触れられていない。

石材は、報告によると凝灰岩とされ、破損面が乳白色を呈している。本例の復元を試みると、原形を留めている長さ4cm程の側面の厚さにおいて0.16cmの差があり、平面形も現状で両側面が平行しない。すなわち、本例の原形は、中国や楽浪の長方形板石硯とは板石を利用しているのと墨の付着以外は似ていないことになる。だから、これを「石硯」とされてきた諸氏は卓見なのである。本例は石材が地元の白色凝灰岩を使用していることから、当該地で製作されたものと考えており、文字文化が倭国では北部九州から時間をかけて広範囲に普及していったことを述べている(柳田2017b・2018a・b・2019a~f)。

C区1-a環壕掘り始め跡付近出土石板状石製品を研石とされているのは、片面に「円形の窪んだところに把手のようなものが付くのかもしれない」（松江市2005）と考えられたかららしいが、武末純一は根拠を示していない（武末・平尾2016）。石製品の原形を保っているのは、現長3cm足らずのわずかに内湾する研磨された側面と平坦な面の一部に弧状に窪む部分が残る一面、その裏面が粗割されたままの面である。武末は「側面下半は下面側にわずかに内傾し、擦り切り痕が残る」とするが、下面角がマメツで丸みをもつものを誤解したらしい。墨らしき黒色付着物が認識できるのは、側面と裏面の側面側及び硯面と考える円弧内である。円弧が正円とした場合は直径約3cmとなるが、楕円形とすればそれ以上の大きさとなる。その外側の平坦部分の幅が1.5cmであるから、この平坦部分が円弧の反対側にも存在すると想定できることから、本石製品の大きさは6cm以上であることになり研石ではありえない。裏面は平滑ではなく、粗割のままでありながら縁辺のみに墨が付着しているのが硯の裏面である証拠である（図10-2、写真4）。報告書（松江市2005）では、石硯の時期が弥生中期後半とされているが、北部九州とは後期初頭以後に併行すると考えている。2回目の現地調査で、砥石などと報告された石器の中から新たに方形板石硯6点、研石1点、有孔石鋸1点を発見した（表3～5参照）（柳田2019a～f）。

（2）福岡県糸島市三雲・井原遺跡番上地区方形板石硯

2016年3月2日三雲遺跡番上地区で石硯が発見されたと報道され、2016年8月にはその内容が〈速報〉という形で報告された（武末・平尾2016）。報告書が刊行されたのは2019年3月であり、石硯が3点に増えていた（平尾編2019）。ところが、その3点を実見すると砥石破片と区別できない製品も含まれている。報告書を精査し実見すると、砥石などとされる石器の中から追加された2点より石硯らしきほぼ完形品1点、未製品を含む研石4点、石鋸4点を発見した（表3～5）（柳田2019c）。

ここでは、学史的な発見として最初に発見された1点のみを検証する。番上330番地1次南北トレンチB区上層例は、〈速報〉では割合よく観察されているが、追加すると硯面は砂質頁岩であり「金雲母様の粒子を多く含む」が、厚さの中央部から変化し裏面が粘質頁岩であり金雲

母様粒子が含まれていない。さらに、原形を保つ左側側面は研磨された現長6cm程の内湾している一辺のみであるが、本板石硯は破損後再生された小型方形板石硯であり、破砕した3辺のあらゆる角などがマメツし、現形のまま使用されて硯面の中央部が楕円形にマメツして「若干窪」んでいる（武末・平尾2016）ことから再生方形板石硯と考えている（図10-3、表3-9、写真5）。

（3）筑前町東小田中原遺跡方形板石硯（表3-53）

本例は倭国3遺跡目の発見であり、報告書では砥石とされていた（石井2001）。弥生後期初頭の東小田中原遺跡3号住居跡床面から出土した方形板石硯は、最大長9.4cm、最大幅7.4cm、最大厚0.69cm、重さ66.1gの法量をもつ（図11、写真6）。報告書では石材を砂岩とする（石井2001）が、灰白色粘質頁岩としておいたほうが良いだろう。実測図上方が比熱して灰黒色に変色している。方形板石硯は、裏面の約半分が剥離しているが、硯面のほぼ中央部が楕円形にわずかにくぼんでおり、裏面が微妙に膨らんでいるのと対照的であることから方形板石硯と判断した（柳田2017a）。製作工程は、材質が層状をなすことから厚さ0.7cm強に剥離した後に両面全体を敲打し、次に同じく両面をほぼ一定方向で平滑に粗研磨している。したがって、硯面の中央部のわずかにくぼむ部分以外には、粗研磨痕が観察できる。この方形板石硯は、2辺がほぼ直角を呈するが、他の2辺が不整形であり破損しているかに見える。しかし、硯面のくぼみが図面下方に片寄るものの、ほぼ中央部を研磨面として使用していることから、完形品である。写真のように少なくとも直角をなす2辺は、調整された敲打痕と考える（写真6）（柳田2017a・2020）。両側面と狭い小口面の3辺に部分的に残る面取を擦切り痕跡と考えると、浅く施工される擦切り溝が短くても施溝分割が可能となり、本例のような変形方形が意図された平面形であることになる。面取だとしても、最長側面の三分の二に面取が存在することになり、その湾曲した側面が意図された曲線であることになる。

2018年刊行の『筑前町史資料編 筑前町の考古資料』には、薬師ノ上例のみ掲載され本例は取り上げられていないが、裏面の欠損部分が出土すれば三雲遺跡番上地区例のように「石硯」と認められる公算が強い。

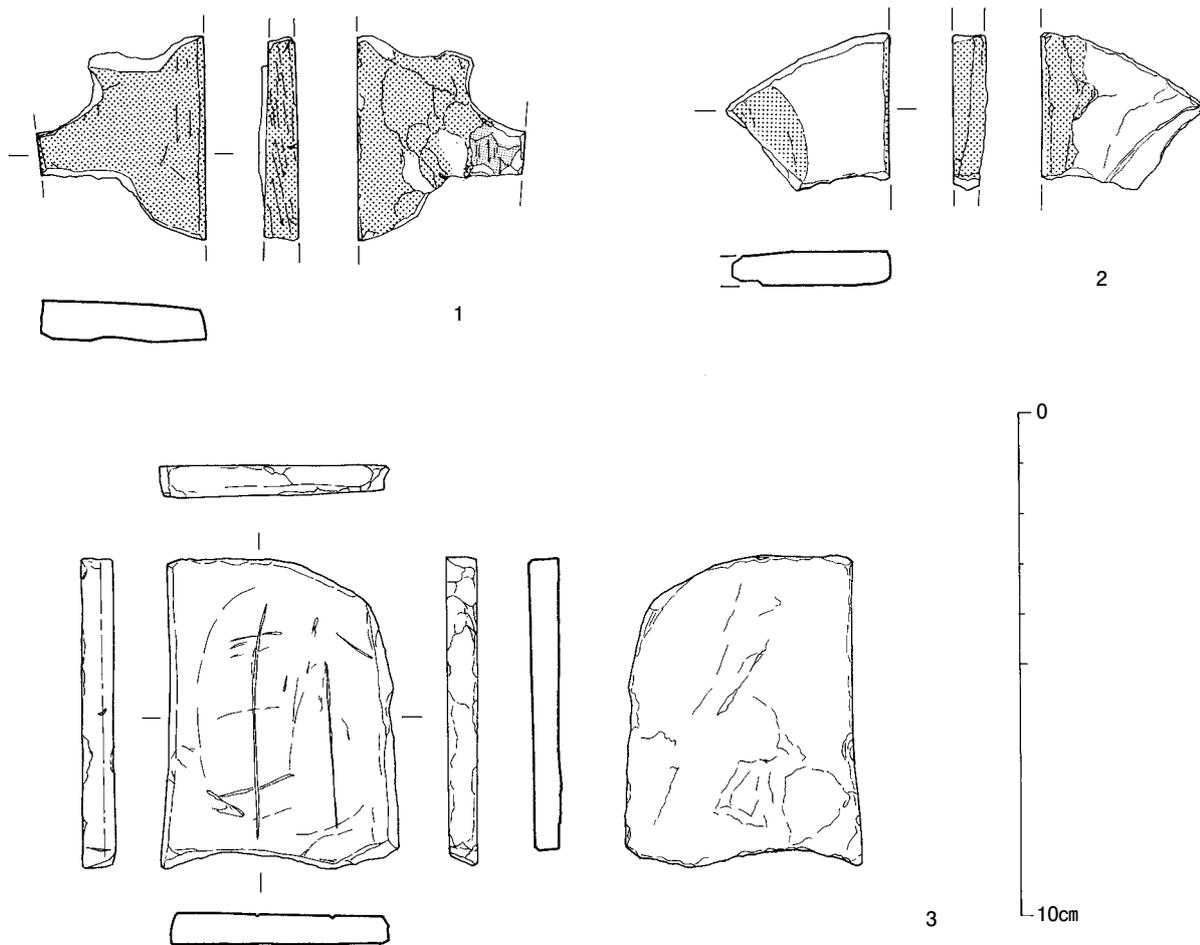


図10 既発見の倭国の方形板石硯実測図 (2/3) [1・2：田和山遺跡 3：三雲・井原遺跡群番上地区]

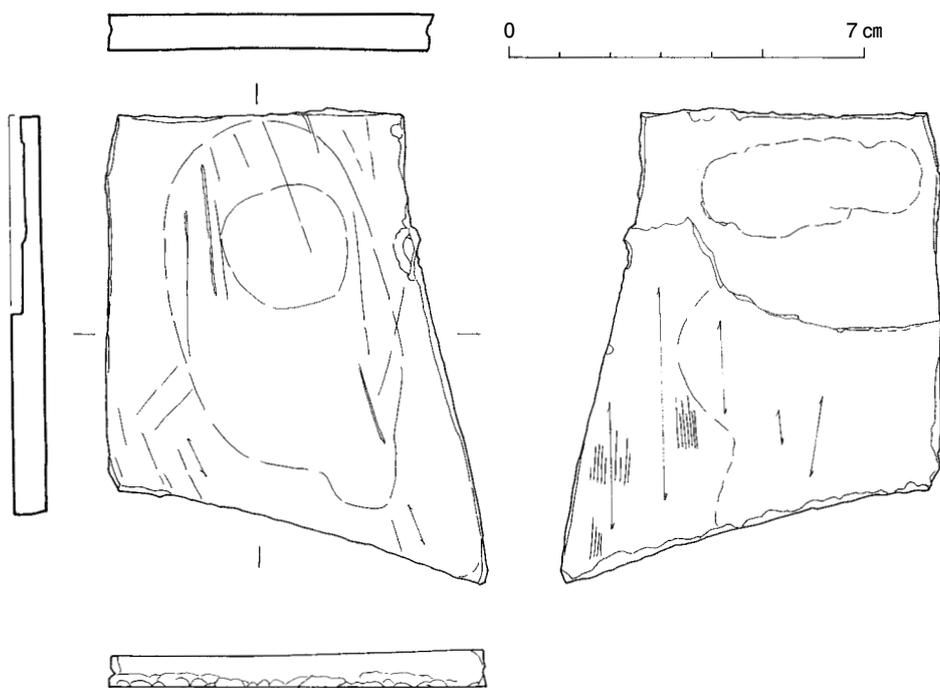


図11 既発見の筑前町東小田中原遺跡 方形板石硯実測図 (2/3)

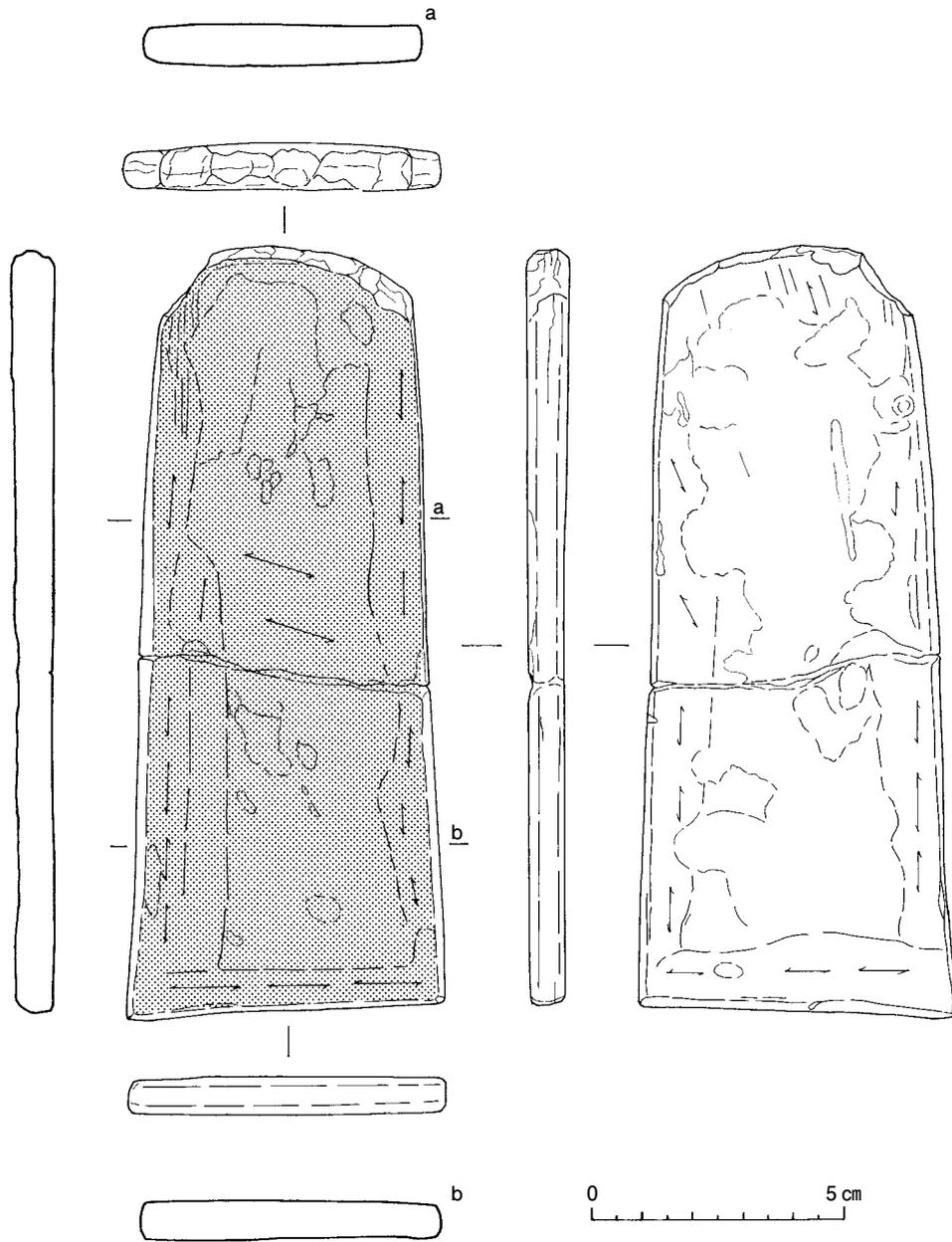


図12 既発見の筑前町薬師ノ上遺跡 方形板石硯実測図 (2/3)

(4) 筑前町薬師ノ上遺跡方形板石硯

薬師ノ上遺跡は、平成15年の発掘調査によって、A区～C区およそ2,400㎡から弥生前期末～中期初頭の竪穴住居跡（4号・5号）、弥生後期前葉の竪穴住居跡（7号）、弥生終末の竪穴住居跡（8号・9号）、古墳時代後期の竪穴住居跡（1号・2号）他、計9軒の住居跡、弥生前期末～中期初頭の貯蔵穴65基と土坑9基、弥生中期初頭・中期中頃の土器を主体とする土器溜り1基が検出されている。このうち土器溜り遺構から、今回方形板石硯として紹介する板状石製品が出土していた（石井2005）。

方形板石硯と考える石製品の石材は金雲母が混入した

砂質頁岩で、最大長15.3cm、最大幅6.3cm、最小幅5.0cm、最大厚0.9cm、最小厚0.69cmの法量をもつ。板石硯の平面形は、最大幅が一方の小口側にあり、最小幅側の小口が弧をなす。弧をなす小口側のみ粗打ち欠き（敲打調整）で部分的に面取されたままだが、他の三辺は面取状に丸く研磨仕上げされた完形品である（柳田・石橋2017）。武末純一は、側面を先入観から「擦り切り」（擦り切り痕跡は観察できないのに柳田実測図を加筆修正している）としていることから、見解が違っていることになる（武末2018）。両面の平坦面は敲打の後粗研磨されているが、A面の硯面と考える一方の表面は敲打痕が少なく、敲打

痕内に墨と考えられる黒色が残る、B面の裏面は敲打痕が多く残り黒色がない。現状ではほぼ中央部で破断していることから正確ではないが、縦断面ではほぼ中央部がくぼむものの、横断面では上下共に硯面中央部がふくらんでいることから、水溶化された墨は両側にたれる可能性があるが、円滑に丸く研磨された側面にはその痕跡が現状では見えない(図12、表3-54、写真7)(柳田・石橋2017、柳田2020)。円滑(平滑)な部分は出土後に水洗されれば墨の痕跡が失われることになる。

V. 型式分類

中国で硯が出現するのは戦国時代末期とされ、平らな自然礫を利用している。次に前漢初期に出現する円形板石硯の発見例が増加し、約40例が報告されている。前漢中期に出現する長方形板石硯は、漢代に最も普及した硯で、中国国内のほぼ全域、さらに朝鮮、ベトナムでも発見されている(吉田2003・2018)。これらが日本で出土する可能性を残しておきたいことから、出現順番に自然礫利用硯をⅠ型式、円形板石硯をⅡ型式、長方形板石硯をⅢ型式とする型式分類とする。

吉田恵二は、長方形板石硯を横断面の形態から、横断面が長方形で外面全体を平坦に磨いて整形したA類、断面が逆台形で外面全体を平坦に磨いて整形したB類、断面逆台形で上面と側面上端のみを平坦に磨いて整形したC類に大別している。(吉田2003・2018)。この分類は平面形においては型式分類できないことを前提とされていることが明らかである。「形式的にはA類→B類→C類の変遷が認められる」(吉田2003)とするが、一覧表などに個別例の表示がないことから、明確な分類ではない可能性があり、実物を検証する以外に確認できない。日本に所蔵されている楽浪出土品2点は、横断面形が明確な逆台形ではないがC類である。日本・韓国出土品は横断面形や両面研磨ではA・B類が含まれている。

中国や楽浪郡で出土する長方形板石硯は、現在日本に存在する出土品で判断する限り幅において数ミリ以上の誤差がない正長方形であることから、これを定型式とすると韓国や日本で出土する方形板石硯は不整形を呈するものが多い。したがって、中国や楽浪出土の正長方形板石硯をⅢA～ⅢC型式、韓国や日本で模倣された方形

板石硯を分類する。

田和山遺跡出土「石硯」例段階では断定されていないが、楽浪からの舶載品として議論されている(岡崎2005)。この時点では、田和山例の一方が凝灰岩製であることと、吉田(2003)の断面形分類が無視され(田和山例は台形である)、同様に三雲遺跡番上地区例の発見と資料紹介時にも倭国製の可能性が検討されていない(武末・平尾2016、平尾編2019、武末2019)。その証しとして両遺跡の報告書の中で砥石などと報告されている石器の中から、2019年になって多数の方形板石硯と未製品を含む砥石を発見した(柳田2019c)。

(1) 定型式(長方形板石硯)

定型式は、中国や北朝鮮の楽浪郡で出土する正長方形板石硯をⅢA a・ⅢB a・ⅢC a型式、韓国や日本国内で模倣された正長方形板石硯をⅢA b・ⅢB b・ⅢC b型式とする。現在のところ倭国では時期が確実に特定できるⅢA a・ⅢB a・ⅢC a型式と判断できる例が発見されていないが、いずれ発見されるものと考えられる。ⅢA b型式の最古例は不確実ながら吉野ヶ里例などが弥生後期前半以後にあり、西新町例のように古墳前期以後に定着している可能性がある。ⅢA b型式は、横断面形から長方形をⅢA b1式、逆台形をⅢA b2式とする。

丹波篠山市門前遺跡A-2地区例(ⅢC a式)

報告書では、出土地点や時期不明の「砥石」とされている(深江編2011)。ところが、平面形が正長方形であること、表面(硯面)に使用痕跡の同心円形マメツ痕が存在すること、裏面が割面でありながら周辺部の一部に安定性を保つための研磨痕が存在すること、原形を留める小口と両側面がヨコ方向に粗研磨されていることから、長方形板石硯と判断した(図13-1、表3-147、写真8)。墨などの付着物の痕跡はなく、断面逆台形ではないが中国の「青石」製らしいことから舶載品のⅢC a式の可能性がある(柳田2019b・c)。

筑紫野市貝元遺跡121号住居跡例(ⅢA b1式)

報告書(中間編1999)では、5世紀後葉の121号住居跡出土の細砂岩製「手持ち用中砥」とされているが、本稿では定形長方形板石硯例と考える。本例は両面が粗研磨で、片方小口が破損し、残りの3辺が割面そのままの未製品である。原形を保つ3辺をみると、擦切り技法を

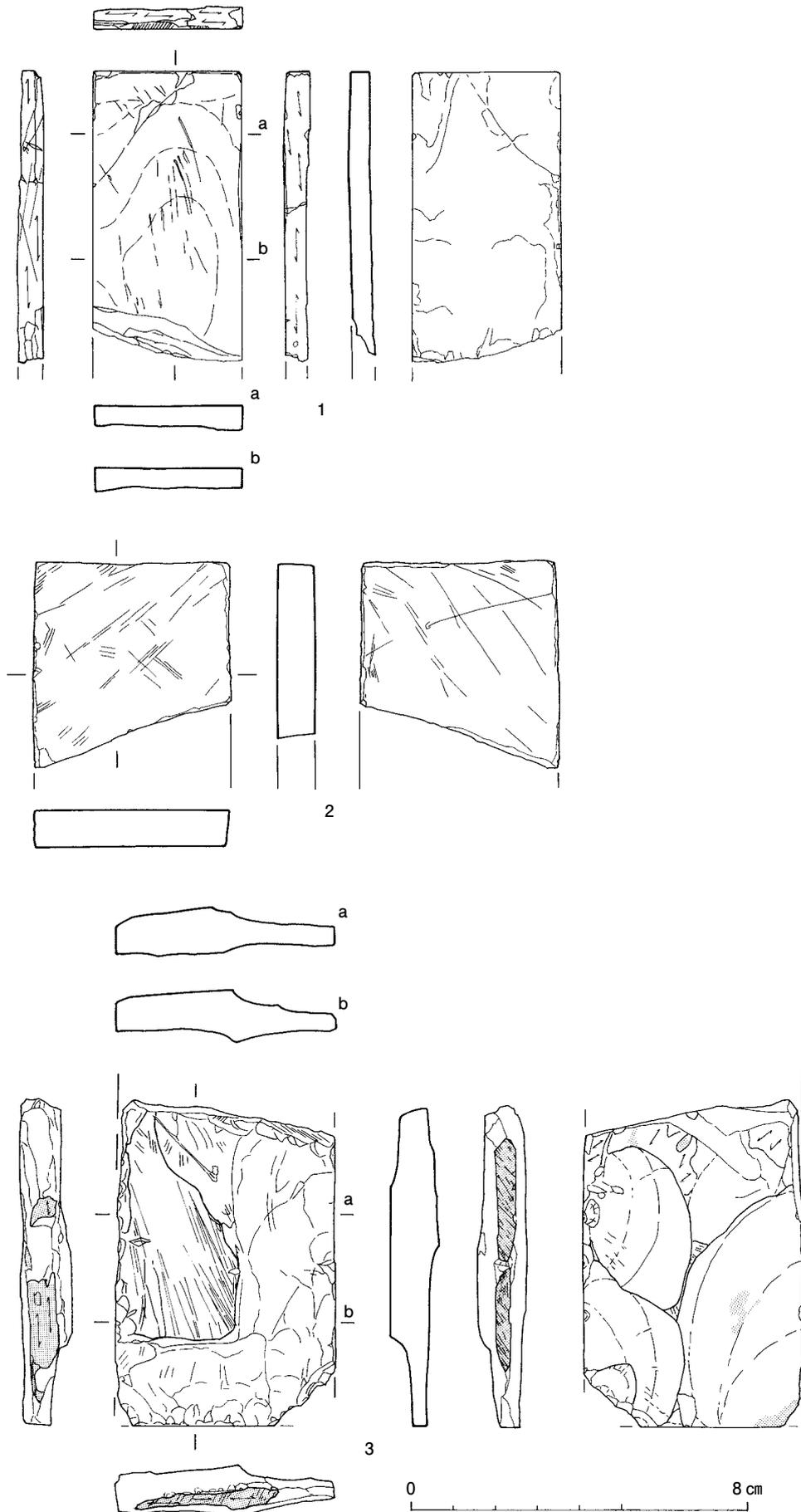


図13 方形板石硯実測図① (2/3)

[Ⅲ C a 式 1 : 門前遺跡 2 : 貝元遺跡121号住居跡 Ⅲ C b 式 3 : 吉野ヶ里遺跡]

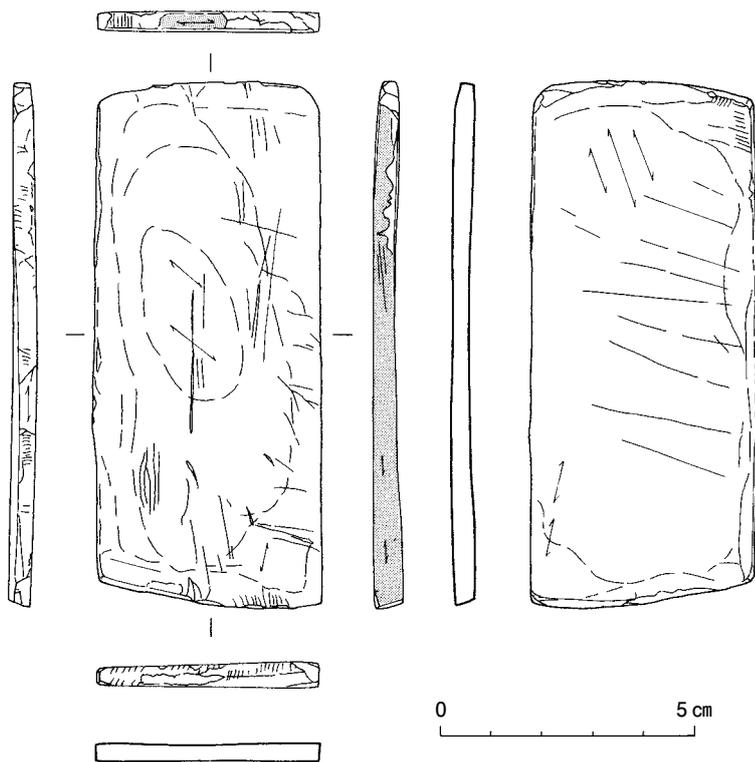


図14 方形板石硯実測図② (2/3)
[Ⅲ A b 1 式 西新町遺跡22次調査 P-64]

使用せずに直線・直角に仕上がっていることから、このような製作技法が存在したことになる。両面が粗研磨され古式であること、共伴土器に弥生中期甕が1点含まれていることから、この時期の混入品である可能性も残されている (図13-2、表3-45)。

佐賀県吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里地区Ⅵ区 SH1291 長方形竪穴住居跡例 (Ⅲ C b 式)

方形板石硯の発見が注目されるようになって報告 (渡部編2019) され、同時に詳細が紹介された (渡部2019)。詳細は渡部論考に譲るが、原形を保つ側面や小口面で観察できる加工痕跡は擦切り痕跡ではなく粗研磨痕跡であり卓見である。ただ報告や論考には記述がないが、現形の裏面以外の剥離面は、両側面や小口面に明瞭に残る赤色付着物以後に実施されていることから、長方形板石硯の未製品であることになる (図13-3、表3-107)。

吉野ヶ里遺跡南部の田手一本黒木地区Ⅰ区 220 調査区 SD0026・SD0027溝例 (Ⅲ C b 式) (表4-26)

渡部論考 (2019) で「方板形研石の可能性」とされる本例は、両小口が欠損しているが、研磨面を観察すると「中央部から下部は僅かに窪んで」おり、窪んだ部分の楕円形の等高線も半切していることから、本例は復元長約 8 cm、

幅 3.4 ~ 3.5 cm、厚さ 0.4 ~ 0.5 cm の小型長方形板石硯を研石に再生したものとする。両側面はケズリ調整され、その上に赤褐色が付着している (図31-3、写真26)。ちなみに、楽浪王肝墓小型長方形板石硯は、長さ 9.13 cm、幅 3.2 ~ 3.3 cm、厚さ 0.5 cm である (図8-2、写真1)。

福岡市西新町遺跡 22 次 P-64 例 (Ⅲ A b 1 式) (表3-23)

報告書 (下原編2009) では、時期不明の64号ピットから「砥石」3点 (報告書第46図の6・7・9) が出土している。このうち2点为本稿で長方形板石硯とするが、他の1点は厚さが1.5 cm であることから疑わしい。本遺跡で最も重要視するのは、現長 10.44 cm、幅 4.27 cm ~ 4.42 cm、厚さ 0.34 cm ~ 0.5 cm の扁平な長方形板石硯である。報告書では砂岩製とするが、いわゆる灰褐色粘板岩であり、粘質頁岩

である可能性が高い。共伴した3点が同一石材に見えるが、他の2点は頁岩製とする。本長方形板石硯は、両側面がほぼ平行するものの、両小口が不規則である。本例は全面に赤褐色が付着しているが、小口面の再加工部分のみ赤褐色が付着していない。両平坦面は、製作当初は平坦に粗研磨されたらしく、両小口側部分のみ粗研磨の平坦面が残り使用によるマメツがない (図14、写真9)。共伴した長方形板石硯片は保存状態が悪いが、原形を留めている両側面が平行している。共伴した砥石を含めて3点共赤褐色が付着していることから、祭祀的埋納遺構あるいは製作工房の一部と考える。他にも同一石材・同一製作技法の厚みのある砥石が数点出土している。時期は、17次調査の1号住居跡出土長方形板石硯と同型式・同石材・赤褐色付着であることから古墳前期前半と考える。

福岡市比恵遺跡141次調査Ⅱ区包含層例 (Ⅲ B b 2 式)

本例は報告書校正最終段階で連絡があり、実見して指導したがあまり理解されずに表裏逆に報告されている (松崎2018)。本例は包含層出土であることから時期が特定できないが、出土土器には弥生中期から古代のものまである。時期は出土地が包含層最下の地山直上であることから、弥生終末の可能性が高いという。本例は小破片

であるが長方形の3辺が原形を留めており、厚みのある本体裏面周縁が大きく面取される特徴をもつ。石材が割合軟質であることから、硯面がマメツにより大きくくぼみ、硯面と小口面のみ黒色が付着している（図16-3、表3-28、写真12）。同型式に小破片ながら、弥生終末の基山町千塔山遺跡15号住居跡例がある（渡部2019）。

（2）不定形式（ⅢD型式）

現在のところ日本で最初に出土する板石硯は、平面形において略方形ではあるが正確な長方形ではない。現在最古例の糸島市潤地頭給例・唐津市中原例・朝倉市下原例は、両小口幅において1cm以上の差があり、広い方の小口の一辺が極端に傾斜する平面形を呈する。当初は唐津市中原遺跡未製品例の幅広小口側が破損しているものと判断していたところ、朝倉市下原遺跡例・築城町十双遺跡例などで完形品が発見されたことから、この型式が少なくとも弥生終末までは定着していることが明らかである。この型式は弥生終末まで確実に存在し、意図された平面形と判断することから、これをⅢD a式とする。この平面形は、中国では玉器の「圭」を縦に半分に割った形の玉器の「璋」に類似する。弥生中期中頃の丹塗磨研土器の出現など中国と無縁ではないと考える（常松2013）ことからこの型式を「璋形」としておく。東小田中原例で狭い小口と短い側面とが直角をなすことと、その時には気付かなかったが広幅の小口面と鋭角をなす側面が多少湾曲する共通点が存在するのも無縁ではない。璋形とした場合は実測図で尖った方を上側に配置すべきであるが、本稿の方形板石硯では幅が狭い方を上に配置してきたところから、東小田中原例報告時とは違って天地逆に配置することにした。

糸島市潤地頭給遺跡大溝上層例（ⅢD a式）

潤地頭給遺跡は、弥生終末から古墳早期の玉作遺跡として知られているが、弥生中期中頃以後の遺構や遺物も発見されている（江野2006、江崎編2007）。ここで紹介するのは、報告書でⅢ-E区大溝E区上層出土の「扁平片刃石斧」とされている石器である（江野2006）。本製品は3辺が原形を留めており、平面形の現存する小口が狭く、破損する方へ広がる梯形を呈する。部分調整は、幅が狭い小口が平面的に斜め方向に粗研磨され、両側面が多面的に斜めに粗研磨されて終わっている。表面（硯

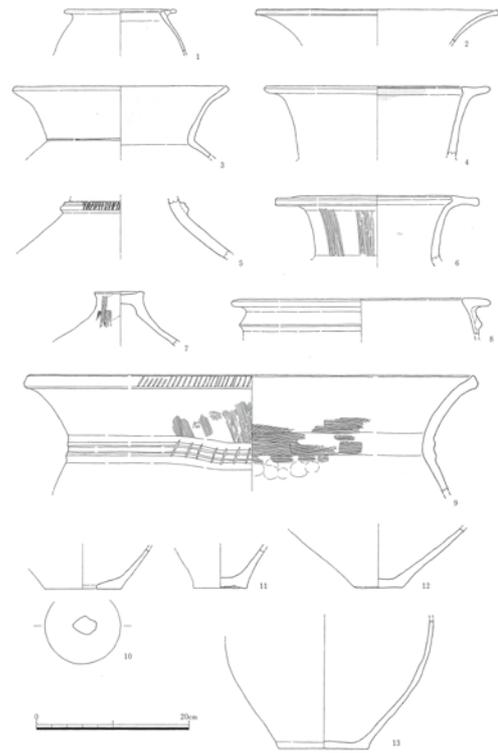


図15 糸島市潤地頭給遺跡 大溝上層出土土器（江野2006、1/10）

面）とする片面は平面的に縦方向に粗研磨され、部分的に割面の窪みを残して研磨を終えている。これに対して裏面は割面（剥離面）のまま、未調整であることから小型方形板石硯の未製品（未使用品）とした（図16-1、表3-12、写真10）。ちなみに、法量は、後記の唐津市中原遺跡小型方形板石硯とはほぼ同じであることから、規格が存在する可能性がある。時期は、弥生中期中頃の土器に1点のみ弥生終末の大甕片が混入しているが、時期が隔離していることから中期中頃とする（図15）。同時期のⅢ-W区1号溝I群出土品の中に、報告書では石包丁とされるが、後述する石製工具の石鋸（70）と石鑿（71）など合計6点を発見した（江野2006、柳田2019c）。

唐津市中原遺跡例（ⅢD a式）

SH11183住居跡からは、「定形砥石」と「未製品」の各1点が出土している（小松編2015）。報告書で「定形砥石」とされている大型品（図18）は、狭い方の小口が弧状に敲打調整され、長い方の側面が研磨されている。破損して短い側の側面は、浅い擦切り痕跡があるが下半の多くが折半の際に破損し、擦切り痕跡がある部分も含めて未加工である。硯面は長い側面側に高まりがあるものの、研磨途中で終わっており、右上部分以外は滑らかに研磨されている。硯面中央には平面を二分するかのよ

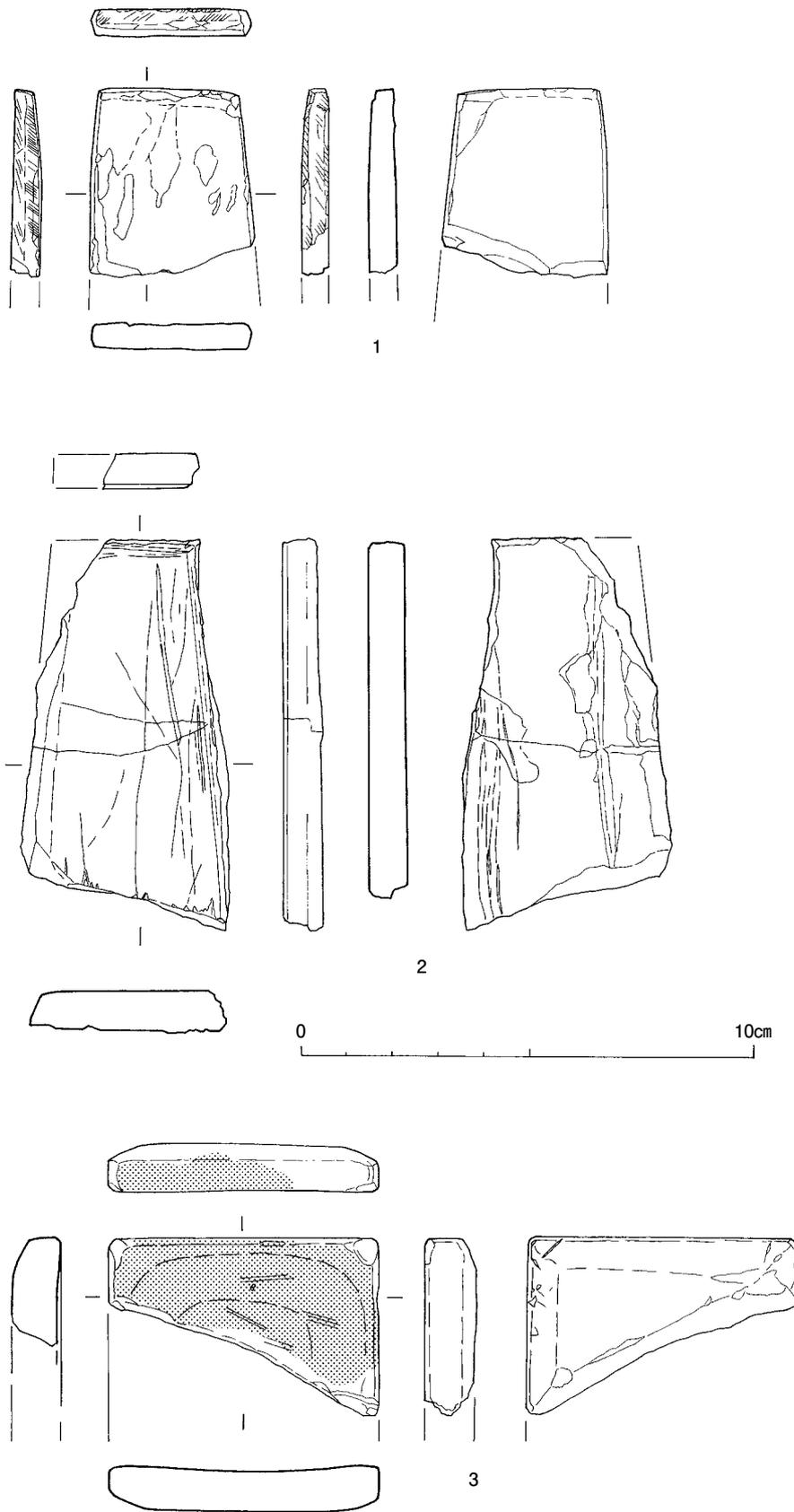


图16 方形板石硯实测图③ (2/3)

[1：潤地頭給遺跡 2：中原遺跡 3：比恵遺跡141次調査Ⅱ区包含層]

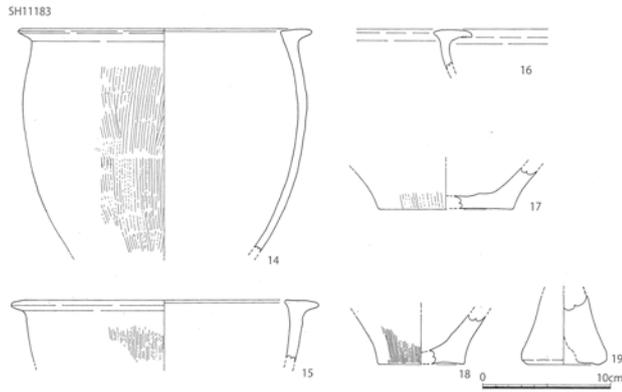


図17 唐津市中原遺跡 SH11183住居跡
出土土器 (1/6)

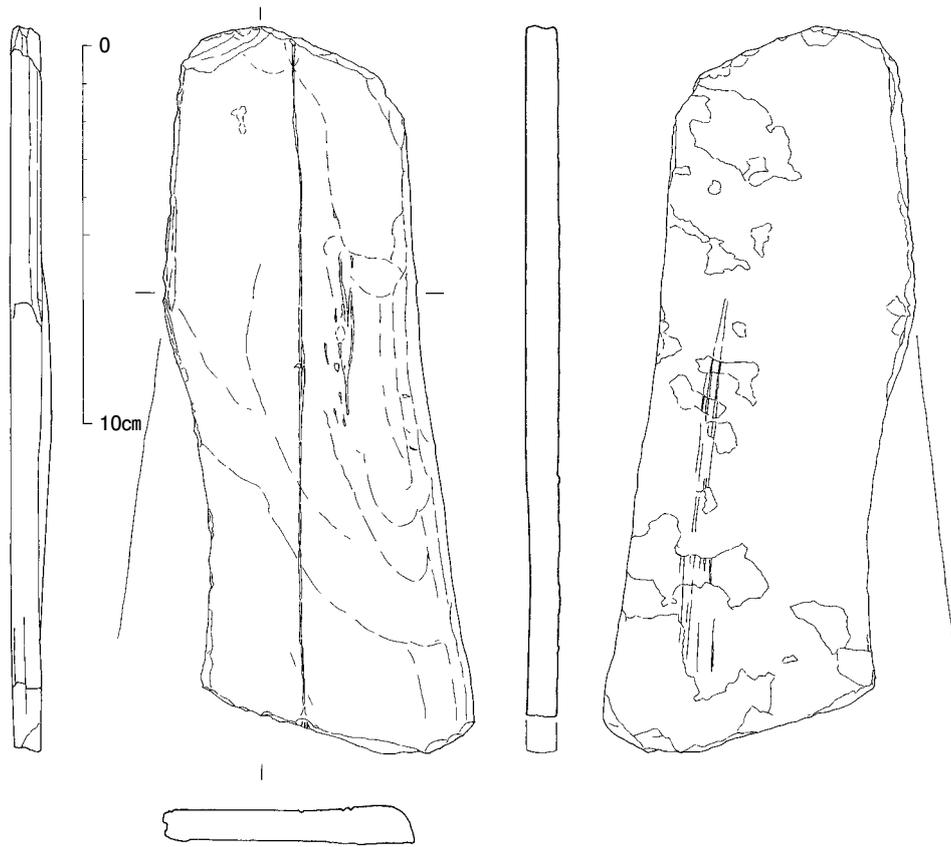


図18 方形板石硯実測図④ (1/2) [唐津市中原遺跡 SH11183住居跡]

うに縦に浅い擦切り溝らしき痕跡がある。裏面は割面そのまま未加工であるが、一部に擦切り痕跡のような無数の極浅い溝がある。問題は広幅の小口側で、尖った方の角が敲打調整されていながらその他の長い部分が未調整であることである(図18、表3-103)。当初は破損したものと考えていたが、尖った部分のみ敲打調整されて丸みをもつこと、本遺跡方形板石硯関係製品3点の未製品の全部に同様広幅小口が鋭角に尖ること、その後発見した同時期の朝倉市下原遺跡例などが同様な平面形を呈し、墨らしき黒色や赤色付着物があり使用痕跡が確認できることと、時期が下降しても同形態が存在すること

からこの型式を設定した。

報告書で「未製品」とされる小型石製品は、片面は砥石のようなマメツがなく平坦に研磨され、周縁の2辺に浅い擦切り痕跡があるものの割面そのままの未加工の小型方形板石硯である(図16-2、表3-104、写真11)(柳田2019b・c)。短い側側面は擦切り痕跡がなく、面取風に肩の斜面が施されているが、大半が割面そのままである。硯面は平坦に研磨されているが、擦切り溝らしきものと極浅いが傷が縦方向に走っている。裏面は割面そのままであるが、ここにも擦切り溝らしきものなど浅い傷がある。幅広小口側は、割面そのまま斜行して一方

が尖る。渡部芳久は、本製品を「石硯の未製品の可能性」とし、幅広小口を「欠損」とする(渡部2019)。大型・小型方形板石硯の時期は、弥生中期前半古段階(須玖I式古段階)土器に1点(図17-16)のみ須玖I式新段階甕口縁部が混入していることから弥生中期中頃としておく(図17)。同遺跡からは、石鋸1点(図34-2)も発見した。

朝倉市下原遺跡4号住居跡例(ⅢD a式)(表3-67)

下原遺跡は、報告書では弥生中期前半の住居跡群とされている(佐々木1983)が、丹塗磨研土器が含まれていることなどから、本稿では中期中頃とする。本方形板石硯は「砥石」として報告され、弥生中期中頃(須玖I式新段階)土器と共伴し、4号住居跡東側壁床面から出土している。本例は、狭い側小口が敲打調整、両側側面が研磨調整、幅広小口が割面無調整であるが、意図された平面形の完形品と考える。その根拠は、例外なく本例も出土後水洗されているが、石材が砂岩であることから微細なくほみに黒色や赤色が沈着しており、側面の一部と幅広小口面には黒色の下に赤色が濃厚に網目状を呈して付着している(図19-1、写真13)本例は、厚さが最小1.3cmから最大2.0cmと全体に分厚いことから、一見砥石の転用と考えられる可能性もあるが、前記や後記のように意図された平面形である。両面の利用によるマメツ程度を示す同心円が観察できることから方形板石硯の特徴を残しておりⅢD a式の典型と考えている。この時期には丸刃石斧などが存在し、刃先を研磨する可能性もあるが、その場合に赤色や黒色が付着することはない。

筑前町東小田中原遺跡3号住居跡例(ⅢD a式)

前記参照(図11、写真6)(柳田2017a・2020)。

築城町十双遺跡19号住居跡例(ⅢD a式)

十双遺跡は弥生終末の住居跡群で構成され、13号住居跡から楽浪系土器、9号住居跡から銀製品、12号・18号・19号・22号・25号(2点)住居跡・谷1の砥石とされるもの(中間編1992)から合計7点の方形板石硯を発見した。報告書では方形板石硯の全部が「砥石」とされているが、一部に茶褐色と黒色付着物が観察されることと、時期的に丸刃石器は石包丁以外に存在しないことから方形板石硯とした。このうち19号住居跡から出土した「砥石」は、方形板石硯ⅢD a式の典型例の一つと考えている。幅が狭い小口は直線的で割面そのまま、左側側面が研磨調整、右側側面が割面を残した部分研磨、幅広小口側が割面そ

のままである。硯面は不規則に凹凸があるものの研磨やマメツし黒色付着物が全面に観察され、黒色付着物が側面や割面そのままの裏面の一部にもみられる(図19-2、写真14)。

その他に同一型式は、赤色や黒色付着物がある春日市須玖岡本6次Cトレンチ西側拡張区7層上層例、筑紫野市貝元遺跡河出土例・溝14例・溝17出土例、筑前町迫額遺跡68号住居跡例(未報告)などがある。

筑紫野市貝元遺跡河例(ⅢD a式)

報告書では、弥生中期前半から古墳後期土器が共伴する河から出土した「砥石」(中間編1998)だが、全面に黒色が付着すること、裏面が割面そのままであること、平面形で幅広小口側がⅢD a式の形体であることから方形板石硯ⅢD a式とした。狭い小口側が欠損し、斜行する小口側を敲打調整、両側側面が研磨調整されているが、硯面のマメツ同心円が右側に片寄り、右側が薄いことから再生品であると考えられる。再生品でありながらⅢD a式を踏襲していることになり、時期が古墳時代まで存続している可能性も残されている(図21-1、表3-42)。

総社市神明遺跡土坑115例(ⅢD a式)

本例は、報告書では弥生後期I新段階の土坑115出土の「砥石」とされている(岡山県2019)。本例の石材は「粘板岩」とされているが、緻密硬質頁岩らしき材質で、裏面の割面以外の研磨・マメツ部分が黒色を呈している。硯面中央部はマメツでわずかにくぼみ、上の三分の一に敲打痕跡、その下三分の二は平滑で光沢がある。周縁は敲打後粗研磨されている。周縁の上部両角が欠けているように見えるが、これは製作工程段階の意図的打撃痕であり、部分的に粗研磨されていることから完形品である。硯面上部に径2.4mmの穿孔途中のくぼみがある(図21-2、表3-141、写真15)。この型式が瀬戸内中部に存在することで、東西交流が証明できる。

(3) 不整形(方形板石硯)

横幅が広い小口が極端に傾斜する平面形の璋形板石硯をⅢD a型式とした。この型式は裏面が剥離されたままの未加工のものが多いが、下原例から中国や楽浪のように木盒に固定するものではなく、手持型式と考える。さらに多少出現が遅れるが、韓国勸島例・筑前町薬師ノ上例のように幅が狭い小口が玉器の圭形のような山形や

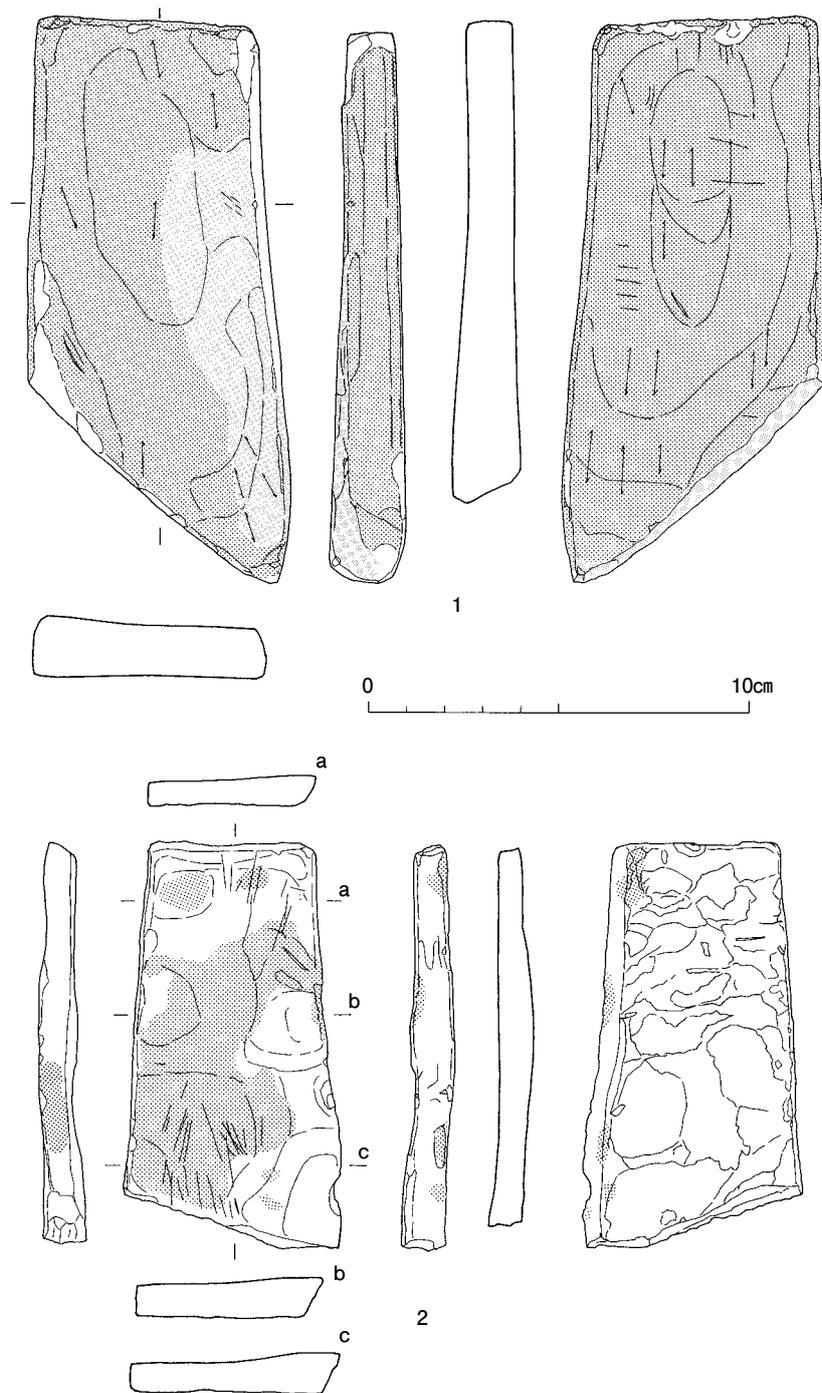


図19 方形板石硯実測図⑤ (1/2)

[1 : 下原遺跡4号住居跡 2 : 十双遺跡19号住居跡]

弧状に外湾するものが存在することから、これをⅢD b式とする。この型式は、裏面も研磨されるものが存在し古さを示すが、木盒に固定することが可能である。他に東小田峯遺跡117号住居跡例・田和山第1環壕B区1区例・三雲遺跡番上地区330番地2次包含層例・壱岐市原の辻遺跡高原石敷き跡例などがある。なお、薬師ノ上例など小口が弧状を呈するものを久住猛雄(2019a)は「勺状」としているが、「笏」の間違いではないだろうか。

ⅢD b式のうち古式と考える両面研磨例を先ず例示するが、本例は両側面が丸く研磨される特徴がある。

韓国勸島遺跡245号住居跡例 (ⅢD b式)

前記参照 (図9、写真2) (柳田2017a・b・2018a・c・2019a～e)

筑前町薬師ノ上遺跡例 (ⅢD b式)

前記参照 (図12、写真7) (柳田・石橋2017、柳田2018a・c・2019a～e・2020)

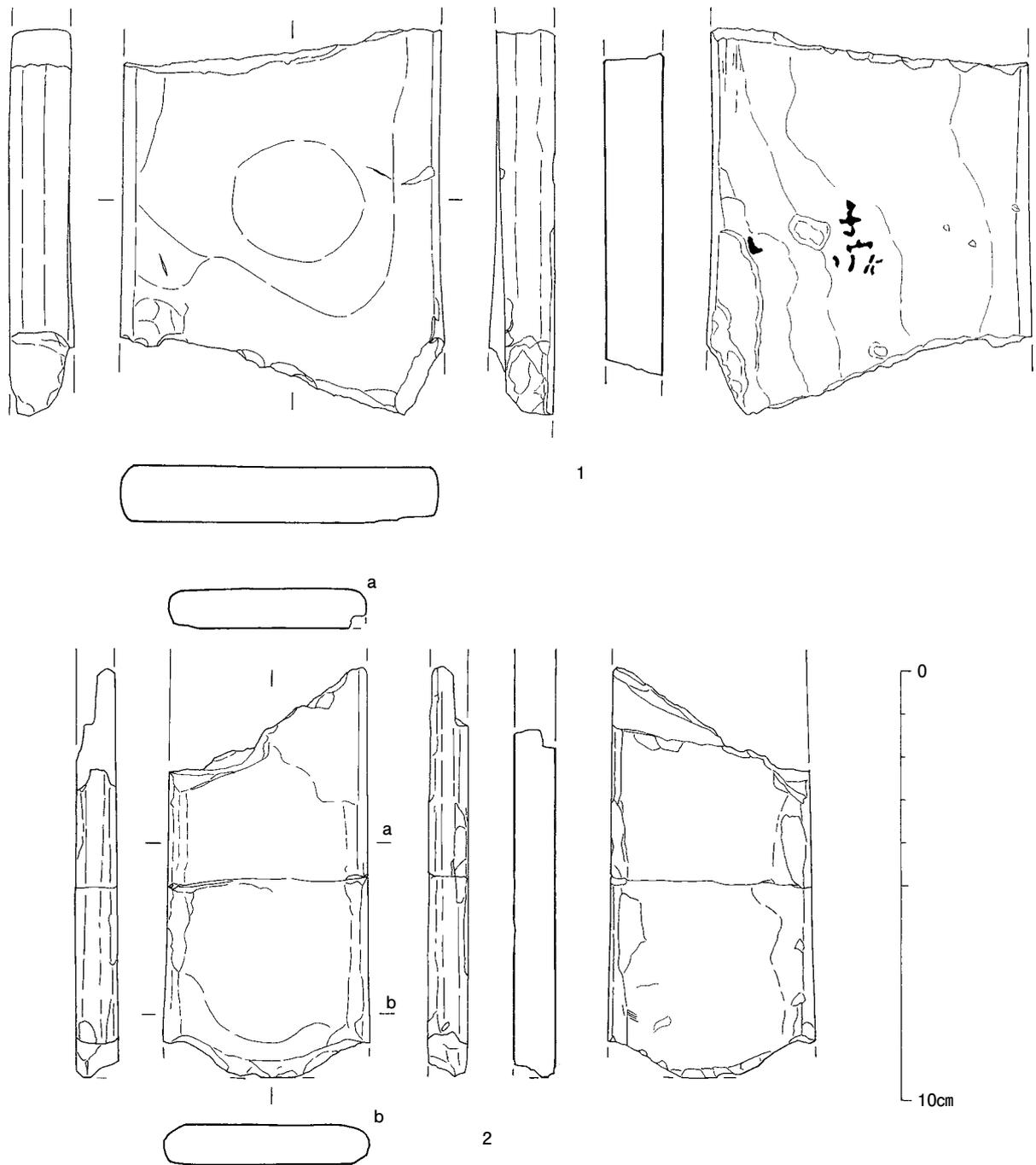


図20 方形板石硯実測図⑥ (2/3) [1：田和山遺跡 2：貝元遺跡96号住居跡]

松江市田和山遺跡第1環壕D区黒色土中例 (ⅢD b式)

報告書(松江市2005)では「砥石」(457)とされているが、両面が研磨され、薬師ノ上例のように両側面が丸く研磨されていること、両小口を欠損するが片面の中央部がマメツして丸くくぼむこと、裏面に墨らしき附着物が存在して一部が文字らしく見えることから方形板石硯と考える(柳田2019c)。方形板石硯の上下関係は、図面上小口幅7.34cm、下小口幅7.51cmであることから図示したが、右側側面が内湾することから大差がなく長方形に近い可

能性もある。硯面と考えるマメツ具合からすると上側小口は明らかに大きく欠損するが、下側小口の右端側がマメツしていることから、破損が小規模であると考えられる。この方形板石硯は一見規格性のある均等な製品に見えるが、厚さにおいて左下角部分が1.48cmの最大厚、右下部分が1.05cmの最小厚、他の部分が1.19～1.38cmの厚さに仕上げられている。裏面の文字らしき痕跡を発見したのは久住猛雄氏であり、松江市教育委員会でも検討されているが発表がない。ちなみに、久住氏は後に「子六」又は「子

穴」と考えているようだ（註）が、いずれにしる意味が難解である。松江市からX線写真などのデータが託されたので、本稿では私見を述べる。方形板石硯裏面中央部には、上に子・午・壬らしき文字、下が「まだれ」・「がんだれ」・「ほこづくり」をもつ文字の戌・戌・戌のいずれかに見える。さらに想像を逞しくすると、2字あわせて干支の「壬戌」（紀元2年）には見えないだろうか、年代的に符合する（図20-1、表3-122、写真16）。さらにこの文字の左側に明瞭な立体感のある黒色付着物が2点あることから、詳細な分析が必要である。ただし、裏面と側面の一部には出土後の透明な樹脂系付着物が見られることから、その経緯を確認する必要がある。文字らしきものは、その樹脂らしきものに覆われ、意図的に保護されているかのようだ。

筑紫野市貝元遺跡96号住居跡例（ⅢD b式）（表3-39）

本例は96号住居跡出土破片と包含層出土破片が接合したもので、報告書（中間編1998）ではなぜか「石戈」とされているが、本稿では典型的な方形板石硯と考える。葉師ノ上例・田和山例と同様に両面研磨、両側面が多面研磨調整されている。図面（図20-2）で下側小口を円弧に復元しているのは、小口中央部分が敲打調整されていることと、下端幅が4.72 cm、上幅が4.56 cmであり、上端幅が4.5 cmに復元できるからで、この型式が両小口を直線仕上げしない特徴をもつからである。また、本例は、両面共に使用痕跡がないことから、未製品あるいは未使用品である。時期は、住居跡の弥生後期中頃以前と考える。糸島市三雲・井原遺跡番上330番地2次包含層例（ⅢD b式）

報告書（平尾編2019）では、「板石硯の未製品の可能性も」と記述され卓見であるが、両面が実用されていることから未製品ではない。甕と「三韓系土器」が相伴しているが、甕は丹塗鉢で実測図の間違いである。そうだとすると、厚み（1 cm以上）のあるⅢD b式の最古例（弥生後期前半）となり重要な1例となる。周縁は敲打調整後マメツしているが、この型式で本例が重要な製作技法を示すのは上辺小口の左右角側から打撃を加えられていることとあり、この型式の製作技法の特徴を明示していることである（図22、表3-12）。

筑前町東小田峯遺跡117号住居跡例（ⅢD b式）

大型方形板石硯と考える石製品は、古墳前期前半の117号住居跡覆土出土の黒褐色砂質頁岩製の完形品であ

る（図23、表3-57）。大型方形板石硯は、全形が五角形を呈し、硯面中央部がマメツにより大きくくぼむ。両側面は敲打後研磨され平滑であるが、両小口が敲打整形のままであり、裏面が石材からの割面そのまま無加工。硯面は、全面に赤色付着物があったらしく、周縁全面と裏面の周縁近くの部分に赤色付着物が見られる（柳田2020）。

（4）不整形

東小田峯遺跡2号住居跡・同15号祭祀土坑例（柳田2020）のように略楕円形や築城町十双遺跡25号住居跡例のように略六角形の平面形を呈する板石硯が存在する。発見例は少ないが、方形板石硯の大型品としてⅢE型式とする。三雲番上2例目（平尾2018、平尾編2019、武末2019）を「石硯」とするならば、330番地2次包含層例のような大型方形板石硯や東小田峯15号祭祀例のような不整形大型方形板石硯も方形板石硯として認めざるを得ないだろう。

筑前町東小田峯遺跡15号祭祀土坑例（ⅢE型式）

大型不整形方形板石硯と考える石製品は、弥生中期中頃から後期初頭の土器が相伴する15号祭祀土坑出土の灰白色粘質頁岩製で、現長19.1 cm、現最大幅9.8 cm、現最大厚1.9 cm、現重さ262.2 gの法量をもち平面形が船形を呈する。15号祭祀土坑は近世墓で攪乱されていることから、破片の大半が近世墓からの出土であるが、裏面に接合した一片が15号祭祀土坑から出土している。黒色や赤色付着物がないことから砥石との区別が困難であるが、両面ともに中央部がマメツして窪んでおり、裏面の一片のみであっても三雲遺跡番上地区石硯よりは方形板石硯らしい（平尾編2019）。周縁は平滑に研磨されている。本例は、墳墓祭祀に使用された唯一の方形板石硯である（表3-58）（柳田2020の図参照）。

筑前町東小田峯遺跡2号住居跡例（ⅢE型式）

柳田2020の図参照。

築城町十双遺跡25号住居跡例（ⅢE型式）（表3-99）

十双遺跡は弥生終末の集落で、楽浪系土器や銀製板状品などが出土している（中間編1992）。報告書では砥石とされたものの中から、本稿で方形板石硯とするものが6点発見された。25号住居跡からは2点あり、その中から完形品の不整形方形板石硯を紹介する。本例は両面が

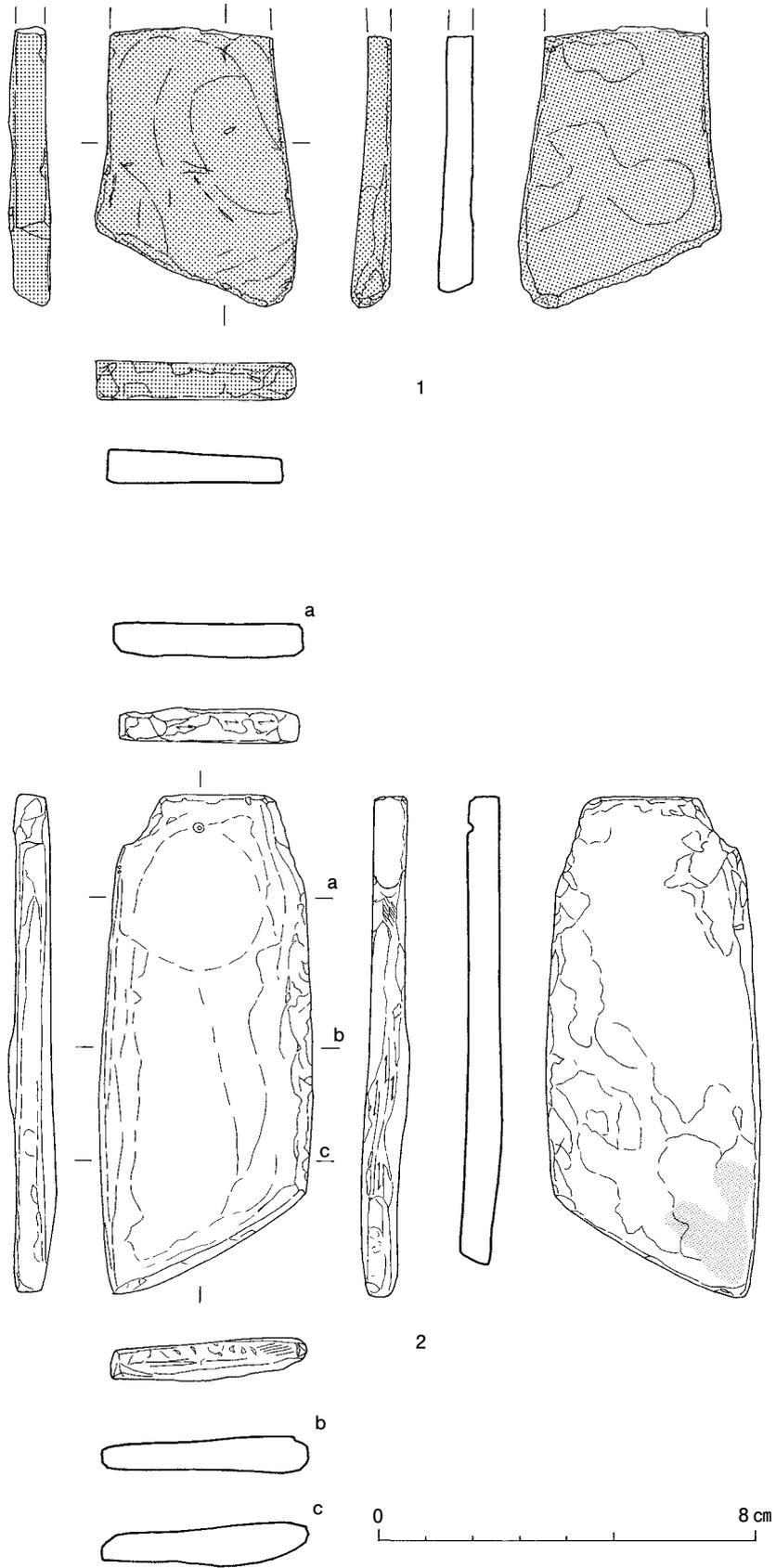


图21 方形板石硯実測図⑦ (2/3)
 [1 : 貝元遺跡河 2 : 神明遺跡土坑115]

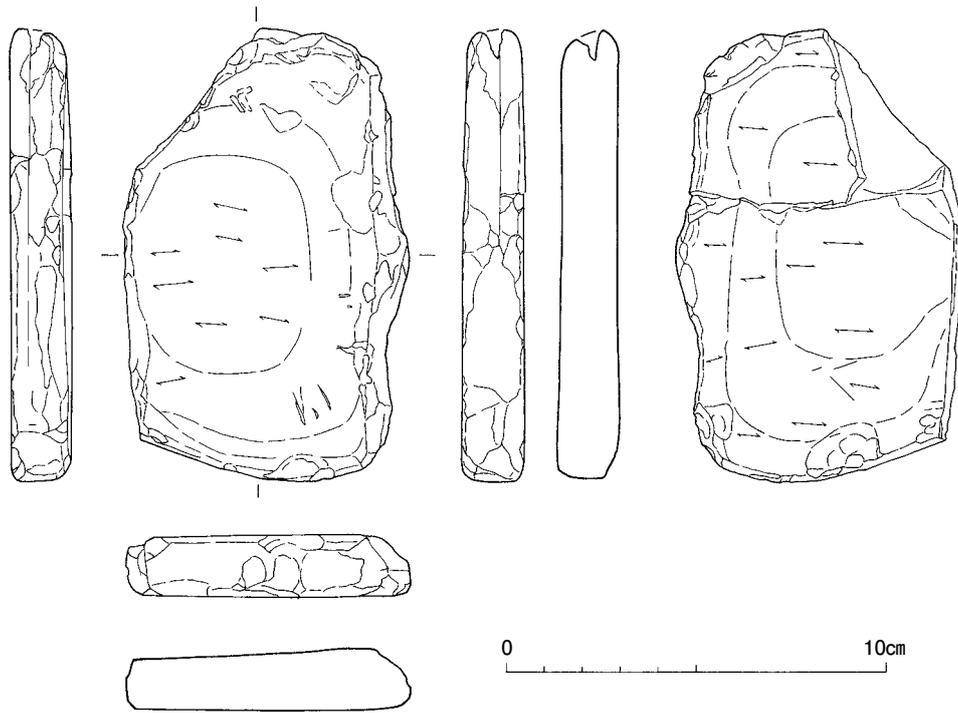


図22 方形板石硯実測図⑧ (1/2) [三雲・井原遺跡群番上地区]

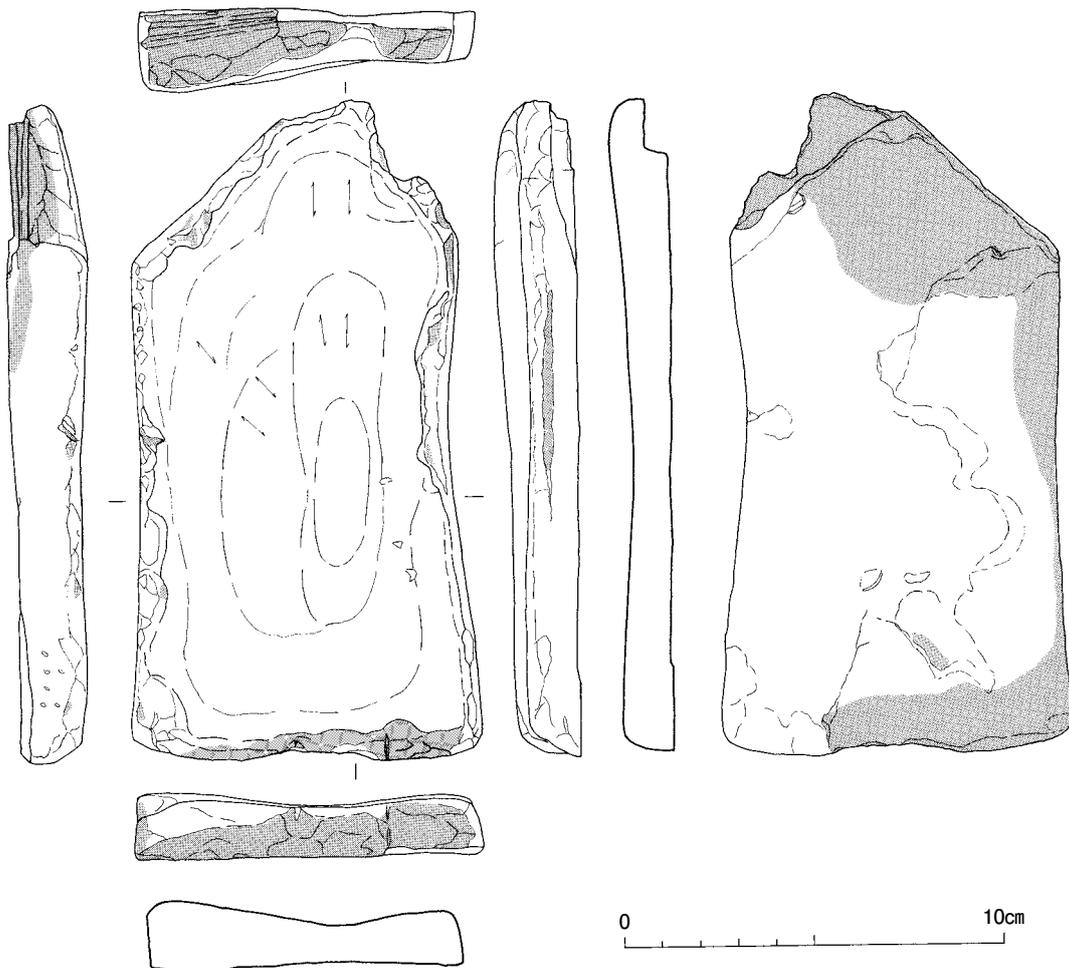


図23 方形板石硯実測図⑨ (1/2) [東小田峯遺跡117号住居跡]

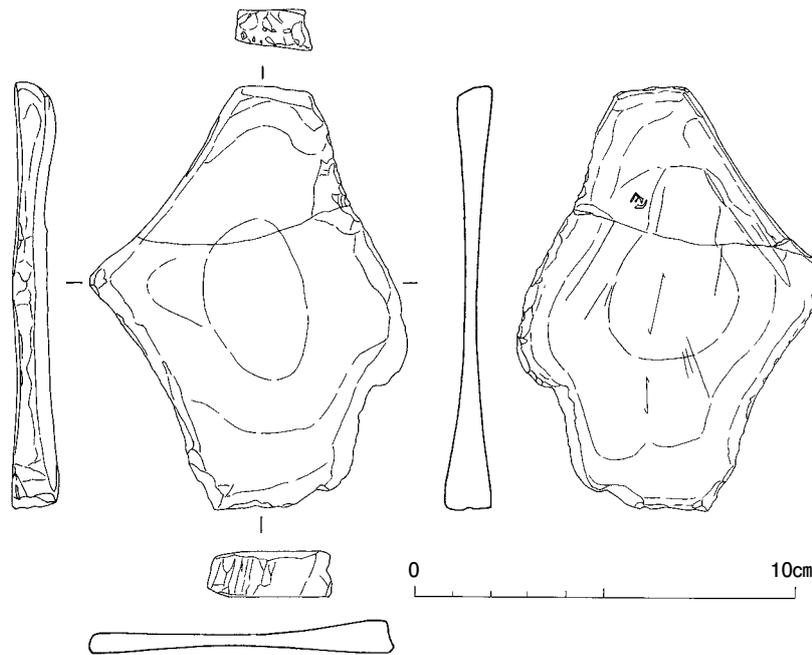


図24 方形板石硯実測図⑩ (1/2) [十双遺跡25号住居跡]

使用され、中央部がマメツして同心円状に大きく窪んでいる。平面形は不整六角形で、左図左側面が研磨や部分研磨、右側面が割り後にマメツ、両小口の上側が敲打、下側が割とケズリで調整されている（図24）。黒色や赤色付着物が見られないことから積極的に方形板石硯とできないが、石材の灰緑色粘質頁岩は、潤地頭給遺跡や東小田遺跡群に同一石材の方形板石硯が数例存在する。

(5) 再生品（再加工）

福岡市比恵遺跡143次調査例（朝岡2018）のように、方形板石硯を再加工した小型品が存在することから、これらをⅢF型式としておく。再加工品であることから小型板方形石硯となるが、大型方形板石硯に伴う研石である可能性もわずかながら残されているものの、研石幅が4cm以上になると硯面のマメツしたくぼみの楕円形同心円と合致するものがなくなる。最古例は、筑前町東小田峯遺跡99号住居跡の弥生中期末・後期初頭例がある（柳田2020）。

小郡市三国の鼻遺跡環壕例（ⅢF型式）（表3-71）

報告書（片岡編1988）で砥石とされるFig578の16の石器は、平面形が変形五角形を呈し、片面と側面の一部に黒色が付着していることから、方形板石硯の再生品と考えている。裏面は割面がマメツしており、周縁が下辺のみ割面そのままであるが、他の4辺が敲打調整されている。周辺の下辺と左上辺に黒色が付着することから、

他の3辺が再加工されたことになる。黒色が全面に付着する硯面は、わずかに凸面を呈する（図25-1）。時期は、詳細が不明だが環壕の土器の主体が弥生後期中頃である。

朝倉市平塚山の上遺跡SH122住居跡例（ⅢF型式）

報告書によると長方形で四隅にベッド状遺構をもつSH122住居跡からは、弥生後期中頃の土器に共伴して、石器の石包丁・砥石と投弾23個が出土している（隈部2006）。砥石を観察すると、報告書図面の両側側面が研磨され、上辺が破損したままで、下辺が敲打調整後マメツしている。本例を掲載図のように破損面を右側にして平坦面を観察すると、マメツしてくぼみ等高線が破損部分で半切していることが解る。裏面は、マメツの等高線が楕円形に完結していることから、最終的にこの面を使用していたことになる（図25-2、表3-70）。現状では黒色などの付着物が観察できないことから、確実に方形板石硯とはいえないが、灰黒色縞模様のある灰色粘質頁岩製方形板石硯が潤地頭給遺跡・東小田峯遺跡・東小田迫額遺跡の方形板石硯で確認している。しかも、現形は、最大幅6.4cm、最小幅5.1cmで、再生品においても五角形を意識していることになる。

松江市田和山遺跡第1環壕例（ⅢF型式）

第1環壕出土例（報告書図面463）（松江市2005）で、出土土層が不明な方形板石硯が1点存在する。本例は研磨された両側面が残されているが、両小口側が欠損して

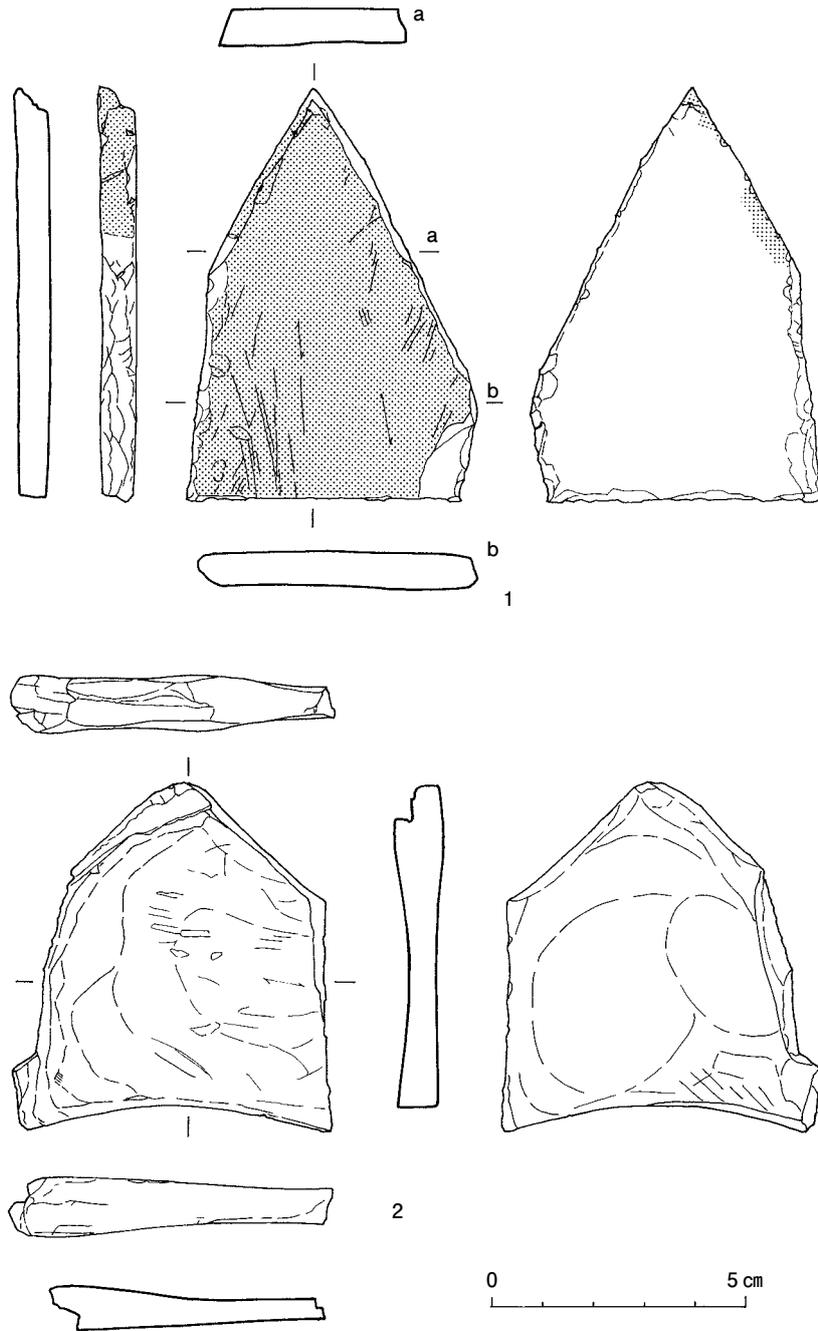


図25 方形板石硯実測図① (2/3)

[1 : 三国の鼻遺跡環濠 2 : 平塚山の上遺跡 SH122住居跡]

いる。ところが、図面上の小口面の全部がマメツし、下小口面の左側のみマメツしている。硯面のマメツ同心円から下側小口が破損していることが解るが、現形の状態でも使用されていることになる。硯面と右側側面には黒色が付着しているが、裏面と左側側面にはない。硯面はマメツしているが、裏面が粗研磨のままである。本例は時期不明だが、弥生後期の古い例となろう(表3-125)。
出雲市山持遺跡6区K4砂層例(ⅢF型式)

同じく弥生後期前半例の山持遺跡6区K4砂層出土方

形板石硯(原田編2009)は、両側面が研磨され両小口が破損しているが全面にマメツし、硯面のマメツ同心円が完結している。硯面全面と右側側面の一部に黒色が付着しているが、裏面の割面がマメツしているものの、黒色は付着していない(表3-128)。

安来市柳遺跡ES-2K第55加工段例(ⅢF型式)

本例(島根県1998)は図面左側の平面形のマメツ同心円が完結することから現形の硯面とし、裏面のマメツ同心円が半切されていることから、原形の硯面も復元できる。

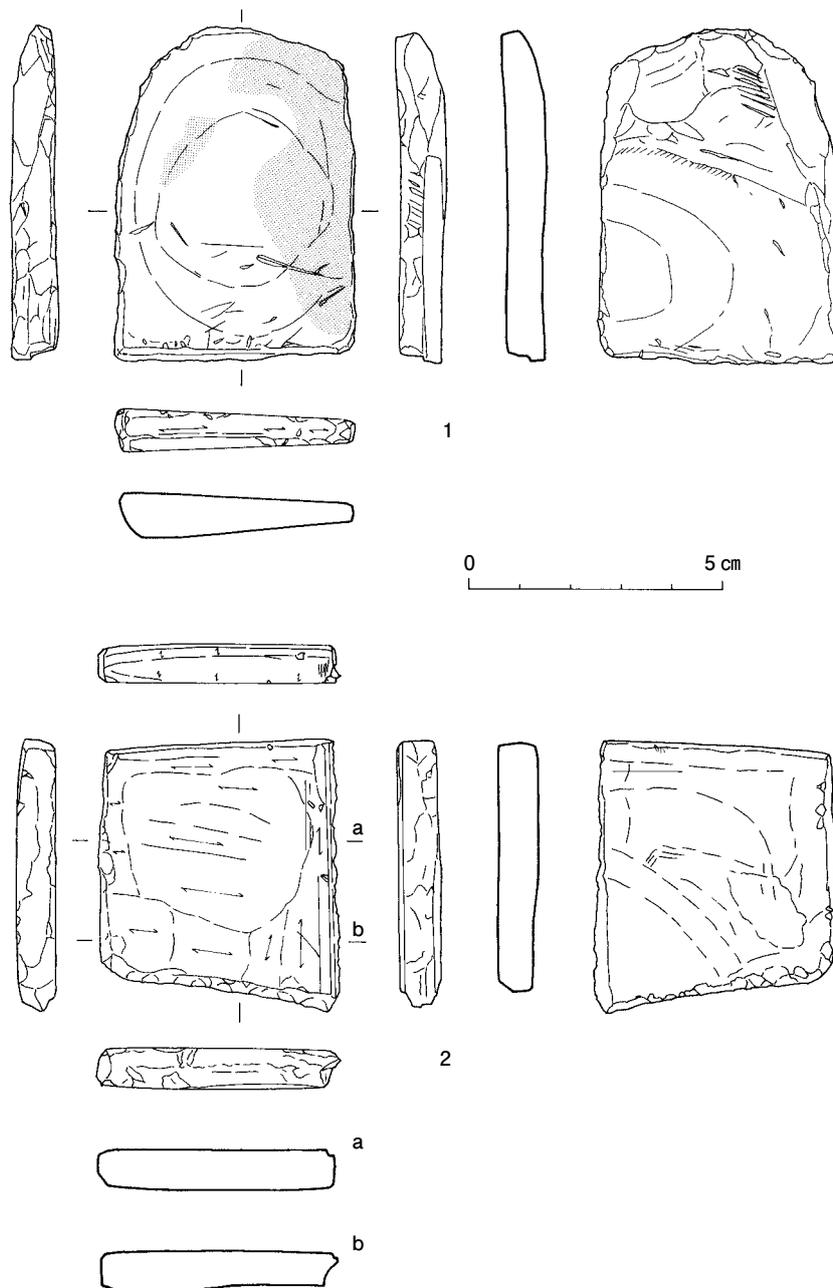


図26 方形板石硯実測図⑩ (2/3)
 [1：柳遺跡 ES-2K 第55加工段 2：比恵遺跡第143次]

したがって、擦切り溝が半分ほどに達する下小口とマメツ同心円が半切する側面が、原形破損後の再加工ということになる。擦切り以外の3辺は、敲打調整後に部分的にケズリ調整されている(図26-1、表3-131)。ちなみに、石材は東小田中原例・吉野ヶ里例・西新町4例などと同一である。

糸島市三雲遺跡番上330番地1次南北トレンチB区上層例(ⅢF型式)

前記参照(図10-3、写真5)(柳田2017b・2018a~c・2019a~e)。

福岡市比恵遺跡143次例(ⅢF型式)

本例は、「石硯」の発見が話題になり始めてからの報告であることから、「石硯」として詳細な観察が記述されている(朝岡2018)。2次的な滑らかな浅い摺切り痕跡のある例で、それ以外の3辺はマメツしている。擦切り痕跡が浅く滑らかであることから、施溝分割技法が古墳早期新段階までは存在したことになる(図26-2、表3-29)。現形になってからの硯面の中央部が不整隅方形に微妙に窪むことから、擦切り再生後に使用されたことが明らかで、再生方形板石硯の典型である。裏面は

敲打後マメツしているが、突出部は研磨されている。

VI. 研石

研石は中国では、石硯と同じように自然礫を利用したものから、円形板石研石、方形板石研石の順で出現している（吉田 1993・2018）。したがって、円礫半裁形研石をⅠ型式、円形板石研石をⅡ型式、方形板石研石をⅢ型式、上円下方形などはⅣ型式以後とする型式分類とする。中国の方板形研石は、「平面正方形のものは十五点ある。一辺2.5～4.0cm、厚さ0.2～0.9cm」。時期は、「前漢後期～後漢晩期」（吉田 1993）という。研石においても舶載品が存在する可能性があることから、方形板石研石の舶載品をⅢA型式、倭国製をⅢB型式とする。吉田の方板形研石は前漢後期からとなっているが、倭国のⅢB型式は唐津市中原遺跡の弥生中期中頃のSK11051土坑出土「未製品」（小松編2013）とされる研石、筑紫野市貝元遺跡弥生中期中頃例、筑前町東小田峯遺跡の弥生中期中頃～中期後半の105号住居跡出土品の「砥石」として報告されている石製品などがあり、現在のところ世界最古の方形板石研石である可能性をもつことになる（石橋編2016、柳田2019a・b・c）。

① 長方形板石研石（ⅢA・ⅢB型式）

長方形板石研石は、中国や楽浪出土品のような正方形板石研石が発見されていないが、東小田峯105号住居跡例のように模倣された厚さ数ミリの長方形板石研石が存在することから、これをⅢB a式とし、その他の厚みのある長方形板石研石をⅢB b式とする。

筑前町東小田峯遺跡105号住居跡の研石（ⅢB a式）

「東小田峯遺跡Ⅰ」の報告書で、弥生中期中頃の105号（旧107号）住居跡出土の砥石として報告されたものである（石橋編2016）。研石と考える石製品は、現長3.0cm、最大幅2.4cm、最小幅2.3cm、最大厚0.32cm、重さ4.3gの微雲母を微量含む暗灰色砂質頁岩製である。全体に粗研磨のままで片方の小口面を欠損するが、両側面が多面体粗研磨のままで、片小口のように平坦面に仕上げられず未整形であることから研石未製品と考える。時期は、相伴土器から中期中頃から中期後半（須玖Ⅱ式）である。（図27-1、表4-20、写真17）（柳田2019a～f、2020）。

小郡市三国の鼻遺跡環濠研石（ⅢB a式）

報告書（片岡編1988）で環濠出土とする砥石の中から、方形板石硯2点と長方形研石1点を確認した。このうちFig580の27は、典型的な正長方形研石で、東小田峯105号住居跡例と同型式の扁平研石である。研面は研磨されたようにマメツして平滑であるが、裏面がマメツしているものの割面の凹凸を残している。全面に赤褐色の付着物があるが、裏面の一部の径約1cmに付着物がない（図27-2、表4-23、写真18）。報告書では、石器一覧表などがなく出土地点が不明だが、環濠出土土器の主体は弥生後期中頃である。

唐津市中原遺跡SK11051土坑研石（ⅢB b式）

ⅢB b式の唐津市中原遺跡SK11051土坑出土研石は、報告書で「未製品」とされるが、方形板石硯の場合と同じく何の未製品なのか不明（小松編2013）。本石製品は、小口面と両側面が直角をなすこと、幅が約3cmと狭いこと、研磨調整すれば幅3cm未満となることからⅢB a式の研石未製品と考える。周縁の3辺に浅い擦切り痕跡があるものの、割面のままで未加工。他方の小口には擦切り痕跡がなく、斜行する割面そのままである。右側面擦切り痕跡の長さが約3cmであるから、ここで切断すれば正方形の研石が製作できる。裏面は割面そのままであるが、右側面側に数本の擦切り溝が施されている（図27-3、表4-26、写真19）。時期は、相伴土器（図28）から渡部芳久（2019）が弥生中期後半（須玖Ⅱ式）とするが、本稿では須玖Ⅰ式古段階から新段階（中期中頃）と考える（柳田2019a・b・c）。

筑紫野市貝元遺跡156号住居跡研石（ⅢB b式）

報告書では、弥生中期中葉の「手持ち用粗砥」とされているが、破面以外が黒色であることからⅢB b式長方形研石と考える。本例は、径9mを超える楕円形堅穴住居跡から土器片2点と石包丁が相伴している（中間編1999）。現長3.4cm、最大幅2cm、最小幅1.8cm、厚さは裏面が割面のままであることから1.12cmから0.83cmの差がある。研面はタテ研磨、両側面ヨコ研磨され、幅広小口の破面がマメツ、狭い小口が破面そのまま、赤褐色を呈する（図27-4、表4-13、写真20）。中国の方板研石が前漢後期以後（吉田1993）であることから、唐津市中原遺跡例・本例・筑前町東小田峯遺跡105号住居跡例の3例が世界最古例となる。

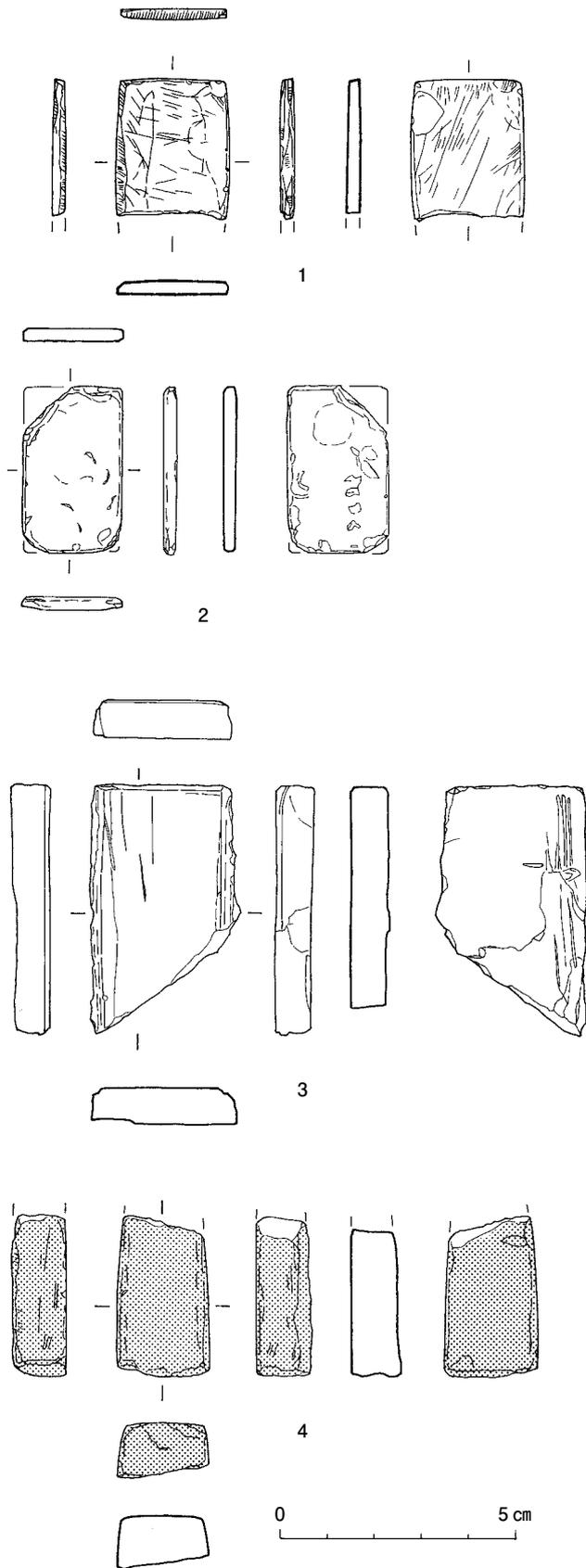


図27 研石実測図① (2/3)

[1：東小田峯遺跡105号住居跡 2：三国の鼻遺跡環濠
3：中原遺跡 SK11051土坑 4：貝元遺跡156号住居跡]

筑前町東小田峯遺跡27号住居跡研石 (Ⅲ B b 式)

「東小田峯遺跡 I」の報告書で、弥生中期末の27号住居跡出土の砥石として報告されたものである(石橋編2016)。研石と考える石製品は、現長3.8cm、最大幅2.4cm、最小幅2.2cm、最大厚1.3cm、重さ19.4gの灰白色砂岩製であり、全面が研磨され、周縁の稜線すべてがマメツシ、ほぼ全体に墨らしき黒色付着部がある。下面は中央部がわずかに窪むが、上面は大きく内湾することから指先の滑り止め、あるいは木製取手を張り付けるためではないだろうか。時期は、相伴土器から弥生中期末・後期初頭の幅がある(図29-1、表4-21、写真21)(柳田2019 a~e、2020)。同一型式・同形態の完形品が下記の筑紫野市貝元遺跡Ⅱ区包含層にある。

筑紫野市貝元遺跡Ⅱ区包含層研石 (Ⅲ B b 式)

報告書(中間編1999)では、「頁岩」製「手持ち用仕上げ砥石」とされているが、白色石英長石斑岩製であり、全面に黒色が付着して裏面の長辺に擦切り痕跡があることから完形の長方形研石とした(図29-2、表4-16、写真22)。

筑前町東小田七板遺跡150号住居跡研石 (Ⅲ B b 式)

東小田七板遺跡は東小田遺跡群の東側を占め、1982年度にA~Eの5区で発掘調査が実施され、弥生・古墳時代の集落跡や墳墓を主体とした多数の遺構が発見された。このうち6,200㎡と最も広い調査面積のB区では、166軒の竪穴住居跡や環溝、「L」字状の溝によって区画された甕棺墓群などが発掘されている。B区の出土遺物として注目されるのは、150号住居跡から発見された鉄戈や、甕棺墓群を区画した溝から出土した多量の丹塗磨研石器である(佐藤1983)。特に、弥生中期の墳丘墓と後期初頭の150号住居跡から屈曲した鉄戈・鉄刀子と併せて未製品の研石2点が注目される(柳田・平田2017)。

長方形研石と考える石製品は、長さ4.4cm、最小幅2.8cm、最大幅3.2cm、最大厚1.7cm、重さ40.5gの石英長石斑岩製の寄棟家屋形の立方体である。全体に粗研磨されているが、寄棟部分は粗欠きされたままで研磨がなされていないことから研石の未製品と考えている(図29-3、表4-18、写真23)。150号住居跡内のどの部分で出土したのか記録がないが、研石の狭い小口の一方の角に鉄錆が付着していることから、住居跡中央部の鉄戈か、ベッド状遺構上の鉄刀子のどちらかに密着していたものとする(柳田・

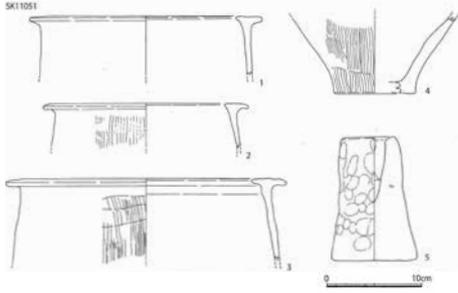


図28 唐津市中原遺跡 SK11051土坑土器
(小松編2013、1/8)

平田2017、柳田2018 a・c・2019 a～e・2020)。

筑紫野市貝元遺跡334号住居跡研石 (Ⅲ B b 式)

報告書(中間編1999)では、弥生中期後葉～末葉の334号住居跡出土の細砂岩製「手持ち用中砥」とされている研石である。両面と片側側面がマメツで内湾するが、片側小口破面と裏面の一部以外に黒色が付着していることから研石と考えている(図30-1、表4-15、写真24)。時期は、中期中頃から後期初頭と幅がある。同型式の研石がⅡ区包含層から出土しているので、同時期と考えられる。

糸島市三雲遺跡番上地区 332 番地北側調査区研石未製品 (Ⅲ B b 式)

報告書では、「すべての面が剥離しているが砂岩製砥石の可能性があるとされている(平尾編2019)。実測すると、図面の左平面図(研面)が粗研磨され、裏面が剥離面そのままである。上小口面は敲打調整であるが、他の3面が割面そのままである。割面の右側面と下小口面には鑿痕跡が存在することから、擦切り切断だけではなく、鉄製鑿などで石材を方形分割できた可能性がある(図30-2、表4-6、写真25)。したがって、砂質頁岩製研石未製品と考える。時期は明記されていないが、中期中頃から後期前半の土器が共伴している。

筑紫野市貝元遺跡113号住居跡研石 (Ⅲ B b 式)

報告書(中間編1999)では、5世紀後葉の113号住居跡の粗砂岩製「手持ち用仕上げ砥」とされているが、本稿では研石と考える。完形品で、長3.9cm、幅2.5～2.8cm、厚2.1～2.6cmの法量をもつことから、握りやすい研石であり、ほぼ全体が黒色付着物で覆われている(図30-3、表4-12)。この研石は管見ながら現在のところ最新時期の研石であり、倭国

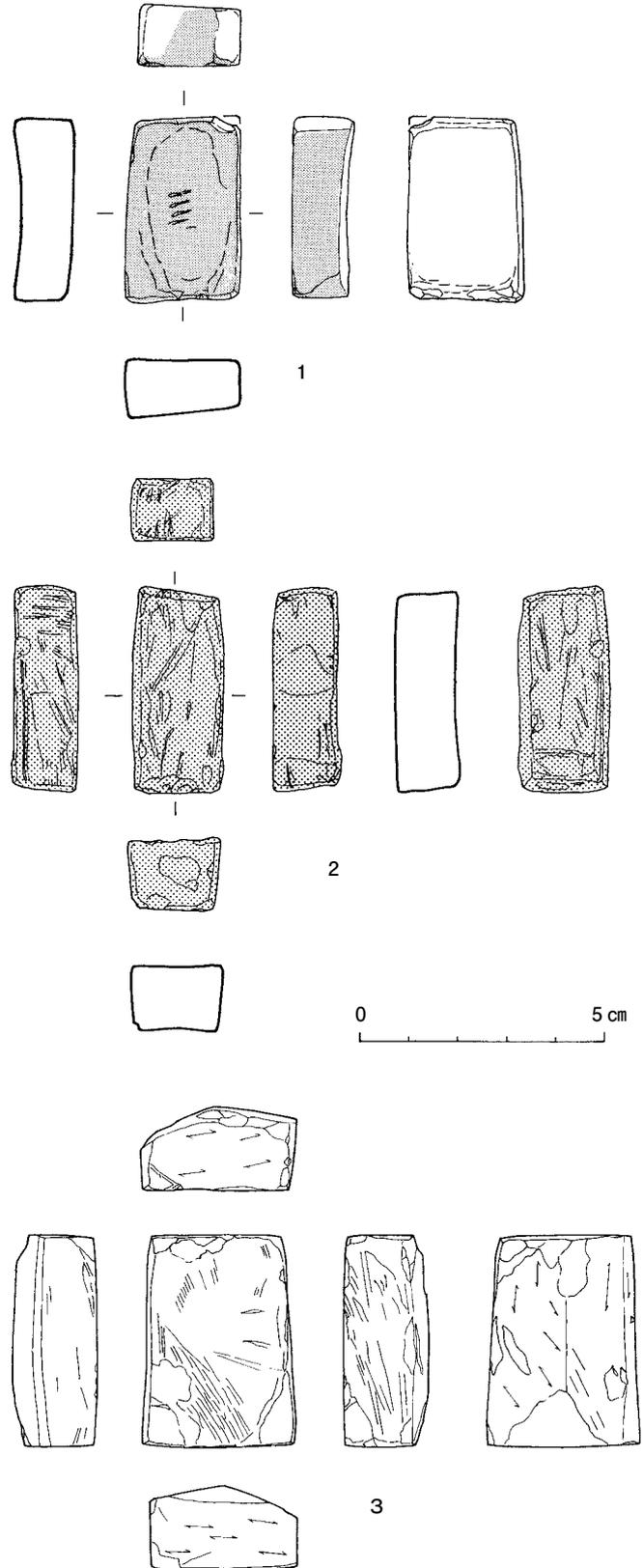


図29 研石実測図② (2/3)
[1: 東小田峯遺跡27号住居跡 2: 貝元遺跡Ⅱ区包含層
3: 東小田七板遺跡 B150住居跡]

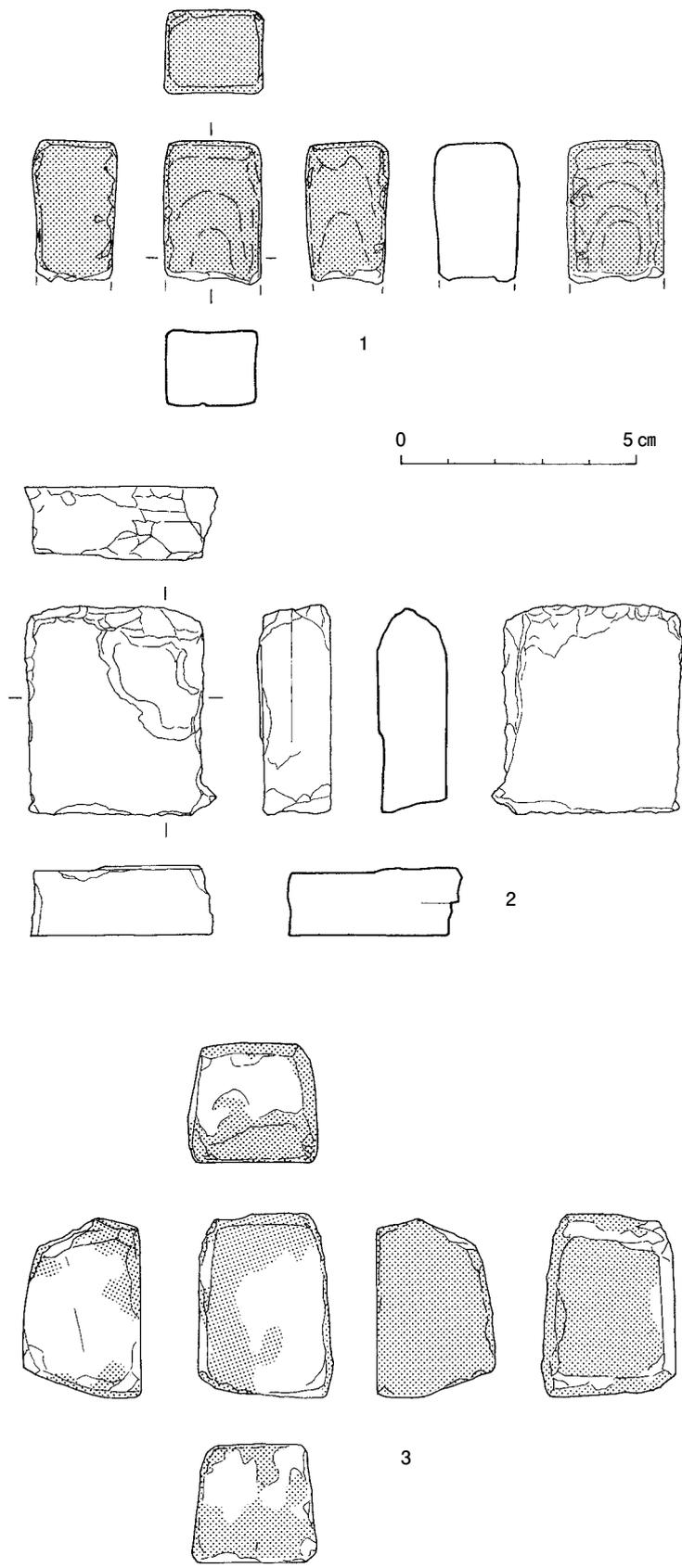


图30 研石实测图③ (2/3)

[1 : 貝元遺跡334号住居跡 2 : 三雲・井原遺跡番上地区332番地北側 3 : 貝元遺跡113号住居跡]

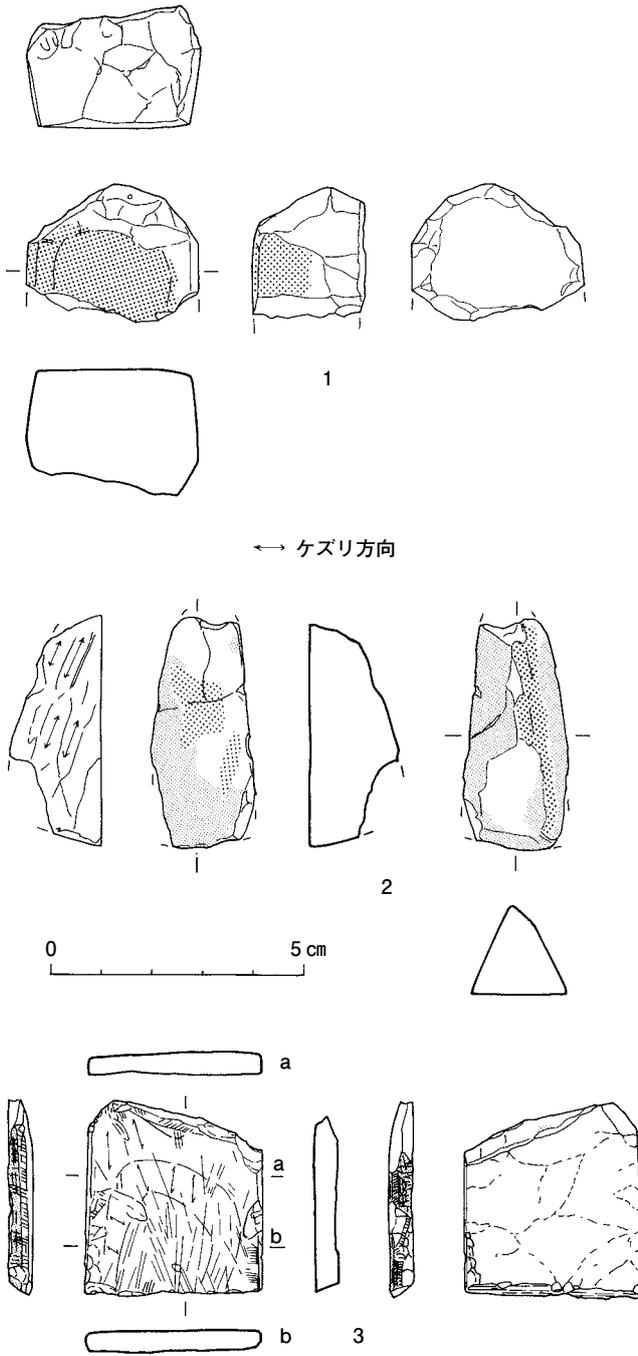


図31 研石実測図④ (2/3)

[1：田和山遺跡環濠 2：蔵数森ノ木遺跡23号住居跡
3：吉野ケ里遺跡田手一本黒木1区220区]

では少なくともこの時期まで固形墨が普及していなかったことになる。

② 多角形研石 (Ⅲ C 型式)

多角形研石は、東小田七板 150 号住居跡 2 例・東小田峯 P - 6 例以外に、筑紫野市貝元遺跡例・壱岐市原の辻遺跡例・田和山遺跡例など多様な形式が存在することからⅢ C 型式とする。これは各地域で創作された形式であ

ることから、特に細分類しない。

松江市田和山遺跡第 1 環濠 A 区黒色土下黄褐色土研石 (Ⅲ C 型式)

報告書 (松江市 2005) では、砥石として一括されている。しかし、片方の平面と両側面が研磨され、しかも黒色付着物が観察できること、厚みがあり裏面が割面のままであることから研石とした。片方の小口を欠損しているが、図面上の小口は敲打調整され、一部に研磨がある (図 31 - 1)。

筑後市蔵数森ノ木遺跡 23 号住居跡研石

報告書 (佐々木編 1990) では、砥石が 3 点掲載されているが時期は不明。三角形の小型「砥石」とされたものは、背部の三角形部分がケズリ調整され、研面が平坦であること、全面に黒色と褐色の付着物があることから多角形研石とした (図 31 - 2、表 4 - 24)。

③ 再生研石 (Ⅲ D 型式)

方形板石硯から方形板石研石に再生した例には、吉野ケ里遺跡例・岡山県津寺遺跡例があり、弥生扁平片刃石斧を再利用した福岡市吉武遺跡例 (久住 2019 a ~ c) がある。

佐賀県吉野ケ里田手一本黒木 1 区 220 区研石 (Ⅲ D 型式)

報告書 (渡部編 2019) と資料紹介 (渡部 2019) では、上端が欠損し、「擦切による分割後、研磨による面取整形が施されている」とするが、擦切り痕跡は存在したとしても現状では面取痕跡が存在するにすぎない。「方形板研石の可能性」を指摘するが、研面の「中央から下部は僅かに窪んでいる」ことから小型長方形板石硯 (Ⅲ A b 式) の転用研石と考える。渡部は記述していないが原形の両側面はケズリ調整が施され赤色が濃密に付着しているが、その後には面取調整が実施されていることから、当初の擦切り分割はなかったことになる。上辺小口の欠損部にも面取があり、下辺小口の破損面にもわずかなマメツがあり点的に赤色が付着していることから研石への再生が確実なものとなる。(図 31 - 3、表 4 - 27、写真 26)。

Ⅶ. 時期

中国では、自然石を利用した石硯が戦国末期に出現し、紀元前 100 年頃の前漢中期になると扁平な長方形板石硯

が出現している。日本では、玄界灘沿岸の糸島市潤地頭給遺跡と唐津市中原遺跡の2遺跡で柳田編年（1986～）の弥生中期中頃に出現と同時にⅢD型式のような倭国独自の方形板石硯の製作を開始し、内陸部の朝倉市下原遺跡で「砥石」と報告されているものの中から、赤色と黒色が付着した両面使用品を発見した。

模倣品のⅢC b式は吉野ケ里の後期前半例、ⅢB b 2式の横断面逆台形の基山町千塔山例が弥生終末、ⅢC b式は玄界灘沿岸で時期が確定できるものはないが、勒島例・田和山例から弥生中期末・後期初頭、葉師ノ上例が両面研磨であることから、それより古い弥生中期後半以前には出現している。

方形板研石は、中期中頃例が唐津市中原・貝元遺跡に、弥生中期後半古段階に筑前町東小田峯遺跡で製作を開始しているが、吉田恵二によると中国で「方板研石」の出現が前漢晩期とされることから、これより古い世界最古となる。弥生後期初頭になると、家形など多角形で厚みのある長方形研石も各地で創作された不整形研石が製作されているが、自然石礫研石・円形板石研石・上円下方形研石はいまだに発見できない。これは長方形板石硯（ⅢA a式）の流入が確認できないことに通じている。

終焉は、古墳前期前半までは長方形板石硯（ⅢA b 1式）が多数存在し、古墳中期中頃までは政治的交流だけではなく対外交易や地域間交流などにも活用されていると推測できる。

共伴土器が出土遺構によって時期幅が広い場合や破片資料は、型式分類によって絞り込める。葉師ノ上例は両面研磨であることから、弥生中期中頃から後期初頭までの間であることが、上限の朝倉市下原例と下限の東小田中原例で証明できる。東小田峯15号祭祀土坑例も両面研磨であることから、前例を証明している。ただし、裏面を未加工のままにする田和山例のような型式が中期末・後期初頭に存在することも考慮しなければならない。ちなみに東小田中原例は、吉田恵二分類（1993）のA類である。土器が共伴していない東小田峯遺跡平成9年P-6例・表採例は、P-6例が七板150号住居跡例研石と同一石材であることから弥生後期初頭、表採例が築城町十双18号住居跡例とよりふたつであることから、弥生終末である可能性が強いことになる（柳田2020）。

VIII. 分布

長方形板石硯・方形板石硯・研石の分布は、久住猛雄確認例を含めると現在のところ倭国で200例以上が確認でき、下記のように福岡県に集中するものの、半数近くが隣県や中九州・山陰・山陽・近畿・北陸などにも分布する。

福岡県糸島市13例（研石3）以上、福岡市17例（研石1）、春日市3例、筑紫野市29例（研石6）。筑前町22例（研石5）、朝倉市4例、小郡市3例（研石1）、筑後市4例（研石1）、北九州市20例、築城町8例（研石1）。福岡県合計123例以上。

佐賀県唐津市4例（研石1）、吉野ケ里町2例（研石1）、基山町1例。長崎県壱岐市11例（研石4）。大分県日田市1例。熊本県阿蘇市2例。福岡県以外の九州合計21例。

広島県東広島市2例。岡山県10例（研石2例）。鳥根県松江市8例（研石1）、出雲市2例、安来市3例。鳥取県鳥取市3例。石川県小松市20例。兵庫県丹波篠山市1例。大阪府泉南市1例、高槻市3例。奈良県田原本町2例、桜井市1例、橿原市1例、天理市5例。九州以外合計62例以上。ただしこれらの発見は、筆者と久住猛雄の行動範囲であり、筆者の行動範囲がほぼ蔵書の範囲に限定され、報告書の蔵書が多い福岡市とその職員の久住が古墳時代を中心に広範囲に行動が及んでいるにすぎない。関心のある研究者が少ない地域は希薄である。

時期別の分布範囲は、弥生中期中頃から中期後半が玄界灘沿岸と筑紫平野北部の朝倉地域。約100年後の中期末から後期初頭になると前者を中心として一気に筑後市や九州本島以外の壱岐市・鳥根県・奈良県・石川県まで拡大分布する。中期中頃は須玖Ⅰ式土器の普及、中期後半が須玖Ⅱ式土器の時期で弥生王権（柳田2008・2010・2013・2019f）の出現時期でもある。イト国の中期末土器は、壱岐・対馬だけではなく朝鮮半島南部、後期になると赤彩土器が列島の北陸や東海にも及んでいる。これは弥生文化の発展過程とも期を一にしていることが明らかである（柳田2010・2012・2013・2014・2016）。ただし、今後は遠賀川以東や瀬戸内での弥生中期末から後期初頭の時期の資料が未確認であることが気になる。

時期別の分布範囲は、同時に型式分類別の分布でもあることから、北部九州で特徴的な型式の分布範囲を確認する必要がある。例えば「璋形」のⅢD a式や「圭形」

のⅢD b式は、瀬戸内の岡山や山陰にも分布している。これは文字文化が北部九州を經由している証明でもあり、当該地との交流を明確化しただけではなく、長方形板石硯やその忠実な模倣品がなければ当該地域は中国や楽浪との直接交渉が考えられないことが明晰である。

瀬戸内以東でも方形板石硯の類例が増加し、現状では当該地への伝播には100年以上経過していることになる(柳田2019 f)。東漸する青銅器や銅鏡は埋納や伝世されることから、瀬戸内以東の当該地での年代が不明確であったが、集落で破棄されている消耗品の方形板石硯は当該地での年代を明確にしている。研石の分布は、筆者が実物調査していない地域、特に中国地方以東では少ないことから、自然石利用など報告書不掲載製品などの再確認の必要がある。

問題は、この時期が玄界灘沿岸とそれ以外の北部九州、さらには中国地方以東の時期が併行していることが検証されているかであり、同時期の青銅器や完形銅鏡の分布時期からみると肯定できないことから、さらに若干の時期下降を考えている(柳田2014・2018)。近畿地方への分布拡大は、北部九州の後期前半以後の第4様式以後になる。これは筆者のイト国を核とした玄界灘沿岸政権の伸長と東漸(柳田2013)や寺沢薫(2000)の外来系文物の東伝とも一致する。近畿地方第Ⅲ様式に遡る可能性は、近畿地方最古の銅鐸を含む青銅器鋳型出現が同時期以後(柳田1986～・2002・2014)であることから完全否定できないが、同地域が同時期に実戦青銅武器を製作できていない事実から一定の規制が存在することも確実であり、高度な文字文化は及んでいなかっただろう。

IX. 製作技術

長方形板石硯の型式分類で述べた様に、吉田恵二のA類～C類分類は横断面形の特徴と製作技術も表現している(吉田1993)。また武末純一は、楽浪の石硯・研石の「つくり」の特徴を①～③の3点を挙げている。このうち①が石材、②・③が断面形と製作技術である(武末・平尾2016)。この時点で特徴的なのが「石硯や研石を製作する際に割り取った扁平な石材の上面から擦り切り技法で四辺に溝を切り、側面の下半を折り取る。そして下半に残った破面はさらに研磨して平滑にする」という技法で

ある。ところが、楽浪長方形板石硯の技法は、指摘された(三雲)番上硯には見られない。三雲番上硯の現形に唯一残る原形を保つ一辺は、復元すると著しく湾曲することになり、前記したように堆積岩の材質の違いはあるが擦切り技法で分割されたものではないことが明らかである。本稿の型式分類で明らかのように、多様性のある倭国の方形板石硯は石材に応じて相応しい製作技法を採用している。すなわち、方形板石硯は各地で製作されていることから、扁平な板状石材が安易に製作できる頁岩が入手可能な地域では擦切り技法と鑿(石製・鉄製を含む)が併用され、砂岩や凝灰岩などであれば鑿と敲打調整技法が採用されている。したがって、同一遺跡で時期に応じた石製や鉄製工具を搜索する作業で、玉作遺跡が多い日本海沿岸の山陰・北陸地方と違って、特に石材分割技術の解明が希薄な北部九州では痛感した。

(1) 製作工程

方形板石硯と研石が発見された遺跡では、「石鋸」とされるものや石鑿と命名した石製工具や鉄鑿などの鉄製工具も共伴することがある。未製品の方形板石硯と研石を見ると、これらの石製工具や鉄製工具で石材を①板材に割分割、②鉄鑿での間接打撃による方形分割、③擦切りで方形分割、④周縁を敲打加工、⑤研磨加工などを実施した痕跡が残されている。①～⑤は必ずしも順番に実施されるのではなく、石材などの条件によって順番が入れ替わる。例えば石材が砂岩などのように割分割で板材にできない場合は直接打撃分割後に敲打調整技法が先行活用される。

① 石材を板材に割分割

方形板石硯を製作するには、最初に原石素材から板材を製作する必要がある。この時使用されるのが、石製・鉄製を含めた鑿を活用した間接打撃分割である。石材が頁岩(堆積岩)であれば「石の目」を見分けるのは容易であるが、砂岩や凝灰岩などは素人目にも困難に思える。

②・③ 板材を鑿や擦切りで方形分割

得られたのが頁岩板石であれば、平面的に方形分割するには鑿を活用した間接打撃分割と石鋸・鉄鋸を用いた浅い擦切り分割技法(「施溝分割」)が存在する。同時に前記したように勒島例や三雲番上研石未製品などの数例で鑿を活用した方形分割も存在する。砂岩やその他の硬

質石材で「石の目」を見分ける技術が伴わない場合は、直接打撃で敲打分割が実施されている。

④ 周縁加工

方形板材が確保されてからは、初期段階では小口が敲打調整、両側面の面取的研磨で半円形に整形される。この段階では両面研磨されていることが多い（薬師ノ上・貝元96号住例・田和山（457）例など）。楽浪出土例・吉野ヶ里例・西新町例・田和山例の多くは、長方形断面を意図して周縁を粗研磨している。この場合は、側面に粗い条痕が残されている。これらは先行して擦切り施溝分割されたことが予想される。

⑤ 硯全体の研磨再生加工

方形板石硯は破損することが多く、再加工されている。部分的な周縁加工だけではなく、半切・折損した場合には安来市柳例や福岡市比恵143次例のように施溝分割で側面を直線化している。

(2) 石製工具（石鑿・石鋸）

方形板石硯と研石の製作工具として、石鑿と石鋸が存在する。玄界灘沿岸の弥生中期中頃に出現する方形板石硯と研石未製品には、同時期の石鑿と「石鋸」が共存している（柳田2019b・c）。ここで石鑿や「石鋸」とした石製品は、これまでその多くが報告書では石包丁や石鎌などの未成品とされていた。「石鋸」とされている石製品には、①厚手で刃部が研磨されているものと②薄手で刃部が敲打されたままのものがある。ところが、①の場合のように刃部が研磨され厚みがあると研磨された石材本体には食込みが困難である。この点、②の場合は刃部が打製の鋸歯状を呈することから文字通り石鋸であろう。したがって、「石鋸」とされた吉野ヶ里例（図35-3）（渡辺2018）は、①に相当することから石鑿である。ここで言う石鑿は、石材本体の層理方向に刃部方向を合わせて密着させ石鑿の背部に打撃を加え石材を割る工具である。②の場合であれば、鋸歯状であることと、扁平であることから側面の摩擦抵抗が少なくすむことになる。しかも、下記の潤地頭給例・中原例・三雲番上例・田和山例のように片刃であればなおさら摩擦抵抗が刃部先端に集中することから切断効力が増加すると同時に、少なくとも切断面の一方が硯平面と直角になる。これまでの「石硯」の製作技術においては、上記のような工具や製品の実態

を明確にしないまま議論されている（武末2016・2018）。

擦切痕跡は、楽浪王冨墓例や小倉コレクション例で明らかかなように浅い溝段階で割り取られており、倭国では比恵143次例（朝岡2018）のように古墳早期新段階まで存続している。ただし、弥生終末の十双遺跡8号・31号住居跡出土砥石2例（中間編1992）や古墳前期の島根県安来市柳遺跡ES-2K第55加工段出土方形板石硯例のように深い段階まで擦切りされているものもある（島根県1998）。

方形板石硯周縁の粗い研磨痕は、その研磨痕（条痕）方向で判断しなければならない。研磨痕跡が細く横方向であれば石鋸切断である可能性が強いが、粗く斜め方向である場合は一気に切断したことになり石鋸では困難であることから、破面を粗研磨した痕跡であることになる。管見ではあるが「擦切石器」は縄文後期から存在すると考えている（柳田1980）ので、以下時期が古い順に列記する。

椎田町山崎遺跡2号住居跡例

報告書（小池編1992）では、縄文後期2号住居跡出土の「すり石」とされているが、「擦り切り石器のような形状」とも併記している。本擦切り石器は、砂岩製らしく粗い石材で、刃部が直線で鋭利であり、背部が円弧をなし掌になじむ形態である（図32-1、表5-1）。

糸島市三雲遺跡郡の後地区例（表5-3）

報告書（柳田）では、「堅牢な砂岩製…厚さは、直線的に減少してするどい刃部を作り、他方は掌に当たるに都合よいように丸みを持つ・大きさ・形態・石材から考えて、擦切用の石器…縄文期に東北地方などで擦切石斧があるように、弥生前期の扁平片刃石斧に使用することも可能」としている（柳田編1980）。本例は遺構に伴っていないが、弥生前期遺構群に近いことから、弥生前期に属するものと考えている。報告書には記述していないが、本例には全面に赤色が付着している（図32-2）。

糸島市潤地頭給遺跡石鋸・石鑿

潤地頭遺跡からは、石鑿3点、石鋸3点の合計6点の石製工具が発見された。報告書（江野2006）では、いずれも「石包丁（未成品を2点含む）」とされ、石材も砂岩や安山岩とされているが、本稿では一覧表（表5）のように判断した。本遺跡は、弥生終末から古墳早期の玉作遺跡として知られているが、これらの石製工具は弥生

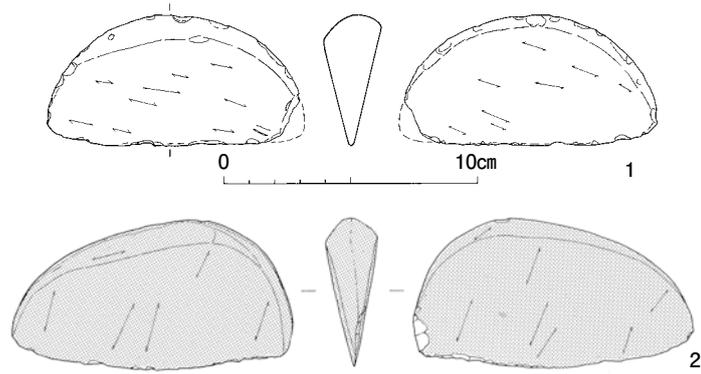


図32 擦切石器実測図 (1/3)
[1 : 山崎遺跡2号住居跡 2 : 三雲遺跡郡の後地区]

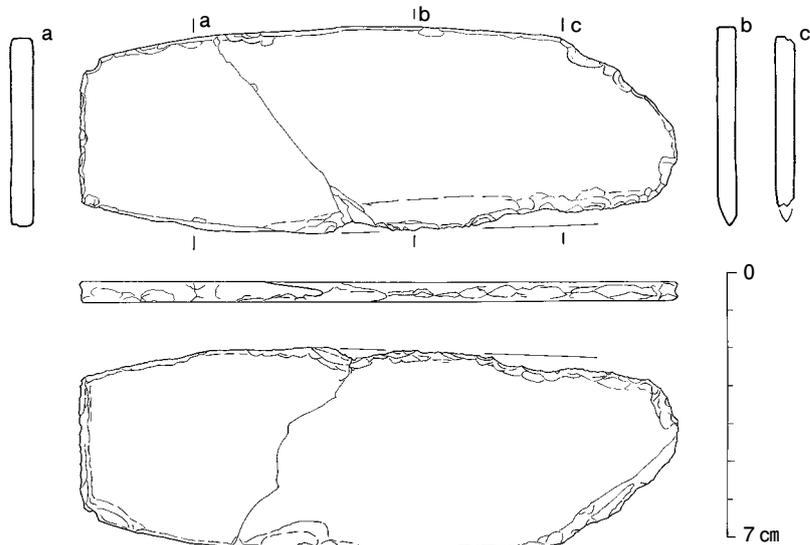


図33 三雲遺跡番上地区Ⅱ-5 柄付石鋸実測図 (1/2)

中期中頃を主体とする時期のものである。一覧表5の4・5は、両側が破損しているように見えるが、平坦面に付着している赤色付着物が破断面にもわずかに見られることから、現形で使用できる完形品と考えている。4（図35-1）は厚みがあり刃部が研磨されていること、背部に打撃を受け片面が剥離していることから石鑿、5（図34-1）が薄作りで、刃部が打ち欠き作りのままであることから石鋸とした。6は両側が破損しているように見えるが、敲打調整後研磨されていること、薄作りであることから石鋸とした。片面に鉄鏝が付着していることから鉄器と共伴したことになる。7の石鑿未製品は、背部の半分に擦切り痕跡があるが、その後は周縁全部を敲打調整して終わっている完形品である。8も両側が破損し

ているように見えるが、両側が研磨されていること、刃部側の三分の二に刃がないことから柄付石鋸である可能性がある。9も「石包丁」とされるが、壱岐市原の辻遺跡の「直線刃の石鎌」（表5-22）と同形態であり、石材が報告書のように「砂岩」であれば石鑿となる。本稿では粘質頁岩としておく。

糸島市三雲遺跡番上地区石鋸

三雲・井原遺跡群では、これまでに前記の郡の後地区例以外に5例の石鋸を確認した（表5）。報告書では「石包丁」未製品などとされていたがその全部の本体が扁平な打ち欠き片刃であること、当該地域の石包丁には直線刃がないこと、使用痕跡のあるものは刃部先端がマメツして両刃になりかけていることから石鋸とした。

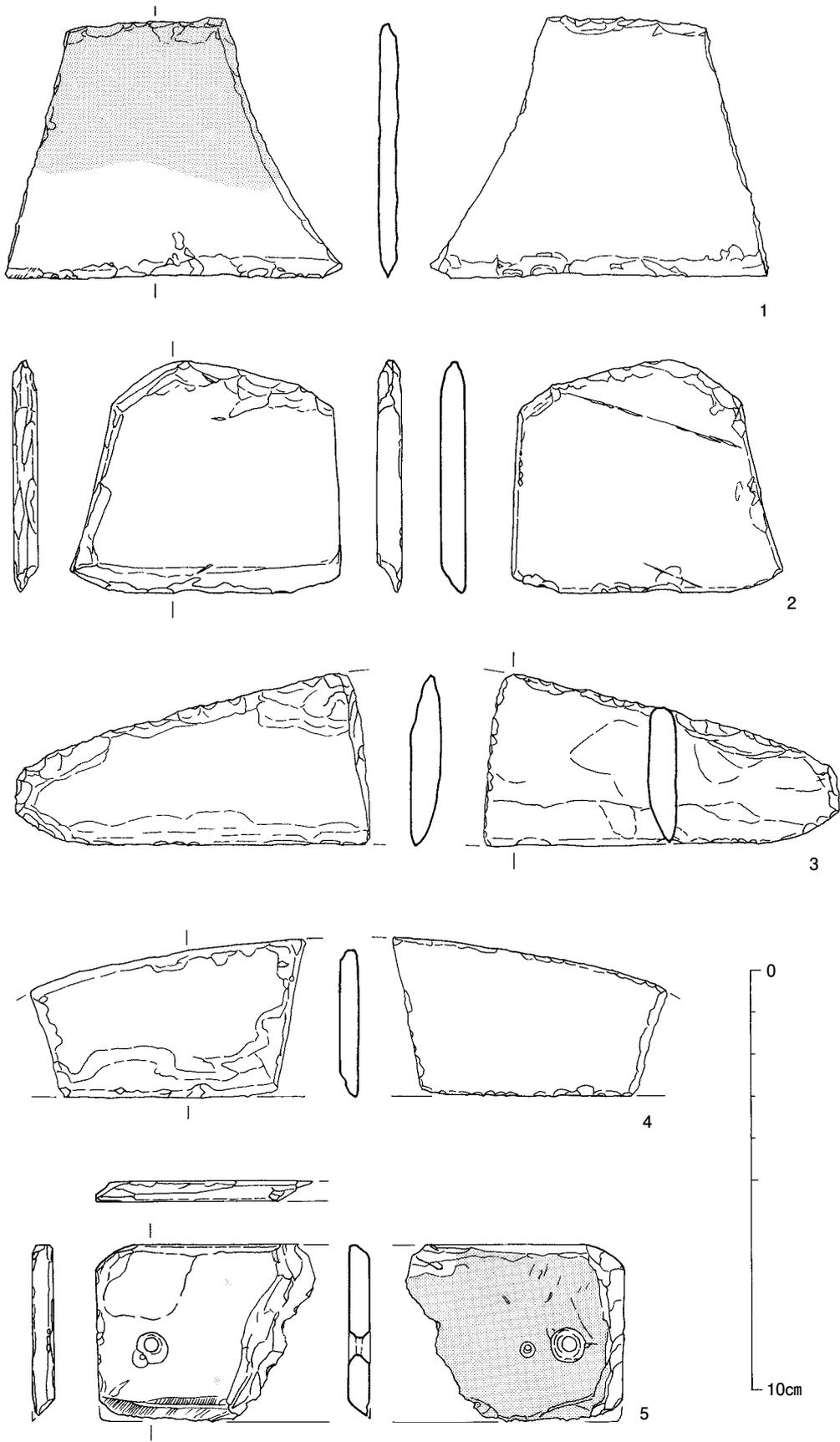


图34 石鋸実測図 (2/3)

[1 : 潤地頭給遺跡 2 : 中原遺跡 3 · 4 : 三雲遺跡番上地区 5 : 田和山遺跡]

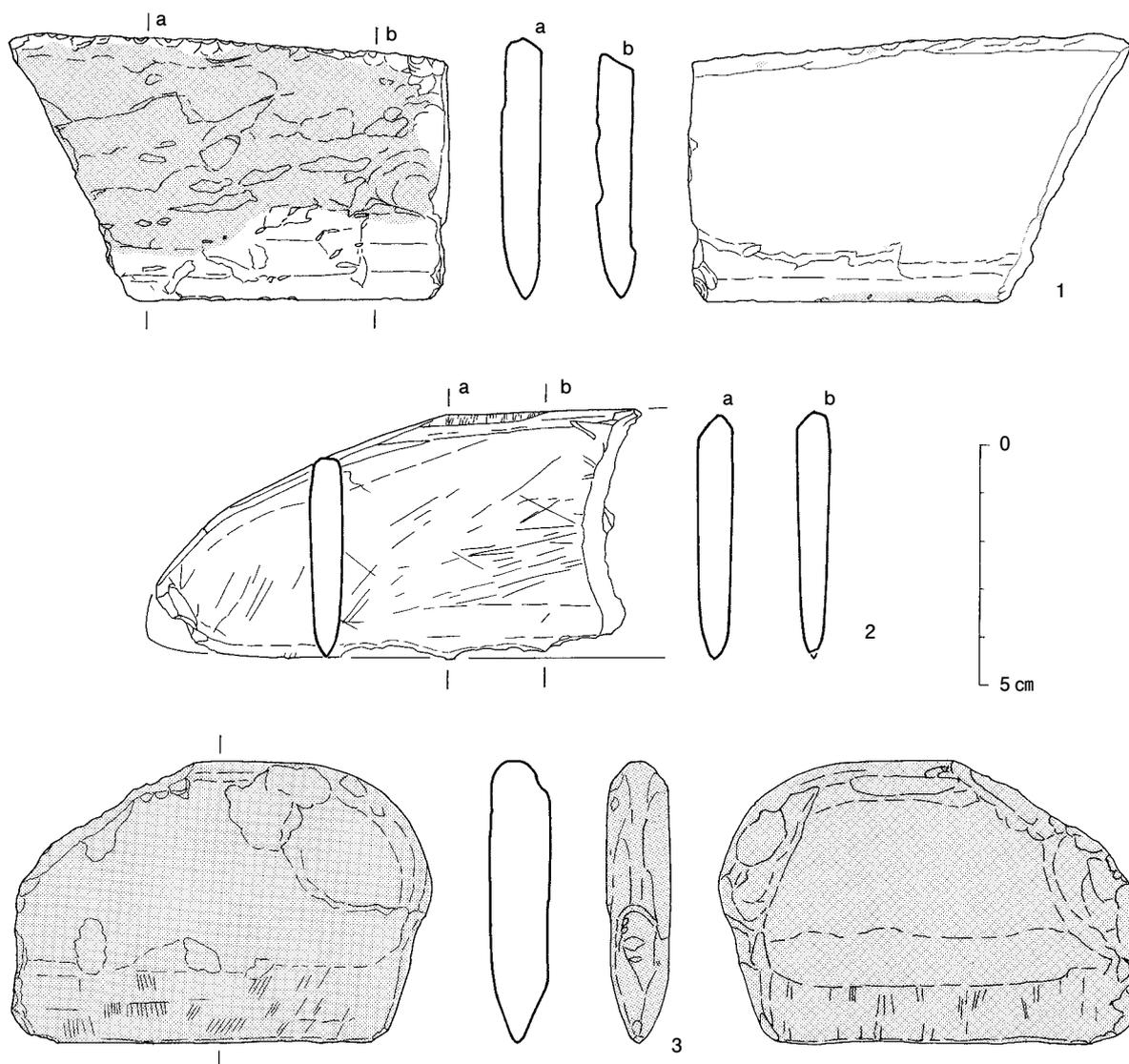


図35 石鑿実測図 (2/3)

[1 : 潤地頭給遺跡 2 : 東小田峯遺跡14号祭祀土坑 3 : 吉野ヶ里遺跡]

福岡県が調査した番上地区Ⅱ-5の石鋸は報告では「石包丁未製品」(児玉 1982)とされていたが、灰色砂質頁岩製の柄付石鋸の完形品で、全長15.7cm、柄と刃部の境界線が最大幅の5.42cm、柄部最小幅3.9cm、刃部最小幅約5cmから先が丸みをもって尖る。刃部は当初から打ち欠き片刃のままであつたらしく使用によりマメツして両刃気味になっている(図33、表5-10)。

糸島市が調査した番上地区(330・332番地)(平尾編 2019)でも「石剣未製品」や「石包丁未製品」とされた石器の中から石鋸4点を発見した。「石剣未製品」とされていたものは石鋸の切っ先で、使用されたために両刃気味である(図34-3)。他の3点は扁平で打ち欠き片刃である。石材は全て砂質頁岩である(図34-4)(表5)。

松江市田和山遺跡T-8第1環壕黑色土石鋸

報告書(松江市 2005)では、「石包丁の欠損品」とされているが、直線片刃であること、単孔が直線小口に近いこと、全形が長方形に復元できること、片面全体に赤色付着物が観察できることから木柄付き石鋸と考える。両平面・背・片方小口は研磨調整されているが、刃部は粗研磨されている(図34-5、表5-23)。

筑前町東小田峯遺跡11号住居跡石鑿

本例は石鑿未製品で、灰色砂質頁岩(金雲母微粒子を含む)製の現長8.4cm、最大幅4.8cm、厚さ1.12cm、重さ71.1gの法量をもつ(図36-1、表5-15)。両平坦面は、一方が研磨され、他方が部分的に粗研磨されているが、刃部と背部が敲打整形のみで仕上げ研磨されていない。11号住居跡では、弥生中期中頃から中期後半の土器が共

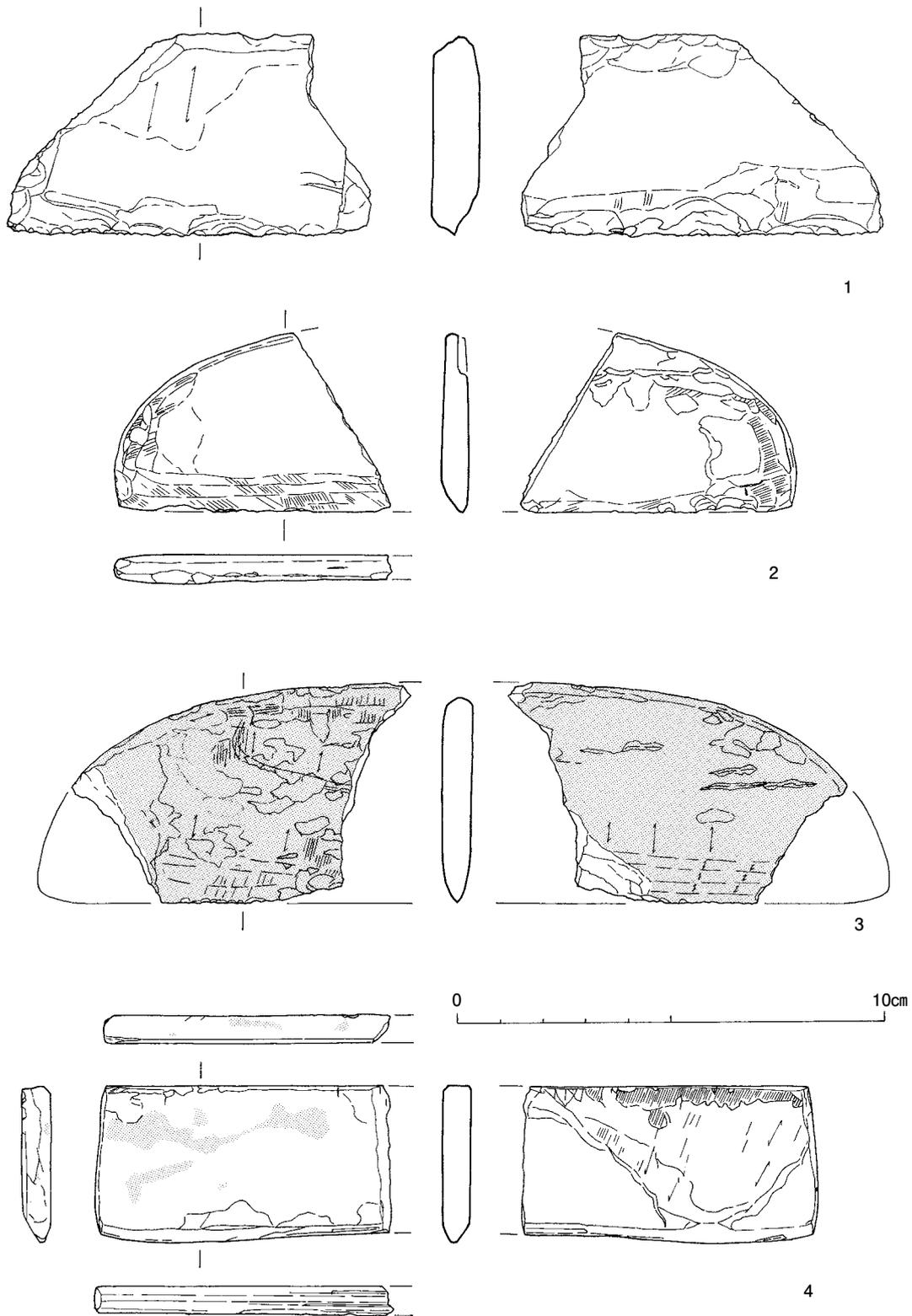


図36 石鑿・石鋸実測図 (2/3)

[1：東小田峯遺跡11号住居跡 2：潤地頭給遺跡 3：東小田峯遺跡5号溝 4：東小田峯遺跡P-646]

伴している（柳田2020）。

東小田峯遺跡14号祭祀土坑石鑿

弥生中期末の14号祭祀土坑から出土した石鑿は、現長6.42cm、最大幅4.3cm、最大厚0.62cm、重さ24.8gの法量

をもつ（図35-2、表5-17）。本石製品は直線刃と研磨された弧状を呈する背部から形成されるのが特徴。平坦な片面は粗研磨されているが、片面が剥離していることから刃部が片刃状を呈する。この片面の剥離は、背部

が受けた打撃による本体の破損と同時に起こったものと考えられる。類例には、糸島市潤地頭給遺跡石鑿例がある（図36-2）（柳田2019b・c・2020）。

東小田峯遺跡5号溝石鑿（表5-16）

弥生中期後半から後期初頭の5号溝出土の石鑿は、現長7.7cm、最大幅5.22cm、最大厚0.73cm、重さ42.6gの法量をもつ（図36-3）。本例も直線刃と研磨された弧状を呈する背部に特徴をもつが、両平坦面が割面に粗研磨が施されたのみである。刃部は直線刃に直角に近い方向に研磨されている。体部両側を欠損する（柳田2020）。

東小田峯遺跡P-646石鋸

時期不明のP-646から長方形の石製品が出土している。P-646という遺構の所在と同伴土器が不明の石製品であるが、石材が方形板石硯や石鑿と同一であることと、刃部をもつこと、背部が平坦であることから石鋸とした。本石製品は、現長6.9cm、最大幅3.7cm、最小幅3.5cm、最大厚0.69cm、重さ37.1gの法量をもつ（図36-4、表5-18）。背部と刃部に石鋸による擦切り痕跡をもつこと、直角に近い平坦な小口をもつことから、長方形板石硯の可能性も考えたが、横マメツした刃部を形成することから石鋸とした（柳田2020）。

（3）鉄製工具

鉄鋸は、管見ではあるが中国湖南省長沙金塘坡後漢墓（M13）で長方形板石硯・方形研石と相伴して後漢中期には見られる（『考古』1979-5）。ちなみに、銅鋸は、前漢前半の『西漢南越王墓』で知られている。石材分割には、玉作技術の存在を考えると研磨剤を併用すれば鉄板でも鋸の役目を果たすのではないだろうか。糸島市三雲・井原遺跡群（平尾編2019）や筑前町東小田遺跡群（石橋編2016、筑前町2020）でも各種鉄製工具が発見されている。

X. まとめ

現在のところ時期が確定できるもので確実に中国製や楽浪製といえる長方形板石硯（ⅢAa・ⅢBa・ⅢCa式）はないが、倭国特有の方形板石硯と研石の出現と終焉は表1・2のように北部九州と中国王朝の時期が対応しており、北部九州と中国との交流が密接であると同時に、拙稿の青銅器や銅鏡などで1986年以来長年にわたって論

じてきた弥生時代の年代や土器編年の正確さが証明できたことにもなる。方形板石硯や研石は、銅鏡や青銅器と比較すると製作技術が安易な石器であったことから、製品を輸入することなく模倣で事足りたものと考えられる。ちなみに、国立歴史民俗博物館の炭素14年代測定法（春成・今村編2004、設楽等2004・2009、藤尾編2019）の弥生時代の年代だと、中国より約100年早く北部九州で方形板石硯や方形研石が出現することになり、誤った研究がなされていたことになる。中国漢時代から5世紀までと同様に（吉田1993）、薬師ノ上・比恵141次・田和山遺跡例など51例で墨らしき黒色付着物、楽浪例や西新町・下原・田和山遺跡など38例で赤色系付着物、楽浪例や下原・田和山遺跡など10例で両者が観察できることから、これらが砥石などではなく方形板石硯や研石であることは確実である。

方形研石の時期幅は、唐津市中原遺跡例・筑紫野市貝元遺跡例などで、方形板石硯と同時期の弥生中期中頃に出現していることから、吉田恵二（1993）の中国前漢の方形研石の研究よりは古く遡ることが判明している。そしてその終焉は後漢末であるのに対して、倭国では貝元遺跡例のように古墳中期後半（「5C後葉」）まで継続使用されている。中国三国時代以後に研石が見られないのは固形墨の普及と相関することから、倭国では少なくとも多くの研石が存在する古墳前期までは膠を含む固形墨が普及していないことが考えられる。したがって、出土後水洗されれば墨が剥落しやすいものと考えられる。

筆者が最初に資料紹介した灰褐色粘質頁岩製方形板石硯は、最古の東小田中原例（ⅢBb式）（柳田2017a）が一部の研究者や報道関係者に否定されたが、以後のⅢCb式最古の弥生後期前半の吉野ヶ里例から古墳前期の西新町例（ⅢAb1式）まであり、同一石材が倭国製方形板石硯であることを確実なものとしている。

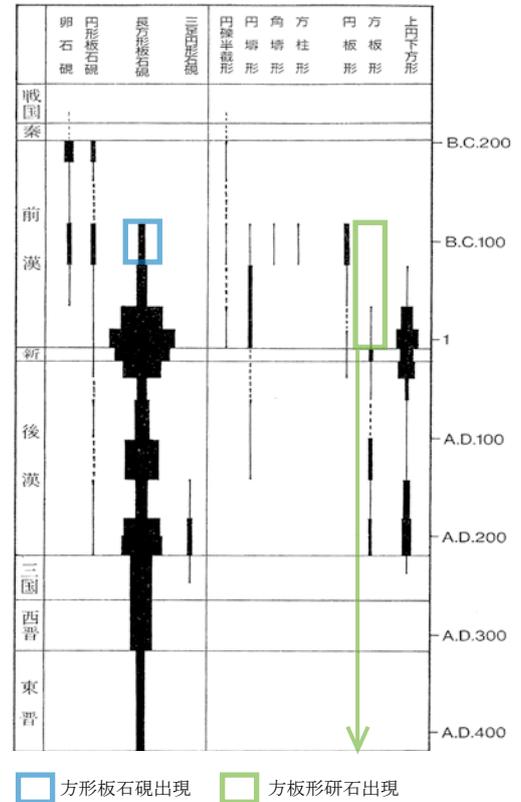
中国での石材は、「圧倒的多数を占めるのは青石で、灰白色石、灰黒色石、黒色頁岩がこれに次ぎ、きわめて少数ながら大理石や黄灰色砂岩製のものもある」という（吉田1993）。倭国での岩石専門知識の乏しい筆者自身の観察では、多くが粘質頁岩で、砂質頁岩が割合少なく、次に砂岩・凝灰岩・石英長石斑岩の順に続く。中国の青石については、倭国で類似するものに潤地頭給遺跡や東小田峯遺跡などの灰色粘質頁岩のうち青色に近い縞模様

表1 柳田康雄編年表（柳田 2018 b の一部）

中国	年代	韓国	時代	時期	北部九州編年	近畿編年
春 770- 秋 453-	400- 300- 221- 202- 100- 8- 25- 220- 265- 281- 316- 400-	無 文 土 器 時 代	繩 文 彌 生 時 代 古 墳 時 代	晩 期	繩文時代 黒川式	繩文時代 滋賀里IV式
早期				夜白式 1 2	船橋式	
前期				板付I式 1 2	長原式	
中期				板付II式 1 2		
後期				城ノ越式 3	第I様式	
須玖I式 1 2				第II様式		
					須玖II式 1 2	第III様式
(高三遊式) 1 2 3				第IV様式		
					(下大隈式) 4 5	第V様式
早期	西 新 式 I a I b	庄内式				
前期	II a II b II c III a	布留式				

註 北部九州とは玄界灘沿岸以外の福岡・佐賀両県と壱岐・対馬を指す

表2 吉田恵二（1993）の漢石硯・研石の消長



□ 方形板石硯出現 □ 長方形研石出現

のある石材が存在する。筆者の肉眼では、島根県の白色凝灰岩と北部九州の石英長石斑岩の明確な区別ができないことから、田和山遺跡の白色凝灰岩製方形板石硯と研石が石英長石斑岩である可能性やその逆である可能性も残されている。現実的に、田和山遺跡例を5年以上前に展示会でガラス越しに見学した際には石英長石斑岩製ではないかと思ったほどである。

今回の方形板石硯の発見は、中国や楽浪などのように首長墓ではなく、一般集落ではないものの拠点集落の竪穴住居跡や溝などに破棄された破片資料が大半を占める。田和山遺跡が祭祀遺構とすれば、東小田峯15号祭祀土坑例や東小田七板150号住居跡と同じく特殊例ともなる。古墳時代前期ではあるが、西新町遺跡22次P-64出土例は、ⅢA b 1式が2点と同一石材で平面的には同形態の砥石1点が相伴している。この3点には赤色付着物が顕著であることから祭祀的埋納あるいは製作工房であると考えている。赤色系付着物のうち褐色に近い付着物は、楽浪

王盱墓長方形板石硯と研石に付着しているばかりではなく、倭国では黒色付着物の下で観察できること、石鋸や石鑿などの石製工具にも付着していることから、顔料や塗料だけではなく研磨剤などの溶材の痕跡である可能性も残されている。

方形板石硯の使用は中国漢時代以後と発見例が吉田恵二研究（1993）とほぼ同数で時期も併行していることから、文字文化到来を確信しているが、倭国特有の方形板石硯を各地域で製作していることから、その地域的普及も目覚ましい。古墳時代前半期を含めて少なくとも楽浪郡設置の紀元前100年頃までは、倭国の文字文化が遡ることを確信する。大多数の硯が使用され消費される中国の官衙や集落、楽浪の硯の実態が不明なままでは、これ以上の研究は進まない。筆者自身が中国考古学において基礎研究不足であることから痛感している。

これらは倭国の先進地域である玄界灘沿岸のイト国・ナ国でなぜか少ない。倭国の中枢部と考えるイト国・ナ

国の王墓などに副葬されてもよい長方形板石硯であるが、いまだに発見されない。いずれ発見されるものと信じるが、今回の集落での発見は一定の集落内にも識字階級が存在することを示唆しているだけでも研究の成果だと考えている。青銅武器や銅鏡の生産を実現し、一定階級段階での地域交流に文字が使用されている弥生時代は、もはや原始時代ではなく、教科書を改訂すべきである。

内陸部の東小田遺跡群は、東小田峯2号墳丘墓10号甕棺墓の中型・小型前漢鏡、ガラス璧再生品（筑前町2020）だけではなく、弥生中期前半から朝鮮系青銅武器土製鋳型ではあるが前漢鏡土製鋳型と同じ製作技術をもつ（柳田2002・2014・2017c）など、内陸部でありながら玄界灘沿岸に並ぶ先進地域であるからこそ、先進文化である方形板石硯と研石を伴う文字文化を受け入れたのである。北部九州内の他の地域の最古例は、筑後市蔵敷遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡などのように約100年以上後の弥生後期初頭以後である。

今後の課題としては、第1に木簡などの同時期の文字資料の発見、第2に方形板石硯の付属資料である削刀は中国製の吉野ヶ里遺跡例や東小田峯遺跡41号住居跡のように弥生中期前半以後には発見されているものの、未発見の筆などの文房具がある。何よりも弥生石器研究者に限らず考古学に携わる研究者・発掘調査担当者の意識改革が必須である。調査現場での選別や整理作業での慎重な水洗の重要性は、調査担当者のみならず作業員の熟練が欠かせないことを今回の出土品の再調査でもより一層痛感した。出土品名の誤認に始まり、不用意に水洗された結果付着していたはずの黒色や赤色付着物が失われている。現在最古の墨書らしき痕跡のある遺物は、紀元前後の田和山遺跡例の他に、ほぼ同時期の紀元前後の福岡県久留米市塚崎東畑遺跡出土丹塗磨研土器（酒井2006）などがあり広範な分析を期待する。

今回の付着物の黒色や赤色としたものは正式に化学分析されたものではないことから、これも今後のあらゆる可能性を視野の分析に期待するしかないが、赤色について三雲番上研石例など一部の分析では担当者に聞く限り、墳墓で検出される金属質のいわゆる赤色顔料ではないらしい。肉眼観察では明らかに方形板石硯や研石の原形表面のみに付着し、欠損部分や再加工部分には付着していないことから石材の色ではない。出土品の付着物分析で、

同様な未解決の事例を連想する。イト国の平原王墓出土鏡の文様面で、銘帯部分などを除外するなど塗り分けられた明らかな色彩変化が存在するが、出土品を修復する過程で分析を依頼したところ、鍍以外の反応はなかったという。すなわち、両者の表面付着物は、炭素や金属質の朱やベンガラなどの顔料ではない可能性がある。

加えて、田和山方形板石硯の1例に文字らしきものが観察できることが明らかになったことで、塚崎東畑遺跡出土丹塗磨研土器の墨書状痕跡が信憑性を帯びてきた。これまでの弥生終末～古墳初期の文字らしきものは、1字のみであったところ、前記の2例は2字から4字以上であることから記号ではないだろう。1字文字例と田和山例を含めて蛍光エックス線に反応しないことから、方形板石硯のように炭素系の墨を使用していない可能性が強いことになる。

原始時代とされている弥生時代において、文字だけではなく青銅武器や大型銅鏡を製作できる土製鋳型技術が出現し継続しているはずがないという研究者が多い現実がある（柳田2017c）。また、遺跡・遺物を観察・分類できる能力（眼力）を感覚的だと軽んじ、認識・認知や理論という机上の操作で武装する風潮が昨今の考古学には存在する。このような考古学の基礎研究不足は、研究を遅滞し高上は望めない。基礎研究不足のまま安易に科学分析を受け入れた、その研究者のそれまでの研究成果はなんだっただろう、旧石器捏造事件を想起する。修練された感覚的能力なくして、遺跡・遺物を研究する考古学という学問は存在意義があるのだろうか。大幅に弥生時代の年代を繰り上げた研究者や博物館などの施設は、それまでの考古学の基礎研究では弥生時代の年代が決定できなかったことを証明している。考古学研究の初心に戻りたいものだ。これはデジタル化に取り残されたアナログ研究者のぼやきだけで済むのだろうか。

この研究は、短期間であったが同僚であった故吉田恵二先生の研究に追うところが多く、少なくとも1年早く研究を始めていれば協働できただろうと思うと残念でならない。吉田先生の研究を基礎に、この論考も倭国の方形板石硯の基礎研究として今後も多岐に深化させなければならない。

（註）本稿提出後、久住氏はようやく2月1日に「近畿地方以東における「板石硯」の伝播と展開」『第34回

考古学研究会東海例会 荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・正業～で文章化し、「子戊」に変更している。筆者は、「子」の筆順や久住氏のように黒色が薄い部分を考慮すると「壬」である可能性を捨てきれないことから、「壬戌」の可能性をいずれ説明したいと考えている。

最後に、以下の施設と担当者には、資料再調査において大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。東京大学考古学研究室・東京国立博物館・九州歴史資料館・佐賀県教育委員会吉野ヶ里調査事務所・長崎県埋蔵文化財センター・熊本県文化財センター・福岡市埋蔵文化財センター・糸島市教育委員会・伊都国歴史博物館・筑前町教育委員会・春日市奴国の丘歴史資料館・小郡市埋蔵文化財センター・朝倉市教育委員会・筑後市教育委員会・壱岐市文化財センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター・松江市文化財調査室・岡山県古代吉備文化財センター・兵庫県立考古博物館・桜井市纏向学研究センター・釜山大学校博物館・松陽山岳林禅寺、朝岡俊也・石川岳彦・石橋新次・井上洋一・井上義也・稲田陽介・上田恵・江崎靖隆・大貫静夫・大森真衣子・岡田諭・小川春樹・岡部裕俊・片多雅樹・勝部昭・河合修・小林勇作・小松謙・久住猛雄・酒井芳司・柴田剛・白井克也・進村真之・末益真奈美・椛山林継・角浩行・瀬川道信・武末純一・田中聡一・常松幹雄・椿真治・寺沢薫・平井典子・平尾和久・平嶋文博・平田定幸・廣瀬雄一・深井明比古・深澤太郎・福辻淳・古澤義久・三宅和子・桃崎祐輔・森暢郎・森井千賀子・松井良祐・松尾佳子・松崎有理・松本岩雄・山内亮平・山崎頼人・山崎悠郁子・米倉法子・米田克彦・渡部芳久・安星姫・申敬澈・李昌熙。

【参考文献】

朝岡俊也 2018「比恵82」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』1350
安楽勉編 2000「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』18 長崎県教育委員会
壱岐市教育委員会 2007「特別史跡原の辻遺跡」『壱岐市文化財調査報告書』10
石井美美子 2001「中原遺跡」『夜須町文化財調査報告書』55
石井美美子 2005「薬師ノ上遺跡」『夜須町文化財調査報告書』62
石橋新次編 2016「東小田峯遺跡Ⅰ」『筑前町文化財調査報告書』19
梅原末治・藤田亮策編著 1974『朝鮮古文化綜鑑』2名著出版

江崎靖隆 2007「潤地頭給遺跡Ⅱ」『前原市文化財調査報告書』96
江野道和 2006「潤地頭給遺跡Ⅰ」『前原市文化財調査報告書』93
岡崎雄二郎 2005「田和山遺跡 環壕内出土石板状石製品について」『松江市文化財調査報告書』99
岡部裕俊 2017「志登宮廻遺跡の発掘調査成果」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』12
岡寺未幾編 2005「西新町遺跡Ⅵ」『福岡県文化財調査報告書』200
岡山県教育委員会 2019「神明遺跡 刑部遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』249
片岡宏二編 1988「三国の鼻遺跡Ⅲ」『小郡市文化財調査報告書』43
加藤良彦 2017「比恵78」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』1321
金井亀喜編 1976『西本遺跡群A・B・C地点一』 広島県教育委員会
亀山行雄編 1996「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104
川上秀秋 1995「カキ遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』161
榎本杜人編 1974『楽浪漢墓』1 楽浪漢墓刊行会
木崎康弘編 1993「狩尾遺跡群」『熊本県文化財調査報告』131
久住猛雄 2019 a「西新町遺跡の「板石硯」の提起する諸問題」『考古学研究会岡山例会資料』
久住猛雄 2019 b「中国地方・近畿地方の板石硯の新例～交易ネットワークの予察～」『弥生時代ネットワーク』
久住猛雄 2019 c「古墳時代における「板石硯」の展開について（予察）」『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』
隈部敏明 2006「平塚山の土遺跡Ⅱ」『甘木市文化財調査報告書』67
小池史哲 1982「八反田Ⅰ-1石器」「三雲遺跡Ⅲ」『福岡県文化財調査報告書』63
小池史哲編 1992「山崎遺跡（Ⅰ）」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』7 福岡県教育委員会
小泉顕夫・澤俊一 1934「楽浪彩篋塚」『昭和九年度古跡調査報告1』朝鮮古跡研究会
児玉真一 1982「番上Ⅱ-5」「三雲遺跡Ⅲ」『福岡県文化財調査報告書』63
小松 謙編 2013「中原遺跡Ⅶ」『佐賀県文化財調査報告書』199
小松 謙編 2015「中原遺跡Ⅸ」『佐賀県文化財調査報告書』208
酒井芳司 2006「塚崎東畑遺跡出土丹塗磨研土器の墨書状痕跡について」『九州歴史資料館研究論集』31

- 佐々木隆彦 1983『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』
2 福岡県教育委員会
- 佐々木隆彦 1990「蔵敷遺跡群一森ノ木遺跡の調査一」『筑後市文化財調査報告書』6
- 佐藤浩司 2010「伊崎遺跡（4区・5区）」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』433
- 佐藤正義 1983『「東小田遺跡」の調査』夜須町教育委員会
- 重藤輝行編 2000「西新町遺跡Ⅱ」『福岡県文化財調査報告書』154
- 重藤輝行編 2006「西新町遺跡Ⅶ」『福岡県文化財調査報告書』208
- 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編 2009「弥生文化誕生」『弥生時代の考古学』2 同成社
- 柴尾俊介 1993「上清水遺跡Ⅰ区」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』130
- 鳥根県教育委員会 1998「塩津山丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡 附・亀の尾古墳）」『一般国道9号（安来道路）建設予定地内発掘調査報告書』西地区Ⅸ
- 下原幸裕編 2009「西新町遺跡Ⅸ」『福岡県文化財調査報告書』221
- 下村 智編 1995「雀居遺跡2」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』406
- 白井克也 2004「朝鮮半島の文化と古代出雲」『田和山遺跡国史跡指定3周年記念講演記録集』
- 杉原敦史編 1999「原の辻遺跡」『春の辻遺跡調査事務所調査報告書』16 長崎県教育委員会
- 杉原敦史編 2000「原の辻遺跡」『春の辻遺跡調査事務所調査報告書』19 長崎県教育委員会
- 杉原敦史編 2001「原の辻遺跡」『春の辻遺跡調査事務所調査報告書』21 長崎県教育委員会
- 高畑知功・中野雅美編 1998「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財調査報告』127
- 武末純一・平尾和久 2016「〈速報〉三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢』76
- 武末純一 2018「薬師ノ上遺跡」『筑前町史資料編 筑前町の考古資料』筑前町
- 武末純一 2019「弥生時代に文字は使われたか」『18歳からの歴史学入門』福岡大学人文学部歴史学科編 彩流社
- 田中聡一編 2006「観城跡・車出遺跡」『壱岐市文化財調査報告書』8
- 田中聡一 2011「特別史跡原の辻遺跡」『壱岐市文化財調査報告書』16
- 田原本町教育委員会 2009「奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡Ⅰ」『田原本町文化財調査報告書』5
- 筑前町教育委員会 2020「東小田峯遺跡Ⅱ」『筑前町文化財調査報告書』25
- 常松幹雄 2013「弥生土器の東漸」柳田康雄編著『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
- 寺沢 薫 2000『王権誕生』『日本の歴史』02 講談社
- 中尾篤志編 2003「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』26 長崎県教育委員会
- 長家伸 1997「比恵遺跡群（24）」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』530
- 中間研志編 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』8 福岡県教育委員会
- 中間研志編 1998『貝元遺跡Ⅰ』福岡県教育委員会
- 中間研志編 1999『貝元遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会
- 中牟田賢治編 1978『千塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団
- 原田敏照 2009「山持遺跡 Vol. 5（6区）」『国道431号道路改善事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』7 鳥根県埋蔵文化財センター
- 原田淑人・沢田金吾 1930『楽浪一五官掾王野の墳墓一』東京帝国大学文学部 刀江書院
- 春成秀爾・今村峯雄編 2004『弥生時代の実年代』学生社
- 平尾和久 2018「三雲・井原遺跡の調査成果とその特徴」『第4回伊都国フォーラム 三雲・井原遺跡国史跡指定記念シンポジウム 伊都国人と文字』糸島市教育委員会
- 平尾和久編 2019「三雲・井原遺跡Ⅺ」『糸島市文化財調査報告書』21
- 深江英憲編 2011「篠山市門前遺跡」『兵庫県文化財調査報告』399
- 福岡市教育委員会 1982「西新町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』79
- 福田一志・中尾篤志編 2005「原の辻遺跡総集編Ⅰ」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』30 長崎県教育委員会
- 藤尾慎一郎編 2019『再考！縄文と弥生』吉川弘文館
- 松江市教育委員会 2005「田和山遺跡発掘調査報告1・2」『松江市文化財保護調査報告』99
- 松崎友理 2018「比恵80」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』1348
- 松見裕二 2015「市史跡カラカミ遺跡3次」『壱岐市文化財調査報告書』25
- 村川逸郎・藤村誠編 2001「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』23 長崎県教育委員会
- 森本幹彦編 2012「大塚遺跡5」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』1144
- 柳田康雄編 1980「三雲遺跡Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』58
- 柳田康雄 1982「原始」『甘木市史』甘木市
- 柳田康雄編 1984『甘木市史資料 考古編』甘木市
- 柳田康雄 1986「墓」『三世紀の九州と近畿 シンポジウム+講座』榎原考古学研究所附属博物館編

- 柳田康雄 2002『九州弥生文化の研究』学生社
- 柳田康雄 2004「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代」『九州歴史資料館研究論集』29
- 柳田康雄 2008「弥生時代の手工業生産と王権」『國學院雑誌』109-11
- 柳田康雄 2009 a「福岡県筑前町東小田峯遺跡出土銅矛土製鋳型」『古代学研究』182
- 柳田康雄 2009 b「弥生時代青銅器土製鋳型研究序論」『國學院雑誌』110-6
- 柳田康雄 2010「弥生王権の東漸」『日本基層文化論叢 梶山林継先生古稀記念論集』雄山閣
- 柳田康雄編著 2012『東日本の弥生時代青銅器祭祀の研究』雄山閣
- 柳田康雄 2013「弥生時代王権論」柳田康雄編『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
- 柳田康雄編著 2013『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
- 柳田康雄 2014『日本・朝鮮半島の青銅武器研究』雄山閣
- 柳田康雄 2016「板付Ⅰ式土器の実態」『平成28年度九州考古学会総会研究発表資料集』
- 柳田康雄 2017 a「福岡県筑前町東小田中原遺跡の石硯」『纏向学研究』5 桜井市纏向学研究センター
- 柳田康雄 2017 b「卑弥呼以前の伊都国の外交」『桜井市纏向学研究センター東京フォーラム「卑弥呼」発見親魏倭王卑弥呼に制詔す—卑弥呼の外交—』奈良県桜井市
- 柳田康雄 2017 c「福岡県春日市須玖タカウタ遺跡の青銅器鋳造技術」『古文化談叢』79
- 柳田康雄・石橋新次 2017「福岡県筑前町薬師ノ上遺跡の石硯」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』
- 柳田康雄・平田定幸 2017「福岡県筑前町東小田七板遺跡の鉄戈」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』
- 柳田康雄 2018 a「伊都国の外交」『第4回伊都国フォーラム 三雲・井原遺跡国史跡指定記念シンポジウム 伊都国人と文字』糸島市教育委員会
- 柳田康雄 2018 b「弥生時代初期の時期区分と初期青銅器」『纏向学研究』6 桜井市纏向学研究センター
- 柳田康雄 2018 c「弥生時代の長方形板石硯」『國學院大學研究開発推進機構 第44回日本文化を知る講座「倭・日本における漢字文化の受容と国家形成」』
- 柳田康雄 2019 a「イト国からヤマトへ」『第12回纏向学セミナー』桜井市纏向学研究センター
- 柳田康雄 2019 b「北部九州における長方形板石硯の出現と終焉」『平成30年度纏向学研究センター定例研究集会（第7回）資料』
- 柳田康雄 2019 c「弥生時代の文字文化」『伊都国歴史博物館『2019年度伊都学第1回』』
- 柳田康雄 2019 d「板石硯・研石の観察と研究」『第1回板石硯・研石研究会』
- 柳田康雄 2019 e「倭国における方形板石硯と研石の出現と製作技術」『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』
- 柳田康雄 2019 f「弥生時代王権論（補足）」『季刊邪馬台国』137 梓書院
- 柳田康雄 2020「筑前町の方形板石硯・研石・石鑿・石鋸」『筑前町文化財調査報告書』25
- 山口信義 1996「祇園町遺跡3」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』193
- 山見 彰 1955「朝倉郡夜須村・三井郡三国村の一弥生遺跡について」『史学部報』6 福岡県立朝倉高等学校史学部
- 吉田恵二 1993「長方形板石硯考」『論苑考古学』天山舎
- 吉田恵二 2018「文房具が語る古代東アジア」『ものが語る歴史』38 同成社
- 吉田佳広 2008「須玖尾花町遺跡」『春日市文化財調査報告書』51
- 吉田佳広・井上義也編 2012「須玖岡本遺跡5」『春日市文化財調査報告書』66
- 渡部芳久 2018「弥生時代擦切石器の展開—資料紹介を兼ねて—」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』43
- 渡部芳久編 2019「吉野ヶ里遺跡」『佐賀県文化財調査報告書』222
- 渡部芳久 2019「擦切加工と石硯・研石—佐賀県内出土例を対象として—」『調査研究書』43 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
- 李昌熙 2007「靑島住居址の祭祀長-B地区カ-245号住居址出土遺物検討—」『第17回考古学国際交流研究会韓国の最新発掘調査報告会』
- 曹喜勝 2003「絹と硯を始めとした楽浪遺物を通じて観た楽浪文化の性格と出雲地方への伝播」『東北アジアシリーズ報告書'02 楽浪文化と古代出雲』環日本海松江国際交流会議
- 鍾志成 1975「江陵鳳凰山一六八号漢墓出土一〇文書工具」『文物』1975年第9期
- 臨浙市博物館 1984「山東臨沂金雀山周氏墓群発掘簡報」『文物』1984-11
- 揚州博物館 1987「揚州平山養殖場漢墓清理簡報」『文物』1987-1
- 河北省文物研究所 1990「河北陽原県北関漢墓発掘簡報」『考古』1990-4 科学出版社
- 広州市文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所・広東省博物館 1991「西漢南越王墓」『中国田野考古報告集考古学専刊』丁種第43号
- 西安市文物保護考古所・鄭州大学考古專業編著 2004『長安漢墓』陝西人民出版社

2019.12.28

表3 朝鮮半島・日本の方形板石硯一覧

番号	図	地域	遺跡	遺構	時期	型式	墨	石材	全長	幅	厚さ	備考	文献	
1		北朝鮮	石蔵里200号墓	木槨墓	後漢初期	ⅢC a	○	「粘板岩」	14.2	6.2	0.4	漆盒内、「題」銘	榎本編1974	
2	8-2		栗浪王肝墓	木槨墓	後漢中期	ⅢC a	○	灰褐色砂質頁岩	9.13	3.31	0.49	金雲母含む、褐色付着	原田・田沢1930	
3			南井里116号墳	木室墓	後漢末～	ⅢC a	○	「粘板岩」	32.2	12	0.17		小泉・澤1934	
4	8-1	韓国泗川市	伝楽浪	採集	「弥生中期後半」	ⅢC a	○	灰褐色砂質頁岩	4.99+	5.51	0.62	小倉コレクション	白井2004	
5	9		勒島B地区	カ-245号住	I-1包舍層	ⅢD b	—	灰褐色粘質頁岩	14.2	6.84	0.72	微雲母多量含む	李2007	
6			三雲八反田	I-1包舍層	I-1大溝	ⅢC b	○	黄色粘質頁岩	6+	3.2	1.9	赤褐色付着	小池1982	
7			三雲屋敷	I-10包舍層	I-10包舍層	ⅢC b	○	黄色凝灰岩	4+	6.8+	1.4	擦切り、台形		
8			三雲番上330番地	土器溜り	I-10包舍層	ⅢD b	—	灰色粘質頁岩	14+	7.4	1.5	擦切り、210g		
9	10-3		三雲番上332番地	土器溜り	土器溜り最上層	ⅢF	—	「黒灰色砂質片岩」	6.1	4.6	0.6	再生品	武末・平尾2016	
10			三雲番上332番地	土器溜り	土器溜り最上層	?	—	灰漆黒色粘質頁岩	5.3+	3.8+	0.6	「砥石に転用」	平尾2018	
11					東側包舍層	ⅢD	—	灰色砂質頁岩	5.9+	2.3+	0.64		平尾編2019	
12	22			三雲番上330番地	2次包舍層	ⅢD b	—	灰黒色砂質頁岩	11.9	7.5	1.7	「未製品」		
13			潤地頭給	大溝A区上層	大溝A区上層	ⅢD a	—	灰色粘質頁岩	5.9+	6.8	0.65	「石造り未製品」	江野2006	
14	16-1		大溝E区上層	大溝E区上層	ⅢD a	—	灰色粘質頁岩	4.1+	3.6+	0.6	未製品、「扁平片列石斧」			
15			志登宮廻	トレンチ	ⅢC b	○	灰色片岩	8.4+	10.9	1.94	再生品	岡部2017		
16		福岡市西区	今宿大塚15次		古墳中期「TK216」併行	ⅢD a						未確認	久住氏教示	
17			今宿大塚17次	366		「時期不明」	ⅢC b		11.8	5.5	1.2	擦切り痕跡	森本編2012	
18			元岡									未確認		
19		早良区	西新町	D区16号住	古墳前期前半	ⅢF	○	灰黒色粘質頁岩	8.7	3.8	0.87	再生品	福岡市1982	
20			西新町12次	29・31号住付近	古墳前期?	ⅢA b1	—	灰色粘板岩	4.7+	4.4	0.5	10.5g	重藤編2000	
21			西新町14次	2号石組	古墳前期?	ⅢA b1	赤	灰褐色粘板岩	7.5+	2.4+	0.63	11.2g	岡寺編2005	
22			西新町17次	1号住居跡	古墳前期前半	ⅢA b1	赤	灰褐色粘板岩	7+	5	0.63	23.5g	重藤編2006	
23	14		西新町22次	P-64	古墳前期?	ⅢA b1	赤	灰褐色粘板岩	10.44	4.4	0.5	類似砥石共伴	下原編2009	
24		博多区	雀居4次E7区	SD03上層	弥生後期後半	ⅢD	—	灰褐色砂岩	5.7+	5.45	0.86		下村編1995	
25			比惠57次	SK062土坑		弥生後期初頭	ⅢC b		4.9+	3.8	0.7		長家1997	
26			比惠140次	B7グリップSP1		「弥生中期」	ⅢD a		「8.1+」	「8.7+」	「1.6」		加藤2017	
27			比惠141次			弥生中期～奈良	ⅢB b2	○	灰色粘板岩	3.9+	5.9	1.1	断面逆台形	松崎2018
28	16-3			比惠143次		古墳早期新	ⅢF	—	灰黒色砂質頁岩	5.3	4.7	0.8	微白雲母多く含む	朝岡2018
29	26-2			山王									未報告	
30				博多遺跡群213次									久住氏教示	
31		春日市	須玖花町	8号溝	弥生中期末～終末	ⅢC b	—	灰褐色砂質頁岩	9+	5.8	1.35	「砥石」	吉田2008	
32			須玖岡本5次	Ⅱ区攪乱	弥生後期前半・中頃	ⅢD a	—	白色石英長石斑岩	6.8+	3.7	0.9	30.1g	吉田・井上編2012	
33			須玖岡本6次	C区7層	弥生中期～後期中頃	ⅢD a	○	「石英長石斑岩」	4.5+	4.3	1	199g		
34		筑紫野市	貝元I	5号住	弥生後期中頃	ⅢE	○	粘質頁岩	5.6	3.4+	1.2	完形品	中間編1998	
35				14号住	弥生後期中頃	ⅢF	○	粘質頁岩	6.3	3.4	1.5	再生品		
36				89号住	弥生終末	ⅢF	○	「砂岩」	4.5	6.4	1.9	再生品		
37				96号住	弥生後期中頃	ⅢE	○	結晶片岩	13.7	8.7	1.7	完形品、自然石		
38			土3・I区包舍層		ⅢD b	○	灰黒色砂質頁岩	8.7+	4.7+	1	両面研磨			
39	20-2		河		弥生後期中頃	ⅢD b	赤	「粗シルト」	「13+」	「8」	「1.5」			
40					弥生中期中頃	ⅢE	○	灰色砂質頁岩	12.9	7.9	1.9	粗い擦切り痕跡		
41					弥生中期前半～古墳後期	ⅢE	○	「砂岩」	6.9+	6.8+	1.9+	両面		
42	21-1					ⅢE	○	茶褐色粘質頁岩	5.9+	4.2	0.9	再生品		
43						ⅢD a	○							

番号	図	地域	遺跡	遺構	時期	型式	墨	石材	全長	幅	厚さ	備考	文献			
44		筑紫野市	貝元Ⅱ	109号住	古墳前期	ⅢC b	○	「シルト」	2+	6.1	1.3		中間編1999			
45	13-2			121号住	古墳中期	ⅢA b1	—	灰色細粒砂岩	5+	4.7+	0.9	未製品				
46				132号住	弥生終末	ⅢE	—	結晶片岩	8.9+	7.4+	1.5	自然石				
47				302号住	弥生後期初頭	ⅢF	—	灰色粗砂質頁岩	6.3+	5.5+	1	再生品				
48				14号溝	弥生中期前半～後期初頭	ⅢD a	—	灰黒色砂岩	6.2+	4.8	1.5	台形				
49						ⅢD a	—	硬質砂岩	3.4+	5.4+	1.2	台形				
50					17号溝	弥生後期残半、古墳中期～	ⅢD a	○	灰白色凝灰岩	7.8	4.9	1.6		完形品		
51					包含層	弥生中期前半～古墳後期	ⅢC b	○	灰色砂質頁岩	5.4+	5.2+	0.7		赤色も付着		
52					I区包含層		ⅢD a	—	「細砂岩」	[4.3]	[3.9]	[0.9]				
53	11			筑前町	東小田中原	3号住	弥生後期初頭	ⅢD a	—	灰白色粘質頁岩	9.4	7.4		0.69	両面研磨	柳田2017a
54	12					土器溜り	弥生中期初頭～後期	ⅢD b	○	黒褐色砂質頁岩	15.3	6.32		0.74	金雲母含む	
55						2号住	弥生中期後半	ⅢE	—	灰褐色砂岩	7.6+	9.1+		0.7		
56		99号住	中期末、後期初頭			ⅢF	—	灰褐色粘質頁岩	7.3+	5.7+	0.8	再生品				
57	23	117住	古墳前期前半			ⅢD b	赤	黒褐色砂質頁岩	17.5	9.1	2.2					
58		祭祀15	中期中頃～後期初頭			ⅢE	—	灰白色粘質頁岩	19.1+	9.8+	18.8	不整形				
59		表採	弥生終末?			ⅢE	—	白色粘質頁岩	8.3	9.6	1.5	未製品、158.7g				
60		東小田追願				I1・14住上層		—	青灰色粘板岩	9	3.5+	1.33	完形に近い	未報告		
61						48号住	弥生後期前半	ⅢC b	○	灰褐色粘質頁岩	4.2+	1.9+	6.8		微雲母含む	
62						68号住	弥生後期初頭	ⅢD a	—	青灰色粘質頁岩	10	3.2+	1.2		完形品	
63						77住		ⅢE	○	白色石英長石斑岩	3.5+	1.9+	1.1			
64						107住		ⅢE	○	白色石英長石斑岩	10.6	4.3	1.4		完形品、黒の下に赤褐色	
65				I溝5区	弥生後期初頭	ⅢC b	赤	黄褐色粘質頁岩	7.5+	5.04+	0.58	18.4g				
66				17溝4区		—	—	青灰色粘質頁岩	5.6	4	0.8	再生品				
67	19-1			朝倉市	下原	4号住	弥生中期中頃	ⅢD a	○	硬質砂岩	14.6	6.7	2		黒色下に赤色あり	佐々木1983
68						5号住		I B	—	緑泥片岩	15.2	12.4	1.2		自然石利用	
69						SH54住		ⅢD a	○	灰色砂質頁岩	8.7+	4.1	2.1			
70	25-2			小郡市	三國の鼻	SH122住P-2	古墳早期	ⅢF	—	灰色粘質頁岩	7+	6.4+	1.1		再生品	隈部2006
71	25-1					環壕2区	弥生後期中頃	ⅢF	○	灰褐色粘質頁岩	8.2	5.5	0.7		再生品	
72		環壕2区	弥生後期中頃			ⅢE	—	灰褐色粘板岩	6+	3.5+	1.1					
73		筑後市	蔵敷森ノ木	47号住屋内土坑	弥生後期前半	ⅢC b	○	硬質砂岩	11	10.3	1.8	褐色付着	佐々木1990			
74				91号住	弥生後期初頭	ⅢC b	○	硬質砂岩	9.9+	7.0+	1	褐色付着				
75						ⅢF	—	硬質砂岩	6.3+	6.5+	1.45	再生品				
76		北九州市	上清水I区	2トレンチ下位腐植土	古墳前期			「凝灰質砂岩」				未確認、「砥石」	柴尾1993			
77				E区5層併行	弥生終末				「凝灰質砂岩」							
78				B区4下層	弥生終末～古墳早期				「凝灰質砂岩」							
79				B区4下層					「珪質層灰岩」							
80				Ⅲ区5層上層					「凝灰質細粒砂岩」							
81		伊崎4区	伊崎4区	Ⅲ区7層上層									川上1995			
82																
83																
84				祇園町3地点											山口編1996	
85															佐藤2010	
86																

番号	図	地域	遺跡	遺構	時期	型式	墨	石材	全長	幅	厚さ	備考	文献
87		北九州市	伊崎4区	4A区4住									佐藤2010
88				4A区7住									
89				4A区M3東半米面石内				「凝灰質細粒砂岩」					
90				4B区13住				「凝灰質泥岩」					
91			伊崎5区	2住									
92				3住									
93				4住									
94				溝6									
95				溝6南半覆土									
96		築城町	十双	18号住	弥生終末	ⅢE	赤	灰色粘質頁岩	7.1	9.4	1.2	「砥石」	中間編1992
97	19-2			19号住		ⅢD a	赤	灰褐色粘質頁岩	107+	5.7	1.2		
98				22号住		ⅢF	赤	灰褐色粘質頁岩	7.6	5.1	1.4		
99	24			25号住	古墳早期	ⅢE	赤	灰褐色粘質頁岩	11.2	8.1	1.2		
100						ⅢF	赤	灰白色粘質頁岩	6.5+	5.4	1		
101				32号住	弥生終末	ⅢE	赤	灰白色粘質頁岩	「5.5+」	「3.2+」	「1.4」	両面に擦切り痕跡	
102				1号谷砂礫層	弥生後期後半～古墳前期	ⅢC b	赤	輝緑凝灰岩?	7+	6.2+	1	赤色部分もある	
103	18	佐賀県唐津市	中原11区	SH11183住	弥生中期中頃	ⅢD a	赤	灰色砂質頁岩	19.2	7.2+	0.7～	未製品、擦切痕跡	小松編2013
104	16-2					ⅢD a	赤		8.7+	4.5+	0.9	未製品、擦切痕跡	小松編2015
105				SH11160住	古墳前期	ⅢC b	赤	灰色砂質頁岩	9.8	6.4	1.4	157.4g、側面黒色	
106		基山町	千塔山	15号住	弥生終末	ⅢB b2	赤	緑灰色粘板岩	3.4+	3.0+	1	断面逆台形	中牟田編1978
107	13-3	吉野ヶ里町	吉野ヶ里	Ⅵ区SH291住	弥生後期前半	ⅢC b	赤	灰褐色粘板岩	7.8+	5.2	1.2	57.1g、再生品	渡部編2019
108		神埼市		田手一本里木1区 220区SD0026・SD0027		ⅢB b	赤	灰褐色粘粘質頁岩	3.8+	3.5	0.5	11g、再生品	渡部2019
109		長崎県志岐市	原の辻	原7区	弥生中期中頃～古墳前期	ⅢC b	赤	灰色砂岩	5.7+	4.3+	1.3	52g	安楽編2000
110				1号田河通B区IV d層	弥生中期中頃～古墳前期	ⅢE	赤	砂質頁岩	10.7	9.3	1.4	242.4g、発形品	杉原編2000
111				C2区Ⅲ層	弥生中期前半～後期初頃	ⅢF	赤	緑灰色砂質頁岩	7.1+	7.1+	1.2	側面に木質付着	杉原編2001
112				3号溝	弥生終末	ⅢE	赤	砂質頁岩	24.6+	8.2	1.8	637g	村川・藤村編2001
113				石田高原南区石敷き	弥生後期	ⅢD b	赤	「細粒砂岩」	20.9	11.5	2.7		中尾編2003
114				高元V区P7上層	弥生中期中頃～古墳前期	ⅢC b	赤	灰褐色砂質頁岩	4+	5.6	1	37g、赤色	志岐市2007
115				高元X区SD1-4トレ	弥生中期前半～古墳前期	ⅢC b	赤	灰色細砂質頁岩	9.9	3.4+	0.8	60g	田中2011
116				3トレ5層	弥生後期前半～中頃	ⅢC b	赤	灰色砂質頁岩	7.7+	8.1	1.8	310g	田中編2006
117		大分県日田市	伝吹上	採集	弥生	ⅢF	赤	灰褐色粘質頁岩	6	5.1	0.55	再加工品	未報告
118		熊本県阿蘇市	狩尾湯の口	38号住	弥生終末	ⅢC	赤	白色粘質頁岩	8.5	3.9	0.8	32.8g「砥石」	木崎編1983
119			狩尾池田古園	I区2住		ⅢE	赤	淡黄褐色粘質頁岩	6.6	4.7+	0.9	32.7g「砥石」	
120	10-2	鳥取県松江市	田和山C区	1-a環壕掘り始め跡付近	弥生「中期後半」	ⅢF	赤	白色「凝灰岩」	4.04+	3.34+	0.78	裏面に赤褐色	白井2004
121	10-1			第1環壕(1-c)		ⅢA b1	赤	灰黒色砂質頁岩	3.1+	3.2+	0.69	「砥石」	松江市2005
122	20-1			D区黒色土		ⅢD b	赤	灰色砂岩	9+	7.5	1.5	裏面に文字	松江市2005
123				7区第1環壕		ⅢD	赤	淡褐色粘質頁岩	3.8+	5.2+	1	未研磨未製品	
124				第1環壕B区黒色土		ⅢC b	赤	白色凝灰岩	4.9+	6.4+	0.8		
125				第1環壕		ⅢF	赤	白色凝灰岩	3.5+	4.5+	1.1	再生品	
126				第1環壕(1-c)0区黒色土		ⅢF	赤	灰白色凝灰岩	3.7+	4+	0.4	側面に赤褐色付着	
127				第3環壕黒色土		ⅢC b	赤	灰褐色砂質頁岩	3.3+	5+	1		
128		出雲市	山持6区	k4砂層	弥生「後期前半」	ⅢF	赤	灰黒色砂質頁岩	4.2+	5.7+	0.4	再生品	原田編2009

番号	図	地域	遺跡	遺構	時期	型式	墨	石材	全長	幅	厚さ	備考	文献
129		出雲市	山持6区	F2砂層	弥生「後期前半」	円形	一	白色凝灰岩	4.3+	3.7+	1.3		久住2019a
130		安来市	柳	ES3k 第26加工段		ⅢF	赤	黒色砂質頁岩	5.5+	4.6+	0.9	擦切り痕跡、再生品	高根県1988
131	26-1			ES2k 第55加工段		ⅢF	赤	灰黄色粘質頁岩	6.6	4.7+	0.9	擦切り痕跡、再生品	
132			竹ヶ崎	SI12住	「古墳早期新」	ⅢC b	一	粘質・砂質頁岩	3.8+	2+	0.5	「再生硯」	久住2019b
133		鳥取県鳥取市	青谷上寺地		弥生「中期後半」	ⅢF						「再生硯」	
134						ⅢF						未製品	
135													
136		広島県広島市	西本第一B地点	3 b 住	「弥生後期中葉」			「凝灰質岩」	「7」	「2.5」	「0.5」	13.6g、未確認	金井編1976
137			西本第一C地点	II a 住	「弥生後期前半」			「流紋岩」	「2.6」	「2.8」	「0.5」	4.8g、未確認	
138		岡山県総社市	神明	20号住	弥生後期後半「後Ⅲ～Ⅳ」	ⅢD a	○	「流紋岩」	6.7+	5.6	0.9	再生品	岡山県2019
139				24号住	弥生後期中頃「後Ⅲ」	ⅢD a	赤?		7.8+	6.7	0.7～		
140				67住	「古墳中期Ⅱ」	ⅢD a						未製品	
141	21-2			土坑115	弥生後期前半「後Ⅰ」	ⅢD a	赤?	「粘板岩」頁岩	10.6	4.3	0.8		
142				その他の出土品		ⅢD a		「流紋岩」				未製品	
143		岡山市	津寺	78住	古墳前期	ⅢD a	一	頁岩	「5.6+」	「4.5」	「1.5」		亀山編1996
144				79住	古墳前期	ⅢD a	一	白色凝灰岩	2.7	3.3	1	研石に再生	高畑・中野編1998
145				盛土M8Ⅱ区		不明	一	流紋岩				研石に再生	
146				盛土M8Ⅰ区		ⅢD b	赤	「古銅輝安山岩」				五角形	
147	13-1	兵庫県丹波篠山市	門前A-2地区	A-2区細溝	弥生・須遠器・瓦器	ⅢC a	一	灰色粘質頁岩	6.9+	3.5	0.6	「砥石」	深江編2011
148		大阪府泉南市	滑瀬			ⅢD b						未確認	久住2019a
149		高槻市	古曾部・芝谷	[A]		ⅢC b							久住2019a・b
150				[B]		ⅢD							
151				[C]		ⅢD a							
152		奈良県田原本町	唐古・鍵69次	SK1137第5下層	「大和Ⅲ-3」			細粒砂岩	「5.7」+	「4.8」	「1.2」		田原本町2009 久住氏教示
153													未報告
154		桜井市	纏向	溝	古墳前期		一						未報告
155		天理市	布留三島・里中東地区		「古墳中期～後期」			「片岩」				未確認	久住2019a・b
156								「シルト質頁岩」					
157			布留三島・里中地区1次										
158			1F1.203-L.N										
159													
160													
161		種原市	新堂	ⅡSX524下層	古墳中期			「片岩」					久住2019b
162～181		石川県小松市	八日市地方									20例余り存在	久住氏教示

注:「」は報告書内容(未確認)。+は欠損。

表4 朝鮮半島・日本の研石一覧 2019.12.28

番号	図	地域	遺跡	遺構	時期	型式	黒	石材	全長	幅	厚さ	備考	文献
1		北朝鮮	石蔵里200号墓	木槨墓	後漢初期	ⅢA a	○	「粘板岩」	3.3	3.3	0.2		榎本編1974
2	8-2		薬浪王肝墓	木槨墓	後漢中期	ⅢA a	○	灰褐色砂質頁岩	2.43	2.51	0.37	褐色も付着	原田・田沢1930
3			南井里116号墳	木室墓	後漢末～	ⅢA a	○					円形溝	小泉・澤1934
4			伝薬浪	採集		ⅢA a	○	灰褐色砂質頁岩	3.33	3.32	1.49	赤塗装	白井2004
5		福岡県糸島市	三雲番上332番地	西側	弥生中期～後期前半	ⅢA a	赤	灰褐色砂質頁岩	4.6	2.6	1.9		平尾編2019
6	30-2		三雲番上332番地	北側調査区	弥生中期中頃～後期前半	ⅢB b	—	砂質頁岩	4.4	3.9	1.5	未製品	柳田2019 d・e
7			三雲番上330番地	1次包含層	弥生終末～古墳中期	ⅢB b	—	灰色粘質頁岩	4.6	4.6+	1.1	未製品	
8		福岡市西区	吉武9次	69住	古墳中期後半	ⅢD	赤	灰褐色粘質頁岩	「4.6」+	「3.3」	「0.6」	転用品	久住2019a～c
9		筑紫野市	貝元1	11号住	古墳前期新	ⅢB b	○	「粘板岩」				「16.3g」	中間編1998
10				12号住	古墳前期	ⅢB b	○	砂質頁岩	3	2.9	1.4	「16.7g」再生品	柳田2019 d・e
11				106号住	古墳前期前半	ⅢC	○	「砂岩」	「3.5」	「2.5」	「1.7」	「22.1g」	中間編1999
12	30-3			113号住	古墳中期後半	ⅢB b	○	粗砂岩	3.9	2.8	2.6	台形「39.7g」	柳田2019 d・e
13	27-4			156号住	弥生中期「中葉」	ⅢB b	○	褐色砂岩	3.4+	2	1.1	「10.8g」	
14				317号住	「弥生終末」	ⅢB b	○	「頁岩」	「3.4」	「3.1」	「1」	「16.4g」	
15	30-1			334号住	弥生中期中頃～後期初頭	ⅢB b	○	灰色細粒砂岩	2.9	2	1.8	「19.3g」	
16	29-2			Ⅱ区包含層	弥生中期前半～古墳後期	ⅢB b	○	白色石英長石斑岩	4.2	1.9	1.4	完形品、擦切痕跡	
17				Ⅱ区包含層		ⅢB b	○	灰色細粒砂岩	3	2	1.4	「15.3g」	
18	29-3	筑前町	東小田七板B区	150号住	弥生後期初頭	ⅢB b	—	白色石英長石斑岩	4.39	3.15	1.74	未製品	柳田・石橋2017
19						ⅢC	—	灰褐色滑石片岩	4.7+	3.1	0.65	未製品	柳田2019 d・e
20	27-1		東小田峯	105号住	中期中頃～中期後半	ⅢB a	—	暗灰色粘質頁岩	3+	2.4	0.3		石橋編2016
21	29-1			27号住	後期初頭	ⅢB b	○	灰白色砂岩	3.9	2.35	1.3		柳田2019 d・e
22			追廻	44・45住		ⅢB b	—	白色石英長石斑岩	5	3	1.5	完形品、	未報告
23	27-2	小都市	三国の鼻	環壕2区	弥生後期中頃	ⅢB a	赤	灰黄色粘質頁岩	3.6	2.1	0.29		片岡編1988
24	31-2	筑後市	蔵数森ノ木	23号住P	不明	ⅢC	○	石英長石斑岩	4.5+	2.0+	1.8+	褐色も付着	佐々木1990
25		築城町	十双	12溝	弥生終末～古墳中期	ⅢD	—	灰褐色粘質頁岩	4	3.5	1.3	板石硯から再生	中間編1992
26	27-3	佐賀県唐津市	中原11区	SK11051土坑	弥生中期中頃	ⅢB b	—	灰色砂質頁岩	5.35	3.1	0.8	未製品、擦切痕跡	小松編2015
27	31-3	吉野ヶ里町 神埼市	吉野ヶ里田手一本	黒木1区220区 SD0026・SD0027		ⅢD	赤	灰褐色粘質頁岩	3.8+	3.5	0.5	11g、硯から再生	渡部2019
28		長崎県志岐市	原の辻	B区28号土坑	「須玖Ⅱ式」	ⅢB b	赤	玄武岩?	5.4	3.9	3.5	127.5g、	杉原編1999
29				原7区	弥生中期中頃～古墳前期	ⅢB b	赤	灰色砂岩	3.4+	3	1.6	25g、	安楽編2000
30						ⅢB b	—	砂岩				研石?	柳田2019 d・e
31			カラカミ3次	Ⅵ区2次堆積包含層		ⅢB b	赤	砂質頁岩	5.5	4.1	2.8	125g	松見編2015
32	31-1	鳥取県松江市	田和山	第1環壕(1-c)	「弥生中期後半」	ⅢC	○	白色礫灰岩	3.4+	2.7+	2.5		松江市2005
33		鳥取県鳥取市	青谷上寺地			ⅢB a	赤					「Aタイプ」	久住2019b
34						ⅢB b	赤	白色礫灰岩				「Bタイプ」	
35		岡山県岡山市	津寺	48住	「弥生後期」	ⅢB b	—	流紋岩	3.7+	1.7	1.3	板石硯から再生	龜山編1996
36				79住	古墳前期	ⅢD	—	白色礫灰岩	2.7	3.3	1	板石硯から再生	
37				盛土M8Ⅱ区		ⅢD	—	流紋岩	「4.9」	「3.7」	「0.9」	板石硯から再生	高畑・中野編1998

注:「」は報告書内容(未確認)。+は欠損。

表5 石鋸・石鑿一覧

番号	図	地域	遺跡	遺構	形式	時期	附着	石材	長	幅	厚	備考	文献						
1	32-1-1	福岡県椎田町	山崎	2号住	石鋸	縄文後期	—	砂岩	9.9+	5	2.2		小池編1992						
2				採集	石鋸		—	砂岩											
3	32-2	糸高市	三雲郡の後 潤地頭給	地山直上	石鋸	弥生前期?	赤	砂岩	11	5.9	2.1		柳田編1980						
4	35-1-1								Ⅲ-W区1号溝I群	弥生中期前半	赤	9	5.5	0.7					
5	34-1-1								Ⅲ-E区大溝I区上層	弥生中期中頃	赤	7.9	6.1	0.4					
6									Ⅲ-E区大溝A区上層	弥生中期中頃	石鋸	6.2	5	0.42					鉄錆付着
7										弥生中期中頃～中期末	石鑿	11	3.9	1					未製品
8											石鑿	6.9	5.9	0.71					柄部・刃部
9	36-2									Ⅲ-E区大溝D区上層	石鑿	弥生中期中頃～後期初	—	灰黒色粘質頁岩	9.9+	5+	0.76		
10	33									Ⅱ-5	石鋸	弥生中期末～後期末	—	灰色砂質頁岩	15.7	5.4	0.5		柄付, 完形
11	34-4		332 番地東側包含層	石鋸	弥生中期～後期	—	灰黒砂質頁岩	6.5+	3.6	0.44		片刃							
12			330 番地1次褐色包含層	石鋸	弥生終末・古墳早期	赤	—	4+	5.6+	0.4		片刃							
13			330 番地2次包含層2F区	石鋸	弥生中期～後期	—	—	2.4+	3.4+	0.4		片刃							
14	34-3		332 番地西側5B	石鋸	弥生中期～後期	—	—	8.3	4	0.7		片刃							
15	36-1	筑前町	東小田峯	11号住	石鑿	弥生中期中頃～後半	—	砂岩	8.4	4.8	1.1		未製品						
16	36-3								5号溝	弥生中期後半～後期初	赤	7.9+	5.2	0.7					
17	35-2								祭祀14	弥生中期末	石鑿	6.4+	4.3+	0.7					
18	36-4									P646	石鋸	不明	赤	灰色砂質頁岩	6.9+	3.7	0.7		擦切痕跡
19										2号住	石鋸	弥生中期後半～後期初	—	灰褐色砂岩	7.6+	9.1+	0.7		微粒雲母含
20	34-2	佐賀県唐津市	中原	落ち部5層	石鋸	弥生中期初頭～後期初	—	灰褐色砂質頁岩	6.3	5.5	0.6		片刃						
21	35-3	神埼市	吉野ヶ里	南祭壇包含層中層	石鑿	「弥生中期前半代」	赤	茶褐色砂質頁岩	8.6	5.9	1.3		小松編2015						
22									河C・D区Ⅲ層	弥生中期後半	石鋸	14.2	6.3	0.7		渡部2018			
23	34-5	長崎県志岐市	原の辻	T8 第1環壕黒色土	石鋸	「弥生中期後半」	—	砂質頁岩	5.2+	4.2	0.5		福田・中尾2005						
24		高知県松江市	田和山	C8区1C環壕最下層	石鑿	「弥生中期後半」	赤	灰黒色粘質頁岩	14.9	5.5	1		松江市2005						

注:「」は報告書内容(未確認)。+は欠損。

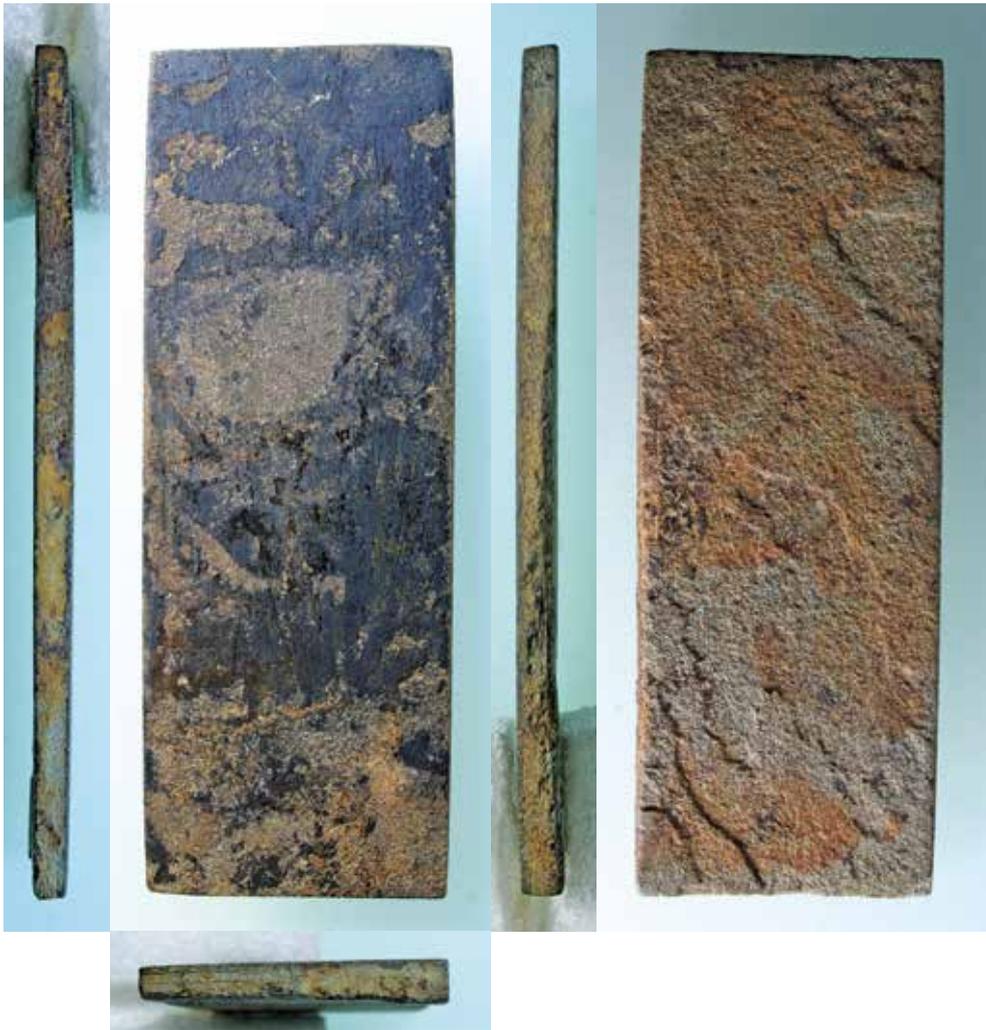


写真1 北朝鮮樂浪王盱墓 長方形板石硯と研石



写真2 韓国勸島遺跡B地区カ-245号住居跡 方形板石硯



写真3 田和山遺跡1-a環壕掘り始め跡付近 方形板石硯



写真4 田和山遺跡第1環壕(1-c) 方形板石硯



写真5 三雲遺跡番上地区330番地1次南北トレンチB区上層 方形板石硯再生品



写真6 東小田中原遺跡3号住居跡 方形板石硯



写真7 薬師ノ上遺跡土器溜り 方形板石硯 (側面は拡大)



写真8 門前遺跡 長方形板石硯 (実大)



写真9 西新町遺跡22次P-64 長方形板石硯



写真10 潤地頭給遺跡Ⅲ区大溝E区上層 方形板石硯未製品



写真11 中原遺跡11区S H11183住居跡 方形板石硯未製品



写真12 比恵遺跡141次調査Ⅱ区 長方形板石硯



写真13 下原遺跡4号住居跡 方形板石硯



写真14 十双遺跡19号住居跡 方形板石硯



写真15 神明遺跡土坑115 方形板石硯



写真16 田和山遺跡第1環壕D区黒色土 方形板石硯の「壬戌」?の墨書

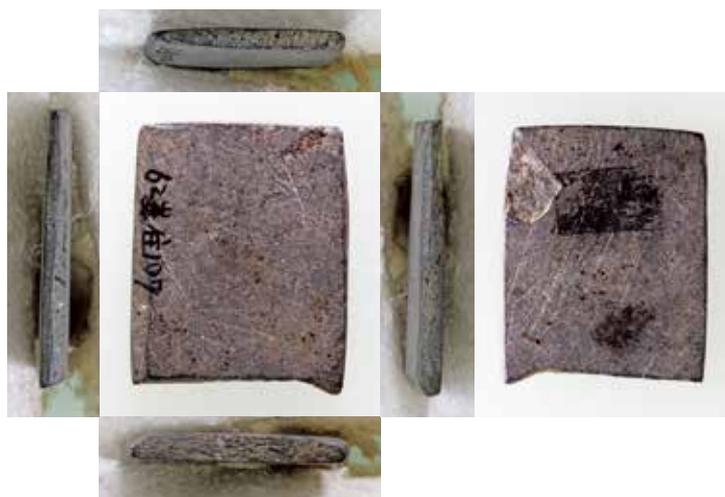


写真17 東小田峯遺跡105号住居跡 研石未成品



写真18 三国の鼻遺跡環濠 研石 (実大)



写真19 中原遺跡 SK11051土坑 研石未成品 (実大)



写真20 貝元遺跡156号住居跡 研石 (実大)



写真21 東小田峯遺跡27号住居跡 研石



写真22 貝元遺跡Ⅱ区包含層 研石



写真23 東小田七板遺跡B地区150号住居跡 研石未成品



写真24 貝元遺跡334号住居跡 研石



写真25 三雲遺跡番上地区332番地北側調査区 研石未製品



写真26 吉野ヶ里遺跡田手一本黒木 長方形板石硯再生研石

弥生墳丘墓における性差の認識と帰葬について

—福井県小羽山墳墓群の事例から—

古 川 登

目次

I. はじめに	69
II. 若干の用語について	69
III. 小羽山墳墓群の概要	70
IV. 小羽山墳墓群における性差の認識	77
V. 母子埋葬墓から帰葬を考える	78
VI. 収束	81

論文要旨

前期・中期古墳では歯冠計測法を基に男女ペアの埋葬は夫婦ではなく父と娘・母と息子ないし兄と妹・姉と弟であるという。古墳あるいは弥生墳丘墓において、埋葬された遺体が出土することは稀な事例である。酸性土壌では、遺体は溶けて残らないのだ。

本論は、福井市小羽山墳墓群の埋葬遺構を材料として、埋葬頭位を違えるばあい性差であること、16号墓は母子埋葬で、それと頭位を違える第1埋葬の被葬者を木棺規模の差から男性とした。26号墓では副葬品の鉄鏃から第3埋葬を男性、それと頭位を違える第1・4・5埋葬を女性と認識した。

埋葬の主軸方向を違えるばあい、墓壙上集積、墓壙内破碎土器埋納と埋葬儀礼が異なるので、埋葬の主軸方向を違えるのは出自の違いを反映しているものと解し、帰葬と考えるには母子埋葬は疑問があることを指摘した。

古川 登(ふるかわ のぼる)
株式会社四門 文化財事業部

弥生墳丘墓における性差の認識と帰葬について

—福井県小羽山墳墓群の事例から—

古川 登

I. はじめに

『小羽山墳墓群の研究—越地方における弥生時代墳丘墓の研究—』¹⁾が、福井市立郷土歴史博物館より刊行され10年の時が流れた。この間、北陸地方の弥生時代墓制研究において注目される遺跡の発掘調査もなく、また刺激的な論文が発表されることもなかった。

こうした中、古墳時代研究において男女の合葬が夫婦の埋葬ではなく、親子・兄弟の埋葬で、夫婦の合葬が始まるのは古墳時代後期以後のことであるという説が²⁾主流となりつつあることを知った。小林行雄はすでに1959年に古墳時代前・中期の古墳は同族墓だ³⁾と言っているので、私之不勉強であったことは確かだ。とすれば、古墳時代に先行する弥生時代後期の埋葬にも夫婦の埋葬は存在しないということとなる。男女ペアの埋葬は、親子ないし姉弟あるいは兄妹ということとなる。むろんこの結果を導き出した歯冠計測法⁴⁾に誰もが賛意を表しているわけではなく、この方法は誤差が大きく人類学分野でも敬遠される傾向にあることを指摘して、DNA分析が進むまで従前の研究も全否定できないのではないかという⁵⁾指摘もある。

木棺直葬系の埋葬施設は、条件がよほど良好でなければ埋葬された遺体の残存は望めない。福井県小羽山墳墓群¹⁾では弥生時代の箱形木棺31基・舟形木棺1基・割竹形木棺1基・土器棺1基、土器蓋土壙墓1基。小羽山古墳群⁶⁾では古墳時代の割竹形木棺9基、箱形木棺2基・土器棺1基・土壙墓1基。片山鳥越墳墓群⁷⁾では弥生時代の箱形木棺4基、古墳時代の箱形木棺1基を検出したが、いずれの埋葬からも遺体を検出することは出来なかった。したがって歯冠計測法、DNA法のいずれも行うことは出来ない。

過去の研究に遺体の残っていない埋葬であっても残存

脂肪酸の分析から男女を区別することが出来るという研究があり、脂肪酸分析を実施した調査もあった⁸⁾。しかし、旧石器捏造事件の発覚後、脂肪酸分析法⁹⁾はなぜか考古学の舞台上から退場してしまい、これによって遺体の残っていない埋葬から理化学的な方法で被葬者の性差を読み解く方法は無くなった。

そこで私たちは、木棺規模の大小、木棺の形式、墳丘墓の区画形式、埋葬儀礼における形式の違いに、被葬者の性差や出自の違いなどを読み取る、考古学本来の手法に拠らざるを得ない。

本稿は、遺体の残らない小羽山墳墓群の事例から、性差の認識と帰葬について考古学的手法から考えてみることにしたい。

II. 若干の用語について

本稿で用いる若干の用語について、過去の用語と異なるものについて解説を加えることにしたい。

墳丘墓は、弥生時代の墳丘を持つ墓を包括する概念として用い、その下位概念として平坦面区画型墳丘墓・周溝区画型墳丘墓・切断区画型墳丘墓を区画型式から用いる。

平坦面区画型墳丘墓、過去の用語でいう台状墓・墳丘墓の一部。墳丘周囲の三～四辺を広い平坦面によって区画する。墳裾を明瞭に削り出すことによって墳形を作り出し、墳丘の立面観を強調する。墳頂に広い平坦面を持つ。

周溝区画型墳丘墓、過去の用語でいう周溝墓の大半。墳丘周囲の三ないし四辺を溝によって区画する。周溝が深くとも、周溝外からの高さの無い例が多い。

切断区画型墳丘墓、過去の用語でいう周溝墓・台状墓の一部を指す。墳丘の一ないし対辺二辺を溝によって切断して区画することを基本とするもの。単独で営まれた

場合や墓群の先端に営まれた場合、平坦面区画型墳丘墓との違いを指摘することは困難であるが、切断区画型墳丘墓は小型墓が主体で、平坦面区画型墳丘墓は大型墓が主体であることにおいて異なる。

土器祭式・祭式土器は、土器祭祀・土器供献・供献土器と過去に呼ばれたものであるが、墳墓祭祀を構成する一つの要素にすぎない土器祭式は祭祀ではない。墳墓祭祀は埋葬にかかる祭祀の総体と認識し、祭式はそれを構成する下位概念である。また、土器供献という語については、墳墓から出土する土器が土器供献という行為の結果ではなく、墳墓祭祀に用いた土器の片付け、廃棄の結果としての土器の集積あるいは埋納であるから、これを用いない。したがって、土器祭式に用いられる土器を祭式土器と呼ぶこととなる。このことによって、祭式土器の集積・配置を、例えば墓壙上集積・墓壙内破碎土器埋納と呼ぶ。

本稿で墳墓の造営時期を、例えば後期末—終末期初頭としたばあい、後期末から終末期初頭にかけてのどこかで営まれたものと理解されたい。

帰葬、他集団に嫁いだ人物が、その死後に出自集団に帰されて埋葬される習俗。

Ⅲ. 小羽山墳墓群の概要

小羽山墳墓群は、福井県福井市小羽町に所在する。弥生時代後期中葉から終末期にかけて小羽山丘陵の丘頂周辺と東南にのびる稜線上、北東に舌状にのびる稜線上に営まれた2基の大型墳丘墓と39基の小型墳丘墓を調査した。その結果、小羽山墳墓群では墳丘区画形式・平面形の共通する墳丘墓が数基で単位群を形成し、異なる墳丘区画形式・平面形を持つ単位群が集合して単位群集合体「墓域」を形成することが明らかとなった。小羽山墳墓群の発掘調査で判明した墓域はA群～D群の4群が存在する(図1)。以下、A群～D群の概要を紹介する。

A群

丘頂周辺に営まれた墓域で、この墓域から小羽山墳墓群の造営が始まった。最高所に営まれた17号墓が弥生時代後期の墓として最古の墳丘墓である。9・61・62号墓は切断区画型、14～18・37号墓は周溝区画型で、区画形式を同じくするものが単位群を形成する。墳丘区画型

式は異なっても墳丘平面形は方形である。以前、19・20号墓をこの墓域に入れていたが、19号墓と丘頂の間に墳丘墓の存在しない空白が存在するため、本稿では19・20号墓を24号墓を核とするD群に入れて理解することとした。

丘頂周辺は、古墳時代前期後半の前方後円墳2基・円墳1基・中世山城の築城によって著しい破壊を被っている(図2左上)。14号墓の南13mに37号墓が周溝の一部のみ残存する姿に、多数の墳丘墓の破壊されたことがうかがえる。そして、2基の前方後円墳の墳丘下に小型墳丘墓が残存していたことに、丘頂周辺に大型墳丘墓を造営できる余地のないことを知ることが出来る。単位群は、9・61・62号墓、14～18号墓、37号墓の3群の存在を認める。

9号墓 後期末?・切断区画型・辺長・8.7×6.4m・埋葬施設：不明・祭式土器：不明。

61号墓 後期末・切断区画型・辺長7.1×5.7m、埋葬施設：墳丘軸に斜交・墓壙2.37×1.30m・箱形木棺2.03×0.75m・副葬品なし・成人埋葬1・埋葬頭位西、祭式土器：墳丘斜面・溝—有段口縁長頸壺1・有段口縁短頸壺1・甕3・高杯2、墓壙脇—器台1。

62号墓 後期末・切断区画型・辺長7.2×5.1m・埋葬施設：箱形木棺・副葬品不明・成人埋葬1・埋葬頭位不明・祭式土器：墓壙上—甕1・墳丘斜面—壺1・高杯1・器台2

14号墓 後期後葉前半・周溝区画型・辺長7.1×3.55m、埋葬施設：長軸に2基直列配置・第1埋葬：墓壙1.32×0.66m・箱形木棺0.77×0.33m・副葬品なし・未成人埋葬・埋葬頭位東。第2埋葬：墓壙1.62×0.73m・箱形木棺0.93×0.40m・副葬品なし・未成人埋葬・埋葬頭位東。祭式土器：第1埋葬墓壙上集積—甕2、墓壙脇—広口壺1、第2埋葬墓壙脇—甕1、墳丘斜面・溝—有段口縁広口壺1・有段口縁長頸壺1・甕1・高杯1・鉢1・器台1。

15号墓 後期末・周溝区画型・辺長4.7m以上×3.0m以上、埋葬施設：墳丘北端に偏在、墓壙1.91m以上×0.90m・箱形木棺1.70m以上×0.58m・副葬品なし・成人埋葬1・埋葬頭位西?、祭式土器：墓壙上集積・墓壙脇・溝—高杯3・器台3・甕3。

16号墓 後期後葉前半・周溝区画型・辺長6.0m×3.2m、埋葬施設：墳丘長軸に直交し並列する木棺2・長軸に並行する土器蓋土壙墓1基、第1埋葬墓壙2.55×1.01m・

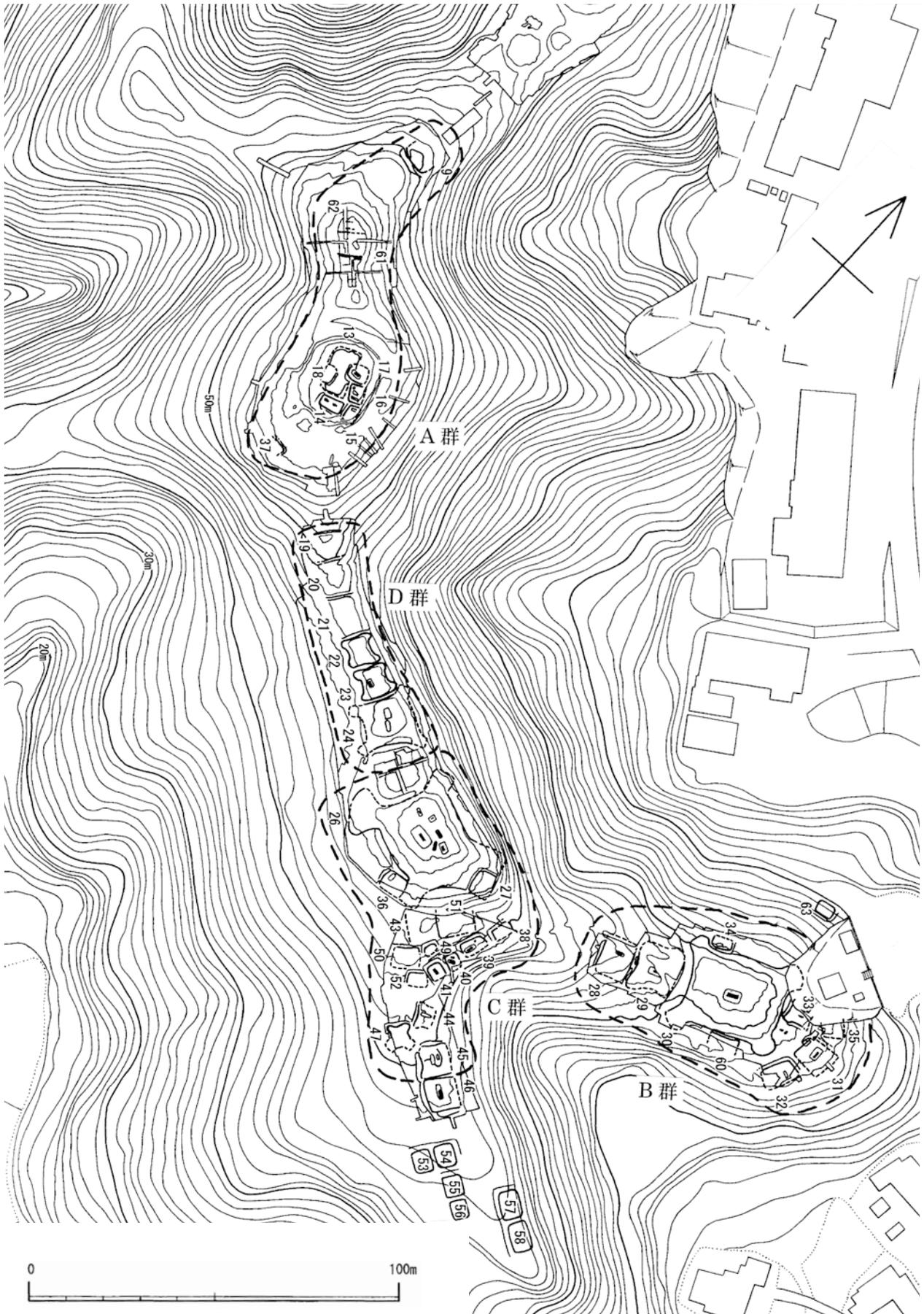
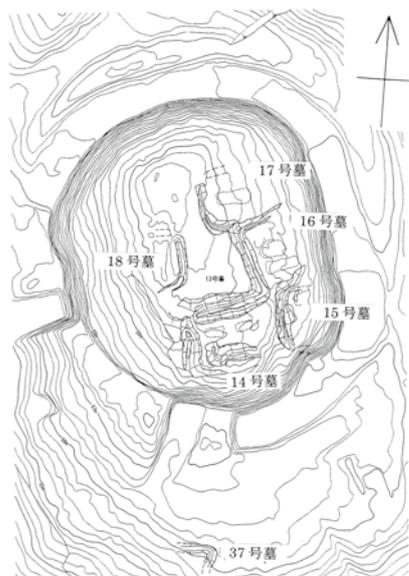
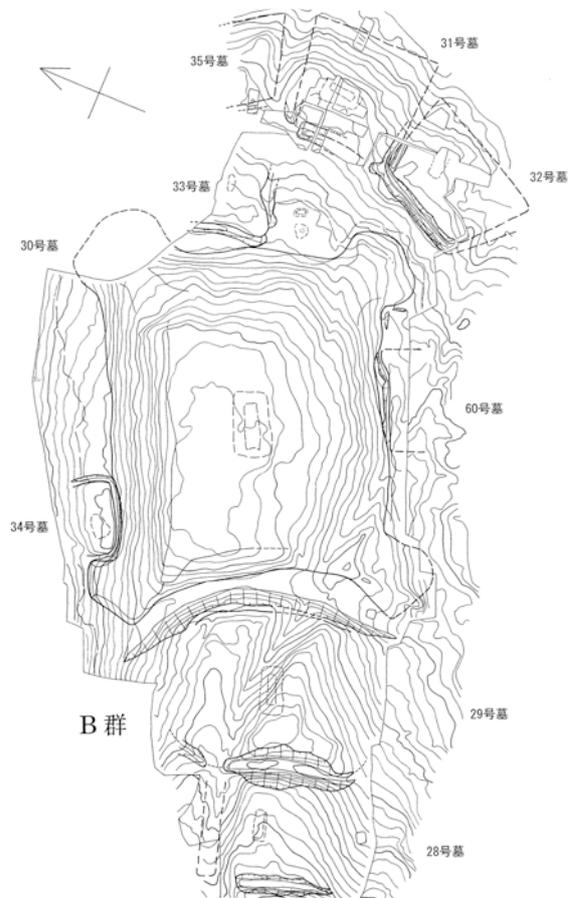


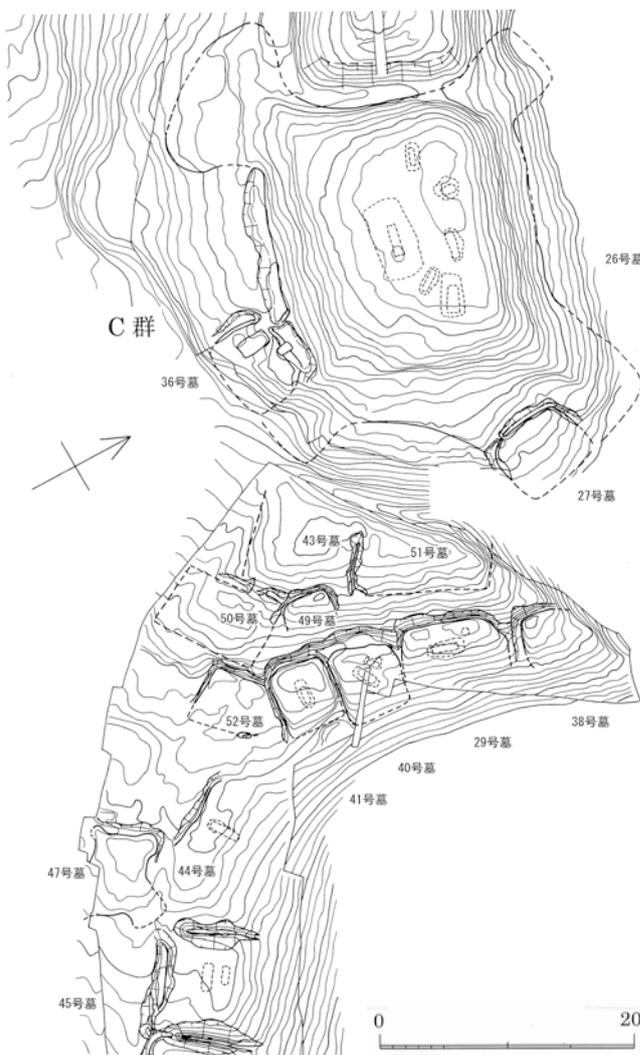
図1 小羽山墳墓群墓域配置図 (1/1,500)



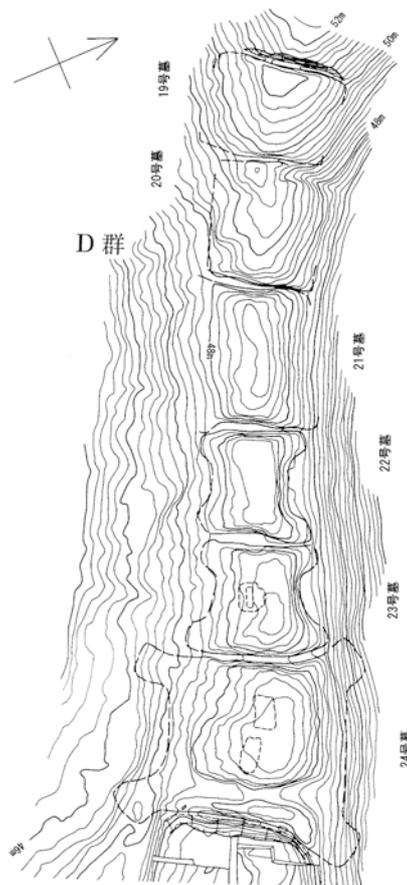
A群



B群



C群



D群

0 20m

图2 小羽山墳墓群墓域遺構実測図 (1/600)

箱形木棺2.18×0.68m・副葬品なし・成人埋葬・埋葬頭位西、第2埋葬墓壙2.14×1.43m・箱形木棺1.48×0.42m・副葬品なし・成人埋葬・埋葬頭位東、第3埋葬墓壙1.05m以上×0.75m・土器蓋0.81×0.45m・副葬品なし・未成人埋葬・埋葬頭位北ないし南。なお、16号墓第3埋葬は特異な構造で、2個体の大形の甕を半裁し、一見すると合せ口風に墓壙中央で二つの甕の口が合っている。しかし、墓壙床面には土器片が認められないので、報告時の理解とは異なるが、土器棺ではなく墓壙を土器で蓋をした土器蓋土壙と呼ぶこととした。

祭式土器：第1埋葬墓壙上集積一器台1・甕2、第2埋葬墓壙上集積一高杯1・脚付鉢1・甕2・壺1。

17号墓 後期中葉後半・周溝区画型・辺長4.7×4.2m、埋葬施設：墓壙2.65×1.18m・箱形木棺2.00×0.48m・副葬品なし・成人埋葬1・埋葬頭位西。祭式土器：墓壙上集積一直口壺1・甕3・高杯2・器台1、墳丘周辺一大型有段口縁広口壺1・甕1。

18号墓 後期中葉後半？・周溝区画型・4.8m×2.5m以上、埋葬施設：不明・祭式土器：不明。

A群は、後期中葉後半（17号墓）・後期中葉後半？（18号墓）－後期後葉前半（14・16号墓）－後期後葉後半（墳丘墓未確認）－後期末（15・61・62号墓）と、土器型式で4型式にわたって営まれた墓域で、長期造営型墓域に分類される。この墓域は発掘調査で確認した限り10mに達しない小規模墓のみからなる。単位群は、3群の存在を認められ、墳丘墓数9基以上であったことは確かである。

14～17号墓が溝を共有し、14号墓のように未成人埋葬だけの墳丘墓の存在、嬰兒とみなしうる未成人埋葬（第3埋葬）を伴う16号墓第2埋葬は出産によって亡くなった女性が被葬者であると考えられ、この一群がある家族の墓域であることを物語っている。しかし、61・62号墓が切断区画型、14～18号墓が周溝区画型であるのは、両者が異なる集団、家族の墓域であることを示している。しかし、61・14～17号墓で検出した木棺が全て東西主軸であるのは、両集団の親縁性、同族意識を反映しているものと解される。

B群

丘陵東側に舌状に張り出した稜線上に営まれた平坦面区画型墳丘墓1基、切断区画型墳丘墓2基、周溝区画型墳丘墓6基の9基からなる墓域。今井神社敷地の造成によっ

て30号墓北側が削られており、この部分に数基の墳丘墓が存在したことが社殿に接した未調査地区に63号墓の認められることから推定される。30・33号墓は四隅突出型墳丘墓、28・29号墓は弧状溝のある四隅突出型墳丘墓の影響を受けた方形墓、31・32・34・35・60号墓は方形墓。単位群は、28号墓、30・33・34・60号墓、31・32・35号墓の3群で、30号墓の墳丘に接して造営される33・34・60号墓、30号墓から離れて造営される28・31・32・35号墓に分かれる（図2右上）。

29号墓は、B群で造営時期が1基だけ終末期初頭なので、B群の造墓が終了した後に空閑地に造営された可能性が高い。よって29号墓はB群から排除する。

28号墓 後期後葉後半・切断区画型・辺長10.3×8.9m、外部施設：南テラス長方形焼土坑0.97×0.74m。埋葬施設：北に偏在・二段墓壙・上段墓壙2.41×0.99m・下段墓壙2.25×0.74m・箱形木棺2.11×0.50m・副葬品なし・成人埋葬1・埋葬頭位西。祭式土器：墓壙上一器台1・高杯1・甕1、溝一有段口縁細頸壺1・脚付壺1・甕2。

30号墓 後期後葉後半・平坦面区画型四隅突出型墳丘墓・辺長26.2×21.8m・墳頂部平坦面復元規模19.0×12.0m、墳丘高北西2.45m・北東2.95m・南東2.65m・南西1.15m。含突出部規模33.2×26.8m、東突出部端からの高さ3.85m、西突出部端からの高さ3.05m。墳丘北西テラス幅3.4m・北東テラス幅4.3m・東南テラス幅0.4m、東南テラスは後期末の60号墓の溝によって切られたテラスの残存部分を30号墓のテラスと誤認。本来は3m前後の幅か。溝は東突出部の南側基部付近に幅0.5mを測る溝があるが、この溝も直角に曲るなど不自然で、東突出部に接して小型の周溝区画型墳丘墓が存在する可能性が高い。墳丘後背の切断溝は大きく弧を描いて墳丘を挟り、残存長22m・切断溝上端から30号墓裾までの最大幅3.10m・溝底最大幅2.70m。

突出部：東突出部先端部幅6.6m・基部幅5.5m・長さ4.8m、東突出部上平坦面幅5.7m、墳頂部に至る稜線幅3m、傾斜の緩いスロープで墳頂部に至る墓道。西突出部先端部幅5.9m・基部幅5.2m・長さ4.4m、北突出部残存最大幅7.4m、南突出部残存最大幅5.0m・長さ4.7m。

外部施設：墳丘北東テラス上に木柱1（掘方1.14×0.94m、木柱痕跡径0.32×0.31m）、墳丘後背切断溝内に方形焼土坑1（0.67m×0.73m）。木柱は、墳丘裾から東

に1.20mにあり、掘方の東辺から東0.6mに掘方と墓壙の方向が合致する周辺埋葬がある。周辺埋葬の標識の可能性が考えられる。焼土坑は、近接する30号墓の墳丘裾線とは合致せず、墳丘の主軸方向に合致する。

埋葬施設：墳丘中心に営まれた1基と北東テラス上に営まれた周辺埋葬がある。墳丘上埋葬は、墓壙規模5.18×3.07m・H字形箱形木棺・南長側板長3.61m・北長側板長3.58m・西小口幅1.02m・東小口幅0.91m・西小口板幅0.70m・東小口板幅0.59m・西小口板-東小口板間外側長3.22m、蓋板長3.75m・木棺高0.70m、副葬品：刃関双孔鉄短剣1・碧玉製管玉103・ガラス管玉10・ガラス勾玉1、玉類は棺内全域に振り撒かれ、赤色顔料も同様に棺内全域に振り撒かれた状況で出土。成人埋葬1・埋葬頭位西。

周辺埋葬：墳丘北東テラス上、墓壙規模0.92×0.52m、H字形箱形木棺・小口板間外側長0.56m・側板間外側長0.31m・南西側長側板長0.80m・北東側長側板長0.66m・木棺内法0.46m×0.16m、副葬品なし、未成人埋葬-木棺規模から月齢の低い乳児か。埋葬頭位南ないし北、30号墓埋葬施設の主軸方向と90°方向を違える。

祭式土器：墓壙上集積-40個体以上、脚付無頸壺2・脚付細頸長頸壺1・脚付長頸壺1・鉢3・高杯17・器台5・甕4以上、墳丘盛土下の旧表土上面-甕8以上・高杯3以上。埋葬上の祭式土器は甕以外は全て赤い精製土器で、赤く発色していない部分に赤色顔料を塗布したものが認められ、赤い土器であることに意味があるものとみられる。土器以外の祭具は埋葬上から蛤刃磨製石斧を転用した杵状石器1・ガラス管玉1。

31号墓 後期末・周溝区画型・辺長10.4×8.8m、埋葬施設：墓壙規模3.18×2.30m、箱形木棺1.96×0.62m、副葬品なし、成人埋葬・埋葬頭位南。祭式土器：墓壙上一甕2・高杯1、木棺長側板上一破砕された甕ないし鉢の口頸部片3、棺床面一壺肩部片1点（この4点の土器片は全て個体を異にする）墓壙内破砕土器埋納。

32号墓 後期末・周溝区画型墳丘墓・辺長11.3×7.2m、祭式土器：墓壙上集積一壺1・甕2・器台2・ミニチュア鉢1。埋葬施設：上面の陥没坑で調査を止め、棺内の調査は行わなかった。陥没坑の状況から木棺の主軸方向は東-西方向。

33号墓 後期末・周溝区画型四隅突出型墳丘墓・辺

長7.0以上×3.0m以上。含突出部復元規模7.5×7.5m、祭式土器：溝一有段口縁広口壺1点。埋葬施設：刳貫舟形木棺1.36×0.62m、棺床面1.1×0.22m、副葬品：翡翠製C字形勾玉1点・未成人埋葬・埋葬頭位西。

34号墓 後期後葉後半・周溝区画型・辺長6.0×3.2m、埋葬施設：墓壙1.99×0.80m、箱形木棺1.71×0.46m、副葬品なし・成人埋葬・埋葬頭位東ないし西。祭式土器：溝一甕1・高杯1。墳丘の切合いから30号墓に後出。

35号墓 後期末?・周溝区画型・辺長9.5(復元)×6.5m、埋葬施設：不明、祭式土器：不明。

60号墓 後期末・周溝区画型・辺長8.10×4.0(復元)m以上、埋葬施設：不明、祭式土器：溝一高杯1。

B群は、後期後葉後半(28・30・34号墓)、後期末(31・32・33・60号墓)、後期末?(35号墓)、の2時期に営まれた墓域で、平坦面区画型墳丘墓1基・切断区画型墳丘墓1基・周溝区画型墳丘墓6基からなる。後期後葉後半に大型墳丘墓1基(30号墓)が造営され、後期後葉後半~後期末にかけて小型墳丘墓7基が随伴するように営まれた短期造営型墓域である。単位群は、28号墓、30・33・34・60号墓、31・32・35号墓の3群で、30号墓の墳丘に接して造営される33・34・60号墓、30号墓から離れて造営される28・31・32・35号墓に分かれる。

副葬墓は30・33号墓に限られ、いずれも四隅突出型墳丘墓である。埋葬施設における赤色顔料の使用も30号墓に限られる。祭式土器は墓壙上集積30号墓、墓壙内破砕土器埋納31号墓である。

C群

丘陵主稜線の東半部に営まれた平坦面区画型墳丘墓2基、切断区画型墳丘墓2基、周溝区画型墳丘墓11基の15基からなる墓域。26・47号墓は四隅突出型墳丘墓、44・45号墓は弧状溝のある四隅突出型墳丘墓の影響を受けた方形墓、27・36・38・39・40・41・43・49・50・51・52号墓は方形墓。単位群は、26・27・36号墓、38・39・40・41・49号墓、43・51号墓、44・45・47号墓、50・52号墓の5群からなり、26号墓の墳丘に接して造営された27・36号墓、26号墓から離れて造営される38・39・40・41・43・44・45・47・49・50・51・52号墓に分かれる(図2左下)。

46号墓は、C群で造営時期が1基だけ終末期前葉で、C群の造墓が終了した後に45号墓の横に造営されており、

46号墓をC群に伴わないものとして排除する。46号墓は45号墓との間に1ないし2型式の土器型式差があり、46号墓の周溝が45号墓と周溝を共有するのではなく、掘りなおして造営していることに、C群に伴わないことが明らかである。

26号墓 後期末・平坦面区画型四隅突出型墳丘墓・辺長27×20.5m、墳頂部平坦面復元規模21.5m×12.5m、墳丘高：南東2.8m・北東2.7m・南西2.7m・北西1.9m、含突出部規模42.5×34m。墳丘の北東・南東にテラスがめぐる。北東テラスは流失が著しく幅0.5mの平坦面が残存。南東テラスは、最大幅3mが残存。南西裾には26号墓墳丘長軸に沿う南西溝と36号墓に伴う2条の溝がある。36号墓は後期末の造営であるが、南西溝からは後期中葉の高坏・壺が出土しており、これによって南西溝が先行する時期の遺構で、26号墓に伴わないことを示している。仮に伴うと考える場合、26号墓の造営開始時期が30号墓に先行することとなる。したがって、後期末に南西溝は埋まって存在せず、幅4mを超える南西テラスがあったこととなる。北西溝は強く屈曲する弧状の切断溝であるが、前期古墳の25号墳の造営によって削られている。25号墳周溝下層に切断溝の底面部分が残存する。確認できる切断溝の規模は、検出長約10m・下端幅1m。

埋葬施設：墳丘上に6基、第2～5埋葬は墳丘盛土以前に埋葬が行われ、第1・6埋葬は墳丘完成後に盛土を掘り込んで埋葬が行われる。埋葬順序は、①第5埋葬→②第4埋葬→③第3埋葬・第2埋葬→④第1埋葬→⑤第6埋葬の順と考える。

第1埋葬：2段墓壙・上段墓壙6.5×3.4m・下段墓壙2.95×1.6m、下段墓壙上に営まれた木槨3.7×1.55m、H字形箱形木棺長2.25m・南側板長2.56m・北側板長2.67m・東小口幅0.75m・西小口幅0.50m、成人埋葬・埋葬頭位東・副葬品なし、棺内頭部に赤色顔料散布。第2埋葬：墓壙2.1×1.85m、箱形木棺1.30×0.46m・副葬品頭部横に皿状土器1・未成人埋葬・埋葬頭位北。第3埋葬：墓壙2.6×1.3m、刳貫割竹形木棺2.05×0.7m・副葬品無茎鉄鎌2・成人埋葬・埋葬頭位西。第4埋葬：墓壙3.6×1.85m・箱形木棺2.15×1.0m・副葬品碧玉製管玉13・成人埋葬・埋葬頭位東南東。第5埋葬：墓壙2.25×0.85m、箱形木棺1.8×0.45m・副葬品翡翠製勾玉1・頭部に赤色顔料散布・成人埋葬・埋葬頭位南東。第6埋葬：墓壙2.25×1.0m・箱形木棺1.4

×0.3m・副葬品なし・未成人埋葬・埋葬頭位東ないし西。

祭式土器：第1埋葬墓壙上集積—70個体以上、有段口縁壺3・大型有段口縁広口壺3・脚付無頸壺1・高坏13以上・器台7以上・有段口縁鉢4・鉢2以上、第2埋葬墓壙上集積—10個体以上、高坏5・器台1・有段口縁広口壺1・無頸壺1・大型有段口縁壺1。第3埋葬墓壙上集積—7個体前後、高坏4・器台1。墳丘盛土中から甕1。土器以外の祭具として第1埋葬上の陥没坑から碧玉製管玉1。第1埋葬墓壙上集積の土器のみ赤色顔料を塗布したものが認められ、赤い土器であることに意味があるものとみられる。脚付無頸壺は前段階のものに比べ大型化していることが注意される。

27号墓 終末期初頭・26号墓東突出部を分割して造営した周溝区画型・辺長7.0×5.5m。祭式土器：溝—高坏2・甕2。

36号墓 終末期初頭・26号墓南突出部を分割して造営した周溝区画型・辺長7.0×5.5m。外部施設：墳丘北辺を掘り込む長方形の1.2×0.65mの焼土坑1基。埋葬施設（図4右）：墳丘西端に長軸に直交して偏在する1基、墓壙2.75×1.8m、箱形木棺2.0×0.65m・副葬品なし。成人埋葬・埋葬頭位北。祭式土器：木棺東長側板の裏込部分を掘り広げ、一個体分の甕形土器を破碎し、破片の内面を上にして口縁部から底部にかけての破片を順に配列する墓壙内破碎土器埋納。

38号墓 後期末～終末期初頭・周溝区画型・辺長2.8m以上×2.5m以上、埋葬施設不明、副葬品碧玉製管玉1点以上・祭式土器：周溝内—甕1。

39号墓 終末期初頭・周溝区画型・辺長8.5×4.6m、埋葬施設：箱形木棺（第1埋葬）、土器棺（第2埋葬）。第1埋葬（図4左上）：墓壙2.95×1.30m・H字形箱形木棺・南東長側板長2.21m・北西長側板長2.15m・木棺主軸長1.78m・長側板南西端幅0.62m・長側板北東端幅0.55m・南西小口幅0.56m・北東小口幅0.41m・木棺材厚4～5cm。副葬品：頭部右に鉄鉢1・成人埋葬・埋葬頭位南西。第2埋葬（図4左下）：土器棺（甕を直立させ、脚端部を打ち欠いた高坏を蓋とする）墓壙0.630×0.595m・土器棺甕0.30×0.36m・副葬品なし・嬰兒埋葬。祭式土器：溝—脚付無頸壺1・長頸壺1・有段広口長頸壺2・直口壺2・高坏1・甕2。有段広口壺は墓壙上と溝から出土。第1埋葬墓壙内部—木棺北西側棺外に切断した甕の上半

部を置き、その位置から体部下半の大きな破片を、その内面を上に向けながら頭部方向に列状に配置し、体部細片を棺蓋上と棺南東外の墓壙内に撒く墓壙内破碎土器埋納。第2埋葬の甕体部最大径付近に破碎した鉢1個体が墓壙埋土中に埋められていた。墓壙内破碎土器埋納。土器棺内に嬰兒の遺骨も副葬品も認められなかった。39号墓北側周溝が38号墓に削られている。

40号墓 後期末～終末期初頭・周溝区画型・辺長6.15×5.30m・埋葬施設：墳丘主軸に斜向する箱形木棺2基。第1埋葬：墓壙2.22×0.90m・箱形木棺1.38×0.33m・副葬品なし・成人埋葬・埋葬頭位南東、第2埋葬：墓壙1.42×0.90m・箱形木棺0.89×0.37m・副葬品なし・未成人埋葬・埋葬頭位南東。祭式土器：溝一有段広口長頸壺1・甕2。

41号墓 後期末～終末期初頭・周溝区画型・辺長5.40×4.80m、埋葬施設：墓壙2.28×0.98m・箱形木棺1.23×0.35m・副葬品なし・未成人埋葬・埋葬頭位東。祭式土器：墳頂一甕1、溝一直口壺1・長頸壺1・甕3。

49号墓 後期末～終末期初頭？・周溝区画型・辺長4.10m×2.20m、埋葬施設：不明、祭式土器：不明。

44号墓 終末期初頭・周溝区画型一四隅突出型墳丘墓の影響を受けた方形墓、辺長6.50m以上×3.50m以上、埋葬施設：墓壙2.66×1.03m、箱形木棺1.99×0.48m・副葬品なし・成人埋葬・埋葬頭位南西。祭式土器：埋葬施設一木棺の南西小口・北西長側板上から甕口頸部・体部破片が内面を上にして配置、墓壙内破碎土器埋納。墳頂部一有段口縁壺1・高杯1・器台1・甕2、墳丘北東側裾下斜面一器台1、器台なし高杯脚部1、甕1、ミニチュア甕1。

45号墓 後期末～終末期初頭・周溝区画型一四隅突出型墳丘墓の影響を受けた方形墓、辺長8.50×8.30m、祭式土器：墳丘北側斜面流土一甕1・高杯1・器台1、北西溝一甕1・有段口縁壺1。埋葬施設：墳丘の中央に主軸に並行して埋葬された箱形木棺2基。第1埋葬：墓壙2.20×0.81m・小口板が長側板の外側に置かれるI字形箱形木棺2.01×0.51m・副葬品なし・成人埋葬・埋葬頭位南西。第2埋葬：墓壙1.48×0.62m、箱形木棺1.30×0.46m・副葬品なし・未成人埋葬・埋葬頭位南西。

47号墓 後期末～終末期初頭？・平坦面区画型四隅突出型墳丘墓・辺長6.50×4.30m、含突出部規模8.0×7.60m。埋葬施設：不明、祭式土器：壺1。

43号墓 後期末～終末期初頭・切断区画型墳丘墓・辺長9.0m×8.20m、埋葬施設：不明、祭式土器：墳頂流土一直口壺2・甕1、墳丘裾を49・50号墓に切られる。

51号墓 後期末～終末期初頭？・切断区画型・辺長10.60m×6.0m以上、埋葬施設：不明、祭式土器：不明。

50号墓 後期末～終末期初頭？・周溝区画型・辺長8.40×5.50m、埋葬施設：不明、祭式土器：不明、墳丘と周溝北東側を49号墓に切られる。

52号墓 後期末～終末期初頭？・周溝区画型、辺長6.0×4.10m埋葬施設：不明、祭式土器：不明、墳丘北側を41号墓に切られる。

C群は、後期末(26号墓)、終末期初頭(27・36・39・44号墓)、後期末～終末期初頭(43・40・41・45号墓)、後期末～終末期初頭?(38・47・49・50・51・52号墓)、終末期前葉(46号墓)と3時期にわたっているが、終末期前葉の墳丘墓は46号墓しか存在せず、46号墓は45号墓の周溝を共有するのではなく、掘りなおして造営されていることに、46号墓をC群に伴わないものとして排除することが出来る。

平坦面区画型墳丘墓2基・切断区画型墳丘墓2基・周溝区画型墳丘墓11基からなる。単位群は、26・27・36号墓、38・39・40・41・49号墓、43・51号墓、44・45・47号墓、50・52号墓の5群からなり、26号墓に接して造営された27・36号墓、26号墓から離れて造営された38・39・40・41・43・44・45・47・49・50・51・52号墓に分かれる。

C群は、後期末に大型墳丘墓1基(26号墓)が造営され、後期末～終末期初頭に小型墳丘墓14基が随伴して営まれる短期造営型墓域である。副葬墓は26号墓第3埋葬：鉄鏃・第4埋葬：管玉・第5埋葬：勾玉、38号墓：管玉・39号墓：ヤリガンナ。埋葬施設における赤色顔料の使用は26号墓第1・5埋葬で、26号墓に限られる。祭式土器は墓壙上集積26号墓第1・2・3埋葬、墓壙内破碎土器埋納36・39・44号墓で、26号墓第1埋葬の土器のみ赤色顔料を用いた赤色塗彩が行われていた。

D群

丘陵主稜線の西半部に営まれた切断区画型墳丘墓6基からなる墓域。単位群は、19・20号墓、21～24号墓の2群からなる。19・20号墓は方形墓、21～24号墓は四隅突出型墳丘墓(図2右下)。

19号墓 後期末・切断区画型・辺長10.3×7.7m、埋葬

施設：不明、祭式土器：墳丘周囲一甕2・高杯1・器台1。

20号墓 後期末～終末期初頭・切断区画型・辺長9.5×7.0m、埋葬施設：不明、祭式土器：墳頂部一甕1・高杯1、埋葬施設流失。

21号墓 後期末～終末期初頭・切断区画型・四隅突出型。突出部は、墳丘南隅の形状にその存在をうかがうことが出来る。墳丘は辺長10.7×8.0m、埋葬施設：不明、祭式土器：切断溝内・墳丘斜面甕4・大型有段口縁広口壺1。

22号墓 後期末～終末期初頭・切断区画型・四隅突出型・辺長8.2×6.1m・含突出部規模8.9×8.7m。墳丘側面に半月形のテラス。埋葬施設：不明、祭式土器：北側テラス一甕2。その他の遺物：北側テラス一砥石1。

23号墓 後期末～終末期初頭・切断区画型・四隅突出型・辺長8.6×6.5m・含突出部規模11.0×9.2m。墳丘側面に半月形のテラス。祭式土器：墓壙上一無頸壺1、墳丘裾一広口壺1・高杯2。埋葬施設：墓壙2.25×2.03m・箱形木棺1.70×0.50m・埋葬頭位北西。副葬品：鉄刀子1。

24号墓 終末期初頭・切断区画型四隅突出型・辺長13.2×12.4m、含突出部規模19.5×18.0m。祭式土器：第1埋葬墓壙上集積一高杯1・高杯脚部3・高杯杯部1・器台1・器台受部2・器台脚部1・鉢1・無茎多孔鉄鏃1。第2埋葬墓壙上集積一高杯1・高杯杯部2・器台1・広口壺1・大型壺1。墳丘裾一大型広口壺1・東側切断溝内一直口壺1。

埋葬施設：2基直列配置、第1埋葬墓壙2.80×1.40m、箱形木棺1.88×0.73m・副葬品碧玉製管玉10・埋葬頭位南東。第2埋葬墓壙2.73×1.73m、箱形木棺1.76×0.64m・副葬品碧玉製管玉40・埋葬頭位北西。第1埋葬の被葬者と第2埋葬の被葬者は頭位を違えて埋葬。

D群は、方形墓と四隅突出型墳丘墓が一群を形成する。土器型式からみれば、方形墓に始まり四隅突出型墳丘墓に移行するように見える墓域である。墳丘規模に差が認められず、23・24号墓で検出した墓壙・木棺規模は成人を埋葬するに足るものに過ぎない。24号墓中心埋葬（第1埋葬）上に集積された土器は、高杯4・器台2～3・鉢1、これに墳丘裾から出土した大型広口壺1・直口壺1を加えても30号墓・26号墓第1埋葬上の集積された土器には遠く及ばない。しかし、終末期初頭に限れば20号墓～24号墓の5基であり、C群の墓域15基に比べ墳丘

墓の数が減少していることはうかがえる。

IV. 小羽山墳墓群における性差の認識

木棺の規模から成人か未成人かを判別することは可能であっても、遺体の残存しない木棺から成人埋葬の性差を読み取ることは困難であるが、全く手掛かりがないこともない。

16号墓のばあい、第1埋葬と第2埋葬とで墓壙上に集積された祭式土器の配置された位置が大きく異なる。第1埋葬では祭式土器が墓壙西端に配置され、第2埋葬では墓壙東端に配置される。そして、第1・第2埋葬とも祭式土器の置かれた位置は被葬者の頭部付近にあたる。なお、14号墓第1・2埋葬、15号墓、24号墓第2埋葬も被葬者の頭部周辺の位置に祭式土器が配置される。量の多寡はあるが、26号墓第1埋葬も被葬者の頭部周辺の墓壙上に集中的に集積している。墓壙中心に配置される例は17号墓、24号墓第1埋葬、26号墓第2・第3埋葬、30号墓があるが、脚部方向に配置した例は確認していない。したがって、墓壙の端に寄せて祭式土器が配置されているばあい、その位置を被葬者の頭部にあたると認識できる。

16号墓第2埋葬は嬰兒とみなしうる第3埋葬を伴うことで、出産によって亡くなった女性が被葬者といえる。よって、第2埋葬の木棺長1.48mに対して第1埋葬の木棺長2.18mは男性的と言え、埋葬頭位の違いが被葬者の性差を表しているともみなしうる。なお、A群は小規模墓のみからなる墓域であるので、木棺規模に身分的格差が表れていないと言え、木棺長の差を性差と認識しうる。

26号墓の成人埋葬4基をみると、第1埋葬箱形木棺長2.25m、第3埋葬刳貫割竹形木棺長2.05m、第4埋葬箱形木棺2.15m、第5埋葬箱形木棺1.80mで、木棺長は第1埋葬が最も長い。そして、第1埋葬は3.7×1.55mに復元される木槨を持つ。副葬品は第1埋葬「なし」、第3埋葬「無茎鉄鏃2」、第4埋葬「碧玉製管玉13」、第5埋葬「翡翠製勾玉1」、赤色顔料の使用は第1・5埋葬で認められる。

26号墓第1埋葬は木槨、26号墓最大規模の木棺を有し、墓壙上に集積された70個体に達する土器は、一人の被葬者のために用いられたものとして越地方最多である。よって、第1埋葬を首長埋葬と認識することに異を唱える者

はいないだろう。しかし、それをもって第1埋葬の被葬者を男性と認識することは短絡的である。26号墓第1埋葬の箱形木棺長2.25m、30号墓の箱形木棺長3.22m、この木棺長が被葬者の体軀に合わせたものでないとは言うまでもない。弥生時代後期にあっても、階層的上位者が大きな木棺に埋葬されることがあるということが指摘できるにすぎない。

26号墓の副葬品を確認すると、第3埋葬にのみ武器である無茎鉄鏃が2点棺内に副葬されていた。清家章によると¹⁰⁾、古墳時代の副葬品のうち鏃・甲冑・鍬形石は基本的に男性のみに副葬され、女性には副葬されないという。そして、弥生時代では女性人骨に伴う鏃副葬は皆無とのことであるので、第3埋葬の被葬者は男性の可能性が高い。

次いで、26号墓の埋葬頭位を確認すると、第1埋葬：埋葬頭位東・第2埋葬：埋葬頭位北・第3埋葬：埋葬頭位西・第4埋葬：埋葬頭位東南東・第5埋葬：埋葬頭位南東・第6埋葬：埋葬頭位東ないし西で、埋葬頭位がはっきりしないのは第6埋葬のみである。埋葬施設の主軸方向に角度の振れが認められるが、東西軸5基、南北軸1基である(図3右上)。最も振れが大きいのは第5埋葬で、第1・3・4・6埋葬は比較的近似する。成人埋葬のうち鉄鏃を副葬する第3埋葬は略西頭位で、第1・4・5埋葬は略東頭位で第3埋葬と頭位を逆にする。16号墓で確認した埋葬頭位を違えることが性差の表示という理解が正鵠を射ていれば、第3埋葬の被葬者は男性で、第1・4・5埋葬の被葬者は女性の可能性が高いということになる。

先述した第1埋葬の木棺を除き、第4・5埋葬の木棺規模を見ると、いずれも箱形木棺で第4埋葬は2.15×1.0m、第5埋葬は1.8×0.45mあり、第4埋葬の木棺は女性用にしては大きいという印象を持つ。第5埋葬は木棺の幅0.45m、確認できた木棺材の厚さ5cmであるので、その内法の幅は35cmとなり、被葬者が女性である可能性は高く、埋葬頭位の違いが性差を表す可能性の高さを支持する。

24号墓は、2基の埋葬施設が直列に配置され(図3右上)、第1埋葬：箱形木棺1.88×0.73m、第2埋葬：箱形木棺1.76×0.64mで、第1埋葬の木棺が12cm長く幅も7cm広いが、性差を表す規模とは言い難い。副葬品は両埋葬とも碧玉製管玉のみであり、これは性差を示さない遺物である。しかし、両埋葬は埋葬頭位を違えているので、二人の被葬者が同性である可能性は低い。そこで墓壙上の祭式土

器集積に目をやると、第1埋葬の墓壙上から特殊な無茎の多孔鉄鏃1点が出土している。これは墓壙上で祭式土器片と伴に出土しており、埋葬儀礼において儀仗の用途に用いられた、あるいは墳頂部に立てて魔を避けるに用いられたと考えられるものである。これを副葬品と同義で捉えられるなら、第1埋葬の被葬者を男性と認識できる。そして、埋葬頭位を違えることが性差の表示という理解から、24号墓第2埋葬の被葬者を女性と認識できる。

24号墓に副葬された管玉は、第1埋葬のものは明緑灰色を呈し、全長11.0～18.0mm・径2.9～3.2mmに分布し、越前地方を含む北陸地方に通有の石材で製作されている。第2埋葬の管玉は濃紺青色を呈し、全長8.5～14.7mm・径2.3～2.7mmで、径が2mm前後の細いものが多く、管玉の法量は伝世品でなければ、同時期と認識しがたい一群である。石材は、北陸地方産の管玉で見たことのない色調のものであり、第2埋葬の管玉は、石材から越前を含む北陸地方以外で製作されたものと認識される。この管玉は、第2埋葬の被葬者が他地域産の管玉を佩用した人物であることを示している。

V. 母子埋葬墓から帰葬を考える

小羽山墳墓群には数基の母子埋葬と認識できる墓がある。

A群には、16号墓があり、16号墓の造営の契機は、墳丘中心に位置する第2埋葬の被葬者の死にあると考えられ、第2埋葬の被葬者の足元右側に第3埋葬が墓壙を接して埋葬されていることから(図3左上)、第2・第3埋葬の被葬者は出産によって亡くなった母子とみられる。16号墓第2埋葬は東西主軸に、第3埋葬は南北主軸で埋葬される。これは帰葬と考えたばあい、母親は同族であるから東西主軸に、生まれてきた子は同族とはみなされず、棺の方向を違えて埋葬されたと解される。その後、第2埋葬の左側に頭位を違えて父親ないし兄・弟が追葬されている。

B群における母子埋葬は、31号墓・30号墓周辺埋葬がある。埋葬施設の主軸方向は、28・30・32・33・34号墓が東西方向で、31号墓・30号墓周辺埋葬のみ南北方向である。31号墓・30号墓周辺埋葬が30号墓はかと埋葬の主軸方向を違えるのは、出自の違いを表している可能性が高い。祭式土器の配置は、30号墓は墓壙上集積で、31号

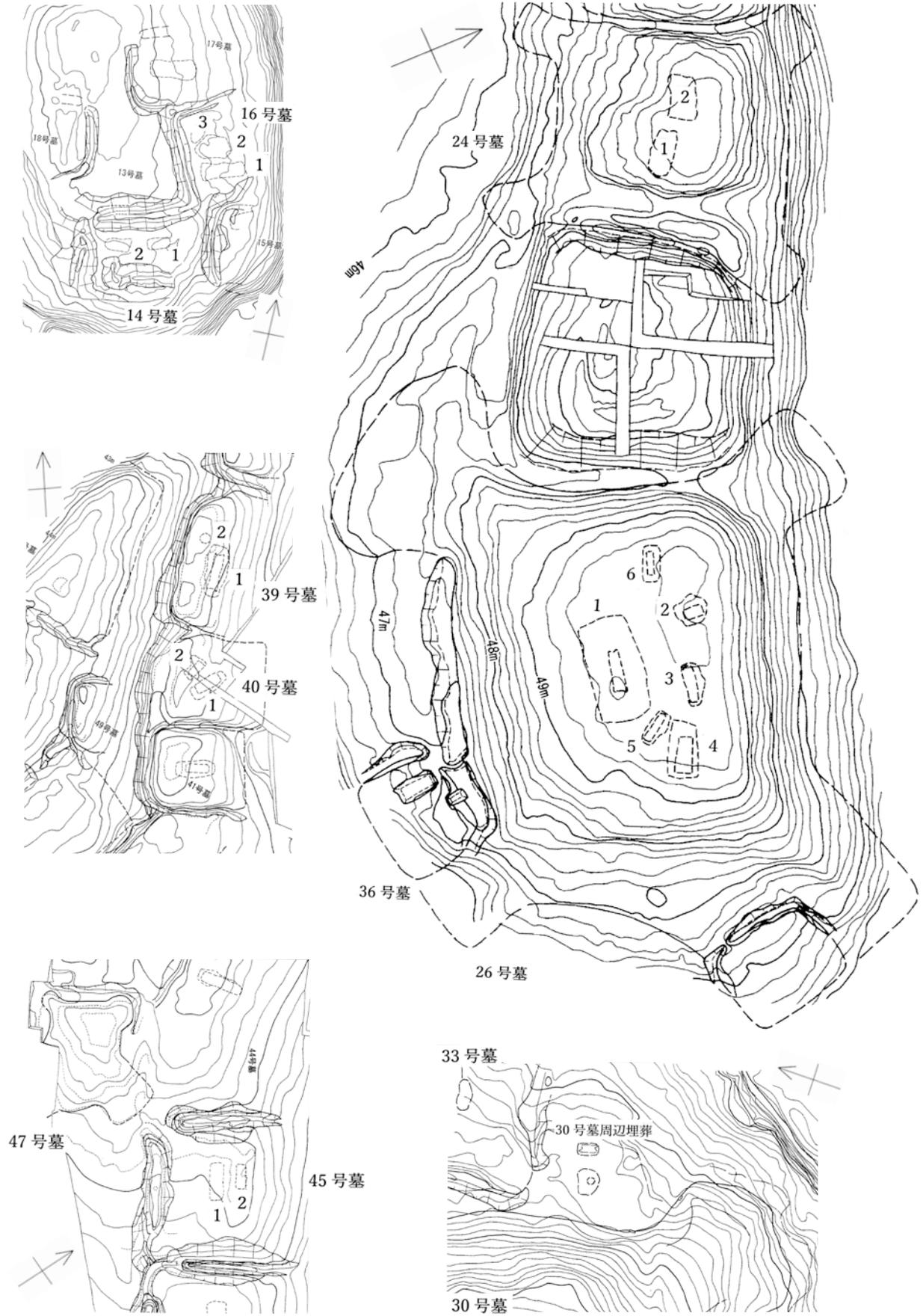


図3 性差・幼児・母子埋葬（縮尺不同）

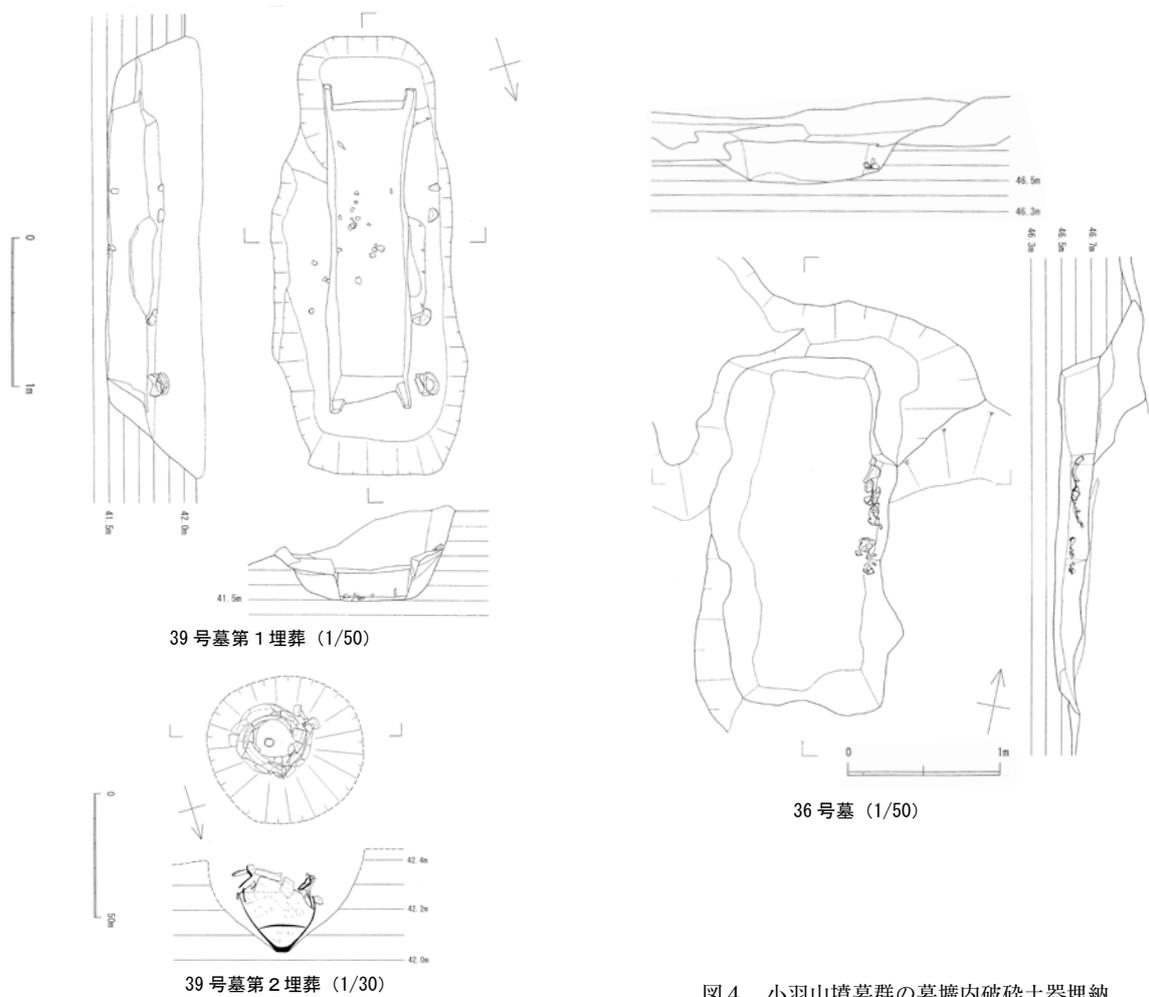


図4 小羽山墳墓群の墓壙内破碎土器埋納

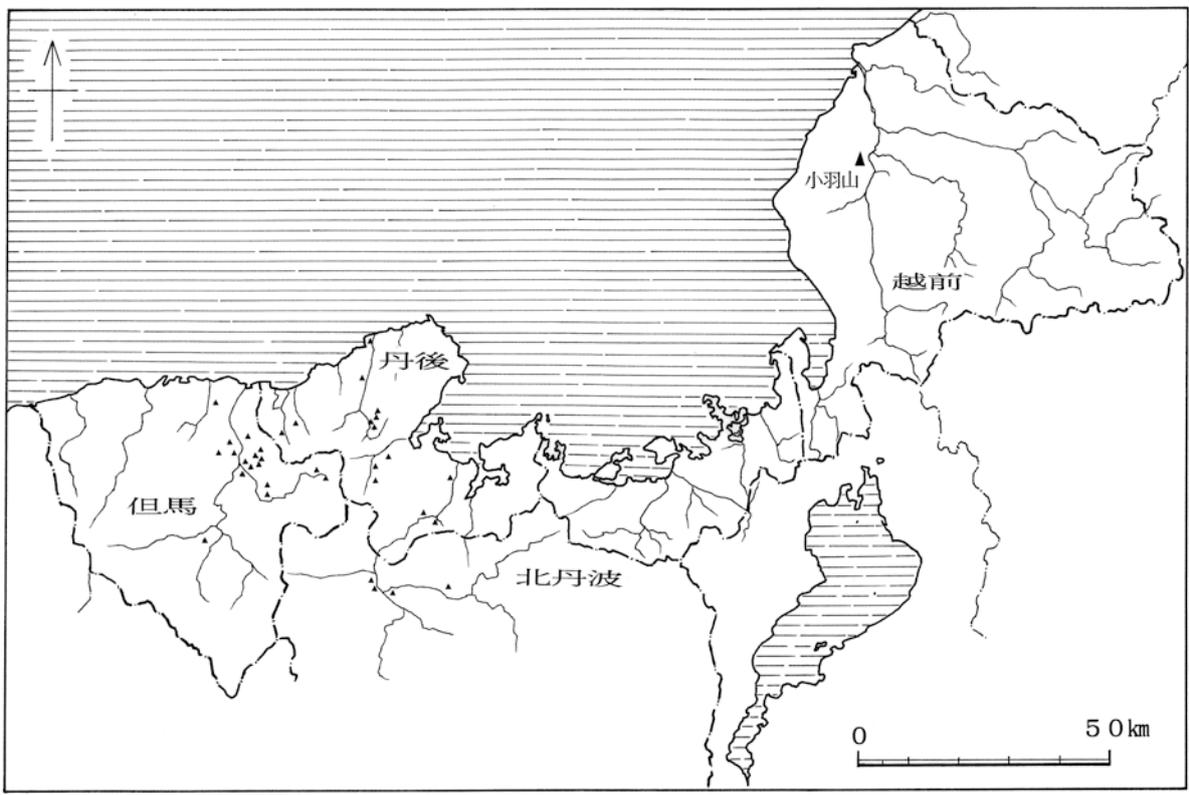


図5 墓壙内破碎土器埋納の分布

墓は墓壙内破碎土器埋納である。墓壙上集積は14号墓第1埋葬・15号墓・16号墓第1・2埋葬・17号墓・24号墓第1・2埋葬・26号墓第1・2・3埋葬・30号墓・32号墓の12基の埋葬に認められ、遺存状況が不良で一部しか墓壙上に残存しなかった62号墓・23号墓・28号墓があり、これを加えると墓壙上集積は15基の埋葬に認められることとなる。墓壙内破碎土器埋納は36号墓・31号墓・39号墓・44号墓の4基の埋葬に認められる。両者は小羽山墳墓群では3対1であるが、越前地方全体では墓壙上集積が主体で墓壙内破碎土器埋納は小羽山墳墓群の4例のみである(図5)。したがって、31号墓の被葬者が出自を異にする可能性は高い。

31号墓と埋葬施設の主軸方向を同じくするのは30号墓東テラス上の周辺埋葬であり、周辺埋葬の東に31号墓が位置することを考えると、この二者が母子である可能性を指摘できる。両者が同一墳丘に埋葬されていない点に、最初に死産した子供が30号墓の平坦面上に埋葬され、その後亡くなった母親が31号墓に埋葬された可能性を考える。嫁ぎ先から戻る帰葬のばあい、最初に死産した月齢の低い幼児が帰葬され、その後年を経て亡くなった母親が帰葬されたこととなる。このばあい、帰葬であれば同族であるはずなのに、31号墓の埋葬施設の向きを違えることに違和感がある。

C群39号墓は、成人埋葬の木棺と足元左側に埋葬された土器棺という組み合わせから出産によって亡くなった母子の埋葬とみられる(図3左中)。第1埋葬は頭部右に鉄鉈1点を副葬し、甕1個を用いた墓壙内破碎土器埋納、第2埋葬は甕を据え置き、脚部下半を打ち欠いた高坏で蓋をし、鉢1個を用いた墓壙内破碎土器埋納を行っており(図4左)、いずれも両丹地域から直接移入された埋葬儀礼とみなしうる。また、第1埋葬の被葬者頭部右に置かれていた鉈の配置は、福島孝行¹¹⁾によれば、丹後・但馬地域に分布する副葬習俗と合致している。帰葬と考えたばあい、両丹地域の埋葬習俗を行われた被葬者が100kmを超える地域から亡くなった母子を運んできたのか、弥生時代後期の交通事情に思いを巡らせると、帰葬とは大変な風習であると思われる。加えて、埋葬儀礼に用いられた土器及び子の棺に用いられた土器は、両丹地域産のものではないのである。

29号墓の女性が婚入者であったばあい、誰に嫁いでき

たのかは分からないが、この墓域で成人男子を埋葬していることが明らかな埋葬は首長墓の26号墓第3埋葬だけである。26号墓の成人埋葬の主軸方向が東西主軸を基本としていることからみると、39号墓は南北主軸であるので、他集団から来た者であれば、埋葬の主軸方向を違えることで、同族と違う扱いをされたとみられる。

この墓域にある母子合葬墓に40・45号墓があるが、こちらは残念なことに出身地域を特定できる埋葬儀礼などの要素が認められない。この2基には成人埋葬にたる木棺と嬰兒埋葬にたる木棺が墓壙端部をそろえて埋葬されていることに、母子合葬と認識できる。この2基の埋葬も南北主軸で26号墓の埋葬と埋葬の主軸方向を違えている。

36号墓は、26号墓南突出部を分割して造営されていることに、26号墓の墳頂部には埋葬されないものの、26号墓上に営まれていることに、その地位が反映されているとみることが出来る。成人埋葬で埋葬の向きは南北主軸で、26号墓上の成人埋葬の主軸方向とは向きを違えている。埋葬儀礼は墓壙内破碎土器埋納で、墓壙上集積ではない。ただ、墳頂部には向きを同じくする未成人埋葬の第2埋葬があるので、36号墓は第2埋葬に埋葬された子の母で土器型式からみると子供が亡くなった後、時間をおいて亡くなった母が突出部に埋葬されたこととみることが出来る。墳頂部に埋葬された子も突出部に埋葬された母も首長世帯からは埋葬の主軸方向を違えることで同族ではないという扱いを受けたとみることが出来る。子の埋葬と母の埋葬に時間差を読み取れるばあい、帰葬とみることは難しく思える。

VI. 収束

小羽山墳墓群では墳丘墓上における埋葬頭位の違いが性差を表すことが16・24・26号墓の成人埋葬の分析により明らかにすることが出来た。

御嶽貞義¹²⁾は、袖高林墳墓群で実施した残存脂肪酸分析の結果から、一墳丘上にて並立する埋葬施設の頭位方向を逆位とする場合、被葬者の性別が異なるという結果を得ていると言い、異性の合葬で婚姻関係にある二者を被葬者とした蓋然性を示すと言う。しかし、今日ではこの分析結果が信頼のおけないものであることが確かなものとなり、御嶽氏本人もこの点については撤回し、

夫妻の埋葬ではなく同族墓と認識を変える方向にある¹³⁾という。

次いで小羽山墳墓群の墳丘墓上および墓域における埋葬の向きの違いが、祭式土器の墓壇上集積か墓壇内破碎土器埋納かという違いによって、同族か非同族かを示すと考えた。

小羽山墳墓群のB・C群は首長世帯・家族の墓域で、首長墓の造営を契機として造墓が始まり、土器型式で2型式内に造営を終える。C群の単位群は、26・27・36号墓、38・39・40・41・49号墓、43・51号墓、44・45・47号墓、50・52号墓の5群からなっている。これを5世帯と考えて分析すれば首長世帯・家族の墓域ではなく、首長と共同体成員の墓からなる墓域というような、全く違う解もありうるだろう。

弥生時代から古墳時代中期は全て同族埋葬であるという前提で考えれば、墓壇内破碎土器埋納を行っている31・36・39・44号墓の被葬者は死後、出身集団に戻された女性で、嫁ぎ先の埋葬儀礼で送られ、埋葬の主軸方向を親兄妹・姉弟と違いさせられたということとなる。ひとたび出身集団を離れば、同族として扱われないという社会であったということになる。しかし、36号墓と26号墓第2埋葬のように、子供と母親の死に時間差が想定できるばあい、まず死産した子が帰葬され、年を経てその母親が帰葬される、そのような帰葬となる。同族墓しかありえないという前提に立てば、帰葬しかありえないという解しか存在しなくなるのではないだろうか。

帰葬なのか帰葬ではないのか、遺体の残らない埋葬では水掛け論にしかならないが、考古学的手法でもモノを言えることはあるのではないかと、小羽山墳墓群の事例から検討してみた。

【註記】

1) 古川登編 2010『小羽山墳墓群の研究－越地方における弥生時代墳丘墓の研究－』福井市立郷土歴史博物館

- 2) 清家章 2018『埋葬からみた古墳時代－女性・親族・王権』吉川弘文館
- 3) 小林行雄 1959『古墳の話』岩波書店
- 4) 田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究－人骨が語る古代社会－』柏書房
- 5) 設楽博己 2019「弥生時代の世界観」『考古学講義』北條芳隆編 筑摩書房
- 6) 古川登編 2002『小羽山古墳群－小羽山丘陵における古墳の調査－』清水町教育委員会
- 7) 古川登編 2004『片山鳥越墳墓群方山真光寺跡塔址－清水町片山地区における遺跡の調査－』清水町教育委員会
- 8) 中野益男・中野寛子・長田正弘 1999「袖高林古墳群から出土した遺構に残存する脂肪の分析」『袖高林古墳群』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 9) 脂肪酸分析法については、研究の初期段階から遺伝学分野の研究者ほかから疑義が呈されていたが、捏造旧石器を支持していた考古学研究者によって無視され続けたという。
- 10) 清家章 2010「古墳時代の親族構造の変化と女性の地位」151-220『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 11) 福島孝行 2000「弥生墳墓における鈿の副葬作法について(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第78号
福島孝行 2001「弥生墳墓における鈿の副葬作法について(2)」『京都府埋蔵文化財情報』第81号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 12) 御嶽貞義 2004「越前地方における墳丘墓の埋葬配列に関する一考察－片山鳥越5号墓の埋葬配列について－」『片山鳥越墳墓群方山真光寺跡塔址－清水町片山地区における遺跡の調査－』清水町教育委員会
- 13) 御嶽貞義氏教示

【引用文献】

- 古川登・御嶽貞義・青木敬「Ⅱ小羽山墳墓群の調査」・森本幹彦「Ⅳ出土遺物1) 弥生土器」・豊島直博「Ⅳ出土遺物3) 鉄製品」
古川登編 2010『小羽山墳墓群の研究－越地方における弥生時代墳丘墓の研究－資料編』福井市立郷土歴史博物館
森本幹彦「小羽山墳墓群出土弥生土器の編年と併行関係」
古川登編 2010『小羽山墳墓群の研究－越地方における弥生時代墳丘墓の研究－研究編』福井市立郷土歴史博物館

冠帽形埴輪について
—纏向遺跡出土冠帽形埴輪を中心に—

三 沢 朋 未

目 次

I. はじめに	85
II. 纏向遺跡坂田地区について	85
III. 坂田地区出土の冠帽形埴輪の特徴	87
IV. 冠帽形埴輪の形態と変遷	88
V. 出土古墳の特徴と樹立位置	90
VI. 冠帽形埴輪を樹立する意義	91
VII. おわりに	92

論文要旨

纏向遺跡坂田地区から出土した冠帽形埴輪は、形象埴輪が出現し始める4世紀前葉に属する埴輪である。ただし、類例の少なさや出土している埴輪が小片であることから、「冠帽形」という形態に否定的な意見もあるため研究の対象として取り上げられることがほとんどなかった。本稿では坂田地区から出土した冠帽形埴輪から読み取れる特徴を抽出し、冠帽形埴輪の形態について検討する。さらに冠帽形埴輪の樹立の意味についても検討していく。

まず、坂田地区出土の冠帽形埴輪を基準資料とすると、5つの特徴を捉えることができた。その特徴は、a. アーチ形の窓がある、b. ドーム状の頭頂部を持つものである、c. 鋸歯文や直線文などの線刻が施されている、d. 頭頂部には鱗状の突起もしくは飾り板が存在している、e. 側頭部には鱗が存在している、である。この特徴をもとに現在出土が確認されている冠帽形埴輪を見ていくと、aとbの特徴はほぼすべてに当てはまるが、それ以外については必ずしも当てはまるものではなかった。これは、時期による差や単純に形骸化しているのではなく、冠帽形埴輪に一定の基準はあるものの基本的にはそれぞれが独自の形態で埴輪を作成していたのではないかと考えられる。

冠帽形埴輪が出土する古墳は基本的には100mを超える前方後円墳である。それ以外であっても、その地域の首長墓系譜の初現にあたる古墳や、ヤマト政権と密接な関わりがあったと考えられている古墳であるなど、重要な古墳であることは間違いない。また、冠帽形埴輪のモデルについて、西晋が滅んだ後の朝鮮半島との関係の中で取り入れられた可能性のある「幘」ではないかと考えられる。つまり、朝鮮半島との関係の中で活躍した首長が「幘」の着用を認められ、自身の権力の象徴として冠帽形埴輪を樹立した可能性も考えておきたい。

冠帽形埴輪を樹立していた古墳の被葬者は、実際に冠帽を所有することが許されていた人物であると考えられる。このことから、冠帽形埴輪は権力を象徴する威儀具のひとつとしてかなり限定的な古墳に樹立された埴輪であったのだろう。

三沢 朋未（みさわ ともみ）

桜井市纏向学研究センター研究員

冠帽形埴輪について

— 纏向遺跡出土冠帽形埴輪を中心に —

三 沢 朋 未

I. はじめに

纏向遺跡坂田地区から出土した冠帽形埴輪と鶏形埴輪は、形象埴輪としては初期の4世紀前葉に属するものであり、鶏形埴輪は大形で両足で止まり木をしっかりと掴んで立つ表現がされていること、冠帽形埴輪は全国でも類例の少ない希少なものであることなどから、注目されてきた形象埴輪である。

坂田地区の発掘調査は、1984年に纏向遺跡第42次調査として、桜井市大字巻野内字坂田で実施された。この調査では、3世紀後半から4世紀前葉の土器が出土した溝や、4世紀前葉の埴輪などが出土した「落ち込み1」が検出されている。この「落ち込み1」の性格については、埴輪が出土していることから古墳に伴う遺構なのではないかという点が長く課題として注視されてきた。

坂田地区については、2017年に隣接地で第192次調査として発掘調査がおこなわれたことや、冠帽形埴輪について「冠帽」以外の器種の可能性も想定できるのではないかという意見があり、あらためて冠帽形埴輪を取り上げることにした。

そこで本稿では、坂田地区から出土した冠帽形埴輪から読み取れる特徴を抽出し、その他の類例と比較をおこなわない冠帽形埴輪の形態について検討する。また、冠帽形埴輪の樹立の意味について考えてみたい。

II. 纏向遺跡坂田地区について

坂田地区では朝顔形埴輪や鶏形埴輪や冠帽形埴輪が出土しているが、古墳であるといえるような遺構は検出されていない。埴輪が出土した「落ち込み1」が古墳の周濠である可能性もあるが、検出した範囲が狭く断定することはできなかった。この「落ち込み1」からは埴輪の

他に土器も出土している。この土器の時期は布留0～1式期に収まるものであり、朝顔形埴輪の特徴を見ても、突帯設定技法に方形刺突が見られることや、透孔の特徴などから4世紀前葉頃の遺構であると考えられる¹⁾。

2017年には坂田地区の隣接地で第192次調査が実施された。この調査でも包含層からではあるが、坂田地区出土の冠帽形埴輪と同一個体と考えられる鋸歯文が施された頭頂部片と赤色顔料が塗布されている側頭部の鱗部片が出土している(図3)。さらに、鶏形埴輪の尾の部分が出土しており、これは坂田地区から出土した鶏形埴輪と同一個体ではないものの、同様の形態をした埴輪であると考えられる。新たに出土した埴輪の中には、最古級となりえる盾形埴輪と考えられる埴輪片が存在しており、類例の少ない高坏形埴輪も小片であるが出土している。いずれの埴輪も赤色顔料が塗布されている。

第192次調査で出土している埴輪は、その特徴から坂田地区出土の埴輪群と同じ4世紀前葉頃の埴輪であると考えられるが²⁾、埴輪の多くは包含層から出土しており、すべての埴輪が同一遺構に伴うものなのかは不明である。ただし、この時期の古墳かもしくは埴輪が伴うような遺構が近接して複数存在しているとは考えられないことから、これらの埴輪は同一古墳もしくは遺構に伴うものであった可能性が高い。

では、坂田地区周辺に古墳は存在していたのであろうか。先述している通り、坂田地区の調査では古墳と言えるような遺構などは検出されていない。埴輪が出土している「落ち込み1」が古墳の周濠である可能性もあるが、現状では断定することはできない。第192次調査で出土した鶏形埴輪については、坂田地区で検出された「落ち込み1」に近接した位置で検出された遺構から出土しているが、遺構の深さや埋土の違いなどから「落ち込み1」と同一遺構となるかは不明である。それ以外にも遺構は

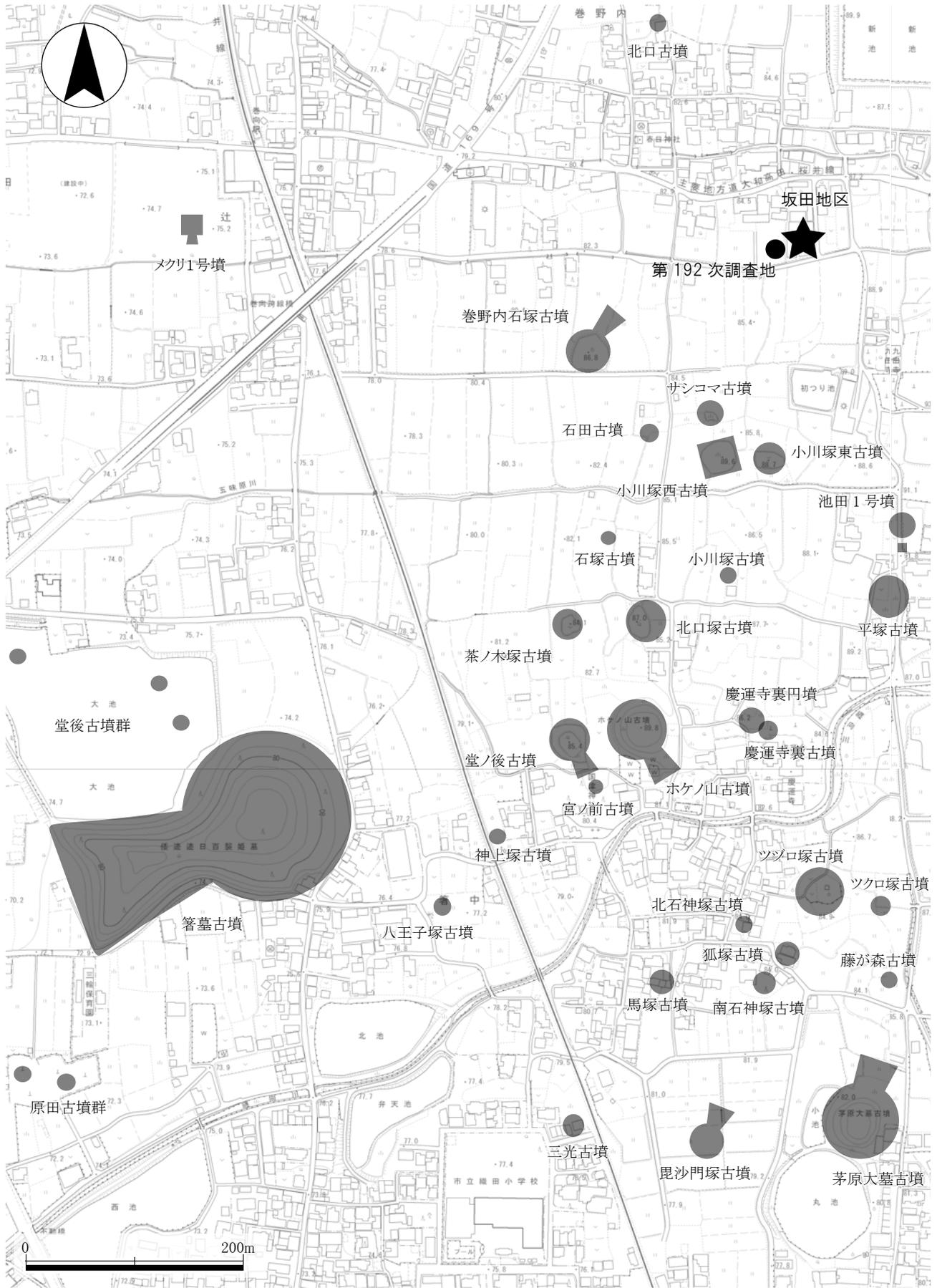


図1 坂田地区と周辺の古墳 (S=1/5,000)

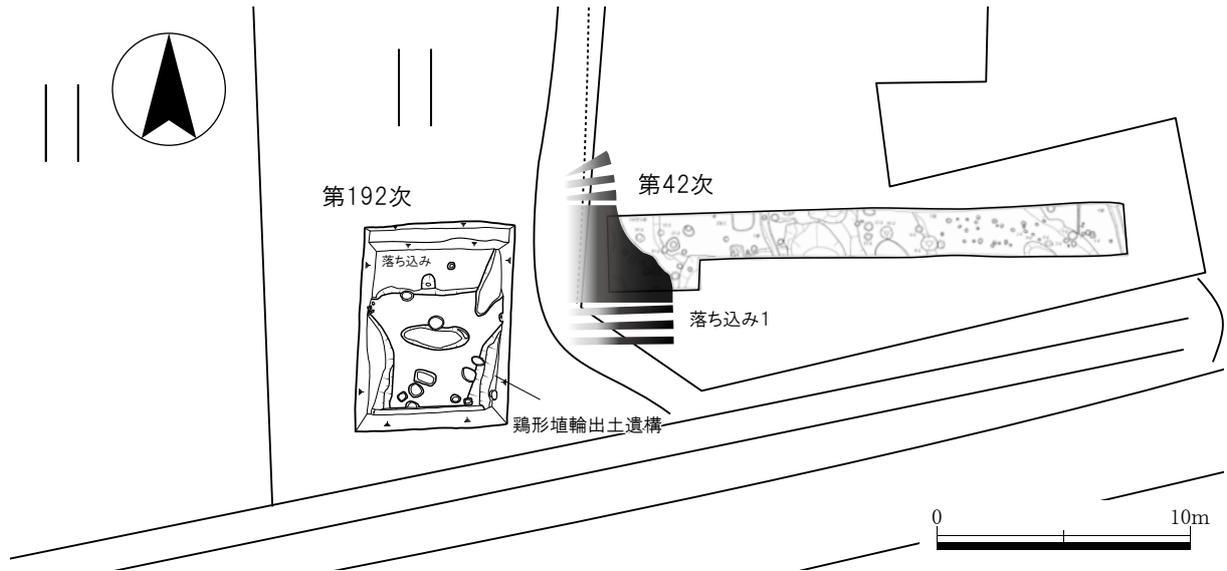


図2 第42次調査と第192次調査の位置関係 (S=1/300)

確認されているが、古墳と言えようなものは存在していない。そのため、この坂田地区や第192次調査で出土した埴輪が古墳に伴うものなのかどうかは未だ解決しえない。

しかし、報告されている通り、坂田地区周辺の字には「ツカアイ」や「イデホリ」といった地名が残っており、南の田圃では不自然な地割りが見て取れる。田圃の地割りから古墳の形態が断定できるものではないが、周辺には巻野内石塚古墳やホケノ山古墳などといった古墳が多く築造されている地域であることから、この場所の周辺が墓域として利用されていた場所であることは間違いない。周辺に築造されている古墳のほとんどが5世紀後半から6世紀の古墳であり、確実に前期古墳と言えるのは

ホケノ山古墳のみであるが、未調査の古墳が多く、今後の調査で前期に築造された古墳が判明する可能性は高い。また、坂田地区周辺は、古墳以外に埴輪窯跡である可能性も考えられるが、調査した範囲内では焼土や炭化物などが多量に出土するということがなく、積極的に窯跡であったとは言い難い。以上のことから、現状では坂田地区の近隣に古墳があった可能性が高いと考えている。

Ⅲ. 坂田地区出土の冠帽形埴輪の特徴

坂田地区で検出された「落ち込み1」から出土した形象埴輪のなかで、本稿で取り上げる冠帽形埴輪は、その名の通り「冠帽」を模した埴輪である。初見は奈良県御所市掖上鍾子塚古墳出土のものであり、ほぼ完形の冠帽形埴輪が出土している。その後、類例が増え現在は11例の出土が確認されている(表1)。しかし、冠帽形埴輪はその類例の少なさや、出土している埴輪が小片である場合が多く、冠帽形という形態に否定的な意見もあるため研究の対象として取り上げられることがほとんどなかった。しかし、冠帽以外の何の形を模したものと明確に示すことができていないのが現状である。

このような考えがある中で、掖上鍾子塚古墳例を見るとアーチ形の窓があり、上部がドーム状に覆われているなど被り物であると考えられる要素が多くみられる。その他の小片の資料であっても、ドーム状の形態やアー

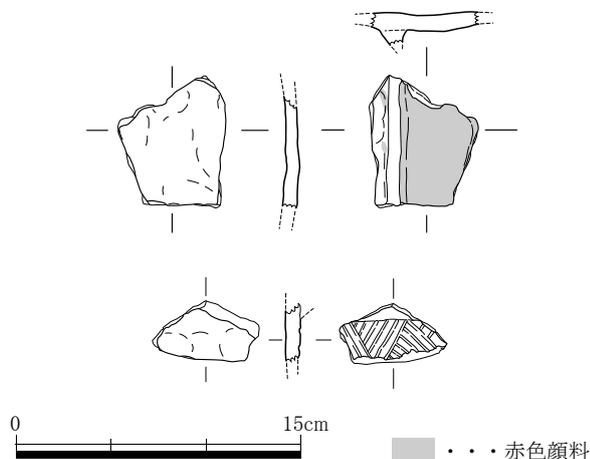


図3 第192次調査出土冠帽形埴輪 (S=1/4)

チ形の窓が開いていることなど共通する特徴を踏まえて掖上罐子塚古墳例と比較してみると、冠帽形埴輪であると考えられるのではないだろうか。そのため本稿では、現在確認されている冠帽形埴輪と言われている11例については、冠帽の形をした埴輪として扱うこととする。

まず、あらためて坂田地区出土の冠帽形埴輪の形態について詳しく見ていこう。正面にはアーチ形をした窓が開いており、これは顔を出すためのものである。その周辺にはこの窓部分に沿うように前方に張り出す形のつば部が立体的に張り付けられている。つば部の中央は突帯によって区切られており、内側には鋸歯文、外側には直線文が施されている。さらに、側頭部から頭頂部にかけて鱗部が張り付けられており、この鱗部は頭頂部まで及ぶように復元されている。側頭部の内側には別作りのドーム状の頭頂部が貼り付けられていた痕跡が確認できる。

ドーム状の頭頂部は突帯によって3区画に分けられており、各区画内には鋸歯文の線刻が施されている。さらに、冠帽形埴輪の下部には布の襷を表現したと考えられる直線文が施されたスカート状に垂下する部分が張り付

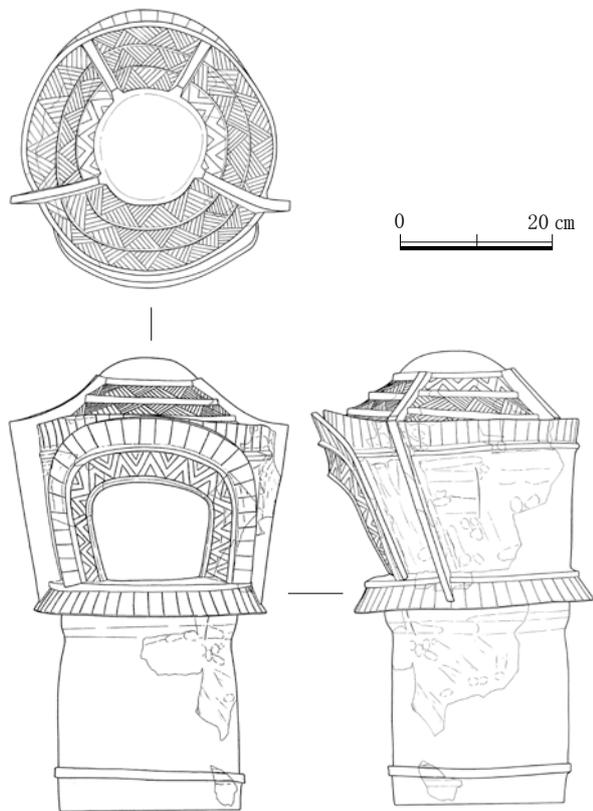


図4 坂田地区出土冠帽形埴輪 (S=1/10)

けられている。側頭部上部にも突帯によって側頭部とは区切られて、下部のスカート状の部分と同じような襷を表現したような直線文が施された部分(額飾り)が存在している。さらに、冠帽形埴輪の全面には赤色顔料が塗布されている。

このように装飾性が強く、頭頂部が別づくりになっている類例は他になく、清水真一が指摘している通り³⁾、この坂田地区出土の冠帽形埴輪の形態がこの埴輪の完成した形である可能性が高い。

IV. 冠帽形埴輪の形態と変遷

現在確認されている冠帽形埴輪の形態については、坂田地区出土冠帽形埴輪の観察結果をもとに細部を検討してみると、いくつか共通する特徴が確認できる。

比較したパーツの共通点は以下の5点である(図5)。

- a. アーチ形の窓がある
- b. ドーム状の頭頂部を持つものである
- c. 鋸歯文や直線文などの線刻が施されている
- d. 頭頂部には鱗状の突起もしくは飾り板が存在している
- e. 側頭部には鱗が存在している

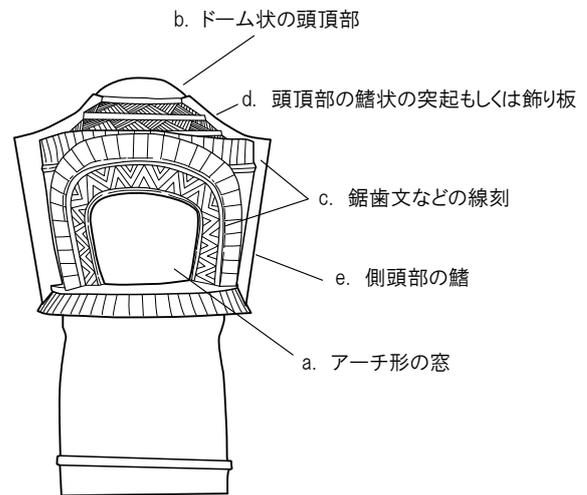
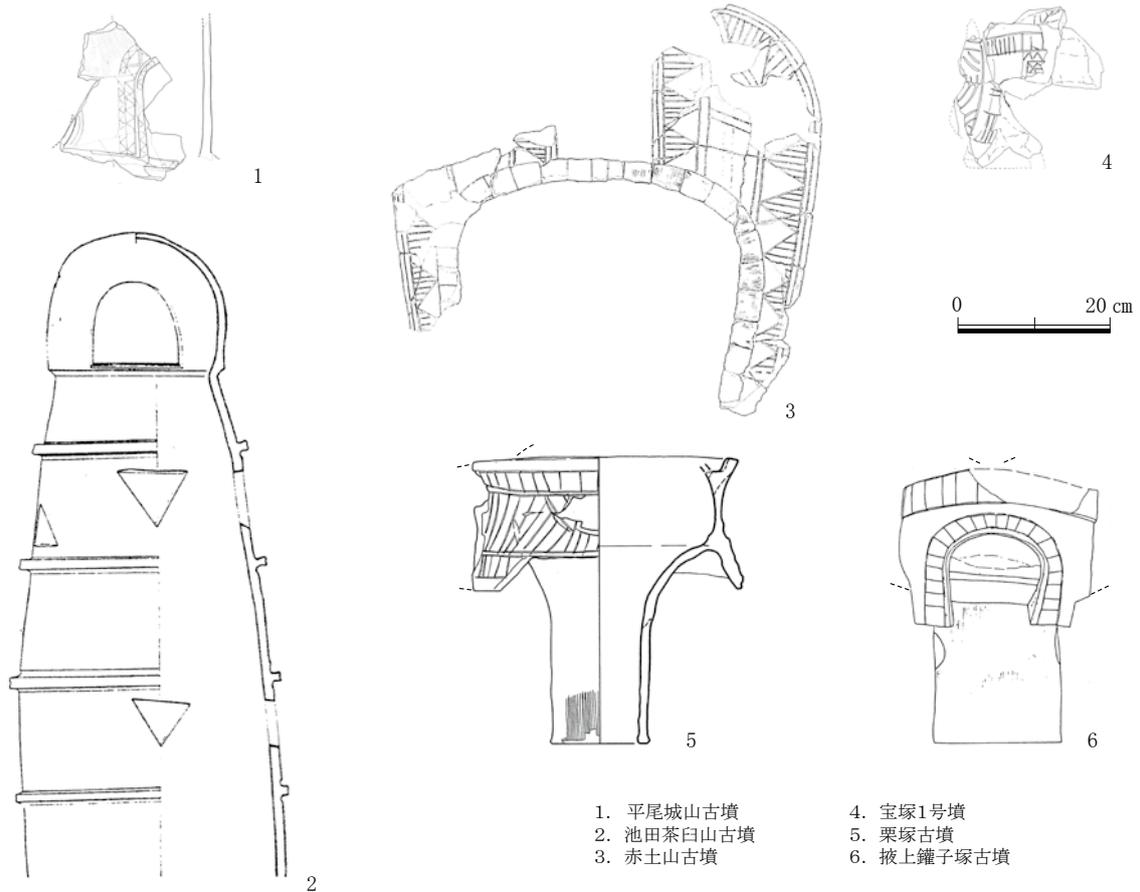


図5 冠帽形埴輪の特徴

この5つの特徴のうち、dの頭頂部の鱗状の突起については、残存しているものが1例のみでありその形態を復元することは困難であるが、冠帽形埴輪の多くには頭頂部に剥離痕跡が残っているためこの部分に鱗状のものが取りついていたことは確実である。さらに、冠帽形埴



1. 平尾城山古墳
2. 池田茶臼山古墳
3. 赤土山古墳
4. 宝塚1号墳
5. 栗塚古墳
6. 掖上籾子塚古墳

図6 冠帽形埴輪 (S=1/10)

輪は鉄製ではなく布もしくは革などの有機物で作られた冠帽を模している埴輪であるといえる。

以上の特徴を踏まえて、現在出土している冠帽形埴輪を時期ごとに観察してみる(図6)。

4世紀前葉には、纏向遺跡坂田地区出土の埴輪以外にも、京都府木津川市平尾城山古墳や大阪府池田市池田茶臼山古墳出土の冠帽形埴輪が存在している。これらの埴輪は、冠帽形埴輪の初現期の事例であり、初期の形象埴輪の形態は類似性より、独自性が強いという特徴をもつ。

坂田地区出土の冠帽形埴輪は、本稿の冠帽形埴輪の特徴を抽出するにあたって基準となる埴輪である。共通する特徴のa～eすべてが確認でき、線刻の鮮明さや立体表現の存在など、初現期の事例であると考えられる。また、多くの冠帽形埴輪が基部から側頭部や頭頂部を連続的に成形し、装飾部を別で貼り付けているのに対して、基部から連続的に成形した側頭部の上部内面に、別づくりした頭頂部を接合するという複雑な手法で制作されていることから、初現期の冠帽形埴輪であると考えられる。

平尾城山古墳出土のものは、小片であるため全体の形

態の復元はできないが、共通する特徴aのアーチ形の窓になる部分の側面に、冠帽と考えられる線刻が施されており、その線刻からは共通する特徴のa・cが確認できる。このような冠帽形埴輪に、冠帽と考えられる線刻が施されている例は平尾城山古墳以外にはなく、かなり独自性の強い埴輪であると言える⁴⁾。

一方、池田茶臼山古墳出土のものは、古墳の周辺に埋葬された転用棺として使用されており、古墳の築造年代(埴輪編年I-5期)⁵⁾と同一時期かそれに近い時期になろう⁶⁾。報告書では「頭巾形埴輪」と記載されているように、冠帽形埴輪としてはかなり独自性の強い形態をしているが、共通する特徴のa・b・eが確認できることから、冠帽形埴輪であると考えたい。ただし、線刻がなく装飾の少ない形態であるため、冠帽形埴輪の形態が完成する初現期の試行的な埴輪という見方から、平尾城山古墳と同じくバリエーションを持った初現期の冠帽形埴輪であるとする。

4世紀前葉～中葉の築造と考えられる赤土山古墳出土の冠帽形埴輪は、共通の特徴b・c・d・eが確認できる。

坂田地区出土の冠帽形埴輪と共通するような、布を表現したと考えられる縦方向の直線文が施された額飾りの下部には鋸歯文が施されている。この埴輪の特徴は、頭頂部から側頭部にかけて鋸歯文が施された飾り板が2枚張り付けられているということである。このような形態の埴輪は、赤土山古墳例以外には確認されていない。

5世紀初頭頃の築造と考えられる三重県松阪市宝塚1号墳出土の冠帽形埴輪に見られる共通する特徴はb～eであり、額飾りや側頭部と頭頂部に鱗部が付くといった特徴は踏襲しているが、立体表現が消え、額飾りを線刻のみで表現しているなど、形骸化がはじまっている。

5世紀前葉の築造と考えられる大阪府羽曳野市栗塚古墳出土の冠帽形埴輪はa・eが確認できる。bについては、欠損しているため断定はできないが、側頭部の内側にドーム状の頭頂部があった可能性は高い。この冠帽形埴輪には鋸歯文の線刻は施されていない。

5世紀後葉に築造された掖上罐子塚古墳出土の冠帽形埴輪は、共通の特徴のa・b・d・eが確認できる。額飾りやつば部に髷状のものを表現しているのは、坂田地区出土のものと共通しているが、鋸歯文の線刻は施されていない。

以上、形象埴輪が出現しはじめる4世紀前葉から5世紀後半まで、少数ではあるが冠帽形埴輪の出土が確認されており、それぞれの埴輪の特徴を整理してみた。そうすると、共通の特徴は存在しているが、同一形態と言え

る埴輪は見つからなかった。古いものほど実物を写實的に表現して作成しているというのは他の形象埴輪と同じであるが、時代が下るにつれ形骸化しているというよりは、ある程度の基準はあるものの、それぞれの古墳が独自の形態で製作していたのではないかと考えられる。これを踏まえて、次に出土古墳の特徴を検討する。

V. 出土古墳の特徴と樹立位置

冠帽形埴輪の出土数は管見では11例であり(表1)、その中で古墳出土のものは7例が確認されている。これらの古墳は、大阪府羽曳野市栗塚古墳を除けば、すべてが前方後円墳であり、その内4古墳が全長100mを超える大型前方後円墳である。全長100m以下の古墳であっても、池田茶臼山古墳は築造時期が4世紀前葉頃と猪名川流域に築造されている古墳の中では初現期の首長墳であり、地藏堂丸山古墳も、この周辺の首長墓系譜の中の最初の古墳であり、ヤマト政権と密接な関りを持って築造された古墳と推測されているため⁷⁾、これらの古墳が重要な古墳であることは間違いない。さらに、方墳である栗塚古墳については、誉田御廟山古墳(応神天皇陵)に隣接して築造されており、出土している埴輪が誉田御廟山古墳と共通する特徴を持っていることや主軸の方向が同一であることから、誉田御廟山古墳との強い関係が想定でき、被葬者は政権の中でも有力者であったと考え

表1 冠帽形埴輪一覧表

名称	所在地	墳形	規模(m)	時期	普通円筒	壺	朝顔	高環	形象																備考	参考文献
									冠帽	鶏	水鳥	家	盾	鞞	蓋	柵	人物	囲い	馬	犬	草摺	短甲	太刀	船		
1 纏向遺跡 坂田地区	奈良県 桜井市	-	-	4世紀前葉																				第42次調査 第192次調査	1	
2 平尾城山古墳	京都府 木津川市	前方後円	110	4世紀前葉																				極狭口縁	2	
3 池田茶臼山古墳	大阪府 池田市	前方後円	57	4世紀前葉																				埴輪棺の資料	3	
4 赤土山古墳	奈良県 天理市	前方後円	106.5	4世紀前葉 ～中葉																						4
5 地藏堂丸山古墳	大阪府 貝塚市	前方後円	70	4世紀中葉																						5
6 宝塚1号墳	三重県 松阪市	前方後円	111	5世紀初頭																				ミニチュア土製品	6	
7 栗塚古墳	大阪府 羽曳野市	方	43	5世紀前葉																				応神陵の陪冢	7	
8 掖上罐子塚古墳	奈良県 御所市	前方後円	150	5世紀後葉																						8
9 茶山遺跡	大阪府 羽曳野市	-	-	5世紀～6 世紀																				埴輪棺など		
10 大園遺跡	大阪府 高石市	-	-	4世紀中葉 ～																				生産遺跡	9	
11 伝鳥取県岩美郡 国府町岡益出土	鳥取県 国府町	-	-	-																						10

られる。

つまり、冠帽形埴輪が出土している古墳の被葬者像として、ヤマト政権の中核と密接な関りを持つ人物像が想定できるのである。

次に、冠帽形埴輪は墳丘のどの場所に樹立されていたのであろうか。残念なことに、冠帽形埴輪の樹立位置が明確にわかっている事例はなく、ほとんどが墳丘から落下したと考えられる周濠内からの出土である。出土状況がわかっている5例の出土位置や共伴遺物の状況などから樹立位置を推測してみたい。

後円部墳頂部周辺に樹立していた事例は、平尾城山古墳や赤土山古墳があげられる。平尾城山古墳は後円部中央に竪穴式石室が築かれ、石室の周辺を囲うように円筒埴輪列が検出されている。それらの円筒埴輪列の内側から形象埴輪（鶏形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪）が出土しており、形象埴輪も円筒埴輪と同様に石室を囲うような位置に樹立されていたと考えられている⁸⁾。

赤土山古墳は、地震による地滑りによって墳丘が破壊されてしまっており、冠帽形埴輪はこの地滑りによって後円部周辺に二次的に堆積した埋土の中から出土している。この堆積からは碧玉製の玉類が出土していることから、この堆積が後円部周辺からの流土であり、副葬品の碧玉製の玉類とともに流土に混在していた冠帽形埴輪は、後円部墳頂に樹立されていた可能性が高い。

宝塚1号墳も後円部の墳丘上へ樹立していた可能性がある。宝塚1号墳は出島状の造り出しでおこなわれた埴輪祭祀が注目されることが多い。その中で、冠帽形埴輪はこの造り出しに近い後円部一段目の墳丘裾付近から出土している。そのため、後円部から転落したものと考えられる。

くびれ部に樹立されていた事例は、地藏堂丸山古墳があげられる。地藏堂丸山古墳は、くびれ部の周濠埋土から形象埴輪（家形埴輪、冠帽形埴輪）が出土していることから、形象埴輪がくびれ部墳丘上に樹立されていたと考えられる。

その他には、栗塚古墳は周濠埋土から出土しており、円筒埴輪や形象埴輪（蓋形埴輪・家形埴輪・犬形埴輪・盾形埴輪・囲い形埴輪・冠帽形埴輪）が同一層位内から出土しており、その出土状況から自然崩壊したのではなく、投棄された可能性が指摘されている⁹⁾。そのため、投棄

される以前は墳丘上に樹立されていた可能性がある。

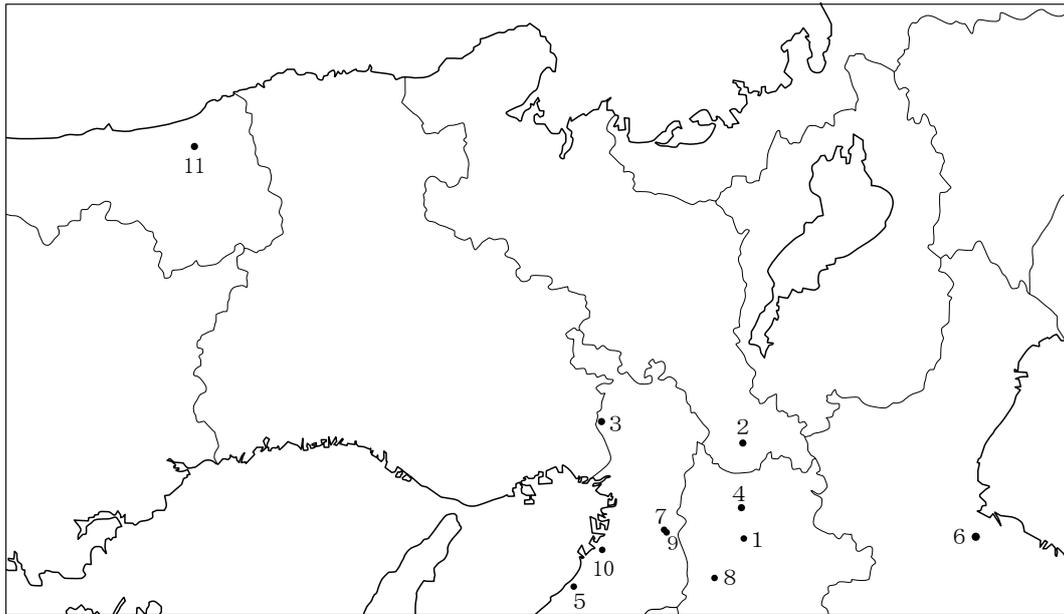
このように、5古墳中3古墳は後円部墳丘上に樹立され、平尾城山古墳や赤土山古墳は後円部墳頂部に樹立されていたと考えられる。このことから、埋葬施設上に樹立した形象埴輪の中での冠帽形埴輪の役割がみえてこよう。この2例以外の宝塚1号墳や方墳である栗塚古墳も、樹立位置が明確ではないが、埋葬施設周辺に樹立されていた可能性はある。しかし、この2例は5世紀代の古墳であり、前期古墳とは埴輪祭祀の形態が異なっている可能性があるため断定はできない。ただし、冠帽形埴輪がいずれも1個体のみ出土しているということは、古墳の縁に沿って樹立されたというよりは、墳頂上やくびれ部などに限定的に樹立されたと考えられるのではないだろうか。

VI. 冠帽形埴輪を樹立する意義

ここまで、坂田地区出土埴輪を中心に冠帽形埴輪の形態について検討をおこなってきた。さらに、冠帽形埴輪が樹立されている古墳は基本的には大型の前方後円墳であり、この埴輪は墳頂部に樹立されていたと考えられることなども述べてきた。これらの特徴を踏まえてその樹立の意味を考えてみたい。

あらためて、冠帽形埴輪の出土地の分布をみると、9例が畿内から出土していることがわかる（図7）。それ以外の2例については、宝塚1号墳は所在する松阪市周辺が東海方面から伊勢神宮へ続く伊勢街道と奈良方面から伸びる初瀬街道の結節点にあたる交通の要衝である。なおかつ伊勢湾に近いこの古墳の被葬者は当時の伊勢湾交易の中心的な人物であり、伊勢平野における最大の影響力を持つ人物であったと考えられる。さらに、伊勢平野においてはじめて畿内でおこなわれていた埴輪祭祀を採用した古墳でもある。そのためヤマト政権との密接な繋がりがあった人物の古墳であると考えられる。もう1例の伝鳥取県岩美郡国府町国益出土の埴輪については、その周辺は山陰道が通っており近くには後に因幡国分寺や国府が造られている場所でもある。ただ、実際に国府町国益から出土したのかという疑問は残るが、国府が置かれるような重要な場所から出土したと伝えられている埴輪である。

このように、樹立古墳が基本的には大型前方後円墳



1. 纏向遺跡 2. 平尾城山古墳 3. 池田茶臼山古墳 4. 赤土山古墳 5. 地藏堂丸山古墳 6. 宝塚1号墳
7. 栗塚古墳 8. 掖上鑑子塚古墳 9. 茶山遺跡 10. 大園遺跡 11. 伝鳥取県国府町国益出土

図7 冠帽形埴輪出土地分布図

であり、なおかつその地域の重要古墳であると考えられることなどから、冠帽形埴輪は権力の象徴としてかなり限定した古墳に樹立された埴輪であると考えられる。事例数の少なさもこのことに起因するのではないだろうか。そして、冠帽形埴輪を樹立していた古墳の被葬者は、実際に冠帽を所有することが許されていた人物であると考えられる。

ここで考えてみたいのは冠帽形埴輪のモデルである。冠帽形埴輪はその名の通り「冠帽」を模した埴輪であると考えられるが、古墳時代の冠帽がどのような形態をしていたのかは明確にはわかっていない。古墳時代後期に築造された熊本県和水町江田船山古墳から実物冠帽が出土しているが、烏帽子のような形態をしており、冠帽形埴輪とは形態的に異なっている。さらに、その材質は金属であり、冠帽形埴輪が布や革製の冠帽を模していると考えられることから、その形態のモデルとは言い難い。

そこで注目したいのは、中国の「朝服」である。中国では漢の時代に「朝服」の制度が導入されはじめ、後漢には身分によって被れる冠帽の形態が変わるといった制度が成立していたようである¹⁰⁾。さらに、『魏書』烏丸鮮卑東夷伝の高句麗条には、「介幘」や「弁冠」を着用しているという記載がみられる。これらは高句麗が魏との朝貢関係の中で取り入れた文化のようである。つま

り中国の冠帽による身分表象は朝鮮半島にも伝わっていたということである。「幘」の基本的な形は頭頂部に三角形の突起が付き、布が顎付近まで覆うような形のものであったようである¹¹⁾。そのような形態を見て、冠帽形埴輪の特徴である頭頂部の突起の存在や顎付近まで布で覆われていることなど共通点が見られ、この「幘」をモデルとして埴輪を作成したということも考えられる。

冠帽形埴輪のモデルがこの「幘」なのであれば、西晋が316年に滅び、ヤマト政権の外交・交易政策の相手が朝鮮半島へとシフトした時期が4世紀前葉であると考ええると、冠帽形埴輪の出現は朝鮮半島からの影響を想定できよう。出土数が少なく、限定的な首長が樹立し得たものであったということから、朝鮮半島との関係の中で活躍した首長が「幘」の着用を認められ、自身の権力の象徴として冠帽形埴輪を樹立した可能性も考えておきたい。

VII. おわりに

本稿では、坂田地区出土の冠帽形埴輪について形態の検討や出土古墳の特徴から、冠帽形埴輪は限定された人物のみが着用を許された冠帽を埴輪化し権力の象徴として樹立したのではないかと述べてきた。

清水が首長権継承の葬送儀礼として冠帽（冠）が必要

であり、その場面を象徴するものとして冠帽形埴輪が創出されたとしているが¹²⁾、そうであるならば一般的な埴輪の器種構成のひとつとしてもっと多くの古墳から出土するであろう。しかし、現状は古墳からの出土は7例と少数であることから、限られた人物のみが樹立することが許された埴輪であると言える。

なお、6世紀以降の古墳からの出土は確認されていない。このような背景には、5世紀後半以降の埴輪祭祀の変容が想定でき、人物埴輪や器材埴輪など多様な形象埴輪による群像、すなわち首長にかかわる祭儀場面の中では、すでに冠帽形埴輪という器種が必要でなくなったということであろうか。ただし、冠帽形埴輪の類例自体が少数であるため、推測の域を出ない。

冠帽形埴輪が、4世紀前葉以降の朝鮮半島との関係の中で取り入れられた「幘」をモデルとしてつくられた埴輪と想定すると、出土数の少なさにも納得がいく。仮に、この「幘」をモデルとして作成された埴輪であったとしても、辟邪を目的とした日本独自の思想である鋸歯文を取り入れ埴輪化させることによって日本のオリジナルのものとし、権力を象徴する威儀具のひとつとして採用された埴輪であったのだろう。

【註記】

- 1) 橋本輝彦・橋爪朝子 2007『纏向遺跡発掘調査報告書－巻野内坂田地区における発掘調査報告書－』桜井市教育委員会
- 2) 三沢朋未 2018「纏向遺跡第192次調査発掘調査報告」『平成29年度国庫補助による発掘調査報告書』第49集 桜井市教育委員会
- 3) 清水真一 1996『大和の大王の埴輪－冠形埴輪の成立と展開－』財団法人桜井市文化財協会
- 4) 平尾城山古墳から出土している埴輪の時期は4世紀前葉頃であると考えられるが、墓壙からは布留2式期の小形丸底壺が出土しており、築造時期と埋葬時期に差がある可能性が考えられる。
- 5) 寺前直人 2011「3. 猪名川流域における前期古墳の動向」『古墳時代政権交代論の考古学的再検討』平成20～22年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書(研究代表者 福永伸哉) 大阪大学大学院文学研究科
- 6) 埴輪の転用棺は布留2式期以降に出現していると考えられることから、この転用棺は古墳の築造時期よりは一段階新しい埋葬施設であると考えられる。この転用棺に使われている埴輪が池田茶臼山古墳に樹立されていた埴輪であるか

どうかは断定できる要素がない。しかし、本文中でも指摘している通り、装飾性の少なくその他の冠帽形埴輪とは形態的に共通する要素が少なく、独自性の強い形態であると言えることから、初現期の形象埴輪である可能性が高い。そこで、本稿では池田茶臼山古墳に樹立されていた埴輪と考え、4世紀前葉の埴輪であるという考えのもと検討していく。

- 7) 上野裕子 2005『地藏堂丸山古墳と大阪の前期古墳』貝塚市教育委員会
 地藏堂丸山古墳は、近隣に所在する地藏堂丸山古墳よりも古い岸和田市摩湯山古墳や同市貝吹山古墳とは違う系譜の首長墓であると考えられている。地藏堂丸山古墳の被葬者は、王権と密接なつながりを持つ摩湯山古墳の首長を介して、王権と関りを持って地藏堂丸山古墳を築造したと考えられる。
- 8) 冠帽形埴輪の出土位置については明確にはなっておらず、攪乱などにより具体的な配置は定かではない。
- 9) 吉澤則男 2011「栗塚古墳」『羽曳野市内遺跡発掘調査報告書－平成20年度－』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書68 羽曳野市教育委員会
- 10) 小林聡 2010「『朝服』制度の行方－曹魏～五胡東晋時代における出土文物を中心として－」『埼玉大学紀要』第59号 第1巻 埼玉大学教育学部
- 11) 李如星(著) 金井塚良一(訳) 1998『朝鮮服飾考』三一書房



ナムバウイ



武梁祠前石室の中幘を被る人々

幘の形態がわかる資料は残されていない。『後漢輿服史』にある形態を説明する一文について、山東省武梁祠画像石を参考に考えると、幘は朝鮮の「ナムバウイ」の形態と同

じょうなもので、「耳」と呼ばれる三角形の載飾を持ち、「収」と呼ばれる幘の後部に布をつけていたなどの特徴があったようである。

12) 註3) 文献と同一

冠帽形埴輪についての先行研究は、清水真一の論考がある。清水は鶏形埴輪との共伴関係を指摘し、冠帽形埴輪が古墳に樹立された意味を葬送儀礼に捉え、冠帽が前大王の王権のシンボルとして取り扱われたものであり、新大王はそれを頭にのせてはじめて大王と認められたのであろうとしている。しかし、この当時は類例が6例しか確認されておらず、現在出土が確認されている古墳には鶏形埴輪が出土していない古墳も存在しているため、清水が述べたような葬送儀礼を表していたとは言い難い。

【表1の参考文献】

1：橋本輝彦・橋爪朝子 2007『纏向遺跡発掘調査報告書－巻野内坂田地区における発掘調査報告書－』桜井市教育委員会
三沢朋未 2018『纏向遺跡第192次調査発掘調査報告書』『平成29年度国庫補助による発掘調査報告書』第49集 桜

井市教育委員会
2：近藤喬一編 1990『京都府平尾城山古墳』山口大学人文学部考古学研究室
3：堅田直編 1964『池田茶臼山古墳の研究』大阪古文化研究会
4：松本洋明編 2003『史跡赤土山古墳 第4次～第8次発掘調査概要報告書』天理市教育委員会
5：上野裕子 2005『地藏堂丸山古墳と大阪の前期古墳』貝塚市教育委員会
6：松葉和也編 2005『史跡宝塚古墳』松阪市教育委員会
7：吉澤則男 2011『栗塚古墳』『羽曳野市内遺跡発掘調査報告書－平成20年度－』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 68 羽曳野市教育委員会
8：御所市史編纂委員会 1965『掖上罐子塚古墳』『御所市史』御所市役所
9：三木弘ほか 2015『和泉地域における古墳時代前期の埴輪生産』『館報18』大阪府立近つ飛鳥博物館
10：清水真一 1996『大和の大王の埴輪－冠形埴輪の成立と展開－』財団法人桜井市文化財協会

「マキムク」地名小考

森 暢 郎

目次

I. はじめに	97
II. 研究史	97
III. 集成と検討	98
IV. おわりに	100

論文要旨

本稿では「マキムク」という地名がいつどのように使われたのか、その変遷を検討した。その結果、「マキムク」地名の用例には3つの分野があり、相互に関連しながら用字や用例が変遷することを確認した。また検討の過程で古代から近世の用例を収集し、400例以上を確認した。

森 暢郎（もり のぶろう）
桜井市纏向学研究センター研究員

「マキムク」地名小考

森 暢 郎

I. はじめに

桜井市纏向学術センターが名称を冠する纏向という地名は、日本書紀・古事記にも登場する古い由来をもつ。また近現代には「纏向村」が存在していた。しかし纏向という名称は現代まで連綿と同じように使われてきたわけではない。纏向・巻向の使い分けに悩む人もいないだろうか。

そこで本稿ではこの地名がどう用いられ、変遷したのか検討したい。なお、表記・読みが複数あることから個別の用例を指さない場合は「マキムク」の語を用いることとしたい。

II. 研究史

多数の用例がある「マキムク」であるが、和歌や天皇宮の名称に用いられたため、平安時代以降歌論書を中心に多数の注釈を生むこととなった。また近世・近代には『大和志』¹⁾『和州旧跡考』²⁾『和州巡覧記』³⁾『大和名所図会』⁴⁾『大和志料』⁵⁾などに「マキムク」がどういった地名か整理される。また契沖や賀茂真淵らにより、和歌や記紀に載る「マキムク」の用例が考証されている⁶⁾。近現代には和歌の用例や万葉集の地名比定が発達した。特に詳細に検討したものとして奥野健治⁷⁾、吉原栄徳⁸⁾、伊藤一男⁹⁾の検討がある。また中近世史では水利や山林利用を中心に現在の纏向川流域の研究が進んだ¹⁰⁾。

これら近世から現代の研究を概観すると「マキムク」地名の研究は3つの志向がある。第1はマキムクの語源を追及するもの。第2は用例や変遷を考究するもの、第3はその位置・範囲を検討するものである。

1つ目の語源について、池田末則はマキを牧（山辺の傾斜平地の意）と解し、ムクを互いに向かい合う意味と

して巻向川の南北に向かいあう牧の可能性を考える¹¹⁾。またマキを（真樹一聖樹・神木説）とする説を紹介するがこれを採らない。また清水真一は『大漢和辞典』を引用して「纏」の正字が「纏」であることを確認し、「纏」に「竿の先に種々の形のものをつけ、その下に馬簾などをつけたもの」の語義を確認できることから「マキ」が牧に由来し、牧場に関わる可能性を述べている¹²⁾。「マキムク」を牧と結びつける見解は池田以前には見いだせない。

飯田武郷は『日本書紀通釈』で「マキ」を真木、「ムク」を榮と解し、真木榮で木材の生茂るところというとするが、出典を記さない¹³⁾。ただし飯田は賀茂真淵の『冠辞考』を引いて「被」の項で真木を檜とすることを紹介しており、檜原との関連も視野に入れていたものと考えられる。奥野健治も真木榮説に従う¹⁴⁾。松岡静雄は檜原があるために「檜木茂處（まきもく）」の名が付き、マキムクの檜原という呼称も存在すると述べる¹⁵⁾。マキを真木と解釈し、真木を檜の意として檜原と関連付ける考え方は比較的古いが、いつからある説か判然としない。

2つ目の用語の変遷について、賀茂真淵は古くは「まきむく」と読み、その後「まきもく」と転訛したことを指摘する¹⁶⁾。また本居宣長も中世に多用された「まきもく」の訓みは不適當とする¹⁷⁾。一方、松岡静雄はまきもくは檜木茂處が語源で、まきむくが音便であり、まきもくが本来の音と考えているようである¹⁸⁾。澤瀉久孝は万葉集1087番歌の解説で「巻目」の目が「向」の誤写である可能性も指摘する一方で、まきむくともまきもくとも言ったのではないかとする¹⁹⁾。吉原栄徳は万葉集1087番歌の「巻目」によって、平安時代の「マキムク」の読みが「まきもく」に引きずられた可能性を指摘する²⁰⁾。このようにまきもくの表記に関心が集まる一方、纏向と巻向の用例の違いやその他の用字について意識を向けた検

「マキムク」の用例は大別して3つの分野に出現する。仮にA～C類とすると、1つ目は古記録とその註釈書などで、主に天皇宮や天皇の名称に関わる記述（A類）。2つ目は和歌集や歌学書、狂歌などで、万葉集を嚆矢として近世に至るまで歌の題材にとられるもの（B類）。3つ目が現実の地名や神社名（C類）である。なお和名類聚抄に「マキムク」地名は掲載されず、郷名としては平安時代には存在していなかったとみられる。

A類は日代宮・珠城宮についての記事が大半を占めるが、その他の宮の存在を伝えるものとして『新撰姓氏録』の聖徳太子が巡行した卷向宮の記載がある。しかしながらこの宮については佐伯有清が指摘する²⁶⁾ように他に引用された徴候はない。また日代宮・珠城宮記事は大半が垂仁天皇・景行天皇やその在位中の出来事を示す際に出現するが、『続日本後紀』承和十年正月丙辰条に役連の弘村連への改姓記事にその役連の由来として纏向日代宮が登場する。珠城宮・日代宮の位置について述べる古代の書籍はなく、『帝王編年記』でようやく出現する。また用例が少ないが、『補陀洛山建立修行日記』などには垂仁天皇第九王子「卷向尊」の記事が見られる。

B類は「マキムク」の用例の大半を占める。万葉集以降近世・近代まで題材に取られており、柿本人麻呂、藤原定家、順徳天皇なども詠み、歌枕として定着したため多数の歌論書で取り扱われている。こうした和歌の題材や歌論書のほか、連歌や浄瑠璃作品にも出現する。なお類例は少ないものの天皇宮を題材とする歌も知られている。

C類の大半は卷向社や卷向川や卷向山として出現する。万葉集の卷向を除くと『延喜式』に卷向社、卷向坐若魂社などとして出現するものが古い例である。地名としての卷向山、纏向河の出現はさらに遅く、『経俊卿記』建長八年四月二二日（1256年）に「長谷寺申 若山堺事 仰 卷向山事可尋一乘院僧正」とする記事があり、14世紀成立の『帝王編年記』に「卷向珠城宮 大和国城上郡 今纏向河北里西田中也」として纏向河が出現する。

（2）マキムク＝「真木榮處」説について

現在、纏は「まとう」の訓みが一般的であるが、『類聚名義抄』ではマトフのほか、マクの訓みも認められる²⁷⁾。『万葉集』でも「手尔纏」の表現がある。『今昔物語』では蛇がとぐろをまく様子を「巻く」「纏く」の両方で

表現しており²⁸⁾、古代には巻と纏は字訓・字義が似通っていたと考えられる。よって、万葉集で用いられる「兒等手乎 卷向山」という表現を、愛する女性の手を枕にするの意²⁹⁾とすると、「纏向山」であっても十分に意味は通ったのではないだろうか。

紀記の「マキムク」は和歌である雄略天皇段の用例を除くと、諸本はすべて「纏」³⁰⁾に作る。紀記の表記とは対称的に、万葉集では「卷向」を用いる用例が頻繁に認められる。万葉集で「マキムク」は12例出現する³¹⁾が、このうち11例が「巻」で、1例のみ「纏」が用いられる（万葉集3126番歌³²⁾）。ただし巻と纏の字義が似通うことは、紀記の編纂時にも「マキ」は「真木」ではなく、手を「巻く」「纏く」が意識されていたと考えられる。

一方近代・近世には「マキムク」の語源として「真木」が栄える所、という解釈がなされたことは研究史の項で述べた。こうした解釈は鎌倉時代の歌論書『色葉和難集』に遡る事ができる。『色葉和難集』では『和歌童蒙抄』を引用しつつ、自説として「まきもく山ともいふ

これもひの木おひたるやまなるべし 日本紀には卷向の檜原とかけり 文字をかれるなり まきの事如上」とする。管見では中世以前に「マキムク」の語源が真木や檜に由来するとする書籍は『色葉和難集』だけであるが、先行する歌論書でも木材や柚と結びつけてイメージされる場合がある。例えば『八雲御抄』ではまきもくの項に「みもろのそま山」が登場し、『古今集注』では「マキモクノアナシノ山ハ所名 コノ山ノ木ヲトリテ…」とある。また、『新撰萬葉集』に「真木牟具之日原之霞」とあり、管見では「マキムク」を「真木」と表記する初出となる。このように、平安時代には真木あるいは檜と卷向を結びつける考え方ができていたものと考えられる。

ところで室町時代の『大乘院寺社雑事記』には「卷向山」「卷向川」の地名が認められ、水利や山林の權益を巡る争いについて詳細な検討がなされている。室町時代には卷向山が木材産地として認識されていたといえるだろう。木材産地としての卷向山が遡る可能性のある記事として『経俊卿記』建長八年四月二二日条（1256年）に「長谷寺申 若山堺事 仰 卷向山事可尋一乘院僧正」、また同年六月十二日条に「長谷寺申 若山堺事 猶遣官使可実檢之由被仰下之」の記載がある。これは長谷寺と一乘院が卷向山の山堺をめぐって争っている可能

性を示す。『大乘院寺社雑事記』でも大乘院末寺の長谷寺と一乗院が争っており、大乘院側と一乗院側の境相論は鎌倉時代にまで遡るのではないだろうか。『経俊卿記』にみえる境相論は巻向山をめぐるものであり、その権益には木材もあった可能性がある。こうした現実存在する杣山としての巻向山のイメージも「真木」の茂る歌枕としての「マキムク」に影響した可能性も指摘できる。『八雲御抄』にみえる「みもろのそま山」もこうした現実にあった杣山としての巻向山を受けたものと考えられよう。

こうしたマキムクと真木・木材を結びつけるイメージの淵源は『万葉集』1092・1813・2314番歌の「巻向之檜原」に遡るものと考えられる。こうした用例を踏まえると、マキムクの語源を真木・木材と結びつける考え方は奈良時代以降、特に平安時代後期から鎌倉時代に形成・強化されマキムク＝「真木榮處」説が生み出されたのではないだろうか。

(3) 纏向と巻向

日本書紀・古事記ではいずれも天皇宮号は「纏向」であるが、「巻向」と表記する天皇宮号の例に『古語拾遺』、『新撰姓氏録』、『神皇正統記』、『倭姫命世記』、『住吉大社神代記』、『釈日本紀』、『帝王編年記』などがある。住吉大社神代記では全て巻向表記で統一されるが、『古語拾遺』、『神皇正統記』、『釈日本紀』、『本朝月令』が引用する高橋氏文、『本朝皇胤紹運録』、『如是院年代記』、『東寺王代記』、『神明鏡』、『仁壽鏡』、『皇代曆』では巻向と纏向が併存する。

『万葉集』や『釈日本紀』のように文中離れている箇所にも巻向と纏向が併存する場合は、単なる表記揺れと解釈することもできるだろうが、近接本文中に纏向・巻向が併存する場合には、祖本で併存していたか、引用元で既に分かれたかという点とみるべきであろう。ここで注意すべきは『古語拾遺』、『神皇正統記』、『帝王編年記』、『東寺王代記』、『仁壽鏡』、『如是院年代記』、『本朝皇胤紹運録』、『皇代曆』のいずれもが「纏向日代」、「巻向珠（玉）城」と表記していることである。偶然これほど一致するとは考えにくい。

これらの書籍に記載のある「マキムク」は『日本書紀』の記述を節略したような本文中に多いが、こうした一致は個々の書籍が『日本書紀』自体を読み込み改変したというより、それらの書籍が引用－被引用関係にある蓋然

性が高いことを示している³³⁾。日本書紀を改変して成立したテキストが平安時代以降広く流布したことは福田武志の示すとおりであり³⁴⁾、本例もそうした一端を捉えていると考える。

(4) 「まきむく」と「まきもく」

研究史の項でみたように「まきもく」の表記は平安時代以降B類を中心に用例が多い。こうした訓みはいつまで遡るのであろうか。検討すると平安時代にも「まきむく」と詠んだ事例もある。『新撰万葉集』17番歌には「真木牟具」があり、『日本紀竟宴和歌』天慶六年歌80番歌に「満幾牟玖濃」とある。一方で延喜五年（905年）頃成立の『古今和歌集』では「まきもく（こ）」³⁵⁾と詠まれているから、平安時代中頃に境に「まきもく」とする例が登場するとみるべきであろうか。

この現象は和歌の世界でのみ起きていたことではない。平安時代後期書写の九条家本『延喜式』巻二では巻向社に「マキモク」の朱筆があり、神社名もまきもく表記であったことがわかる。時代は下るが近世初頭の文書では「まいぶく川」という表記があり³⁶⁾、現地でも転訛が起きていたことを伺わせる。一方で、宮号については日本書紀の和訓の多くは「まきむく」であり、また『日本書紀私記丙本』に「マキムクタママキ」、神皇正統記でもまきむくの訓みがなされており、こうした訓みの変遷はほとんど起きていないと考えられる。すなわち、訓みの変化は主にB・C類で起きたのであり、A類では比較的变化がなかったと考えられよう³⁷⁾。

こうした状況に変化が起きるのは江戸時代以降で、B類でも「まきむく」と詠む和歌が出現する。これらの歌は本居宣長らによって詠まれたものであり、研究史で述べた本居宣長や賀茂真淵の「まきもく」の訓みが誤りであるという意識を反映していると考えられる。

IV. おわりに

「マキムク」地名について研究史を踏まえていくつかの論点について整理をおこなった。その結果、「マキムク」は古代以来連綿と用いられてきたが、その用例は変遷があることが明瞭となった。語源については明らかでなく、古代末以降唱えられた説も附会である可能性を指摘した。

また、用字から書籍の引用関係や「マキムク」地名が用いられた3分野の相互関係が伺えることも述べた³⁸⁾。本来であれば、周辺地名との相互関係についても検討すべきであったが今後の課題としたい。

【註記】

- 1) 並河永、正宗敦夫編 1929-1930『五畿内志』中
- 2) 続群書類従刊行会編 1906『和州幽跡考』『続々群書類従』8 地理部(一)
- 3) 貝原益軒 1911『益軒全集』巻七, 45-81
- 4) 大日本名所図会刊行会編 1919『大日本名所図会』第1輯第3編
- 5) 奈良県編 1914『大和志料』下巻
- 6) 契沖 1926『万葉代匠記』『契沖全集』第1巻 佐々木信綱編、賀茂真淵 1978『冠辞考』賀茂真淵全集8 続群書類従完成会編
- 7) 奥野健治 1986『万葉地理研究論集 大和志考決 下』『大和志考/地名寸見』奥野健治著作刊行会編
- 8) 吉原栄徳 1995『勅撰歌歌枕集成 資料・研究編』おうふう
- 9) 伊藤一男 1999『巻向』『歌ことば歌枕大辞典』久保田淳・馬場あき子編 角川書店
- 10) 永原慶二 1965『自検断の村々』『下剋上の時代』中央公論社、野崎清孝 1977『大和国穴師郷と巻向川筋の水利構造』『歴史地理学会報』89、服部英雄 1993『巻向・穴師の山と水』『中世の発見』吉川弘文館
- 11) 池田末則 1990『地名伝承論：大和古代地名辞典』名著出版など
- 12) 清水眞一 2007『最初の巨大古墳・箸墓古墳 シリーズ「遺跡を学ぶ」』新泉社
- 13) 飯田武郷 1909『日本書紀通釈』
- 14) 奥野健治 1986『万葉地理研究論集 大和志考決 下』
- 15) 松岡静雄編 1929『纏向』『日本古語大辞典』刀根書院
- 16) 賀茂真淵 1978『冠辞考』賀茂真淵全集8 続群書類従完成会編
- 17) 本居宣長 1926『古事記伝』『本居宣長全集』第1 吉川弘文館
- 18) 松岡静雄編 1929『纏向』『日本古語大辞典』刀根書院
- 19) 澤瀉久孝 1983『萬葉集注釈』巻7 中央公論社
- 20) 吉原栄徳 1995『勅撰歌歌枕集成 資料・研究編』おうふう
- 21) 阪口保 1944『萬葉集大和地理辞典』創元社
- 22) 水木要太郎 1913『宮址諸説』『奈良県史跡勝地調査会報告書 第一回』奈良県編
- 23) 「纏」の用字にも「纏」「纏」があり、かならずしも同一ではない。
- 24) 『九条家本延喜式』諸陵式 巻二十一
- 25) 筆者が書誌学に疎いため、「マキムク」の最古の書写例がいずれかは不明である。なお現在伝わる『住吉大社神代記』が奈良時代に遡るならばこれが最も古い書写例となる。
- 26) 佐伯有清 1995『新撰姓氏録の研究 本文編』吉川弘文館 第8刷
- 27) 貴重図書複製会編 1937『類聚名義抄』
- 28) 池上洵一校注 1993『今昔物語集』巻3 日本古典文学大系 岩波書店
- 29) 澤瀉久孝 1983『萬葉集注釈』巻7 中央公論社
- 30) ただし本朝月令に引く高橋氏文に「謹案日本紀 巻向日代宮御宇大足彦忍別天皇」や色葉和難抄に「日本紀には巻向の檜原とかけり」といった文があることから古代・中世には日本書紀に「纏向」を「巻向」に作っていた本文があった可能性はある。
- 31) 萬葉集2187番歌「巻来乃山」を「巻牟丸山」の誤写とする説に従えば13例である。
- 32) 巻と纏の表記について、諸本での異同はない。
- 33) 註30) に示すように古代中世には「巻向」表記の本文もあった可能性があるが、色葉和難抄にある「巻向の檜原」は現在の日本書紀本文にはなく、高橋氏文も「巻向日代宮」であるので、これらは直接の引用元とは考えにくい。
- 34) 福田武志 2012『天慶六年日本紀竟宴和歌序の「終於壬寅之歳」「四十二帝」について』『上代文学』108
- 35) 育徳財団編 1928『古今和歌集：清輔本 下』所収の写本が最古のものであり12世紀まで遡る。
- 36) 桜井市辻 辻正嗣氏所有文書 野崎清孝1977『大和国穴師郷と巻向川筋の水利構造』『歴史地理学会報』89
- 37) 北野本日本書紀には「マキモク」の訓がつく箇所(仁徳天皇紀)があり、この巻は16世紀前半の書写と考えられているので、中世後期には天皇宮であっても「マキモク」と訓む場合があったのかもしれない。
- 38) 筆者は文献学・文学・文献史学の専門的訓練を受けていないので、多数の錯誤を冒しているものと考えられる。また、集成から漏れた例が多数あると考えられる。大方の御批正を乞いたい。

表1 「マキムク」地名一覧

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
1	A	古事記	大帯日子淤斯呂和氣天皇 坐纏向之日代宮 治天下也	黒板勝美編1966『国史大系7古事記・先代旧事本紀・神道五部書』吉川弘文館	
2	A	古事記	爾詔 吾者坐纏向之日代宮 所知大八嶋國 大帯日子淤斯呂和氣天皇之御子 名倭男具那王者也	黒板勝美編1966『国史大系7古事記・先代旧事本紀・神道五部書』吉川弘文館	
3	A	古事記	麻岐牟久能 比志呂乃美夜波 阿佐比能比傳流美夜 由布比能比賀氣流美夜	黒板勝美編1966『国史大系7古事記・先代旧事本紀・神道五部書』吉川弘文館	
4	A	日本書紀	冬十月 更都於纏向 是謂珠城宮也	坂本太郎他校注1967『日本書紀』上	師木玉垣宮(記)垂仁天皇二年冬十月 北野本マキムク
5	A	日本書紀	九十九年秋七月戊午朔 天皇崩於纏向宮 時年百卅歳	坂本太郎他校注1967『日本書紀』上	垂仁天皇九十九年秋七月
6	A	日本書紀	則更都於纏向 是謂日代宮	坂本太郎他校注1967『日本書紀』上	景行天皇四年冬十一月 北野本マキムク
7	A	日本書紀	五十四年秋九月辛卯朔己酉 自伊勢還 於倭居纏向宮	坂本太郎他校注1967『日本書紀』上	景行天皇五十四年秋九月
8	A	日本書紀	傳聞之 於纏向玉城宮御宇天皇之世 科太子大足彦尊 定倭屯田也	坂本太郎他校注1967『日本書紀』上	北野本 マキモク 前田本マキムク
9	A	令集解	仲冬(上卯相嘗祭) 謂。大倭・住吉・大神・穴師・恩智・意富・葛木鴨・紀伊国日前神等類是也。神主各受官幣帛而祭。積云。大倭社大倭忌寸祭。宇奈太利。村屋。住吉。津守。大神社。大神氏上祭。穴師(神主)。卷向(神主)。池社(池首)。恩智(神主)。意富(太朝臣)。葛木鴨(鴨朝臣)。紀伊国坐日前。国県須。伊太祁尊。鳴神。已上神主等。請受官幣帛祭(古記无別)。	黒板勝美編1966『国史大系23令集解』吉川弘文館	
10	A	延喜式 卷二	卷向社一座	東京国立博物館「e-国宝延喜式」 http://www.emuseum.jp/detail/100162/066?d_lang=ja 2019年12月10日閲覧	マキモク
11	C	延喜式 卷九	卷向坐若魂社	同上	マキムクノ
12	A	延喜式	纏向珠城宮御宇垂仁天皇	同上	
13	A	延喜式	纏向日代宮御宇景行天皇	同上	
14	C	延喜式	纏向社	同上	
15	C	新抄格勅符抄	卷向神 二戸	黒板勝美『国史大系27 新抄格勅符抄 法曹類林 類聚符宣抄 統左丞抄 別聚符宣抄』	
16	A	続日本紀	土師之先出自天穗日命 其十四世孫 名曰野見宿禰 昔者纏向珠城宮御宇垂仁天皇世 古風尚存 葬礼無節 每有凶事 例多殉埋	黒板勝美1966『国史大系2 続日本紀』吉川弘文館	
17	A	続日本後紀	丙辰 左京人位子從八位下役連豊足等二人賜姓弘村連 纏向日代宮役民長 □鳥之枝別也 故以役爲氏焉	黒板勝美1966『国史大系3 日本後紀 續日本後紀 日本文徳天皇實録』吉川弘文館	
18	A	新撰姓氏録	上宮太子摂政之年 任大椋宮 于時家迎有大倭揚樹 太子巡行卷向宮時 親指樹間之即詔阿比太連 賜大倭連	佐伯有清1995『新撰姓氏録の研究 本文編』	
19	A	古語拾遺	泊于卷向玉城朝 令皇女倭姫命 奉齋天照大神 マキムクノタマキ	京都大学「京大貴重書データベース」 https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/2019年12月10日閲覧	
20	A	古語拾遺	至於纏向日代朝 令日本武命征討東夷 マキムクヒノシロノ	同上	
21	A	皇太神宮儀式帳	右從纏向珠城朝廷以來 至于難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇御世 有爾鳥墓村造神時 爲雜神政行仕奉支	群書類從 卷1	
22	A	帝王編年記	卷向珠城宮 大和国城上郡 今纏向河北里西田中也	黒板勝美1965『国史大系12 扶桑略記 帝王編年記』	
23	A	帝王編年記	纏向日向日代宮 大和国城上郡 今卷向檜林是也	同上	
24	A	伊呂波字類抄	卷向坐若御魂神社 大和 式上郡三五坐内 大月次相掌新嘗		新日本古典籍総合データベース
25	A	先代旧事本紀	次天忍立命 纏向神主等祖	黒板勝美編1966『国史大系7古事記・先代旧事本紀・神道五部書』吉川弘文館	卷一
26	A	先代旧事本紀	尊爲皇太后 纏向天皇垂仁御世追贈太皇太后	同上	卷五 天孫本紀
27	A	先代旧事本紀	弟大新河命 此命 纏向珠城垂仁宮御宇天皇御世元爲大臣	同上	卷五 天孫本紀
28	A	先代旧事本紀	第十市根命 此命 纏向珠城宮御宇御世賜物部連公姓	同上	卷五 天孫本紀
29	A	先代旧事本紀	九世孫物部多遲麻連公 武神諸隅大連之子 此連公 纏向日代宮景行御宇天皇御世拜爲大連	同上	卷五 天孫本紀

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
30	A	先代旧事本紀	冬十月 更都遷纏向謂珠城宮	同上	卷七 天皇本紀
31	A	先代旧事本紀	九十九年秋七月戊子朔 天皇崩於纏向宮	同上	卷七 天皇本紀
32	A	先代旧事本紀	冬十一月 都於纏向謂日代宮	同上	卷七 天皇本紀
33	A	先代旧事本紀	傳聞之 於纏向珠城宮御宇天皇之世 科太子大足彥尊 定倭屯田也	同上	卷八 神皇本紀
34	A	先代旧事本紀	甲斐國造 纏向日代景行朝世 狹穗彥王三世孫臣知津彥公此字鹽海足尼定賜國造	同上	卷十 国造本紀
35	A	先代旧事本紀	那須國造 纏向日代景行朝御代 建沼河命孫大臣命定賜國造	同上	卷十 国造本紀
36	A	先代旧事本紀	吉備穴國造 纏向日代景行朝御世 和邇臣同祖 彥調服命孫八千足尼定賜國造	同上	卷十 国造本紀
37	A	先代旧事本紀	穴門國造 纏向日代景行朝御世 櫻井田部連同祖 邇伎都美命四世孫速都鳥命定賜國造	同上	卷十 国造本紀
38	A	先代旧事本紀	阿武國造 纏向日代朝御世 神祝命十世孫味波々命定賜國造	同上	卷十 国造本紀
39	A	先代旧事本紀	葦分國造 纏向日代景行朝御代 吉備津彥命兒三井根子命定賜國造	同上	卷十 国造本紀
40	A	先代旧事本紀	大隅國造 纏向日代景行朝御世 治平隼人同祖初小 仁德帝代者伏爲日佐賜國造	同上	卷十 国造本紀
41	A	先代旧事本紀	薩摩國造 纏向日代朝 伐薩摩隼人等鎮之 仁德朝代日佐改爲直	同上	卷十 国造本紀
42	A	御鑰座次第記	纏向珠城宮御宇廿五年丙辰春三月 從伊勢國飯野高宮 遷幸于伊蘆宮	同上	国史大系 卷7
43	A	御鑰座傳記	纏向珠城宮皇女倭姬命 伊勢國渡遇之字遲乃五十鈴河上之邊り	同上	国史大系 卷7
44	A	御鑰座傳記	纏向珠城宮御宇天皇廿五年丙辰春三月 從伊勢國飯野高宮 遷幸于伊蘆宮	同上	国史大系 卷7
45	A	御鑰座本紀	纏向珠城宮垂仁御宇廿六年丁巳冬十月甲子 天照太神從但波吉宮志弓	同上	国史大系 卷7
46	A	寶基本記	纏向珠城宮垂仁御宇廿六歲丁巳冬十月甲子 奉遷于天照太神於五十鈴原	同上	国史大系 卷7
47	A	寶基本記	纏向日代宮景行十五歲九月十五日 伊勢天照皇太神宮假殿遷宮事	同上	国史大系 卷7
48	A	倭姬命世記	爰卷向日代宮景行御宇 日本建尊比比羅木乃以八尋鉾根天 奉獻皇太神宮留	『統群書類從1』	
49	A	日本紀略	冬十月 更都於纏向 是謂珠城宮也	黑板勝美1965『国史大系10 日本紀略』	垂仁
50	A	日本紀略	九十九年秋七月戊午朔 天皇崩於纏向宮 時年百卅歲	同上	垂仁
51	A	日本紀略	則更都於纏向 是謂日代宮	同上	景行
52	A	日本書紀私記(丙本)	纏向珠卷 末支牟久玉支	黑板勝美1965『国史大系8 日本書紀私記；釋日本紀；日本逸史』	国史大系 卷8
53	A	釈日本紀	尾張風土記中卷曰 丹羽郡吾縵郷 卷向珠城宮御宇天皇 品津別皇子生七歲而不語	同上	卷六述義
54	A	釈日本紀	豊後風土記曰 大野郡海柘榴市 昔者纏向日代宮御宇天皇在球鞞宮	同上	
55	A	住吉大社神代記	昔卷向玉木宮御宇天皇癸酉年	田中卓1985『住吉大社神代記の研究』国書刊行会	
56	A	住吉大社神代記	自卷向玉木宮大八嶋知食御世至于卷向日代宮大八嶋食知氣帶長足姫比古御世二世者	同上	
57	A	住吉大社神代記	卷向玉木宮大八嶋御宇五十三年辛未崩	同上	
58	A	住吉大社神代記	卷向玉木宮大八嶋國所知食活日天皇御宇五十三年辛未崩	同上	
59	A	住吉大社神代記	卷向玉木宮御宇天皇御世 筑紫國後國有偃樹	同上	
60	A	出雲国風土記	纏向檜代宮御宇天皇勅 不忘朕御子倭健命之御名		出雲郡
61	A	肥前国風土記	又纏向日代宮御宇大足彥天皇 誅球磨磨贈而巡狩筑紫國之時		
62	A	肥前国風土記	昔者纏向日代宮御宇天皇 巡狩之時御筑紫國御井郡高羅之行宮		
63	A	肥前国風土記	昔者纏向日代宮御宇天皇 巡狩之時此郡百姓		
64	A	肥前国風土記	於茲纏向日代宮御宇天皇 巡狩之時就生葉山為船山就高羅山為梶山 造備船漕渡人物		
65	A	肥前国風土記	纏向日代宮御宇天皇 巡狩之時御覽井底海藻		
66	A	肥前国風土記	纏向日代宮御宇天皇 巡狩之時此神仁平		
67	A	肥前国風土記	纏向日代宮御宇天皇 巡國之時遣陪從大屋田子		
68	A	肥前国風土記	昔者 纏向日代宮御宇天皇 巡幸之時此村有土蜘蛛 名曰大身		
69	A	肥前国風土記	昔者 纏向日代宮御宇天皇 巡幸之時御船泊此郡盤田杵之村		
70	A	肥前国風土記	昔者 纏向日代宮御宇天皇 巡幸之時此里有土蜘蛛		
71	A	肥前国風土記	昔者 纏向日代宮御宇天皇 誅滅球磨磨贈凱旋之時		
72	A	肥前国風土記	昔者 纏向日代宮御宇天皇 在肥後國玉名郡長渚濱之行宮		
73	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇大足彥天皇 詔豊國直等祖菟名手 遣治豊國往到豊前國仲津郡中臣村		
74	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇大足彥天皇 征伐球磨磨贈於		
75	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇大足彥天皇 登此坂上御覽国形		

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
76	A	豊後國風土記	纏向日代宮御宇天皇 行幸之時 此野有土蜘蛛		
77	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇天皇在球草宮		
78	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇天皇 御船泊於此門		
79	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇天皇 從豊前国京都行宮 幸於此郡		
80	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇天皇 欲誅球磨磨於		
81	A	豊後國風土記	昔者纏向日代宮御宇天皇御船 從周防国佐婆津發而度之		
82	A	神皇正統記	大和ノ卷向ノ珠城ノ宮 大倭の卷向の珠城乃宮 (やまとのまきむくのたまき)		ひらがなは光丘文庫の刊本
83	A	神皇正統記	大和ノ纏向ノ日代ノ宮 大倭の纏向の日代乃宮 (まきむくの)		同上
84	A	神皇実録	纏向珠向宮天皇	京都大学「京大貴重書データベース」 https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/2019年12月10日閲覧	京大貴重書 15p
85	C	経後御記	長谷寺申 若山堺事 仰 卷向山事可尋一乘院僧正	宮内庁図書寮編1970『図書寮叢刊』	建長八年六月十二日に長谷寺申若山堺事 猶遣官使可実檢之由被仰下之
86	A	本朝月令 (高橋氏文)	掛畏卷向日代宮御宇 大足彦忍代別天皇 五十三年癸亥八月 詔群卿曰	伴信友 1931『高橋氏文考注』大岡山書店	1段落目
87	A	本朝月令 (高橋氏文)	自纏向朝廷歲次癸亥 始奉貴詔勅 所賜膳臣姓 天都御食乎伊波比由麻波理天 供奉来	伴信友 1931『高橋氏文考注』大岡山書店	18段落目
88	A	本朝月令 (高橋氏文)	五十四年甲子九月 自伊勢還幸於倭纏向宮	伴信友 1931『高橋氏文考注』大岡山書店	16段落目
89	A	本朝月令 (高橋氏文)	謹案日本紀 卷向日代宮御宇大足彦忍別天皇五十三年 巡狩東国 渡淡門是時間覺駕鳥之聲	伴信友 1931『高橋氏文考注』大岡山書店	36段落目
90	A	本朝皇胤紹運録	卷向殊宮 富二年 十月都 於 大和国城上郡	京都大学「京大貴重書データベース」 https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/2019年12月10日閲覧	
91	A	本朝皇胤紹運録	都於大和国城上郡纏向日代宮	同上	
92	A	大和志	珠城宮 在穴師村西 垂仁天皇都於纏向 是謂珠城宮 日代宮 在穴師村北 景行天皇更都於纏向 是謂日代宮	並河永 正宗敦夫編 1929-1930『五畿内志』中 p321	
93	C	大和国風土記	卷向山 多出檜松栗等	奈良県史料刊行会編1978『奈良県史料』第3巻	日本惣国風土記
94	C	大和志料	纏向川 源を纏向山より発し穴師、初利、辻を経て初瀬川に入る 穴師川は穴師社辺より珠城山の北に沿える小流なり 一説に穴師川は卷向川の別名なりとも云う 等多数	奈良県教育会編纂1987『大和志料』臨川書店 復刻版	
95	A	如是院年代記	崇神第三子 母御間城姫 孝元之子 大彦命之女也 辛未年廿二年立太子 壬辰年四十三歳即位 治九十九年 壽百四十一歳 居大和卷向珠城宮	群書類従26上	平田俊治が神皇正統記をもとにつくっていると「日本古典の成立の研究」で言っている。
96	A	如是院年代記	垂仁第三子 母葉洲媛 丹波道主之女也 戊子年二十一 立為太子 辛未年六十四歳即位 居大和纏向日代宮 治六十二年 壽百二十三歳	群書類従26上	
97	A	興福寺略年代記	母御間城姫 大和国纏向珠城宮	続群書類従29下	
98	A	東寺王代記	十一 活目入彦五十狹稚 城上郡卷向珠城宮御座 垂仁天皇	同上	
99	A	東寺王代記	十二 大足彦忍代別 城上郡纏向日代宮御座 景行天皇	同上	
100	A	神明鏡 上	同國卷向珠城宮御之	続群書29上	
101	A	神明鏡 上	同國纏向日代宮御之	同上	
102	A	仁壽鏡	卷向珠城宮坐大和國城上郡	同上	
103	A	仁壽鏡	纏向日代宮 大和國城上郡	同上	
104	C	和州巡覽記 (大和廻)	穴師山 卷向山とも云 或曰穴師山と卷向山とは二也 ならびてお なりと云	貝原益軒1911『益軒全集』巻七, 45-81	
105	C	大和名所図会	痛足山 【延喜式】穴師ともかけり 卷向山ともいふ 横向 (まきむき) のあなしと詠みつづけたり	大日本名所図会刊行会編1919『大日本名所図会』第1輯 第3編	
106	C	大和名所図会	卷向山 三輪山の東北にあり 一名穴師山ともいふ 和歌痛足山の所に見えたり 峯を弓月嶽といふ 南を檜原山となづく 東は初瀬山へ連なり、西は珠城山といへり 纏向溪一名穴師川といふ 水源は纏向山より流れて、穴師、初利、辻等を経て大豆越を過ぎ式下郡に至り初瀬川に入る (中略) 檜原 卷向山の南といふ	同上	
107	C	和州旧跡備考 第十三巻 城上郡	穴師社 (中略) 今卷向の穴師社にいます大神也 釈日本紀	『続々群書類従8』	p515

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
108	C	和州旧跡幽考 第十三巻 城上郡	痛背川 水上は三輪山痛背山のあいだより出て西にながれ末は北に行 (一首略) 同 巻向の痛足の川ゆ行水の絶ゆることなくまたかへりみん 家隆 壬二 横向のゆつきか高は雲さえてあなし河波朝水けり	同上	p516
109	C	和州旧跡幽考 第十三巻 城上郡	痛足山 仙覚抄大和国云々延喜式に穴師ともかけり 萬葉經向の痛足の山に雲みつつ雨はふれともぬれつつそ来る (一首略) 顕注密勘日大和國にある山也横向の山ともいふ あなしの山ともいふ さてかく横向の あなしとよび続くるなり (中略) 神楽注秘云まきもこは大和國の山の名也あなし山も其 あたり也	同上	p517
110	C	和州旧跡幽考 第十三巻 城上郡	纏向珠城宮 帝王編年曰此宮の跡は城上郡今の纏向河の北の里の西の田中云々 俗この 田の中を長者の屋敷といふ 緒玉巻墓のほとりなり (中略) 長秋詠藻 まきもくの玉きの宮に雪ふれば さらにむかしの朝をそしる	同上	p518
111	C	和州旧跡幽考 第十三巻 城上郡	纏向山 痛足同山なり 萬葉 巻向の山邊ひびきて行水のみなはの如し世の人我は 人丸 久安百首 横向のあなしの山の鶯は今いくかとそ春を待つらん 季通 巻向川 痛足川おなじながれ 萬葉 痛足川河波たちぬ巻目の由觀我嵩に雲もたてるらし 同 黒玉の夜さりくれば巻向の川音高しもあらしかも 人丸 檜原 痛足山の南にして三輪山の西につづけり 萬葉 巻向の檜原にたてる春霞くれし思ははなつみこめやも 人丸 (中略) 纏向日代宮 帝王編年に城上郡今の檜村これ也 (中略) 壬二 よ所に見しふるき梢の跡もなし檜原の宮の秋の夕霧 家隆	同上	p518 - 519
112	C	和州旧跡幽考 第十三巻 城上郡	弓月嵩 八雲御抄日観は初瀬也 (中略) 壬二 朝またき霞たなひく横向の弓月嵩に春立らしも 家隆	同上	p529
113	A	皇代曆	諱 活目入彦五十狭茅 在位九十九年 巻向珠城宮 大和国城上郡	宮内庁「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」 http://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/ 函架 柳・4 2019年12月10日閲覧	
114	A	皇代曆	諱 大足彦忍代別 在位六十年 纏向日代宮 大和国城上郡	同上	
115	A	皇字沙汰文	大鹿島命者 巻向日代御宇景行天皇 奉仕歟 天見通命者 巻向珠城御宇垂仁天皇 奉仕歟	『統群書類従』1	p129
116	C	桜井市辻 辻 正嗣氏所有文 書	まいふく川へ三輪山ノ水も少出しふんぎもり石にて三分二、三分一に先年わかり申候処 ニ、上にて川をうめ水をぬすみ候ニ付	野崎清孝1977「大和国穴師郷 と巻向川筋の水利構造」『歴 史地理学会報』89	寛永二(1625)年七月十日
117	C	桜井市辻 辻 正嗣氏所有文 書	まいふく川と申用水、上ハ備後村はつり村あなし村、下者辻村大田村草川村六ヶ村とし て用水内わけ二取来り申候	野崎清孝1977「大和国穴師郷 と巻向川筋の水利構造」『歴 史地理学会報』89	慶安三年(1650)五月 十九日
118	A	補陀落山建立 修行日記	昔(時)人王十一代皇活目入彦五十狭茅帝第九王子巻向尊為勅使 伊勢大神宮奉崇鈴(鹿) 河上	『正統群書類従28上』・「補陀 落山建立修行日記」『二荒神 社』	()は群書類従で追加され る本文、また群書類従では、 五十狭茅、巻村尊に作る
119	A	下野国二荒山 鉢石星宮御鎮 座伝記	其先者垂仁天皇之皇子巻向尊十九世之孫 高藤介之子也 幼名藤糸	「下野国二荒山鉢石星宮御鎮 座伝記」『二荒神社』	
120	A	由緒書	王子巻向尊為勅使	「由緒書」『二荒神社』	
121	C	戒壇院公用神 名帳	巻向大明神	『統群書類従3上』神祇部 「戒壇院公用神名帳」巻61 p182	
122	A	増補 渡海参 詣記	次大歳ノ神ノ遙拜 是ハ巻向ノ玉記宮ノ御宇 皇大神宮天降り給イテ	『正統群書類従3』p963	
123	A	大神宮参詣記	次二大歳ノ神ノ遙拜 是ハ巻向ノ玉記宮ノ御宇 皇大神宮アマ下り給テ	『正統群書類従3』p933	
124	B	井蛙抄	光俊朝臣 まきもくのあなしかは風よきてふけにはへる紅葉今さかり也 いもか袖まきもく山の朝霧に匂ふ紅葉のひらまくもおし	群書462 p878	
125	B	萬葉集童蒙抄	痛背乃河 穴師といふ地名あれば、和州巻向の内にある川を調めるなるべし	荷田春満 大和志考決 あな せのかわ	
126	A	戒重藩家老 森平右平手記	大和国城上郡纏向乃穴師上下宮大明神ハ大己貴尊にまします	浦西勉2017「纏向・穴師郷の 民俗宗教文化の研究覚え書き (1)」『纏向学紀要5』	
127	B	冠辞考	纏向山は大和国城上郡にあり、纏向珠城宮とも、日代宮ともいひしは此処なり 萬葉に、 巻目、真木向などと書たるにつきて、まきもく、まきもこなど訓たれど、古事記に、麻 岐牟久能 比志呂乃美夜と書、姓氏録に巻掠、新撰萬葉にも真木牟具之日原と書たれば、 古まきむくといひけんをしる。	統群書類従完成会1978「賀茂 真淵全集8 冠辞考」八木書 店	
128	B	綺語抄 中	まきもくのあなしのやまの山人と人の見るべくやまかづらせよ	『日本歌学大系別巻1』	p62
129	B	和歌童蒙抄 第二	まきもくの穴師の檜原春たてば花か雪かとも見ゆるゆふしで 萬葉集に詠山歌也 類聚三 代格第二云 大和国丹生川上穴師神社といへり	『日本歌学大系別巻1』	p145

番号	分類	書物の題名	本文	典故	備考
130	B	和歌童蒙抄第三	あなし川波立ぬらし巻向のゆづきが嵩に雲たてるらん 萬葉第七にあり みな同所の名ども也 大和に在	『日本歌学大系別巻1』	p165
131	B	五代集歌枕巻上	まきもく山 みもろ山その山なみにこらがてをまきもく山はつぎてよろしも 人丸 こらがてをまきもく山はつねにあれど過行人はゆきまかめやも なるかみのおののみにまきもく山はつねに山をけふみつるかも 人丸 こらがてをまきもく山に春さればこのはしのぎて霞たなびく 同 妹が袖まきもく山の朝霧に匂ふもみちのちらまくをしも 読人不知	『日本歌学大系別巻1』	p315
132	B	五代集歌枕巻上	あなし山 同 棕橋山 或本ムクハシ (一首略) まきもくのあなしの山にくもみつ雨はふれどもぬれつつぞくる まきもくのあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ	『日本歌学大系別巻1』	p316
133	B	五代集歌枕巻上	まきもくのひばら まきもくのひばらにたてる春霞はれぬ思ひはなぐさまめやは	『日本歌学大系別巻1』	p367
134	B	五代集歌枕巻下	あなしがは 痛足川歟 (一首略) まきもくのあなしの河をゆく水のためることなくまたかへりみん 人丸 うばたまのよるざりくればまきもくのかわおとたかしもあらしかもとき 同 あなしがはかわなみたちぬまきもくのゆづきがたけ (由槻我嵩) にくもたてるおし 同	『日本歌学大系別巻1』	p406
135	B	題秘抄	わぎもこがあなしの山をやま人と人もしるべく山かづらせよ まきもくのあなしの山は大和にあり わぎもこがあなしの山とは ただうたひなせるにや あらしの山は山城にこそあれ 大和にはきこえず 而近代は不用葛(と)いへり 庭火に用 此後歌本末共用之	『日本歌学大系別巻5』	p19
136	B	顕注密勘抄	わぎもこがあなしの山の山人とひともみるがに山かづらせよ まきもくのあなしの山とは大和國にある山也 まきもく山とも云あなしの山とも云 さ てかく読つづくる也 又二の山とりあわせて云 常の事也	『日本歌学大系別巻5』	p297
137	B	古三十六人歌合(戊)	三番 左 中納言家持 まきもくのひばらもいまだくらねば小松が原にあは雪ぞふる	『日本歌学大系別巻6』	p136
138	B	古三十六人歌合(己)	新古 まきもくのひばらもいまだくらねば小松が原にあは雪ぞふる	『日本歌学大系別巻6』	p146
139	B	古三十六人歌合秘談(庚)	中納言家持 巻向の檜原はいまだくらねど小松が原に淡雪ぞ降	『日本歌学大系別巻6』	p153
140	B	後撰百人一首	巻向の檜原の山の呼びどりはなのよすがに聞人ぞなき 土御門院	『日本歌学大系別巻6』	p523
141	B	長歌言葉の珠衣(四之巻)	まきむくのひしろのみや あさひのひてるみや ゆふひのひかげのみや	『日本歌学大系別巻9』	p156
142	B	短歌撰格(上)	まきもくの あなしの山の 山びとと 人も見るがに 山かづらせよ	『日本歌学大系別巻9』	p339
143	B	万物部類倭歌抄(萬葉集)	名山 まきむくのひばらの山	『日本歌学大系別巻3』	p15
144	B	万物部類倭歌抄(萬葉集)	山名、雲 まきもくのあなしの山にくもみつ	『日本歌学大系別巻3』	p37
145	B	万物部類倭歌抄(古今集)	まきもくのあなしの山の山人と人もみるがに山かづらせよ	『日本歌学大系別巻3』	p90
146	B	八雲御抄(巻第五)	まきもく 同巻向 霞 霧 ひばらの山 こらがてを みもろのそま山	『日本歌学大系別巻3』	p396
147	B	八雲御抄(巻第五)	あなし 同足病之 丹生川上也 やまかづら 雲 雨 椿 海 石榴梅イ 関 椿さ けれやまきもくの とよめり あなしの神座也 仍はななゆきかと思ゆるゆふしでと は云なり	『日本歌学大系別巻3』	p396
148	B	八雲御抄(巻第五)	まきもくのひ 万 霞 小松原 ただ大かたによめり	『日本歌学大系別巻3』	p402
149	B	和歌手習口伝	まきもくのたまきの宮に雪ふればさらに昔のあしたをぞしる	『日本歌学大系別巻3』	p467
150	B	袖中抄 第九	山かづら ゆふかづら まきもくのあなしの山をやま人と人もみるがね山かづらせよ	『日本歌学大系別巻2』	p141
151	B	袖中抄 第九	まきもくのあなしの山は大和にあり わぎもこがあらしの山とは 只うたひなせるにや あらしの山は山城にこそあれ 大和にはきこえず 而近代は不用葛歌 庭火に用 此 後歌本末共用之	『日本歌学大系別巻2』	p142
152	B	袖中抄	かくらくのはつせともつづけ、まきもくのひばらともつづくるやうのところはさてもに こそ侍れ	『日本歌学大系別巻2』	しながどり
153	B	色葉和難集巻六	一 やまかづら まきもくのあなしの山をやま人とひともみるがに山かづらせよ 祐云 山かづらとは神楽するに まさきのかづらにてかしらゆふなり それを山かづらと はゆふなり まきもくのあなしとは やまとの國にある山の名なり 曾丹歌 まきもく のあなしのひばら春たてば花か雪かとみゆるゆふしで	『日本歌学大系別巻2』	p509
154	B	色葉和難集巻七	一、まきもく まきもくのひばらにたてる春霞はれぬ思ひはなぐさまめやは 和云 ま きもくのひばら まきもくのあなし 所のななり やまとのくににあり まきもく山と もいふ これもひの木おひたる山なるべし 日本紀には巻向の檜原とかけり 文字をか れるなり まきの事 如上	『日本歌学大系別巻2』	p514-515

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
155	B	和歌色葉	五十四 まきもくのあなしの山の山人と人もみるがね山かづらせよ 人も見るがねとは風俗の詞也 見るべくなんといふ心なり 山かづらとは神樂するに眞 辟葛にてかしらをゆふを山かづらとはいふ也 山の峯にくろき雲のうちおほひたるがは れのくをば やまかづらはなるといへり〔曙の雲をも山變と云也〕 まきもくのあなし とは大和の國にある山の名也 好忠歌云 まきもくのあなしのひばら春たてば花か雪かとみゆるゆふして これもこの山也 ひばらとは檜木原也 ゆふしてとはかの山に穴師の明神とて神のやし ろのおはすれば ゆふなんどのしろくてみゆるが花にまがふ心也 しらゆふとは白和幣 と書り 萬葉に云ふがごとし	『日本歌学大系 第三卷』	p228
156	B	奥義抄	百九 まきもくのあなしの山のやま人と人も見るがね山かづらせよ 人も見るがねとあるは 風俗のことば也 見るべくなんといふ心なり 山かづらとは神樂 するには眞辟葛にてかしらをゆふなり それを山かづらといふ まきもくあなしは大和 國に有る山名也 曾丹歌云 まきもくのあなしのひばら春たてば花かゆきかと思ゆるゆふして 是もこの山也 又あなし川ふるやまなどよめるもおなじ所也 檜原とは檜木の原也 花 か雪かと思ゆるゆふしてあるは かの山に神のおはすれば ゆふしてなどしろくて見 ゆるが花にまがふ心也 (中略) ふる山 あなし同所也	『日本歌学大系 第一卷』	p345
157	B	古今集注	マキモクノアナシノヤマノヤマビトヒトモミルガネヤマカヅラセヨ 教長卿云 マキモクノアナシノ山ハ所名 コノ山ノ木ヲトリテ御神樂ノ庭火ニモタキ 諸社祭ニモタテマツル 主殿寮ノ沙汰ナリ	『日本歌学大系別巻4』	p377
158	B	匠材集	まきもくのひ原 大和にあり巻向檜原と書くなり	早稲田大学図書館 https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he05/he05_01981/index.html 2020年2月14日閲覧	古活字版 慶長2年の跋あり
159	B	万葉集	痛足河々浪立奴 卷目之 由槻我高仁 雲居立有良思 あなしかは かはなみたちぬ まきもくの ゆつきがたけに くもあててるらし	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻7	万葉集1087
160	B	万葉集	動神之 音耳聞 卷向之 檜原山乎 今日見鶴鴨 なるかみの おとのみきし まき むくの ひはらのやまを けふみつるかも	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻7	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1092
161	B	万葉集	三毛侶之 其山奈美尔 兒等手乎 卷向山者 繼之宜霜 みもろの そのやまなみに こらがてを まきむくやまは つぎてよろしも	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻7	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1093
162	B	万葉集	卷向之 痛足之川由 往水之 絶事無 又反將見 まきむくの あなしのかわゆ ゆく みづの たゆることなく またかえりみむ	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻7	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1100
163	B	万葉集	黒玉之 夜去來者 卷向之 川音高之母 荒足鴨疾 ぬばたまの よるざりくれば ま きむくの かわおとたかしも あらしかもとき	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻7	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1101
164	B	万葉集	兒等手乎 卷向山者 常有常 過往人尔 往卷目八方 こらがてを まきむくやまは つねなれど すぎにしひとに ゆきまかめやも	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻7	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1268 西本願寺本「まきもく」
165	B	万葉集	卷向之山邊響而 往水之 三名沫如 世人吾等者 まきむくの やまべとよみて ゆく みづの みなわのごとし よのひとわれは	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻7	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1269
166	B	万葉集	卷向之 檜原丹立流 春霞 鬱之思者 名積米八方 まきむくの ひはらにたてる は るがすみ おほにしおもはば なづみこめやも	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻10	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1813
167	B	万葉集	子等我手乎 卷向山丹 春去者 木葉凌而 霞霏霏 こらがてをまきむくやまに はる されば このはしのぎて かすみたなびく	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻10	柿本朝臣人麻呂集 万葉集1815
168	B	万葉集	妹之袖 卷來乃 (牟九) 山之 朝露尔 仁寶布黄葉之 散卷惜裳	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻10	まききだが本居宣長や鹿持正澄 万葉集古義では卷牟九の誤写とする
169	B	柿本朝臣人麻呂集 万葉集	足曳之 山鴨高 卷向之 木志乃子松二 三雪落來 あしひきの やまかもたかき ま きむくの きしのこまつに みゆきふりくる	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻10	柿本朝臣人麻呂集 万葉集2313
170	B	柿本朝臣人麻呂集 万葉集	卷向之 檜原毛未 雲居者 子松之末由 沫雪流 まきむくの ひはらもいまだ くも みねば こまつがうれゆ あわゆきながる	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻10	柿本朝臣人麻呂集 万葉集2314
171	B	万葉集	纏向之 病足乃山尔 雲居乍 兩者雖零 所沾乍焉來	沢瀉久孝『万葉集注釈』巻12	万葉集3126
172	B	古今和歌集	採り物の歌 まきもこ (ク)のあなしの山のやま人と人もみるかね (ニ)やまかつらせ よ	国歌大観1巻 清輔本古今集 p267	古今和歌集1076
173	B	拾遺集	めのしに侍りてのち、かなしひてよめる 人麿 まきもくの山へひひきてゆく水のみな わのことによをはわか見る	国歌大観1巻	拾遺集1320
174	B	拾遺集	山をよめる 人麿 なる神のおとにのみきくまきもくのひはらの山をけふ見つるかな	国歌大観1巻	拾遺集490
175	B	拾遺集	まきもくのひはらの霞立返りかくこそは見めあかぬ君かな	国歌大観1巻	拾遺集816
176	B	続後拾遺集	和歌所にて釈阿に九十賀賜はせける時、屏風に 有家 まきもくのあなしの山のやま かつら 眺かけて かすむ空かな	国歌大観1巻	続後拾遺集27
177	B	新古今集	家持 まきもくの 檜はらの未だ くもらねは 小松か原に 沫雪そふる	国歌大観1巻	新古今集20
178	B	新勅撰集	好忠 まきもくの 穴師の檜原 春くれは 花か雪かと みゆる木綿して	国歌大観1巻	新勅撰集20
179	B	新勅撰集	賀茂重政 まきもくのひ原の山もゆきとちてまさきのかつらくる人もなし	国歌大観1巻	新勅撰集414
180	B	新勅撰集	建保六年 内裏歌合 恋の歌 権大納言忠信 卷向のあなしのかはの かは風になひく 玉藻の 乱れてそ思ふ	国歌大観1巻	新勅撰集703
181	B	続古今集	人麿 卷向の 檜原に立てる 春かすみ 晴れぬ思ひは なくさまるやは	国歌大観1巻	続古今集1488
182	B	続古今集	実頼 池水にくにさかえける 巻もくの たまきの風は 今も残れり	国歌大観1巻	続古今集1908

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
183	B	新後撰集	大中臣定忠 巻もくの 珠城の御代に 跡垂れて 宮居ふりぬる 五十鈴河上	国歌大観1巻	新後撰集718
184	B	玉葉集	俊成 後法性寺入道前関白 右大臣に侍りける時 家に百首の歌詠み侍りけるに雪を 巻もくの たまきのみやに 雪ふれは 更に昔のあしたをそみる	国歌大観1巻	玉葉集1001
185	B	玉葉集	基俊 堀川院御時百首歌奉りけるに霞を まきもくの ひはらの山の 麓まで はるのか すみは たなびきにけり	国歌大観1巻	玉葉集19
186	B	続千載集	行家 弘長の百首の歌奉りけるとき 夕立 なる神の おとにもしるし 巻向の 檜原の山の ゆふたちのそら	国歌大観1巻	続千載集321
187	B	続千載集	紀淑氏 巻向の 穴師の河に かけ見えて 檜原をいつる 秋の夜のつき	国歌大観1巻	続千載集448
188	B	続後拾遺集	前僧正公朝 花ならて はななるものは 巻向の 檜原かうへに かかる白雲	国歌大観1巻	続後拾遺集1103
189	B	風雅和歌集	人麿 子等かてを まきもく山に 春されは 木の葉凌ぎて 霞た靡く	国歌大観1巻	風雅和歌集31
190	B	風雅和歌集	実朝 まきもくの 檜原の風 冴えさえて ゆつきか嶽に 雪降りにけり	国歌大観1巻	風雅和歌集810
191	B	新千載和歌集	春立つ心を詠み侍りける 皇太后宮大夫俊成 春や立つ 雪けの雲は まきもくの 檜原にかすみ たなびきにけり	国歌大観1巻	新千載和歌集1
192	B	新拾遺集	うき身には よのふることも たのまれす いつれかいつれ おほつかな ことわりなれや まきもくの ひはらの山の そまの うきふししけまかり木と いとひ捨てたる 身なれとも 心にもあらず たちましり かなしきまに 雁かねの ひまなくなげと あはれてふ ことのはをたに きかせねは なくもゆかむも かはらぬを たた身のとかなしはてて この よのことを おもひすて 後の世をたにと おもひつつ うき世の中を たちいつれと 子を思ふ道に まよひつつ ゆくへきかたも おほえねは あまのかはなみ たちかへり 空をあふきて あり明の つれなき名をも なかしつるかな	国歌大観1巻	新拾遺集1883
193	B	続後拾遺集	家隆 朝またき 霞たなびく 巻向の 弓櫓かたけに はる立つらしも	国歌大観1巻	続後拾遺集2
194	B	新後拾遺集	清原深養父 春霞 たなびきわたる 巻向の 檜原のやまの いろのことなる	国歌大観1巻	新後拾遺集34
195	B	続後拾遺集	長方 柚人は 道まとふらし まきもくの 檜原もみえず 霧立ち渡る	国歌大観1巻	続後拾遺集314
196	B	続後拾遺集	妹かそて 巻向山の あさつゆに 匂う紅葉の 散らまくも惜し	国歌大観1巻	続後拾遺集400
197	B	新統古今和歌集	呼子鳥を詠ませ給うける 巻向の 檜原のやまの 呼子鳥 はなのよすかに 聞くひとそなき	国歌大観1巻	新統古今和歌集184
198	B	新統古今和歌集	公賢 いたつらに 何しくらむ 巻向の 檜原か嶺は 色もかはらし	国歌大観1巻	新統古今和歌集614
199	B	新葉和歌集	北畠親房 まきもくの 山にや雪の 積るらむ あなしのひはら 風しをる也	国歌大観1巻	新葉和歌集474
200	B	統古今和歌集	人麿 穴師かは 河音高し まきもくの 弓櫓かたけに 雲たてるらし	国歌大観1巻	統古今和歌集1748
201	B	玄玉和歌集	源資清 巻向のあなしの宮にたつ民の山かつらとる秋の夜の月	国歌大観2巻	玄玉和歌集203
202	B	古今和歌六帖	まきもくの 穴師の山の 山人を 人もみるかね 山蔓せよ	国歌大観2巻	古今和歌六帖1072
203	B	古今和歌六帖	巻もくの 檜原の霞 たち返へり 見れとも花に 驚かれつつ	国歌大観2巻	古今和歌六帖619
204	B	古今和歌六帖	せなかてを 巻もくやまを 此の夕 木の葉凌ぎて 霞たなびく	国歌大観2巻	古今和歌六帖632
205	B	古今和歌六帖	巻もくの 檜原も未だ 雲みねは 小松か末に 泡雪そふる	国歌大観2巻	古今和歌六帖754
206	B	古今和歌六帖	み室のや 其山中に 子等が手を 巻向山につきて 宜しも	国歌大観2巻	古今和歌六帖830
207	B	古今和歌六帖	鳴神の 音にのみ聞く 巻もくの 檜原の山を 今日見つるかな	国歌大観2巻	古今和歌六帖853
208	B	古今和歌六帖	妹か袖 巻もくやまの 朝霧に 匂うの紅葉 散まくをしも	国歌大観2巻	古今和歌六帖4059
209	B	新撰万葉集	眞木牟具之 日原之霞 立還 見軀花丹 被驚筒 倩見天偶千片霞 宛如万染満園奢 遊人記取園屏障 想像桃園(源) 兩岸斜	国歌大観2巻	新撰万葉集17
210	B	新撰六帖題和歌	まきもくの ひはらににたる からよもき そまのしけみと むへもひけり	国歌大観2巻	新撰六帖題和歌2204
211	B	夫木和歌集	人麿 こらかてを まきもく山に 春されは このはしきて かすみたな引く	国歌大観2巻	夫木和歌集501
212	B	夫木和歌集	俊成 春やたつ 雪けの雲は まきもくの 檜原にかすみ たなびきにけり	国歌大観2巻	夫木和歌集502
213	B	夫木和歌集	寂蓮法師 まきもくの あなしのひはら 春くれは かすみをかけて 山かつらせり	国歌大観2巻	夫木和歌集503
214	B	夫木和歌集	まきもくの ひはらの山に たちかへり 見れとも花に おどろかれつつ	国歌大観2巻	夫木和歌集1100
215	B	夫木和歌集	土御門院 まきもくの ひはらの山の 呼子とり 花のよすかに きく人もなし	国歌大観2巻	夫木和歌集1810
216	B	夫木和歌集	をのおとも しはしはをやめ まきもくの 檜原の山に 郭公なく	国歌大観2巻	夫木和歌集2864
217	B	夫木和歌集	実朝 五月雨の 雲のかかれる まきもくの 檜原の峰に なくほととぎす	国歌大観2巻	夫木和歌集2870
218	B	夫木和歌集	行宗 五月雨は いくかになりぬ まきもくの あなしの山に 雲とくみたり	国歌大観2巻	夫木和歌集3006
219	B	夫木和歌集	源経平 まきもくの ひはらの山の 下もみち まれなるいろの ちらまくをし	国歌大観2巻	夫木和歌集6123
220	B	夫木和歌集	光俊 まきもくの あなし川風 よきてふけ にはへるもみち いまさかりなり	国歌大観2巻	夫木和歌集6241
221	B	夫木和歌集	信実 まきもくの ひはらにまじる 薄紅葉 これやくち木の そま木なるらむ	国歌大観2巻	夫木和歌集6242
222	B	夫木和歌集	季通 まきもくの あなしの山の うくひすは 今いくかとか 春をまつらむ	国歌大観2巻	夫木和歌集7609
223	B	夫木和歌集	人麿 なる神の おとにのみきく まきもくの ひはらのやまを けふみつるかな	国歌大観2巻	夫木和歌集8586
224	B	夫木和歌集	こらかてを まきもく山に 春されは 木葉しのきて かすみたなびく	国歌大観2巻	夫木和歌集8587
225	B	夫木和歌集	妹か袖 まきもくやまの あさきりに にはふ紅葉の ちらまくをしも	国歌大観2巻	夫木和歌集8588

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
226	B	夫木和歌集	家良 まきもくの みむろの山も うつろひぬ わか時とふる あきのしくれに	国歌大観 2巻	夫木和歌集8846
227	B	夫木和歌集	家隆 まきもくの ひはらに雪や おもるらむ たへぬこすゑに そまきとるおと	国歌大観 2巻	夫木和歌集9005
228	B	夫木和歌集	長明 まきもくの そま山さくら 咲きぬらし まつたつかたにかをるはるかせ	国歌大観 2巻	夫木和歌集9006
229	B	夫木和歌集	実清 あなし河 氷みにけり まきもくの 檜はらのそまき いかかくたさん	国歌大観 2巻	夫木和歌集9007
230	B	夫木和歌集	人麿 あなしかは かはなみたちぬ まきもくの ゆつきかたけに くもたてるらし	国歌大観 2巻	夫木和歌集9100
231	B	夫木和歌集	人麿 むは玉の よるさりくれは まきもくの 川音たかし あらしかもとき	国歌大観 2巻	夫木和歌集11139
232	B	夫木和歌集	人麿 まきもくの あなし川より 行水の たゆることなく またかへりみむ	国歌大観 2巻	夫木和歌集11203
233	B	夫木和歌集	家隆 まきもくの ゆつきかたけに 雲さえて あなし河波 あさこほりせり	国歌大観 2巻	夫木和歌集11204
234	B	夫木和歌集	後鳥羽院 まきもくの 岸のこまつに 雪ふれば ひはらかすゑに 雲ぞかかれる	国歌大観 2巻	夫木和歌集12278
235	B	夫木和歌集	信実 まきもくの ひ原ににたる から蓬 袖のしけみと むへもいひけり	国歌大観 2巻	夫木和歌集13490
236	B	夫木和歌集	あしひきの やまかまたかき まきもくの こすゑのまつに みゆきふりけり	国歌大観 2巻	夫木和歌集13700
237	B	夫木和歌集	定家 まきもくや ひはらのしけみ かきわけて むかしのあとを 尋ねてそ見る	国歌大観 2巻	夫木和歌集13931
238	B	夫木和歌集	後鳥羽院 まきもくの ひはらくもりて 降雪に こまつか原も あとたえぬらし	国歌大観 2巻	夫木和歌集13932
239	B	夫木和歌集	家持 まきもくの ひはらもいまた くもらぬに こまつかすゑに あはゆきそふる	国歌大観 2巻	夫木和歌集13933
240	B	夫木和歌集	俊成 まきもくの 玉きのみやに 雪降れば さらに昔の あしたをそみる	国歌大観 2巻	夫木和歌集14272
241	B	夫木和歌集	権僧正公朝 東にも あとあることそ まきもくの ひしろの宮の ふるきみゆきは	国歌大観 2巻	夫木和歌集16860
242	B	万代和歌集	あさまたき かすみたなひく まきもくの ゆつきかたけに はるたつらしも	国歌大観 2巻	万代和歌集 7
243	B	万代和歌集	寂蓮法師 まきもくの あなしのひ原 春くれは かすみをかけて やまかつらせり	国歌大観 2巻	万代和歌集16
244	B	万代和歌集	袖人は 道まとふらし まきもくの 檜原もみえず 霧立ち渡る	国歌大観 2巻	万代和歌集1045
245	B	万代和歌集	巻向の 檜原の嵐 冴えさえて 弓月か嶽に 雪降りけり	国歌大観 2巻	万代和歌集1464
246	B	万代和歌集	まきもくの たまきのみやに ゆきふれば さらにむかしの あしたをそ見る	国歌大観 2巻	万代和歌集1472
247	B	万代和歌集	あなしかは おとまさるなり まきもくの やまのしらゆき したやとくらし	国歌大観 2巻	万代和歌集1485
248	B	赤人集	まきもくのひはらにたてる春霞 はれぬおもひは名につまめやは	国歌大観 3巻	赤人集121
249	B	赤人集	とくかみを まきもくやまに はるされは このはるしきて かすみたなひく	国歌大観 3巻	赤人集123
250	B	家持集	まきもくの 檜原も未だ 曇らねは 小松かさきに 沫雪そふる	国歌大観 3巻	家持集141
251	B	拾遺愚草	ま木もくや ひはらのしけみ かきわけて むかしのあとを たつねてそ見る	国歌大観 3巻	拾遺愚草743
252	B	好忠集	まきもくの あなしのひはら はるたては はなかゆきかと みゆるゆふして	国歌大観 3巻	好忠集371
253	B	好忠集	まきもくの ひはらくここそ おもほゆれ はるをすくせる ころならひに	国歌大観 3巻	好忠集538
254	B	長秋詠藻	まきもくの 玉きの宮に 雪ふれば さらにむかしの 朝をそ知る	国歌大観 3巻	長秋詠藻562
255	B	壬二集	まきもくの 檜原の山の そまの 春の衣と 立つ霞かな	国歌大観 3巻	壬二集1344
256	B	壬二集	巻向の ゆつきか嶽に 雲さえて あなし川波 朝凍りせり	国歌大観 3巻	壬二集1481
257	B	壬二集	朝またき 霞た離く 巻もくの ゆつきか嶽に 春たつらしも	国歌大観 3巻	壬二集2017
258	B	壬二集	たれかよにつれなき種を 巻もくの ひはらのやまの 色もかはらす	国歌大観 3巻	壬二集2735
259	B	壬二集	まきもくの あなしのやまの 山かつら かけていくよに ひとをこふるむ	国歌大観 3巻	壬二集2884
260	B	壬二集	巻もくの 檜原に雪や おもるらむ たえぬこすゑに 袖木きるおと	国歌大観 3巻	壬二集566
261	B	基俊集	まきもくの ひはらのやまの このまより かのこまたらに もれるつきかけ	国歌大観 3巻	基俊集40
262	B	明日香井和歌集	まきもくの ひはらかすゑは のとかにて かすみのうへに はるかせそふく	国歌大観 4巻	明日香井和歌集98
263	B	明日香井和歌集	つきといへは あらしそくもを まきもくの あなしのやまの ゆふくれのそら	国歌大観 4巻	明日香井和歌集577
264	B	有房集	まきもくのひばらのこすゑすぎぬらんゆきのしたをれおとしきるなり	国歌大観 4巻	有房集257
265	B	延文百首	沙門法守 よははやも かすみにけらし まきもくの ひはらのかせは さえてふけども	国歌大観 4巻	延文百首502
266	B	延文百首	尊氏 まきもくの ひはらのあらし なほさえて きえかてにふる はるのあはゆき	国歌大観 4巻	延文百首1606
267	B	延文百首	義詮 もりかぬる 影こそ見ゆれ まきもくの 檜原に月は 曇ると (ま) もなし	国歌大観 4巻	延文百首2745
268	B	御室五十首	俊成 はるやたつ ゆきけのくもは まきもくの ひはらにかすみたなひきにけり	国歌大観 4巻	御室五十首251
269	B	嘉元百首	為藤 まきもくの あなしふきこす あきのよに ひはらくらぬつきのかけかな	国歌大観 4巻	嘉元百首1942
270	B	嘉元百首	津守国冬 檜もくの あなしの嵐 うちなひき 春は柳の 山かつらせり	国歌大観 4巻	嘉元百首2109
271	B	久安百首 顕輔集	久安百首歌奉りける長歌 うきみにはよのふることも たのまれすいつれかいつれ おほつかな ことわりなれや まきもくの ひはらのやまの そまひとの うきふししけき まかりきと いとひすてたる みなれども ころにもあらずたちまじり かなしきままに かりかねの ひまなくなげと あはれてふ ことのはをたに きかせねは なくもゆかむも かはらぬを たたみのとかに なしはてて このよのことも おもひすて のちのよをたにと おもひつつ うきよのなかを たちいづれと こをおもふみちに まとひつつ ゆくへきかたも おほえねは あまのかはなみ たちかへり そらをあふきて ありあけの つれなきなをも なかしつるかな	国歌大観 4巻	久安百首399 顕輔集180

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
272	B	久安百首	季通 まきもくのあなしの山の鶯はいまいくかとかかはるをまつらむ	国歌大観4巻	久安百首458
273	B	久安百首	実清 あなし川氷みにけり 巻向の 檜はらの 榎木 いかかたきむ	国歌大観4巻	久安百首755
274	B	金槐和歌集	五月雨の雲のかかれる まきもくの ひはらか嶺に なくほととぎす	国歌大観4巻	金槐和歌集154
275	B	金槐和歌集	まきもくの 檜原のあらし さえさえて ゆつきかたけに 雪降りけり	国歌大観4巻	金槐和歌集370
276	B	慶運法印集	巻向の ひはら峰の 夕つよ かすみはつと 春風そふく	国歌大観4巻	慶運集286
277	B	弘長百首	行家 なる神の 音にもしるし まきもくの ひはらの山の ゆふたちの空	国歌大観4巻	弘長百首202
278	B	後鳥羽院御集	まきもくの みねのこまつに ゆきふれは ひはらかすゑに くも(雪) そかかれる	国歌大観4巻	後鳥羽院御集468
279	B	正治後度百首	雅経 まきもくの ひはらかすゑは のとかにて かすみのうへにはるかせそふく	国歌大観4巻	正治後度百首205
280	B	草庵集	山風の さそふもしるく まきもくの ひはらくもりて ちる桜かな	国歌大観4巻	草庵集193頼阿
281	B	草庵集	晴れやらぬ 雪けなからに まきもくの ひはらくもりて 立つ霞かな	国歌大観4巻	草庵集8頼阿
282	B	隆祐集	[] こほりつれなしまきもくのひばらやいまだくもらざるらん	国歌大観4巻	隆祐集64
283	B	隆信集	あなしがはとおとまさるなりまきもくの山のしら雪下やとくらし	国歌大観4巻	隆信集292
284	B	為忠家後度百首	みや木ひく 音たえにけり まきもくの 檜はらの山や 吹雪しらぬむ	国歌大観4巻	為忠家後度百首497
285	B	洞院撰政治家百首	行能 まきもくの ひはらの霞 たえたえに たなひく山の 雪のむらきえ	国歌大観4巻	洞院撰政治家百首58
286	B	洞院撰政治家百首	範宗 つれなしや 時雨にまけぬ まきもくの ひはらや人の 心なるらむ	国歌大観4巻	洞院撰政治家百首1143
287	B	洞院撰政治家百首	家隆 まきもくの ゆつきかたけに 雲さえて あなし川波 あさ氷せり	国歌大観4巻	洞院撰政治家百首825
288	B	長方集	仙人は道まよふらし巻向の檜原もみえず霧立ちわたる	国歌大観4巻	長方集102
289	B	文保百首	冬平 まきもくの 檜原に雲や かかるらむ あなしの山に 時雨ふるなり	国歌大観4巻	文保百首157
290	B	文保百首	行房 まきもくの ひはらのあらし さえ暮れて あなしの山に つもるしらゆき	国歌大観4巻	文保百首2462
291	B	文保百首	実重 雲はみな 山かせ吹きて まきもくの あなしのひはら 月そかかれる	国歌大観4巻	文保百首446
292	B	宝治百首	真観 巻向のあなし河かせよきてふけにほへる紅葉いまさかりなり	国歌大観4巻	宝治百首1943
293	B	宝治百首	成実 まきもくのひはらの風吹きすきて残る色なく散る木のはかな	国歌大観4巻	宝治百首2058
294	B	堀河百首	基俊 まきもくの ひはらの山の 麓まて はるのかすみは たなひきにけり	国歌大観4巻	堀河百首43
295	B	家隆御百番自歌合	たれか世につれなきたねをまきもくの檜原の山の色もかはらず	国歌大観5巻	家隆御百番自歌合127
296	B	院御歌合 宝治元年	右近権中将源朝臣雅光 まきもくのあなしのひはら猶さえて都の空はうす霞みつ	国歌大観5巻	院御歌合 宝治元年14
297	B	永縁奈良房歌合	式部君 まきもくの あなしひはらも うつもれて かかるみゆきも ふれはふりけり	国歌大観5巻	永縁奈良房歌合56
298	B	寛平御時后宮歌合	まきもくの ひはらの霞 たちかへり みれとも花のおとろかれつつ	国歌大観5巻	寛平御時后宮歌合27
299	B	古来風体抄	痛足河河波立ちぬ巻目の槻が高嶺に雲居立つらし	国歌大観5巻	古来風体抄75
300	B	時代不同歌合	家持 真木もくのひばらもいまだくもらぬにこまつがはらにあは雪ぞふる	国歌大観5巻	時代不同歌合13
301	B	千五百番歌合	寂蓮 まきもくの あなしのひはら はるくれは かすみをかけて 山かつらせり	国歌大観5巻	千五百番歌合28
302	B	千五百番歌合	家隆 まきもくの ひばらにゆきや おもるらん たへぬこずゑに そまきとるおと	国歌大観5巻	千五百番歌合1963
303	B	千五百番歌合	女房 まきもくの きしのこまつに ゆきふれは ひはらかすゑに くもそかかれる	国歌大観5巻	千五百番歌合2010
304	B	内裏百番歌合 建保四年	まきもくのあなしの川の河風になひく玉ものみたれてそ思ふ	国歌大観5巻	内裏百番歌合 建保四年187
305	B	月卿雲客妬歌合 建保二年九月	しくれする色こそみえねまきもくのあなしの山に鹿はなくなり	国歌大観5巻	月卿雲客妬歌合 建保二年九月54
306	B	俊成三十六人歌合	まきもくの ひはらもいまた くもらねは こまつかはらにあわゆきそふる	国歌大観5巻	俊成三十六人歌合13
307	B	日本紀寛宴和歌	得活目入彦五十狹茅天皇 意気美都耳 俱邇散嘉江計流 満幾牟玖濃 多萬起濃賀勢芳 伊麻蒙能古禮利 池水に 國栄ける 纏向の 珠城の風俗は 今も残れり 此天皇都於纏向 是謂珠城宮也 同帝御世 遣使于河内国 令作池溝 其後詔令諸国 多開池溝 因是百姓富裕 天下太平也 大納言正三位兼又近衛大将陸奥出羽按察使朝臣藤原実頼	国歌大観5巻	日本紀寛宴和歌80
308	B	百首歌合 建長八年	権中納言 まきもくの 松原か末や時雨るらんゆつきかたけに雲帰るなり	国歌大観5巻	百首歌合 建長八年1064
309	B	百首歌合 建長八年	衣笠前内大臣 まきもくのみむろの山もうつろひぬわか時とふる秋の時雨に	国歌大観5巻	百首歌合 建長八年552
310	B	袋草子	まきもくのあなしのひばらうづもれてかかるみゆきもふればふりけり	国歌大観5巻	袋草子545

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
311	B	袋草子	こえがてをまきもく山に春されば木のはしのごて霞棚引く	国歌大観 5巻	袋草子721
312	B	螢玉集	まきもくのひばらの山の麓まで春の霞はたなびきにけり	国歌大観 5巻	螢玉集 2
313	B	六条斎院歌合 永承四年	しげつね いつしかと 春をこそまで まきもくの ひばらのかすみ たちやわたると	国歌大観 5巻	六条斎院歌合 永承四年19
314	B	和歌一字抄	こらが手をまきもく山に春されば木葉しのぎて霞たな引く	国歌大観 5巻	和歌一字抄1065
315	B	和歌口伝	まきもくの檜原の山は雪とちてまさきのかづらくる人もなし	国歌大観 5巻	和歌口伝157
316	B	和歌口伝	まきもくのあなし河かぜよきてふけにほへるもみちいまさかりなり	国歌大観 5巻	和歌口伝256
317	B	和歌口伝	いもがそでまきもく山のあさぎりににほふもみちのちらまくおしも	国歌大観 5巻	和歌口伝257
318	B	若宮社歌合 建久二年三月	万葉集には、このてをまきもく山にはるされば… (以下略)	国歌大観 5巻	若宮社歌合 建久二年三月28
319	B	月御雲客妬歌合 建保二年九月	光家 まきもくのたかねの雲やしくれぬるあなしの河にこのはすくなり まきもくの 高根の雲はしぐるともふかき川せの紅のみづ	国歌大観 5巻	月御雲客妬歌合 建保二年九月20
320	B	秋風和歌集	いけ水にくにさかへけるまきもくのたまきのかぜは今ものこれり	国歌大観 6巻	秋風和歌集640
321	B	菊葉和歌集	実富朝臣母 巻向の檜原の山の村時雨わきて紅葉をいかで染めけん	国歌大観 6巻	菊葉和歌集716
322	B	雲葉和歌集	崇徳院御時百首歌に 藤原実清朝臣 あなし川氷みにけりまきもくの檜原の柚木いかがかたさん	国歌大観 6巻	雲葉和歌集814
323	B	現存和歌六帖	知家 秋きぬと人もみるべくまきもくのあなしの山ははつもみぢせり	国歌大観 6巻	現存和歌六帖451
324	B	新明題和歌集	後西院 山鳥の尾上へだててやへがすみまきもひばらもふかき色かな	国歌大観 6巻	新明題和歌集153
325	B	新和歌集	鑑定法師 まきもくの山はかすみてみ雪ふるこまつか原に鶯そなく	国歌大観 6巻	新和歌集11
326	B	新和歌集	まきもくのあなしの河やこほるらんもりくる水の音むせふなり 尼西蓮	国歌大観 6巻	新和歌集298
327	B	続現葉和歌集	前中納言実香脚 おしなべてあなしのひばら白妙にまきもく山にみゆきふるらし	国歌大観 6巻	続現葉和歌集505
328	B	続門葉和歌集	法印隆勝 白雪のふる山かけてまきもくのひばらかすゑは今朝そ霞める	国歌大観 6巻	続門葉和歌集6
329	B	題林愚抄	…まきもくのひばらの山のそま人は… (後略)	国歌大観 6巻	題林愚抄10064
330	B	題林愚抄	実朝 まきもくのひばらの嵐さえさえてゆききがたけに雪降りにけり	国歌大観 6巻	題林愚抄5789
331	B	題林愚抄	人丸 なる神のおとにのみきまきもくのひばらの山をけふみつるかな	国歌大観 6巻	題林愚抄8565
332	B	檜葉和歌集	権律師顕縁 まきもくのたまきのみやにとしくれていとどむかしのとほざかりゆく	国歌大観 6巻	檜葉和歌集355
333	B	東撰和歌六帖 抜粋本	三品親王 巻向の檜原にさゆる山風や穴師の河のこほりなるらん	国歌大観 6巻	東撰和歌六帖抜粋本426
334	B	八十浦之玉	酒折宮 纏向の日代の宮に天下しろしめしける… (後略)	国歌大観 6巻	八十浦之玉408
335	B	八十浦之玉	倭姫命世記を書写してそのしりへよみてそへおく歌 源光重 纏向の玉城の宮に天の下… (後略)	国歌大観 6巻	八十浦之玉620
336	B	臨永和歌集	大納言親房脚 あなしがけは水まさるらし巻向のゆつきがたけに五月雨の比	国歌大観 6巻	臨永和歌集118
337	B	臨永和歌集	権律師淨弁 久堅の空さへかけてまきもくのあなしの山ははなかつらせり	国歌大観 6巻	臨永和歌集50
338	B	林葉累塵集	原長秀 朝氷とけてみなわは巻向のあなしの川に春やきぬらん	国歌大観 6巻	林葉累塵集9
339	B	林葉累塵集	契沖 巻向のひばらの霞ただならず曇るとみればはるさめぞふる	国歌大観 6巻	林葉累塵集99
340	B	林葉累塵集	下河辺長流 山かつら玉の緒とけて巻向の痛足のひばら霞ふるなり	国歌大観 6巻	林葉累塵集720
341	B	林葉累塵集	長柄宣統 一つの世にたれかは種をまきもくの檜原となれるかげもふりつつ	国歌大観 6巻	林葉累塵集1307
342	B	有房集	まきもくのひばらのこずゑさぬらんゆきのしたおれおとしきるなり	国歌大観 7巻	有房集55
343	B	権僧正道我集	まきもくのあなしの山のやまかつら霞をかけて春や立つらし	国歌大観 7巻	権僧正道我集 1
344	B	実家集	をのおともしばしはをやめまきもくのひばらの山にほととぎすなく	国歌大観 7巻	実家集82
345	B	寂身法師集	さらでだにたえず雲みるまきもくの檜原の山の五月雨の空	国歌大観 7巻	寂身法師集226
346	B	寂身法師集	衣手をまきもく山の夕時雨木葉しのぎて冬をつぐなり	国歌大観 7巻	寂身法師集440
347	B	寂身法師集	吹きかへぬ時雨に成りぬまきもくのひばらの山のみねの木枯	国歌大観 7巻	寂身法師集609
348	B	為重集	昨日まで曇らずみえし巻向の檜原をこめて立つ霞かな	国歌大観 7巻	為重集324
349	B	隣女集	まきもくのひばらの雪もきえなくにこまつ霞みてあくるしのめ	国歌大観 7巻	隣女集 (雅有) 949
350	B	如願法師集	はるきてもなほくもふかしまきもくのひばらにかすむゆきのやまかぜ	国歌大観 7巻	如願法師集 1
351	B	如願法師集	やまかぜの日ごとにふけばまきもくのひばらのこずゑうらがれにけり	国歌大観 7巻	如願法師集334
352	B	雅頭集	まきもくのあなしの山は春きぬと人もみるべくかすむそらかな	国歌大観 7巻	雅頭集 1
353	B	雅有集	まきもくのひばらのかすみ春かけてこまつがはらのゆきのむらぎえ	国歌大観 7巻	雅有集130
354	B	雅有集	まきもくのひばらのかすみたちかさねこまついるそふはるさめぞふる	国歌大観 7巻	雅有集230
355	B	光経集	夢さめて玉の籬をまきもくの檜原のにしに月そかすめる	国歌大観 7巻	光経集168
356	B	紫禁和歌集	巻向のひばらの山の朝ぐもり空もみどりに春雨ぞ降る	国歌大観 7巻	紫禁和歌集1019
357	B	紫禁和歌集	春は来ていくよもあらぬまきもくの檜原にくもる山の端の月	国歌大観 7巻	紫禁和歌集460
358	B	光経集	春風にはなもにほわぬまきもくのひばらにひとりかすむつきかけ	国歌大観 7巻 群書259 p207	光経集170

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
359	B	草根集	嶺上新樹 まきもくもしけりまさきの綱たえて袖木引くなり嶺のよこ雲	国歌大観 8巻	草根集(正徹) 2221
360	B	草根集	夕立風 夕たたみ雲の行てもまきもくの山風はけし夕立の空	国歌大観 8巻	草根集(正徹) 2602
361	B	草根集	山霞 綱手縄ひけるやかすみまきもくのひ原の山の春の袖人	国歌大観 8巻	草根集(正徹) 274
362	B	草根集	朝雪 あなし山嵐も雪を巻向のゆふたみする朝けをそみる	国歌大観 8巻	草根集(正徹) 5987
363	B	雲玉集	家持 積目の檜原もいまだくもらねば小松が原にあは雪ぞふる	国歌大観 8巻	雲玉集(馴愨) 15
364	B	常縁集	まきもくのひばらは風もなかりけり雪おれしげくこゑのきこゆる	国歌大観 8巻	常縁集259
365	B	称名院集	夜あらしに時雨し雲をまきもくのひばらの奥の雪にみるかな	国歌大観 8巻	称名院集(公条) 964
366	B	松下集	さほ姫のたたぬ衣の巻きもつやまきもく山の霞なるらん	国歌大観 8巻	松下集(正徹) 1562
367	B	松下集	あなし山あらしや雲をまきもくのひばらは秋の雪の月かけ	国歌大観 8巻	松下集(正徹) 2648
368	B	松下集	くもりえぬ嵐は雪をまきもくの檜原に遠き入会の声	国歌大観 8巻	松下集(正徹) 2752
369	B	松下集	更にいま春にひもとく花ぞこれ巻向山の峰のしら雲	国歌大観 8巻	松下集(正徹) 3224
370	B	松下集	吹きいるる嵐に袖を巻向の檜原に夏のよる陰ぞなき	国歌大観 8巻	松下集(正徹) 73
371	B	雪玉集	夕まぐれかきくもりてし巻向の檜原は雪に今朝はれにけり	国歌大観 8巻	雪玉集(実隆) 1705
372	B	うけらが花初編	まきむくの珠城の宮に常世べゆ…(後略)	国歌大観 9巻	うけらが花初編(千蔭) 1572
373	B	うけらが花初編	うつしうゑし花たちばなに まきむくの 珠城の宮の 昔とはばあぢさゐ	国歌大観 9巻	うけらが花初編(千蔭) 389
374	B	挙白集	玉すだれまだよをこめてまきもくのあなしの雪に山かづらせり	国歌大観 9巻	挙白集(長嘯子) 1272
375	B	草徑集	人しれずしぐれになりぬまき向のあなしの山の雲のゆくすゑ	国歌大観 9巻	草徑363
376	B	桂園一枝	朝がすみたな引きこめつ巻向の檜原がおくも春や立つらむ	国歌大観 9巻	桂園一15
377	B	桂園一枝拾遺	巻向の檜原がおくのないづまはすりいだす火のここちこそすれ	国歌大観 9巻	桂園拾246
378	B	黄葉集	をのえは紅葉にくたせ袖山の檜もひばらもかたはらにして	国歌大観 9巻	黄葉集(光広) 920
379	B	後十輪院内府集	まきもくのひばらを過ぐるうき雲や小松がはらにくもる夕立	国歌大観 9巻	後十輪院内府集(通村) 487
380	B	後水尾院御集	さえかえるかせや霞をまきもくの檜原かすへもけさはくもらす	国歌大観 9巻	後水尾院御集34
381	B	逍遊集	巻向のひばらのこしてくもりなき今夜の月に秋風ぞ吹く	国歌大観 9巻	逍遊集(貞徳) 1378
382	B	鈴屋集	あさにけに秋風ふけばこらが手を巻向山は紅葉ちりけり	国歌大観 9巻	鈴屋集1779
383	B	鈴屋集	…その神わざをまきむくの玉城のみやに天の下…(後略)	国歌大観 9巻	鈴屋集2170
384	B	鈴屋集	…わたのへのみきのわくごはまきむくのひしろの宮に天の下…(後略)	国歌大観 9巻	鈴屋集2194
385	B	晩花集	山かづら玉のをとけて巻向のあなしの檜原あられふなり	国歌大観 9巻	晩花集(長流) 314
386	B	広沢輯藻	巻向の檜原もいまだ雪ながらくもり初めたるあざ霞かな	国歌大観 9巻	広沢輯藻(長孝) 27
387	B	藤簍冊子	巻向の檜原杉むら霞みけりほに桜の色にこぼれて	国歌大観 9巻	藤簍冊子(秋成) 129
388	B	藤簍冊子	巻向の檜原さやぎて吹く風に初瀬をとめの袖かへる見ゆ	国歌大観 9巻	藤簍冊子(秋成) 438
389	B	漫吟集	まきもくのひばらの霞只ならずくもるとみれば春雨ぞふる	国歌大観 9巻	漫吟集(契沖) 363
390	B	悠然院様御詠草	きりかをり月影くらきまきもくの檜原の山に呼子鳥啼く	国歌大観 9巻	悠然院様御詠草(宗武) 167
391	B	悠然院様御詠草	あまぎらひみゆきふればまきむくの檜原もわかず今は成りぬる	国歌大観 9巻	悠然院様御詠草(宗武) 259
392	B	亮々遺稿	夕だちは今ふりくらしまきむくのひばらがうへに雲きほふなり	国歌大観 9巻	亮々遺稿(幸文) 1519
393	B	亮々遺稿	巻向のひばらのおくにすむ庵は雨と嵐を何にわくらん	国歌大観 9巻	亮々遺稿(幸文) 350
394	B	歌合 建保四年八月廿四日	まきもくの ひはらかすゑは それなから きりにあけゆく みねのつきかけ	国歌大観10巻	歌合 建保四年八月廿四日46
395	B	歌枕名寄	みよしのも わかなつむらむ まきもくの ひはらかすみて ひかすへぬれは	国歌大観10巻	歌枕名寄1989
396	B	歌枕名寄	こらか手を まきもくやまに 春されは 木のはしきて 霞たなひく	国歌大観10巻	歌枕名寄2693
397	B	歌枕名寄	妹か袖 巻来の山の あさつゆに にほふもみちの ちらまくをしも	国歌大観10巻	歌枕名寄2694
398	B	歌枕名寄	三毛呂之 其山中に こらかてを まきもく山は つきてよろしも	国歌大観10巻	歌枕名寄2695
399	B	歌枕名寄	あし引の 山かもたかき まきもくの きしの小松に み雪ふりけり	国歌大観10巻	歌枕名寄2696
400	B	歌枕名寄	巻向の 山へとよみて ゆく水の みなわのことし 世の人われは	国歌大観10巻	歌枕名寄2697
401	B	歌枕名寄	むば玉の よるさりくれは まきもくの 河おとたかし あらしかもとき	国歌大観10巻	歌枕名寄2698
402	B	歌枕名寄	まきもくの ひばらにたてる 春霞 はれぬおもひは なくさまるやは	国歌大観10巻	歌枕名寄2699
403	B	歌枕名寄	みよしのも わかなつむらむ 巻向の ひはらかすみて 目数へぬれは	国歌大観10巻	歌枕名寄2700
404	B	歌枕名寄	まきもくの ひばらもいまだくもらねば 小松がはらにあは雪ぞふる	国歌大観10巻	歌枕名寄2701
405	B	歌枕名寄	まきもくの 檜原の霞 たちかへり みれともはなにおとろかれつつ	国歌大観10巻	歌枕名寄2702
406	B	歌枕名寄	花ならて 花なるものは まきもくの ひばらのうれにかかるしら雲	国歌大観10巻	歌枕名寄2703

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
407	B	歌枕名寄	まきもくの ひはらの嵐 さえさえて ゆつきかたけに 雪ふりにけり	国歌大観10巻	歌枕名寄2704
408	B	歌枕名寄	巻向の 檜原のしけみ かきわけて むかしのあとを たつねつるかな	国歌大観10巻	歌枕名寄2705
409	B	歌枕名寄	なるかみの おとにのみきく 巻向の ひはらの山を けふみつるかも	国歌大観10巻	歌枕名寄2706
410	B	歌枕名寄	誰か世につれなきたねを まきもくの ひはらの山の 色もかはらぬ	国歌大観10巻	歌枕名寄2707
411	B	歌枕名寄	まきもくの 檜原杉はら うつもれて 山のは見えぬ 雪の空かな	国歌大観10巻	歌枕名寄2709
412	B	歌枕名寄	よそにみし ふるきこす糸の あともし ひはらのみやの あきのゆふきり	国歌大観10巻	歌枕名寄2710
413	B	歌枕名寄	まきもくの あなしのひはら 春くれは 花か雪かと みゆるゆふして	国歌大観10巻	歌枕名寄2711
414	B	歌枕名寄	雲かかる ひはらとみれば まきもくの あなしの風に ちるさくらかな	国歌大観10巻	歌枕名寄2712
415	B	歌枕名寄	あなしやまつはさきけるやみねこしに しかまつきみかいはひつつかも	国歌大観10巻	歌枕名寄2713
416	B	歌枕名寄	まきもくの あなしのやまに くもあつあめはふれとも ぬれつつぞくる	国歌大観10巻	歌枕名寄2714
417	B	歌枕名寄	まきもくの あなしの山の 山人と ひとみみるかに やまかつらせよ	国歌大観10巻	歌枕名寄2715
418	B	歌枕名寄	まきもくの あなしのかはに ゆくみつの たゆることなく またかへりみむ	国歌大観10巻	歌枕名寄2718
419	B	歌枕名寄	あなしかは かはなみたかし まきもくの ゆつきかたけに くもたてるらし	国歌大観10巻	歌枕名寄2719
420	B	歌枕名寄	巻もくの あなしのかはの 河風に なひく玉もの みたれてそ思ふ	国歌大観10巻	歌枕名寄2720
421	B	歌枕名寄	あなしかは かはなみたちぬ まきもくの 弓櫛かたけに 雲たてるらし	国歌大観10巻	歌枕名寄2723
422	B	歌枕名寄	巻目の ひはらのあらし さえさえて ゆつきかたけに 雪ふりにけり	国歌大観10巻	歌枕名寄2727
423	B	歌枕名寄	池水に 国さかえける まきもくの たまきの風は 今も残れり	国歌大観10巻	歌枕名寄2728
424	B	歌枕名寄	ふりにける 跡見えぬまで 巻向の たまきの空は 霞たなひく	国歌大観10巻	歌枕名寄2730
425	B	歌枕名寄	まきもくの 珠城の宮に 雪ふれば さらにむかしの あしたをそみる	国歌大観10巻	歌枕名寄2731
426	B	歌枕名寄	まきもくの 玉木の宮に 跡たれて 宮みふりぬる 五十鈴川なみ	国歌大観10巻	歌枕名寄2732
427	B	歌枕名寄	まきもくの 玉きのみやに あとたれて 宮居ふりたる いすす川上	国歌大観10巻	歌枕名寄4584
428	B	国冬祈雨百首	水こめていまこそ種をまきもくのあなしの山田はる雨ぞふる	国歌大観10巻	国冬祈雨百首15
429	B	耕雲千首	いましはや雪気も雲も巻向の山風ゆるくかすむ春かな	国歌大観10巻	耕雲千首11
430	B	将軍家歌合 文明十四年六月	沙弥宗尹 やまかづらかすみをかけてまきもくの檜ばらに春の空ぞ夜ぶかき	国歌大観10巻	将軍家歌合 文明十四年六月20
431	B	宝篋院百首	まきもくの ひはらのあらし なほさえて こす糸にうとき やまさくらかな	国歌大観10巻	宝篋院百首(義詮) 15
432	B	為家千首	あつさゆみ はるはきぬらし まきもくの あなしのひはら かすみたなひく	国歌大観10巻	為家千首29
433	B	土御門院百首	まきもくのひ原の山のよぶこ鳥花のよすがに聞く人もなし	国歌大観10巻	土御門院百首14
434	B	等持院百首	まきもくの 檜原の山の 夜半の月 木のまの外に みる影もなし	国歌大観10巻	等持院百首42
435	B	長綱百首	誰が世よりにほひそめけんまきもくのひはらの軒の春の梅が枝	国歌大観10巻	長綱百首 4
435	B	南都百首	まきもくのひばらくもりて嶺ふかき月にはうとき山のした庵	国歌大観10巻	南都百首(兼良) 94
436	B	道家百首	秋風をおとにのみきくまきもくのひはらのしぐれいかにそむらん	国歌大観10巻	道家百首99
437	B	宗尊親王 百五十番歌合	川上に夕立すらしまきもくのひはらかそまに迷ふ村雲	国歌大観10巻	宗尊親王百五十番歌合 弘長元年108
438	B	師兼千首	山月 秋風は夕る雲をまきもくの檜原の山に月そいさよふ	国歌大観10巻	師兼千首407
439	B	四十番歌合	御製 まきもくの ひはらのやまの あさくもり そらもみとりにはるさめそふる	国歌大観10巻	四十番歌合 建保五年十月15
440	B	元輔集	みよしのも わかなつむらむ まきもくの ひはらかすみて ひころへぬれば	国歌大観 3巻	元輔集107
441	B	続弄環集 上	叢 巻向のあなしの風に降あられ かざすひばらの玉とこそみれ	上野洋三・中西健治編1993「弄環集 本文と索引」	続弄環集 上 1266
442	B	詠十首和歌	まきもくの ひはらのたにの ふかければ こす糸の雲も そこにみえけり	国歌大観10巻	詠十首和歌47
443	B	歌枕名寄	日にみかく たまきのみやの さくらはな はるのひかりに うゑやおきけむ	国歌大観10巻	歌枕名寄2729
444	B	花十首寄書	久かたの そらさへかけて まきもくの あなしの山は 花かつらせり	国歌大観10巻	花十首寄書144
445	B	道増俳諧百首	今朝ふくはかせさえよはしまきもくの ひはりはねにやはるのたつらん	狂歌大観刊行会1985「狂歌大観」	道増俳諧百首 1
446	B	類字名所狂歌集	見て後の物語にもゆふ霧の たつは源氏のまきもくの山	狂歌大観刊行会1985「狂歌大観」	
447	B	連證集	くもると申句に まきもくの檜原と付て侍はいかに 是は万葉にまきもくのひはらもい またくもらねはこ松かうへにあは雪そふる と申こと葉のゑんにて 霞にくもるはるは きにけり と申句に まきもくの檜原の木す雪きえて と付し也	金子金治郎1963「連證集について」『国文学攷』	
448	B	伊呂波物語	見れば九重の塔の峰 吹下ろす 風や霞をまきもくの 檜原がくまに聳えしは 長谷の お寺と三輪の山	『近松門左衛門全集』 1 p129	
449	B	東山殿子日遊	あはれ昔にまきもくの 檜原が末も曇らねば 鐘も霞まぬ初瀬山	『近松門左衛門全集』 1 p579	
450	C	尋尊大僧正記	就州巻向山木事 可被尋仰之子細在之 不日被召進十市新左衛門尉 更不可有難遊 之由被仰出候也 仍執達如件	「尋尊大僧正記」27「大乘院寺社雜事記」p156	寛正三年四月

番号	分類	書物の題名	本文	典拠	備考
451	C	尋尊大僧正記	態以飛脚注進申入 抑就今度卷向山木盗人之儀 満寺訴訟之趣披露候	『大乘院寺社雑事記』三 p156	寛正三年四月
452	C	尋尊大僧正記	京都御奉書令拜見了 卷向山木事可有御尋子細候	『大乘院寺社雑事記』三 p156	寛正三年四月
453	B	尋尊大僧正記	就卷向山々木事、先度被成奉書處、于今遅々、太不可然、(以下略)	『大乘院寺社雑事記』三 p159	寛正三年五月
454	B	尋尊大僧正記	一 六方峰起廻文成之。來九日可發向備後云々、子細者、卷向山事、穴世宮造作以下に付て、穴世郷民等致自専之處、彼備後号神主一向令自専之間 (以下略)	『大乘院寺社雑事記』六 p114	文明三年九月
455	B	尋尊大僧正記	一 備後發向、六方衆十人下向、備後屋城并郷少々竹木少々可拂之云々、於根本卷向山者無一途之儀、追而可糾明云々、比興事也 (以下略)	『大乘院寺社雑事記』六 p133	文明三年十月
456	B	尋尊大僧正記	一 院入庄百姓等申卷向川井手事、重而成奉書了、就中穴瀬川用水吉水乱水間事(以下略)	『大乘院寺社雑事記』九 p82	文明十九年六月
457	B	大乘院日記目録	十九日、六方衆等長谷寺發向云々、釜口辺下向、卷向山事、穴無瀬郷民等訴申故云々	『大乘院寺社雑事記』十二 p341	文安五年八月十九日
458	B	大乘院日記目録	十九日、六方衆等長谷寺發向、執行住屋・井坊等也 卷向山年貢毎年二十貫文分、為觀音弁可付六方云々	『大乘院寺社雑事記』十二 p345	宝徳三年十一月十九日
459	B	大乘院日記目録	去月廿四日、長谷寺執行寺門所々為礼罷上云々、去宝徳三年十一月請申卷向山年貢二十貫文事、如元彼山事返付長谷寺之由 (以下略)	『大乘院寺社雑事記』十二 p402	文明九年七月二日
460	AB	大和名所和歌集	痛足山 式上郡穴師村の上の山なり (中略) 痛足嵩 (中略) 纏向日代宮 字比志呂又比志利 同郡穴師村穴師大明神より二町斗西南の所 皇居の跡なり 珠城宮の名を改て日代宮と付給ふ 人皇十二代景行天皇大足彦忍別天皇 此所に皇居し給ふ (中略) 纏向珠城宮 式上郡箸中村に長者屋敷と云有是也と 又芝村に玉塚といふ有全く此玉塚の所なるべし 今の地形を以ていふべからず 以前は平地にて有りしが、先年織田侯の廓中となれり 人皇十一代垂仁天皇活目入彦五十狹茅天皇此地に皇居し給う (中略) 珠城山 箸中村東の山の惣名なり (中略) 由槻が嶽 三輪山の丑寅に当て赤はげの高山是なり (中略) 纏向山 由槻が嶽より西北の山はすべてまきもく山なり (中略) 卷向川 三輪の山の北谷より流れ出て、箸中芝村の二村を流れて、末は三輪川に落合景物、山と同じ (中略) 卷向峯 卷向松原 松原は卷向に隣が故に卷向の松原とつづけたり 松原は箸中村より八九町東、三輪山の内松原明神とて、大明神御鎮座の跡今に有り	奈良県史料刊行会編1978『奈良県史料』第3巻	
461	A	旧事本紀玄義	但宝剑者 古語拾遺曰 纏向日代朝令日本武尊征討東夷	大隅和雄『中世神道論』日本思想体系19	慈遍
462	A	都々古和氣神社別当大善院旧記	八槻郡 陸奥国風土記曰 所以名八槻者 卷向日代宮御宇景行天皇時 (中略) 纏向日代宮御宇景行天皇詔日本武尊而征討土知朱 飯豊山 (中略) 古老曰昔卷向珠城宮御宇天皇二十七年戊午秋 飢饉而人民多亡矣	栗田寛纂訂1898『古風土記逸文』p52	
463	B	拾遺抄物	なるかみの音にのみきくまきもくのひはらの山をけふみつるかな	『未刊国文古註釈大系』第6冊 p324	
464	B	新古今私抄	まきもくのひはら大和の名所也此歌に春の詞なし	『未刊国文古註釈大系』第6冊 p8	
465	B	隠口塚序	こもりくの初瀬の堂の片隅に、まきもくのひの木笠うちしきて、ゆかしき春の旅寝姿は	『蕪村晩臺全集』	
466	B	詠歌一体	まきもくの檜原	群書類従 16 p328	
467	B	梁塵愚案抄	卷向と云てまきもことよめりしかれば わきもこはまきもこを云あやまれる也 まきもこは大和国に有山也 あなしの山則其あたりの山なればつづけていへり	『日本歌謡集成』2巻 p268	一条兼良
468	B	筆のすさび	まきもくの檜原の山は秋しらで 人丸に似て 歌やむらん	福井久蔵1943『一条兼良』	

※典拠の他、東京大学史料編纂所データベース、日文研和歌データベース、新日本古典籍総合データベースを利用した。

※国歌大観は新編国歌大観を用い、番号もそれに拠った。

編集後記

○ 当研究センターの研究紀要である『纏向学研究』の第8号が刊行の運びとなりました。『纏向学研究』の成果は当研究センターの活動、とりわけ調査・研究活動の骨子となるものですが、今号は共同研究員1名、外部研究者1名、そして常勤所員2名の研究成果の掲載となりました。若い常勤所員が奮起して、その成果が掲載できたことは喜ばしい限りです。

○ 巻頭の柳田康雄共同研究員の論文は、最近注目されつつある石硯の研究成果です。弥生時代から古墳時代にかけての石硯・研石をまさに手と足と目で稼いで集積し、形状、時期、分布、製作技術をまとめ体系化したものです。文字と墨書があるのは当然の時代とはいえ、こうした考古学の基礎的な研究が向後の外交史や交易史の実証的な研究の先駆けになることは確かです。

○ 古川登論文は、小羽山墳墓群の墳丘内の大小の埋葬を、「母子」と「婦葬」というキーワードで分析した興味深い成果です。親族論が一方に固定化しつつある昨今、発掘に直接関わった者が果敢に仮説を発信し議論を単純化させないことこそが、真実への近道のように感じます。

○ 三沢朋未論文は、いわゆる「冠帽形埴輪」と呼ばれてきた異形の希少な埴輪を取り上げ、出土古墳の年代や特徴などからその原型や被葬者の正確に迫ったものです。短文とはいえ、興味深い内容で、「坂田地区」の今後の行政対応にも新たな視点を提供しました。

○ 最後の森暢郎論文は、私たちが今まで「不明」の一言で片付けてきた「まきむく」のことばの起源をていねいに辿ろうと試みた好論です。その語源や起源は簡単ではありませんでしたが、森論文を出発点として、今後、「まきむく」の意味を真剣に考えていく必要があるでしょう。

○ 今号は当初掲載予定だった三つの論文が掲載できませんでした。今号は立候補が多く、予算を大幅に上回るボリュームに四苦八苦していたこともあり、編集者としても厳しい選択となりました。是非、次号でご活躍いただきたいと思います。

今号も時間的にもベストな編集とはいきませんでした。とまれ第8号の無事刊行を喜びたいと思います。

(寺沢薫・福辻淳)

纏向学研究センター研究紀要

纏向学研究 第8号

令和2年3月31日 発行

発行 桜井市纏向学研究センター

奈良県桜井市東田339番地

印刷 株式会社明新社

奈良市南京終町3丁目464番地



Proceedings of the
Research Center for Makimukugaku, Sakurai City.
STUDIES IN MAKIMUKUGAKU 2020
NO.8